
東方飛脚伝

オル＝トロス・クラフト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方飛脚伝

【Nコード】

N4166N

【作者名】

オルトロス・クラフト

【あらすじ】

幻想郷の飛脚の物語。

基本的にほのぼのとしたいのであまり戦闘はありません。手紙を通じて様々な人妖との触れ合いを書きたいな〜とか思いながらグダグダと書いてます。

主人公が大量に居ます。

場合によってはかなりの改造をしていますのでお気をつけください。

(メイン主人公が空気になりがちです)

拝啓（という名のプロローグ）

拝啓

俺は走っている・・・体力の続く限り。走り続ける・・・今回の目的地は紅魔館、吸血鬼が治めるといふ古風な城。正直人間の俺が行くのは怖い。しかし、行かなければいけない。何故なら届けないといけない物があるからだ。誰かの送る手紙が一つ、何時も他人はそんな紙より命が大事だと言う。しかし、そう言う人間にこそ教えた。【手紙】の意味を、力を、何時かはそんな機会もあるのだろうと思っっている。人のことを詮索するつもりはないが、手紙を受け取る人はどういう人なのかは気になる。飛脚の性だと思っている。恨まれはしない程度に——だが・・・

「飛脚師さん！」

突然声が掛けられる。後ろにいるわけでもないので挨拶をしようと傍まで走る。

「やあ、こんにちは。どうしたの、大ちゃん」

薄い緑色の髪をして、向こう側が透けて見える程薄い羽を持った小学生並みの女の子・・・いや、妖精——更に訂正、大妖精の大ちゃん。何時も明るく元気な子なので俺は好きだ。ただ、普通は人間の俺と妖精が話す機会はない。ただ、俺は依頼を選ばない飛脚をしているので数回ではあるが、この大ちゃんにも会うことがある。数回なのに俺のことを覚えてくれてるのは嬉しいが、妖怪方面に有名になってしまつと人間の依頼が来なくなつてしまふ。依頼は選ばないが、報酬は人間の方が高いので（しかもほぼ安全）無くなつてしまふと飯が食えなくなつてしまふ。

「お仕事中でしたか、飛脚師さん？」

遠慮なのか、仕事中と気づいて罪悪感に襲われたのか、あまり澆刺とした声ではない。

「仕事中だけど、休憩も仕事の内さ。じゃないとこういう仕事はや

っていけないよ」

行李を地面に置き、傍の草むらに腰掛ける。行李とは、郵便物などを入れておくための必須道具だ。もう何年も使わせてもらっている。中に入っているのは紅魔館に届ける手紙と竹水筒、それと大して入っていない財布だ。・・他には、色々と許可証という名の様々な小物が入っている。

「そうですか、ちなみに・・私宛の手紙はありますか？」

一抹の希望を持って訊いてくるが、残念、残りは紅魔館への手紙のみだ。

「ごめんよ、残念ながら承ってないんだ。もし依頼があれば、真っ先に持ってくるよ」

「ありがとうございます」

礼儀正しく頭まで下げてくれる。この子が居るだけで場が和む。

「さて・・っと。休憩も終わりだ。なるべく日のある内に帰りたいからね。俺、人間だし」

「飛脚師さんなら大丈夫ですよ。人間なのにスペルカードを持っていて凄いい人ですから」

スペルカード・・この世界、幻想郷で確固たる存在達は皆持っているものだ。持っていると言っても俺の場合攻撃能力は一切無く（と言っても俺はあくまで人間なので当然だが）二、三枚程度しか持っていない（そう言えば使わないが攻撃にも使えるものもあった）勿論弾幕なんて論外の話だ。

「大ちゃんには負けるよ。ありがとう。いい気分転換になったよ」
そう言って立ち上がり、行李を肩に掛けると再び走り出す。最近更に走れるようになった。仕事をするたびに速く、長く走れるようになっていく。里の人間では追いつけない程と言われているが、俺はそうは思わない。速度を上げて、どんどん道を進んでいく。

次の依頼は妹様！？

さて、かれこれ四半刻（三十分）程走っているわけだが、やはり人間の足・・・紅魔館は遠い。影が

薄っすらと見え始めている程度だ。そういえば紅魔館の主様は随分と威厳あふれる（自称）方だ。

種の位は魔の頂にあるらしく、その辺の妖怪はともかく、程度の低い大妖怪なら簡単に潰せると

自慢されたことがあった。子供のように無邪気で、氷より冷酷な吸血鬼・・・聴いた瞬間は断ってし

まおうかと思った。だが、手紙がそれを拒んだ。俺は人間だが能力を持つている。「道に迷わない程度の能力」そしていつの間にか意識することになった「物の求めを感じ取れる程度の能力」だ。

手紙は【俺に、運んで欲しい】と求めてきた。別に俺がそう思い込んだだけかもしれないが、もう

断ろうとは思わなかった。相手がもし、俺を食おうとしたら・・・手紙だけ渡して、食われれば良いと

思った。俺って、生来の飛脚なんだ・・・少し自嘲気味に考えてしまった。とにかく急がないと・・・

人間用の道を外れて、森の中へと入る。裏道だろうが、獣道だろうが、道であるならば迷うことはない。足場は悪いが、走り続けもう四半刻・・・紅魔館の門前に着いた。

「すみません、何方か・・・飛脚師です。すみません・・・」

そういえば、俺の名前は飛脚師。真名は・・・忘れてしまった。別に記憶がどうかではない、本当に

忘れてしまったのだ。新しい名前でも考えてみようか・・・止めた。面倒臭い

「ふ・・・くああ・・・飛脚師・・・さん？zzz・・・」

緑色のチャイナ服を着た赤髪の女性・・・紅魔館の門番、紅ほん美鈴めいりん

さん。明るく、

元気だ・・・本来は過ぎる程に――だが、ここは本人の名誉を守って省いておく。

「美鈴さん、一応此处を通っても良いですか？」

あまり反応がない・・・どういうことだろう？目も閉じたままだ。瞑想中な訳はない。

「zzz・・・咲夜ひゃ・・・はっ！？あれ、飛脚師さん？」

俺を見るなり飛び跳ねた・・・まったく、咲夜さんならこうはいかないだろう。懲りない人（妖怪）だ。

「そうです。飛脚師です。で、紅魔館に入館許可を頂けますか？」

「一応、許可証を見せてください」

美鈴さん相手に許可証を見せる必要があるのだろうか・・・まあ、まがりなりにもそうしないと、後で

幽霊になりました――じゃあ、後腐れ云々以前の問題だ。行李の中に入っている筈の許可証・・・

「はい、これです」

そう言っただけで初めて紅魔館に来た時貰った、俺のような者が見ても綺麗だと感じる銀の杭を見せる。

「いや、何時見ても綺麗に手入れされていますね」

当たり前だ。銀は金属の中でも錆びやすいので毎日のこまめな手入れが重要だ。

「貰い物ですし、こういう細かい物の管理でも出来なければ飛脚なんて出来ませんからね」

そう言いながら紅魔館の門を潜り、中へと入る。

さて、今回の宛名は誰だったか・・・そうだ、図書館司書の子悪魔さんだ。人当たりが良く、気配りの出来る、とんでもなくおつちよこちよいなのを除けばとても良い人だ。間違えた、悪魔だ。いや、小悪魔だった・・・その辺の妖怪と違ってこの館の人達・・・間違えた、人以外達の見え目はとても

人間に近いのだった。考え事をしても道には迷わず図書館に向

かう。

「飛脚師が来たわよ、こあ・・・こあ？」

紫色のパジャマのような服を着た、紫色の長髪の女の子・・・パチユリー・ノーレッジ。がソファの上

でしきりに小悪魔さん——こあさんと呼んでいる・・・

「はい・・・ちよつと待つてください・・・はうあ!？」

挙動不審でこんな声をしているわけではない。パチユリーさん——パチエさん曰く何時もらしい。

「こあ・・・どうしたの？」

これは、嵐の前の——の予感がしてならない。暗めの図書館で夜目も効いていない・・・

「パチユリー様、避けてください!!」

パチエが座るソファは明るく照らされているので、其処に大量の本を持つて飛び込むこあさんは

スローで見える・・・足で俺に勝つ人間はそう居ない、人外もだ・・・視認の刹那走り出し、パチエの

肩を抱え、頭を胸元に引き込む。その後から地味に痛い衝撃が何度も襲う。本の角かな？

「ああ・・・飛脚師さん・・・ごめんなさい、ごめんなさい」

声しか聞こえないが、こあさんがしきりに謝っている。まあ、本で良かった。

「痛てて・・・怪我は無いか？パチエ」

パチエは非常に身体の弱い女の子（しかし魔女）なので、とにかく守っておかないと後が怖い。特に喘息が酷く幻想郷の薬師でも作れないとか（魔女でも人に近いと思うが）

「ええ、貴方が居る時は大体守ってくれるから平気よ。こあ、飛脚師の手前、後で咎めるからさっさと受け取りなさい」

「うう・・・パチユリー様を助けていただいてありがとうございます。お手紙ありがとうございます」

何故二度も礼を言ったのか。本当に悪魔らしからぬ悪魔だ。見た目

は真紅のストレートヘア、ただ

何故か頭に悪魔の羽が付いている。尻尾もある・・・所々悪魔な悪魔だ。容姿は子供っぽさも残るが大人に近い。恐らく行動が子供っぽくなっている原因だろう。

「いえいえ、こちらこそ。ではお手紙確かにお届けいたしました。それでは」

そう言つて踵を返し、図書館を去ろうとする――

「待つて、飛脚師。この紅魔館に来てレミィに挨拶しないのはどうなのかしら？」

そう言われると昔此処に、この図書館から帰り、門を潜つたら、突然当主の間だったことがあった。

「助かったよ、パチエ。ありがとう」

そう言つて当主の間を目指すことにした。

道には迷わないので案内も要らない。特にこの紅魔館は俺のお得意様だ。他に飛脚なんて居ないし、居たとして断るだろうから・・・特にこの館は力の強弱が激しいので、なおのこと仕事は多い。

「飛脚師です。失礼します」

そう言つて当主の間の扉を開ける。紅魔館でも一際気を遣う動作だ。

・

「ふふ、来たわね。咲夜、紅茶を持つて来なさい」

扉を開けて、閉めて向き直つた瞬間には紅魔館の当主、レミリア・スカレットしか居ない。青紫の綺麗な短髪に、コウモリのような羽を背中に持つ。気づきにくいが牙も持っている。

「スカレット卿、久しくお目にかかります。お変わりないようで」

「飛脚師、そんな口を利かなくても良いわ。咲夜は厳しいけど、貴方は私が認めた人間なの。口の利き方位気にしなくてもいいのよ」

そうは言うが、俺は人間、かたや向こうは吸血鬼の始祖から先祖代々続く由緒正しい吸血鬼だ。

恐怖や偏見でこう話しているわけではない。職業柄話し方を変える都合が良くなるので、その

延長に過ぎない。

「建前は違うのさ、レミリア」

パチエは気軽に呼べるし、向こうも許してくれるが、レミリアはそうはいかない・・・咲夜さんが許さないのだ・・・咲夜さんはこの紅魔館のメイド長で、レミリアの右腕・・・いや、四肢と言っても過言ではない人だ。

「お茶をお持ちいたしました。お嬢様」

まったく・・・いつの間にかレミリアの傍に立っている。白銀に輝く短髪の瀟洒なメイド十六夜^{じゅうよ} 咲夜さん^{さくや}。綺麗なお姉さんのようだが、怒らせると本当に怖い。レミリアも恐れるほどの怖さと聞く人間らしいが・・・

「飛脚師、座りなさい。折角の紅茶が冷めてしまっわ。そうだわ、チェスでも一局どうかしら？」

何度か誘われるこのチェスというゲームは、未だに理解出来ない。何時も誘われては黒星のみの

・ 星空が輝いている。まあ、黒星は一切輝かず真っ黒の空だけだが・・・

「今日は遠慮してお・・・きます。では、紅茶を頂きます」

そう言ってティーカップに入った紅茶を飲む。何というか、何時も飲む緑茶とは風味が全く違う。

普段は飲むことも無いので貴重だ。それとなしに美味しさも解かるようになつてきた。

「ねえ、飛脚師・・・ちよつとした条件付きの一つ届け物をしてくれないかしら？」

随分声の調子が変わって依頼された。レミリアがこうまでなる届け物とは何だろうか。

「まあ、どんな手紙なの？もしくは荷物？」

「・・・咲夜、お願い」

「はい。依頼品は・・・フラン様です」

フラン・・・フランドールの事か！？

「はあ！？ああ、いや、済みません。再度確認しますが、フランドール様ですか？」

「そうよ。フランを届けて欲しいの。条件付きで・・・」

待て待て、フランことフランドール・スカーレット様はレミリアの妹だ。何故かは知らないが、地下室に幽閉されていて、495年程暮らしているらしい・・・レミリアの依頼で同じ屋敷内のフランに手紙を届けに行った時死んだかと思った・・・てつきり姉妹喧嘩の仲直りかと思ったら、殺されかけた。見た目は黄金の短髪に紅白の服を着ていて硝子の樹のような羽のついた女の子だ。ただ可愛らしく笑って、遊ぼうと言った時、飯事が人形遊びでもするのかと思っていたら、次の瞬間、気を失って気づいた時には、揺れる視界の中、血の出た首をしきりに舐められている記憶だけだ・・・

「正直、断りたいです。でも、レミリア・・・様の言・・・仰る条件次第で考えます」

「はあ・・・正直に言うわ。届け先は紅魔館、地下室。条件は・・・明日にフランを届ける事よ」

明日、紅魔館の地下室に・・・別にそれなら俺に頼まなくても、元から地下室に居るじゃないか

「誤解されているようですので、質問を致します。飛脚師様は手紙を明日此処に届けると言われて、手紙を持っている時、貴方はその手紙をどう致しますか？」

それは・・・まあ、ざらにある事だ。そういう時は都合を考慮して、丁重慎重にお預かり——まさか

「そ、の・・・フランドール様を、お預りして、明日お届けしろ——なんて・・・ね？」

「その通りよ。お願い、飛脚師」

「飛脚師様、何卒お願い致します」

まさか、レミリアと咲夜さんが頭を下げてまで頼むとは・・・断われない・・・

「分かりました。この飛脚師、全身心込めてこの依頼受けさせてい

たきます。ただ——」

立ち上がり、片膝を付き、頭を下げる。ただ、生き物を運ぶのは生まれて初めてだ。今迄は手紙、書類・・・荷物も運ぶが、大体は食料品・・・一番大きい物でタンスだった。

「ただ——どうなのかしら？」

「俺の家は狭いし、紅魔館みたいな格式ある綺麗な屋敷じゃないけど・・・良いのか？」

「私は行ったことが無いから、どうとも言えないけど・・・そんなに粗末なのかしら？」

自慢するほどでも無いが・・・いや、自慢出来ないが、厠や台所を除くと三部屋位しかない家だ。

酷く金が無いわけでもないが、人間から貰う報酬は主に食料なので仕事をしても中々積もらない。

かといって妖怪はそうでもないのかと訊かれても、特殊な物が報酬の事がざらなので期待は薄い

のだ。まあ、食うには困らないし、この服も報酬品でほぼ無償のものだ。

「俺だけが住む事が前提だから・・・子供位なら何とかなるけど、困るのは茶碗とかだよ」

「予備くらい無いのかしら？」

む・・・このお嬢様は勤労つてももの苦勞を知らないようだな・・・ある意味では当然だけど。

「何処かのお姫様と違うんでね。まあ、無いこともないから済ませよう」

陶器屋の報酬に茶碗があつた気がする。装飾が見事で店主の言葉そのままの良いものらしいが、俺なんかでは不釣合いなので使わなくなった茶碗がある・・・筈だ。

「それでも信じているのよ。最初に紅魔館に来て、私に普通に話しかけてきた時は驚いたわ」

「そうだよな・・・此処に来れる人間なんて、博麗の巫女さんか、白黒の魔女か・・・だものな」

「そう言えば訊こうと思ってた事だけれど、どうやって私の部屋まで来れたのかしら？」

最初に紅魔館に来た事か・・・臆気ながら覚えている。

「寝ている美鈴さんを幸いと素通りして、手紙が行きたいって思う道に沿って歩いただけだな」

物の求めを感じ取れる程度の能力はこの時に気づいたっけ・・・

「まあ、そこまで分からなくてもいいわ。咲夜をどうしたの？」

「手紙が咲夜さんに会うことを求めてなかったから、咲夜さんには会わなかった」

「そんな・・・咲夜？」

「咲夜さんを責めないでくれ。多分あまりにも俺がちっばけ過ぎて気づかなかっただけなんだ。俺には霊力も無ければ、妖力神力も全く無いちっばけな人間なんだから」

「確かに霊力妖力は感じないけど、神力の無い——そう思うのは貴方だけなんじゃないかしら？」

「冗談。俺は人間。人間の飛脚師だよ。神力なんて・・・一番縁が無いって」

「飛脚師様、信仰が集まれば人間でも神に等しい存在になれる。と言い伝えがございます」

「咲夜さんも上手いですね・・・とりあえず、フラン様に会いに行く処から始めますか・・・」

席を立ち、二人に一礼して部屋を後にする。

正直恐怖でいっぱいだ。怖い、フランは怖い。話だけでも何の突拍子も無く攻撃されるので本当に怖いのだ。本当は寂しがり屋の小さな可愛い女の子なのだろう。しかし何故攻撃するのか——と

考えながら気がつく地下の牢獄まで来ていた。道に迷わず来たので早い。道草でもするべきだったかな。

「フラン、居るか？フラン・・・」

「飛脚師？入って良いよ」

相変わらず【ひきやくし】を【ひきやくち】と聞き違えるような舌足らずだ。随分ましになったが・・・

「お邪魔しますよ。おっと——フラン・・・今度掃除、しような？」
相も変わらず、埃や何かの炭？とゴミ・・・と壁の欠片・・・どうも酷いな

「飛脚師、飛脚師・・・」

うわ言のように俺の名を呼び続けている。今は気が触れているのか・・・

「・・・・・・・・フラン、俺は誰だ。きちんと答えられるか？」

「飛脚師・・・ねえ・・・遊ばウヨ・・・禁忌・レーヴァテイン」

暗い地下の牢獄で紅い光がフランの右手から迸った。

「流石、正解だ。次の質問だが、俺に死んで欲しいのか？」

「ううん。遊んで・・・お願い・・・ダカラ、遊ビマシヨウ！」

飛ぶように、風のように速く飛び掛ってきた・・・幸いにも地下牢に入っただけでこんなだったのでフランは足と手に付いている鉄の枷で止まった。ありがとう咲夜さん。人差し指をフランに向ける。

「正当防衛・・・な。輝符・煌・キラメキ」

人差し指から細い光の線が放たれ、フランに当たった瞬間、大量の光になって、爆ぜた。

「ガ！？アア・・・」

このスペルカードは退魔の光を発し、妖怪の動きを一時的に止めることが出来るスペルカードだ。

善良な人間や神には効かない。ただ、今の光の線でも本気なのだ、流石にフランでも堪える筈。

傍に行っても動きは無い。よほどの力を込めたのだろう、真っ白で細い腕には紅い筋が何本も見えている。正直この枷を外してやりたいと思う。この枷もフランが自由になることを求めている。

だが、俺の能力は物の求めを感じ取れるまでだ・・・叶えてやることは出来ない。一方的と知りながら罪悪感が生まれる。せめて・・・

行李から包帯を取り出す。こういう職なので最低限の医療品は持ち歩いているのだ。包帯を枷が当たる場所に巻いていく。せめて痛みを軽くしてやりたい。これを咲夜さんが見たら苦笑しながら外すだろう。

「うう・・・飛脚師、なの？」

「そうだ。その・・・な、いきなりで悪いと思うんだけど、一日だけ俺の家に来ないか？」

突然考えも及ばないことを聞かれてきょとんとしている・・・首を傾げる姿は可愛いな。

「まあ、嫌だわな。気にしないで、忘れてくれ」

フランもよく解からないのに連れ出されるなんて御免だろう。残念だが仕事を断るか・・・

「待って、飛脚師。外に行けるの？」

まあ、いけないことも無いだろうが・・・どうなのだろう？人に会わすのは論外だ。結局は俺の家に縛り付けることになるのかも知れない。

「行けるけど、ほんの少しだけで後は俺の家に居なきゃいけないんだ。でも良いのか？」

「うん、とね・・・行きたい。飛脚師は遊んでくれるから好き。だから大丈夫だよ」

フランと傍に何か落ちる音がした。金属なのだろうが一体何だろう。拾い上げると古めかしい鍵だった。咲夜さん・・・少し罪な人だ。

「俺もフランのことは好きだよ。もう少し御淑やかになって欲しいけどな」

そう言っつてフランの頭を撫でる。柔らかく、つややかな金髪は流れるように撫でやすい。被り物が無ければもっと撫でやすいが、取ってまで――の程ではない。

「ねえ・・・飛脚師って、名前は無いの？」

「無いこともないだろうけど、覚えてない。飛脚師で名は通ってる

から、今更変えるつもりも無いし」

「ふうん・・・え？鎖取って良いの？」

ちよつと不安が残るが、手足の枷を全て取る。頼むから暴走しないでくれよ・・・

「取らずに行く方法なんてないさ。そうじゃなくても俺が居る間は取ってやりたいんだから」

「ありがと・・・」

「じゃあ、行くか？」

立ち上がり、フランに手を差し伸べる。

「うん。行く・・・」

フランの手を引いてお姫様抱っこをする。軽いな・・・まったく、これでこの強さなんて勘弁だな。地下牢を出て、紅魔館を走り抜ける・・・外に出ると日があるが、暮れ始めている・・・さっさと帰らないと妖怪に襲われる危険が高まる。

「飛脚師さん、またおこしく下さい——zzz」

いざ、紅魔館へ！（前書き）

こんにちはオルです。このたびは二話目を更新することとなりました。

今回は妹様を奪取した主人公がフランに一宿一飯させて出発までです。

本当に更新が不定期ですので…と言ってもアクセス数が全然なので大して変わりはないですね…それでも頑張った方なので絶対零度の如く冷やかな目で見守ってください

いざ、紅魔館へ！

寝言か・・・しかしフランをつれて屋敷を出るのを見られるのも拙いので幸いかな。ふと空を見るとさつき暮れていると思ったが、違う。曇っている。おかしいな、文々。新聞では今日一日は晴れとあったのだがレミリアは太陽を嫌うのでフランもそうだろうからこれはこれで幸いだ。

「飛脚師、お腹空いちやった」

確かに俺が行ったのは微妙な時間帯なので昼飯を食べていないのか。レミリアも段取りが悪い。

「大したものじゃないけど、おにぎり食べるか？」

行李の中に俺の昼飯のおにぎりがある。だが、具も無く塩気だけがあるおにぎりなんて・・・

「食べる。飛脚師が食べさせて」

わがままな妹様だ・・・走り疲れもあるので丁度良い。近くの木陰（曇りなので影は無いが）に腰掛け、行李とフランを下ろす。変な気配がする。行李の中にある額宛を取り出し、付ける。

「どうしたの、飛脚師。角みたいよ」

鬼の威厳は凄まじく、角があるだけでも雑魚妖怪は退いてくれるのだ。まあスペルカードがあるお陰で勝手に錯覚しているだけだが角が付くと妖怪っぽく見られるのだ。

「まあ、気分転換さ。何方かな、其処の何か・・・輝符——」

「ひにゃあ！ご、ご、ご・・・ごめんなさい！助けて藍様ー！」

緑色の帽子を被った猫のような耳と、二つに分かれた尻尾・・・スキマ妖怪の式の式、猫又の橙

（ちえん）だ。とても怯えている。当然といえば当然だが、強さ的には俺の方が弱い筈だが・・・

「大丈夫だよ、橙。ごめんな、怖い思いさせて・・・」

「あ、もう・・・大丈夫、です。お騒がせしました」

とりあえず三人（俺しか人間は居ないが）して立つのも何なので草むらに座ることにした。

どうやら買物帰りにやばい気配を感じて隠れたら、俺が居るので安心したら攻撃されそうになった・・・と。こういうことらしい。見た目の歳はフランと同じかそれ以下だが、可哀想だ。平気と言ったが、まだ尻尾まで震えている・・・いつもなら頭を撫でたり、喉を擦ったりしてやるが、今はフランを遠ざけるほうが優先だ。

「フラン、おにぎりを食べような。はい」

海苔のような海産物は非常に高価なのでほうれん草で包んだおにぎりを一つ差し出す。

「あむ・・・美味しい」

差し出したおにぎりを受け取ることなく食べた。予め言っていたので驚きもしないが・・・

「飛脚師さん、私も食べたいです」

他人（人ではないが）がものを食べていると妖怪と言え触発されるのだろうか・・・

「おかかどころか何も入ってないけど、良いのか？」

「はい、食べたいです」

昔手紙配達の時に行き倒れていた橙におにぎりとお水をあげたのが出会の始まりだった。あの時は少しおかに期待していたのだが（削り節なんて初めて見たから）全て食べられた・・・

「まあ、なら良いけど・・・どうぞ？」

もう片方の手でおにぎりをあげる——と、フランのようにかぶりついてきた。

「美味しいです、飛脚師さん」

「そうか！？なら、良かったけど・・・」

俺は腕が伸ばしっぱなしになるので一切良くないのだが・・・フランがじつとこちらを見ている？

「もう行くのか、それとも飲み物でも要るのか？」

「要る。血、欲しい。飛脚師の血・・・」

嫌だな。そう思ったのとほぼ同じくらいの瞬間に人差し指に鋭い痛みが走った。

「フラン・・・まあ、いいさ。俺が死なない程度なら好きに飲んで良いよ」

食うことさえきちんとすれば血くらい大して問題にはならないだろう。そう思った矢先、また痛みが襲った。

「フラン？」

「ん・・・【けんぞく】に・・・なるまで・・・飲む・・・」

眷族・・・確か、一族とかそんな意味だった気がするが・・・どうやっても俺は吸血鬼にはなれないのではないのか？生まれながらの人間だし、俺は実は——なんて聞いた事もない。

「飛脚師さん、このまま吸わせておいたら本当に吸血鬼になっちゃいますよ」

フランの気が逸れているので小声で血をすわれ続けたら吸血鬼になってしまつと橙が聞かせてくれた。俺が吸血鬼になると仕事が減ってしまう。

「そろそろ良いんじゃないか？」

「や・・・まだ【けんぞく】になってない・・・」

拙いな。だがこの飛脚師の交渉力を甘く見てもらっちゃ困る

「フラン、俺は痛くて辛くて苦しいんだ。フランの事が嫌いになるかもしれないな・・・」

「！それは嫌・・・」

指から口が離れる・・・聞き分けはいいので助かった。

「フランは良い子だな。じゃあ、行こうか？」

軽く頭を撫で、もう一度抱き抱える。

「じゃあな橙。縁があつたらまた会おうな」

そう言つて走り出す。しかし、今更ながら後悔しそうになる。明日まで俺は生きてるかな・・・俺の家は人里とは一線置いた所に建っているのでフランが居ても心配はあまり無い。それ故に俺に何かがあつても助けられることはあまりない。といつても人間に助けら

れた事は一度も無いが・・・近道をしたのでそう思っている間に家に着いてしまった。

「此処が、飛脚師の・・・家？」

妖怪の勢力圏のすぐ近くなので一人しか住めないのだ。それに大きく（普通の家位に）作ったら妖怪の格好的になるのは明白だ。なので小屋と見間違うような大きさの【家】なのだ。

「そうさ。何処かのお嬢様や、幽霊様とは違うんでな」

フランは満更でもなさそうだが、他の家というものを見たことがないだけではないのか・・・とりあえずフランと一緒に入り、その辺に座らせる。

「中は綺麗・・・クローゼットも綺麗、お布団も・・・」

まあ、掃除を怠っているわけではない。ただ、家具は貰い物（報酬）が殆どで家具屋だったり、布団屋の報酬なので良い物だ。とにかくこの家は大きさ以外の問題は無いのだ。

「少し待っててくれよ」

そう言い、フランを中に残して一旦外に出て家の近くに建ててあるポストの中身を見る。特に何も入っていないな・・・依頼は無し・・・

まあ、この夕暮れ時に人間の依頼があるはずも無いが。

「すまん、飛脚師・・・」

突然声が掛かった・・・後ろを振り向くと所々青い独特の服を着た銀の長髪の美女、上白沢かみしろさわ 慧音さんけいね。極稀に角の生えた姿を見かける事があるが、それ以外は寺子屋の教師をしている大変得のある人だ。訂正、半獣だ。ワーハクタクというらしい。半獣といえば妖怪の部類に入るのだがこの人は人里でもいいかの祭事も取り仕切ったりしている。誰からも一目置かれる人だ。色々と依頼を受けるのでお得意様と言っても過言ではない。荷物の配達だが・・・

「どうしました、慧音さん」

「いや、な・・・寺子屋で使う半紙や墨が無くなってきてな。近いに私の寺子屋に来てくれ」

「分かりました。しかし慧音さんも大変ですね、こんな時間まで・・・

・
」

「なに・・・どんな仕事でも断らないお前程でもないさ。いつも頼らせてもらっているよ」

全く嫌味の無い謙虚さだ。女性の美しさとは内面からくる。と里長が言っていたが、慧音さんはその意味では完璧な人だ。まったく、感服する。

「こちらこそ。お互いに、助けられますね」

「ふ・・・うちの妹紅も飛脚師位口達者ならな・・・じゃあ、頼む」

「はい、この飛脚師、全心身込めてこの依頼受けさせていただきます」

片膝を付いて頭を下げる。この言葉と動作は身体に染み付いている習慣だ。慧音さんと分かれ、家に戻る。

「飛脚師。この剣、綺麗・・・」

そう言ったフランが持っているのは光を受け、紅く光る一振りの日本刀。確か【血染村正】だ。

「フラン、離せ！それは拙い物なんだ！」

何時もは怒鳴る事なんてまず無いがこういう時は別だ。

「ひっ・・・ごめんなさい・・・」

フランは驚いて手放して震えている。悪いことをしてしまったが、仕方が無かった。あの剣は、一般的に言う妖刀ではあるのだが、その中でも俺が護身の剣と言って鍛冶屋に譲ってもらった剣で切れ味は恐ろしいほどあるが、持っているとき重く、足に当たり、走りにくいのと実際使っても間合いが違って中々当たらないんだ。威嚇にはなるが、それなら別に輝符・煌・キラメキで十分だ。一番困るのがその剣を抜いてから気が触れた感覚に襲われるところだ。フランが持つと・・・もう目に見えているからこそ、想像したくない。

「フラン、ごめん。でももうこの剣は持たないでくれ。俺の言うことが聞けるか？」

「うん。触らない。ごめんなさい・・・」

座りこんでしまって今すぐにでも泣き出しそうだ。それはそれで拙

いな。

「俺こそ悪かった。きちんと注意もしていないし、拳句怒鳴るなんて・・・ごめん」

「う・・・飛脚師、怒ってないの？」

座りこみ、涙目で上目遣いの状態で嗚咽交じりに言われて責めたてようと出来る者はそう居まい。

「怒っていないさ。ごめんな、フラン」

フランに歩み寄り頭を撫でる。どうも気は触れていないようだ。

「さて・・・なあ、フラン。そもそもどうやればこれを抜けたんだ？」

血染村正には博麗の巫女に頼んで刀自体と妖力に封印の札を貼っておいたのだが・・・

「私は、普通に抜けたの・・・怒る？」

「いや・・・まあ、フランの力だったら抜けても不思議じゃないわな」

とりあえず血染村正を――持っても何ともない？以前は変な感覚に襲われたのだが・・・しかし聞こえる。斬りたい、誰・・・いや、何かでもいいから・・・だが、その求めは叶えない。鞘に仕舞う。安心したのか腹が鳴った。

「飛脚師、お腹空いたの？」

「まあ、昼飯食べてないから結構な・・・」

フランが何かを思いついたような顔をした？嫌な予感がする・・・
「私が作ってあげる♪」

ああ、願わくば家が、基礎の柱だけでも残って居ますように・・・
かまども一から作るのは苦勞するので残っていて欲しいな・・・
囲炉裏って灰集めが苦勞したっけ・・・

「俺が手伝うよ」

「私が作りたいの」

「俺が手伝いたいんだよ」

「じゃあ飛脚師に手伝わせてあげる♪」

ふ・・・この交渉術、我ながら会得して良かったな。その流れで台所へ行く。そうだ、交渉術で止めれば良かったのに・・・でも、流石にそこまでは無理そうだし、ここが良い妥協点かな。しかし、今大した食材はあったかな・・・山菜炒めでも作るか・・・

「フラン——」

言葉はそこで詰まった。さて、フランに何処を手伝って、いや、何処を手伝ってあげようか・・・切る炒めるは家が消えそうで嫌だから、食器の準備、配膳・・・この辺かな。

「——今のままじゃ食器が足りないんだ。持ってきてくれる？」

「うん・・・良いよ」

そう言って部屋の奥（物置）に入っていく。フランって俺の能力使えたっけな・・・いや、単純に俺の家って部屋って物置と居間しかないので消去法が適用出来るな。

「さて・・・やりますか」

木を適当な間隔で置き、マッチで火を点ける。飯自体は朝炊いたので心配は無い。山菜を乱雑に切って、鍋に入れ炒める。肉は干し肉があるので中に入れておく。塩も意外に高いので干す時に使った防菌用の塩分で十分だ。緑茶用の湯も沸かしたのでもう特に危険はないだろう。

「あつたよ。お茶碗、これ？」

丁度良い頃合でフランが蒼く華麗な装飾が施された真っ白な陶器の茶碗・・・本当にフラン位じゃないと釣り合わないよな・・・ただ洋風なフランには格しか合っていないのもっと格式高い人・・・例えば慧音さんとか・・・いや、慧音さんが無駄な装飾というものない気がする。

「ああ、それだよ。ありがとな、フラン」

そう言ってフランの頭を撫でる。俺は事あるごとにフランの頭を撫でるが、正直フランはどう思っているのか・・・拒否しないあたり嫌ではないのだろうが、どうなのか・・・

「もう料理出来てるね・・・なんで私に作らせてくれないの？」

随分声が落ち着いている。理由は単純だが言つと傷つくだろう。何とかオブラートに包まないと。

「僕は料理を作るよ。でも、そのお茶碗は見つけられないんだ」

「ふうん……飛脚師、私もお腹空いちゃった」

上手くいったのか、フ란の口調は元に戻った。料理を皿によそつて居間に持つていく。

「さて、食べようか。頂きます」

箸は微妙ながら予備があるので良かったが、そもそもフ란は箸なんて使うのだろうか……

「いっただつきまゝす」

山菜も食べるのか……本当に俺の家はフ란には似合わないところだな。

「食えるか？不味かったら悪い」

「美味しいよ？食べたことないものばかりだけど」

そこはあっているんだな……しかし俺の家に誰か来た（泊まる）事なんて初めてだな。料理を振舞うのも悪くない気分だ。咲夜さんもこういう気持ちで料理を作っているのだろうか……

「なら良かったよ。これで魚でもあればまだましなだけど……」
イワナの開きは昨日で食べきってしまったので少し後悔する。もしかしたらフ란でもこういう風情のある食事を好んでくれるかも知れない。

「ねえ、飛脚師。その角取らないの？」

確かにそう言われれば額宛を取るのを忘れていた。

「そうだった。ありがとフ란」

まだ付いていたい……と感じ取れるが、取る。取つて傍に置く。もうはつきり言って置くの物置からは大量の求めを感じ取れているのもう自分自身正気なのか判らなくなる。まあ、今は平気だ。

「飛脚師……お願い……」

お願い？

「どうした、俺に出来ることなら全然構わないけど」

「血が欲しいの」

ええ・・・またかよ・・・正直痛いし（我慢出来るけど）、その後ふらふらするし、大変なのだ。それに、一定間隔空けたとはいえ、吸血鬼になってしまいう気がする。

「出来るけど、俺の事を思って我慢してくれるか？」

「嫌だよ。飛脚師・・・の血が・・・」

右手の箸を握り締めて折った。眼が明らかにおかしい。やばい予感がする・・・右腕を掴まれた！？

そのまま握られた。

「ぐあ・・・ああ・・・止め、フラン・・・」

鈍い痛みが腕全体に広がっていく・・・輝符・煌・キラメキ・で止めたいが、利き手ではないので難しい。痛みも酷いのでまともに集中も出来ない。どうも気が触れているわけじゃないようだが・・・

「！・・・ごめんなさい」

手が離れていく。そこまで血が飲みたかったのか？

「まあ、特にどうともなくてもいいから良いけど」

とは言っても、まだ右腕が痛いので左手でお茶を啜る。その内捻ったりしなければ平気になった。

「飛脚師・・・痛くない？」

フランが恐る恐る訊いてきた。勿論まだ痛いけど、ストレートに真実は言わない。

「捻ったり、無理な運動さえしなければ痛くないさ」

「ふうん・・・良かった」

食器はフランが片付けてくれた。破壊衝動さえ無ければ素直で良い子なんだけどな・・・ふと身体に不快感を感じたので水浴びに行く。

「あれ・・・」

桶や手拭の配置が変わっている？昨日の今日なので記憶違いということは無さだが、一体・・・

「飛脚師ー何処ー？」

あ、前もってフランに言うのを忘れていた。心配はされないと思う

が。

「俺は此処だ。フランって水浴び・・・しないよな？」

一旦居間に戻ってフランに姿を見せる。まあどうせ風呂や食器もいたずら好きな妖怪が変えていくのだろうが。そう言えば吸血鬼って汗もかかないし、皮膚だって劣化しないからわざわざ水浴びの必要は無いよな・・・

「飛脚師と一緒に？」

そんな筈は無いだろう。そんな事があつたら咲夜さんに、いや、レミリアもか・・・消滅させられるさ。

「フランも大人なんだから一人で入れるよな？」

そもそも、水浴びするんだな・・・今は真夏真っ盛りなので常温の水でもぬるく、お湯よりも良い。まあ、お湯を張るには井戸から水を汲んでくる作業で半刻掛かる。それにそれが出来たとして、温めるので薪を無駄にするだけだ。

「でも私、水は嫌い」

吸血鬼なのだから当然と言えば当然だが、何故入る事が前提で訊いたのだろうか。

「無理して入る必要は無いさ」

そう言い残し、風呂へ行き、着物を脱いで頭から水を浴びる。動く仕事なので汗が流れて気持ちが良い。もう一度水を浴びて少し身体を振るう。風呂の戸が突然開いた!?

「だ・・・!?!? フラン？」

振り返らずともフランということは判るが、何故今フランが来るのか

「飛脚師、傷・・・あ、お客さん・・・」

「そ・・・そうか。少し待っている様、伝えてくれ」

まったく、驚く。俺にも一応恥ずかしいと思う気持ちはある。軽く叩いて、応答を待つて欲しかった。

それでも客と言うなら迎えなければ・・・寝巻き（薄い普段着）に着替えて玄関へ出る。

「何方ですか？」

「こんばんは。射命丸です。取材予定は、今日ですよ。」

黒い短髪で漆黒の羽を持った明るい女の子……鴉天狗の射命丸しゃめいまる

文。あや明るく馴染み易いが、馴染むと取材取材結構しつこい。今日は依頼も無いので今朝方引き受けたわけだ。何処で間違ったかフランが居る状態だが……。しかし、いつもこの文は簡素な服しか着ていないな、素朴で真つ白なカッターに短く黒いスカート……。丈が短いので眼のやり場に困る。

「そうだな。鬼程じゃないが、嘘は吐かない。あがってくれ」

三人とは、想定外だな。まったく……。しかし、さっさと終わらせよう。フランの眼が怖いし。

「では早速率直に……。お名前は？」

「飛脚師」

「質問を潰さないでくださいよ。さ、本当のお名前は？」

「飛脚師。真名は覚えていない。別に記憶がどうかじゃないからな、単純に忘れたんだ」

「そうですか。では、ずばり……。お仕事は？」

「飛脚」

「ですよ。ちなみに種族は？」

「紛うこと無き人間だ」

「はい。それでは、人間でスペルカードを使えるという噂がありますが、本当ですか？」

「本当だ。見せないがな」

「残念……。では、今恋仲の方は何方からいらっしゃいますか？」

「居ないな。まあ、仮に居たとして、俺の家には連れて来れないさ。危険だから」

「意味深ですね……。あ、ちなみに……。紅魔の妹さんは何故此処に？」

「預かり物だ。外界の硝子の器以上に慎重な扱いが必要だ。くれぐれも雑に扱わないでくれよ？」

「ほう……。大凡の関係は掴めました。そうでした、写真を何枚か

宜しいですか？」

「フランを刺激しなければ構わないさ」

「ではお言葉に甘えて遠慮なく・・・」

そう言った刹那カメラ（と呼ぶ外界の機械）を構えフランと俺を何
十回と写した。数枚って・・・

フランも嫌になったのか俺の後ろに隠れるようになった。それに気
づいたか文はカメラを置いた。

「飛脚師、終わり？」

俺に訊いても無駄なのだが・・・

「はい。終わりです。では、私は記事にさせて頂きますので、また
・・・」

「下手な記事を書いてみる、絶対配達しないからな。後、俺より紅
魔館のメイドに注意することだ」

「あややや、そうしましょう・・・では・・・」

そう言つて外に出て、軽く跳んだかと思つたら消えてしまった。そ
ういえば彼女は幻想郷最速だ。俺程度では見えないのも頷ける。

「飛脚師、眠い・・・」

もう、さっきの間にそんな時間が経過していたのか・・・

「分かった。少し待ってくれ」

そう言つて居間の角に仕舞つてあつた布団を広げる

「わゝ飛脚師の匂い・・・」

それはそうだろう。というか、それって俺にとって良い事なのか？

「その・・・悪いが、嫌でも我慢してもらうしかないぞ？替えとか
は無いんだ・・・」

替えが無い・・・あ、俺どうやって寝ようかな・・・

「嫌じゃないよ。でも何かお話して欲しいの」

話？俺は童話とか、その類のものは一切縁が無いので全く出来ない。
・・・

「ちよつと、無理かな。他なら、その、あれかも知れないけど」

「じゃあ飛脚師の事話して・・・」

俺の過去・・・か。あまり、いや・・・聴いても気分を悪くするだけで気がするが。

「面白くも無いだろうな・・・まあ、話すか——俺は、フランに似てるんだ。親には好かれてなくてな。兄弟が居たわけじゃないが、口減らして奴だ。よく山に置き去りにされた。でも、何度も何度も全く迷わずに家に帰ってな。より一層嫌われた。幼いながら気づいたんだと思うけど、何時かの冬、俺は家を出た。あの時は寒かったな・・・その、感覚で——だけじゃないさ・・・此処まで聞いて面白いのか？」

「面白くないけど、もつと聴きたい。飛脚師になったのは何時？」
随分哲学的に言うな・・・

「まあその後の事だけど、まあ、飛び出てきたわけだから、もう空腹でろくに考えられなくなってるな、裕福な家の前で倒れてたのが幸運だったのか、気づいたら布団の上で、事情もろくに話せてなかったけど、恰幅の良い人が此処で奉公してみるか？って訊いてくれたんだ。その時ばかりは四の五の考える事を忘れたんだ。で、奉公の毎日だ。その家の奥さんもお嬢さんも良い人で、俺は時たま家族になれたのかな——って思うようになったんだ」

「飛脚師、楽しそう」

「本当に楽しかったんだ。まあ、今も楽しいけどな。とりあえず、そんな生活を続けていたら——俺は奉公人だから買出しや掃除、洗濯は何時もの事なんだけど、その時は突然来たんだ。俺がちよっと買物に出かけた時に俺が妖怪に襲われてさ、ただ、運が悪かったんだ。でもそんなに深い傷じゃないさ、何とか逃げ帰ってきたら、家中大騒ぎで・・・それから変に遠慮するようになったからその家を出て飛脚になった。仕事だから心配ないからって・・・まあ、その家族とは幾らか交流はあるさ。疎遠にはならないし、何の仕事をしているのか大変だったら戻って来いとも言われたけど、俺はこの仕事で生きていけるからな。人と人外は中々結べないけど——ふ・・・お休み、フラン」

話のどこで寝たのか、すやすや寝息を立てている。本当に俺何処で寝ようかな・・・結局フ란に一番遠い床で寝ることにした。やはり動く仕事なので眠い。床といえ睡魔がきて、寝た。

ふと眼が開く。薄暗いが明るい・・・朝か。起き上がって薪を割るために外に出る。そう言えば斧が消えていた・・・どうしようか。

元々仕舞い忘れていた自分が悪いのだが・・・そうだ、血染村正で代用しよう。家に戻り、血染村正を持ってきて、試しに薪を割って（切って？）みる。凄まじい切れ味だ、斧のことは忘れよう。さて、夜も明けるすぐ手前、そろそろブン屋の使いが来てもおかしくないおっと、風呂敷を担いだ女の子が近づいてくる。

「おはようございま・・・す。飛脚師さん、今日も文々。新聞の配達をお願いします」

灰色の短髪をして同じく灰色の尻尾の生えた女の子。そう言えば犬のような耳もしている。白狼天狗の犬走いぬばしら 椀もみじ。位的には文の下なのだが個人的には椀の方が尊敬出来る。

白い長袖の服と黒く、端が赤いロングスカートを穿いているが、おんなのこにはにあわない大刀と椀（の葉）の模様の施された盾を装備している。普段は妖怪の棲む山の自警団をしているらしい。

「ああ、任せてくれ。少し待ってくれるだけの間があるなら、干し肉があるけど、要るかな？」

この飛脚師——のくだりは毎日の積み重ねの影響が発生しない。

「わふ・・・その、私には警護という重大な・・・使命が・・・あるので、ありがたく頂きます！」

妖怪と言え、現金（肉だが）な女の子だな。尊敬はしているのだが。これも尊敬のうちか・・・

「待っていてくれ」

そう言って台所へ行き、干し肉と何時もの風呂敷を持ってまた戻る。さっきまで振り子のようなだった尻尾は壊れた風車の様に回っている。試しに意図して手を振ってみると眼が完全に干し肉を追っている・・・

・面白いな。適当な所で止め、椀に干し肉を渡す。

「わふう」飛脚師さんの家の周りは何時もの一回り嚴重に見回っておきますね」

その割には弱い妖精や雑魚妖怪は見逃されているのだが・・・まあ、いいでしょう。血染村正の新しい活用方法も得たことだし。ちなみに血染村正は求めが叶ったからなのか次の求めか、帯刀を求めている。叶えてやれないこともないが、正直飛脚の俺が帯刀をすることは変だし、それを差し引いたところで邪魔なんだよな・・・護身には余計なんだ。輝符・煌・キラメキで事足りる。

「何時もお疲れ様。頑張っているのは知っているから、何時でも相談に乗るよ」

そう言っで見送ろうとした時

「待つてください。お礼をしていませんよ」

そうだった。報酬を貰うのを忘れていた。椀の差し出す封筒を貰う。そういえば、俺の仕事の支払いは前払いでも後払いでも良い。昨日は忘れていたが、こあさんの報酬は後払いなのを忘れていた。ああ・・・面倒だな。とりあえず封筒を懷に仕舞うと椀はもう空に飛び立っていた。ちなみに幻想郷では飛ぶ事が割と安易に出来るようになってる。ただし、人間はその限りではない。俺は仕事の付き合いで魔法使いに色々教えてもらっているが、今の所飛べはしない。正確にいうなら飛べるが、二尺（約60cm）程度を十秒位しか飛べないので高い所の物を取るのに重宝する。だが、俺の家はそんなに高くなく、飛んだら飛んだで天井に激突するだけなので、覚えた意味はまず無い。他にも火を出したりとか、水を出したりとかする魔法も使えなくもないが、火は火花が散る程度、水はその辺が湿る程度で、まあ使えない。素養は本当に人間クラスと言われた。気にしないし、魔法も使っていない。よく【継続は力】と言うが、それが本当なら俺は魔法に関しては無力、飛脚の能力なら無敵なのかな。俺以外の飛脚は幻想郷狭しといえど見た事がない。とりあえず風呂敷の文々。新聞を家に持って帰る。この風呂敷は一日おきに取り替えるので寝ているフ란の横に畳んで置いておく。しっかり寝てい

るフランをよそに新聞を行李に詰め込む。俺の行李——通常行李とは竹や柳を編んで作られた植物性の籠に近いものだが、俺の行李は違い、頑丈な土蜘蛛の糸を少し織り込んだ綿製の頑丈な行李だ。ちなみに新聞は60部程だが余裕で入る。本気でなければ肩に掛けるが、本気なら背負う。その行李に新聞を全て入れ、一部貰い、届け先の紙切れを確認する。いつもと変わらない人間達の名、と一人？の妖怪の名。台所に行き、釜に水と白米を入れ、加減して薪を入れ、マッチで火を点けて放っておく。

「フラン、少し・・・出てくる。まあ、聞こえてないよな・・・」
フランの掛けている布団を掛けなおし、額あてを頭に付ける。着物を寝巻きから普段着（飛脚用の動き易いもの）に着替え、行李を背負い、草履を履き、人里へ走り出す——その前にせめての情け、血染村正を帯刀するも、もう鞘が行李に当たって邪魔だと思う。まあ、気にしないようにする。

十秒足らずで家が点くらいに見える。しかし、里はまだ先だ、そしてその前に滝の近くの河童に会いに行かなければ・・・昨日は人と人外を結ぶと言っても実際には辛いものがある、主に体力で。滝は幸運？にも近いので速度をあげて一気に滝のふもとの家に着く。挨拶はこの時間なのでしない、ポストに新聞を入れてすぐさま次に行く。最近はこの河童しか新聞をとらなくなってしまった。そう言えば最近になって山の頂上に神社が出来たので其処にもたまに持つていく。紙には書いていないので今日は持つていかないが。そしてそのまま人里を目指す。四半刻経つ頃には人里に着いた。

「おう、飛脚師さんじゃねえか。今日も早いねえ！」

豆腐屋の親仁がこの寅二つ（午前五時）の真っ只中煩いものだ。しかし豆腐屋の朝は本当に早く、豆腐と朝の一声は里の名物（自称）になっているらしいので、気に留める者も無い。

「おはようさん。おっちゃん、新聞だよ」

そう言っ行って行李から新聞を一部渡す。勿論紙の中に書かれてある。

「何時も悪いねえ！そうだ、これを持つて行きなよ・・・」

そう言つて豆腐を一丁渡そうとする。しかし、行李の中が大変なことになるので受け取るわけにはいかない。

「待つてくれ。何時もながら断る。また昼に来れば、是非買わせてもらふよ」

「そうかい・・・まあそうだな！そうだ、その内大豆を運んでもらうかも知れねえ。手伝つてくんない！」

「その時は・・・この飛脚師、全心身込めてこの依頼受けさせていただきます」

こんな調子で依頼内容がどんどん膨れている気がする。だが、忙しい裏返しは、仕事があるのだ。文句は言わない、思わない。

「じゃあ達者でな、鬼の飛脚師さん！」

角の付いた額あてを付けていたのだった。しかし、堂々と言わないで欲しい。誤解を生む元だ。

「じゃあ、また。おつちゃん」

その後人里を走つて紙に書かれている人の家にだけ文々。新聞を戸に挟んでいく。半刻（一時間）程で作業も終わり、もう日のあがる卯の一つ（午前六時半）・・・フランは起きてるのかな・・・そうふと思つていると白髪の老婆が杖をつかずにとって近づき、話し掛けてきた。

「飛脚師の坊や、今日も運んでるのかい？」

この里の古参者であるナゴばあさん。苗字までは知らないが、俺に訊く権利は無いも同じ。しかしこの人は本当に元気だ。聞けば齡は七十を越えているらしいが背筋はその辺の若者よりしっかりして、眼も耳も達者。確か、人魚の刺身を一切れ食べたらしく、風邪知らずどころか病氣一切を知らない。明るく楽しい、良い人だ。丁度仕事も終わり、一息ついていいる時なので十分暇もある。

「一仕事終わったところさ。ナゴさんは・・・散歩かい？」

この人には俺は敬語を使わない。勿論、敬う気持ちが無いわけではない。ナゴさんは真摯な気持ちで伝わればただの、純粋な言葉で良いのだ。へたな敬語は怒りを買ういい種だ。

「そうさ。飛脚師の坊やは何時も働いてるねえ」

「食いぶち分は働かなきゃね。それに俺とかじゃないと人と人外は結べないさ」

「あたしや妖怪なんて怖くもないさ。こう長く生きてるとね、何だつて可愛く思えるのさ」

ナゴさんなら人と人外を結べるのではないのか。でも流石に妖怪から逃げるのはあれなので無理か・・・普通の人間は妖怪に関わるだけで嫌がるものだ。

「じゃあ、俺が妖怪になつても話しかけてよ？」

「今の坊やは可愛い小鬼さ。妖怪になつたらなつたで、妖怪の飛脚師になりな」

「それも一興かな。じゃあ俺はもう家に戻るよ。待たせてる人——いや、吸血鬼が居るから」

「独り者の飛脚師にもそんな人が出来たのかい？」

「いや、預かり者さ。じゃあね」

そうナゴさんに別れを言い、家に向かつて走り出す。道中は特に変わりもなく、半刻程で帰つて来ることが出来た。

「フラ・・・まだ寝ている・・・か」

少し寝相が崩れているが、起きた形跡は無い。台所ではもう白米が炊けているはずだ。薪を加減したので、もう火は消えている。ここ最近になつていい塩梅が判つたので助かる。今度はもう一つの釜に水を入れ、火を付ける。煮立つ間に野菜を切り（包丁で）、適当に煮立つたので味噌と共に釜の中に入れる。傍にある七輪に鉄板を敷き、卵と干し肉を入れる。干し肉は随分備蓄があるので中々使う。勿論派手には使わず、フランを含んで、食べきれる量を。最近では食べ過ぎになつていそうな気がする。が俺ももう齡・・・幾らだっけ？確か十五までは祝ってもらえたので記憶にあるが、その後家を出てからは毎日が風のように早く過ぎ去っていき、今に至る。幾つになつただろうか。まあ、いいか。干し肉と卵はいい頃合だ。皿に移し、別の器に味噌汁を注ぐ。一人用のお盆なのでこれで精一杯。

居間に持つて行くと匂いに釣られたのか布団が動き出し、フランが起きた。

「ひきや・・・くち」

いかにも眠たそうに眼を擦りながら名前を言うが、寝起きなので益々呂律が回っていない。

「おはよう、フラン。起き抜けだけど食べる？」

「うん。飛脚師のご飯は美味しいから・・・」

切つて焼いてしているだけなのだが、褒められると嬉しい。

「まあ、そう言ってくれると嬉しいな。でも、咲夜さんの方が美味しいんじゃないか？」

俺はどちらかというと料理が上手い方ではない。凝った料理も出来ないし、何より食材に恵まれていない。それよりは咲夜さんの料理の方が数段美味しいのではないだろうか・・・

「咲夜の料理は何時も同じだもん」

料理自体が同じ——というわけではないだろうが、慣れというものなのか・・・まあ、そういう意味でなら俺の料理は一時咲夜さんを越えたことになるな

「じゃあ先に食べてていいよ。俺はまた持つてくるから」

そう言つて再び台所に行き、同じように皿や器に盛つていく。その合間に塩の握り飯も作っておく。

それも済み、居間に戻つて新しい斧になつた血染村正を置く。

「早く、飛脚師も・・・」

布団は乱雑なままだが、きちんと座つて待っている。先に食べていてもいいと言つたが、待つていてくれたのか・・・変に律儀だな。

「ああ・・・食べるか」

「いただきます」

そして特に事無く食べ終わり、食器を片付けた。

「なあフラン、フランって太陽駄目だよな？」

「うん。直接じゃなかったら平気だけど」

「そうか・・・ちよつと物置に探しものがあるから、留守番頼むな」

流石なのかは判断しかねるが、吸血鬼。言い伝えに間違いはなさそうだ。だからこそその悩みが出てきた。フランをどうやって紅魔館まで運ぶのか。家に行く時は曇っていたので平気だったが、今は青天白日そのもの・・・流石に天気に出すことなど論外なので物置で何か日を守るものを探す。使い道の無いがらくたならあるのだが、日傘は無かったのか・・・いや、日傘は無くとも傘ならある筈だ。雨の日であろうと仕事はするので（耐水性に優れた物の運搬などしかなないが）番傘はある筈・・・何処かに・・・無い。何処にも無い。どうすればいいか・・・このままフランと共に紅魔館を目指すのは無謀。日を見るよりも明らかな事。見た瞬間に大変なことになるが・・・そうだ、行李の中に・・・いや、これも宜しい手段とはいいい難い。が、仕方なし・・・か。居間に戻りそれとなくフランに話しかける。

「フラン、もう少し休憩したら紅魔館に行こうと思うけど、その時お願いがあるんだ」

「飛脚師のお願いなら・・・いいよ？」

実際にこうしろとは言っていないが、了承を貰えたので良しとするか・・・

「ありがとな。そういえばフラン、昨日俺が昔話したけど覚えてるか？」

あまり良い話ではないので覚えていないと良いのだが・・・

「ちよつとだけ・・・飛脚師って私に似てて、家族になったのよね？」

合っているのだが、色々違うな。

「合ってるけど・・・まあ、忘れてくれ。他人に話すことじゃなかったから」

「飛脚師が言うなら忘れるけど・・・」

「ありがとな。じゃあ紅魔館に行くか？」

「うん。でも私太陽に当たれないよ？」

それはやはりそうなるか・・・迷っても意味は無いので行李を出す。

「これの中に入ってくれ。ちなみにさつき言っただお願いってのがこれだ」

この行李の中には子供一人なら十分に入る位の幅はある。フランは不思議気に行きで遊んでいる。簡単に破れたりはいしないが、フラン相手ならあんな行李は紙同然だろう。

「中に変なものが入ってるよ——熱!？」

そうだ、色々と小物が入っているのを忘れていた。熱いとはどうしたのだろう……

「フラン、どうした……自然に冷やすか、水で冷やすかどうかする?」

「このくらい大丈夫だよ。ちょっとしたら治るから」

フランの手の平を見ると、確かに何かで火傷したような痕がある。俺の行李の中には高温の物など何も入っていない筈だ。行李をひっくり返して中身を確認する。中身には勿論高温の物は無い。それにそもそも強靱な肉体を持つ吸血鬼であるフランがあんな少しの間に火傷をするのか。ふと思い、行李の中身だった小物の中から一つの——銀の杭。これしかない勿論俺が触ったところで熱いわけは無いが吸血鬼のフランなら話は別だ。普通なら持っていないようにしたいのだが、入館許可証になっているので持っていけないわけにもいかないだろう。別に無くとも俺なら入れると思うが……仕方無いので行李の別部分のポケットに入れる。他に入っている物でフランに悪影響を与えるような物は無いだろう。

「もう危険な物は無いと思うから入ってくれ、そろそろ紅魔館に行こう」

「うん。早くお姉さまに会いたい」

やはり? 家族の絆は良いものだ……俺も久しく会っていないが【家族】に会いに行こうかな……いや、やはり止めよう。あの家を出る時主人と奥様はともかくお嬢様には最後まで止められたので下手に会いに行けばまた引き止められそう。まだ、その時じゃない。フランが消えた?

「フラン・・・何処だ？」

「飛脚師、早く」

行李がもぞもぞと動いている。ふと思いに浸っている合間には、もう入っていたのか・・・

「分かったよ。それと、頼むから暴れないでくれよ」

そう言いながら行李を背負おうとする時点で気が付いた。弁当（という名の握り飯）を入れるのを忘れていた。一旦フラン入りの行李を置いて握り飯を持ってきて中のフランに持たせる。

「食べて——」

「良くない。後でな・・・と言うか、その前には届けられるさ」

そう言っただけで行李を背負い、草履を履いて外に出る。そういえば血染村正が持つて行って欲しいと求められたが、無視した。本当に邪魔なのだ、仕方が無い。何処かの名言に「ペンは剣より強い」と言っていたらしいが、俺にとっては足が何よりの武器だ。しかし本当に晴天だ。雲があまりないので暑くも感じるが、今は辰の刻（午前十時）位。急がずとも近道なら半刻で紅魔館に着ける筈。

「飛脚師・・・まだ？」

行李越しに背中を叩きながら訊いてくる。まだ四半刻も経っていないのだが・・・

「流石に無理だよ。俺は空を飛ぶ事は出来ないし、本気で走ったらフランが揺れて困るだろう？」

俺の行李はそんなに身体と密着出来るものではないので、走ったらバランスが崩れて酷い揺れに襲われるらしい。その為今は歩くか、小走りにしている。別に何時も走るわけではないので、慣れているといえは慣れている。運ぶ物によって運ぶ手段を変えるのは定石だ。
「うん・・・」

聞き分けは良いので非常に助かる。今までは地下牢か、良くてレミリアの部屋でしか会えないので知らないフランの一面を見ることが出来た。良い事かはともかく、経験自体は良い事だと思う。そうしている、もう紅魔館の門が見えてきた。何かの爆発も見えるが、

気にしない。したくない。

気配を消すように——といっても俺には霊力、妖力、魔力、神力の類は無いので、そのままでも十分だと思うが・・・美鈴さんの所へ行く。ここで何となく想像出来るが、今戦っているのは咲夜さんだな。美鈴さん、この悶着の中普通に居眠りしてるし。後ろを見ると何時かの間欠泉並みの光の柱が出ていた。ああ・・・白黒の魔女か。

「美鈴さん、入ってますよ」

「美鈴、また咲夜に怒られるよ」

わざわざ起こすのもあれなので紅魔館の中に入って行く。

「じゃあフラン、もう出て良いよ」

もう館の中、フランが出て不都合になるわけではない。いや、そう一言で言うことは出来ないか・・・静止役の咲夜さんが居ないわけだし、まあ、レミリアでも大丈夫か。

「やつと出られる」

上機嫌に行李から出てくる。行李は何処も傷ついていないあたりフランを褒めるべきかも知れないが、あえて止めておく。

「じゃあ後は仕上げだ。レミリアの所へ行こう」

「うん」

フランが俺の腕に抱きつく。本音は怖い・・・多分、今抱き疲れている方の腕の指とか全く動かないんじゃないかな・・・現に持たれているのは前腕部分なのに、もう肘を曲げられない。しかし、普通に話すことは出来るので思考がどうかではなく、身体が動けないんだろうな・・・だが、腕以外は動くのでレミリアの部屋へと急ぐ。

「レミリア、入るよ？」

「ええ、分かっているわ。入りなさい」

そう言われたが、フランは声が終わるか終わらないかの微妙な間に扉を開けて中へ入っていった・・・一呼吸おいて俺も入る。

「レミリア、これで依頼達成だ。俺は人間だから、二度と同じような依頼をしないでくれ」

「じゃあ来年には人間以外になって頂戴。フラン、今日を覚えてい

るかしら？」

淡々と言つあたりは何時ものレミリアだが、言葉の後半から変な調子だ・・・何となしに判るが、それなら俺はもうお役御免だ。悟られぬよう踵を返し、音を立てないように扉を閉めると、咲夜さんが居た。

「飛脚師様。もうお帰りになられるのですか、これからだというのに」

「そうでしょうね。俺はただの飛脚です、【誕生日】って家族で祝うものでしょ。勿論血縁じゃなくな」

「そう思われるならこそ、参加なさらないのですか？」

咲夜さんの口は巧いが、俺は帰らせてもらう。どうも性に合わないのだ。

「はい。俺がもっと紅魔館に近づけたなら、その時は是非にでも参加させてもらいます。では」

そう言い、咲夜さんの横を抜けていく——咲夜さんが目の前に居る！？

「飛脚師様、お待ちください。報酬です、小悪魔の文も含んでおりますので、安心してください。」

もう、こういう展開は（紅魔館限定で）お馴染みだ。一瞬驚くものの、動じる事は少なくなってきた。きちんと小包を渡してから、消えた。流石・・・瀟洒なメイド長だ。小包を確認すると一本のナイフが紛れ込んでいた。今更返すのもどうかと思うので行李に入れ、紅魔館を後にする。

いざ、紅魔館へ！（後書き）

どうでしょうか。フランが妹様モード全開だったりそうじゃなかったりと随分ではなかったのでしょうか…フラン好きの人ごめんなさい。

あと、これだけは確定していますが、フランと主人公がどうかほぼ確定してありませんので…ご安心ください。

これは余談になりますがこの話で出てきた血染村正についてはまた出てくるかもしれません。

ただ、主人公が言っているように行李を背負っている状態で帯刀すると非常に邪魔になるのです。

そういった関係から常時帯刀はしませんが、たまに持たせようと思います。

ですが、あくまで飛脚は飛脚…期待すると痛い目を見るかもしれません。

最後に私事ですが、感想もなかなか増えませんか…情けに期待といきましょう

どんな無謀でも勝利が加わればそれは勇氣と称えられるだろう（前書き）

かつたるい…そう思いながらも、とある友人がやれというので追加です。

今回の話では新しいオリキャラが出てきます。

ちなみに他にも小説を書いています、掲載できないほどの駄文です、ので掲載予定はありません。

もし、リクエストがあれば掲載しようと思います。
では、ご覧ください。

どんな無謀でも勝利が加わればそれは勇氣と称えられるだろう

「zzzz・・・zzzz・・・」

最後に紅魔館の門に来てやっと解かった。このナイフ、美鈴さん用だ。頭に刺して欲しいと求めてくるとは・・・だが俺は咲夜さんみたいに投げられない。しかし、他の使用用途も限られるので投げしてみる・・・

「zzzz・・・zzz——あだっ!？」

綺麗な・・・放物線を描いて柄が眉間に当たった。不謹慎と思ったので何とか笑いを堪えた。

「じゃあね、美鈴さん。氣をつけないと、今度は咲夜さんだな」
そう言つて走り出す。状況が状況だが、本来は美鈴さんの方が色々となので後が怖い。形だけ見れば逃げるようだが（勿論この形容で合っているが）とりあえず捕まらないように獣道に入る。獣道で瞑想しながら走っていると変な氣配がしたので目の前を見ると何かが（誰か？）が居た。

「おー？お前は食べてもいい人類なのかー？」

白の長袖に黒いベストを合わせたような服の、金髪の・・・紅いリボンを付けた少女・・・見た目は勿論人間に近いが、洋服を着ている【人間】というのは非常に少ない。ついでにさつき人間を食べるみたいな発言もあるし、妖怪だな。よし、輝符・煌・キラメキ・が通じる相手だ。

「食べられない人類じゃないけど、食べて欲しくないな。まだ仕事が残ってるから俺は行くな」

どうやら大した妖怪でもなさそうなので、そう言つて先に進もうとする。

「そーなのかー。でも食べるぞー!」

そう言うが早いか、飛び掛つてきた（本当に飛んで、向かってきた）
。なんだか、結局そうなるんだな・・・右手の人差し指を向ける。

「輝符・煌・キラメキ」

指先から光の線が出て、黒い妖怪に当たった所で爆ぜる。

「ぶぎゃ〜」

黒い妖怪を撃ち落としたところで走り出す。輝符・煌・キラメキ・は一旦撃つたら次は結構な間が（軽く半刻は）必要なので撃つたなら逃げ出すのが定石だ。ちなみに俺の力では確実に妖怪（それに順ずるもの）を永久的に戦闘不能常態にすることは出来ない。だからこそ逃げる必要がある。あの妖怪も木々を抜けながら飛ぶことは出来ないだろう、現に今現在あの妖怪は後ろには付いてきていない。道を変え、速度を変え、進み続ける。ちなみに次の目的地は慧音先生の寺子屋だ。慧音先生の近い内に来いということは裏を返せば時間が無いということにもなる。本当に二、三日中に行かなければならないので早めに事を済ませたい。半刻後にやっとな慧音先生の寺子屋に着けた。迷うことがないとはいえ、道草も寄り道はしたくないものだ。

「済みませんが、何方かいらっしゃいませんか？」

誰かは居るだろうが、授業中だろう。少し間をおくべきだったか・

「飛脚師か？少し待っていてくれ。妹紅、案内を頼む」

障子が開いて慧音先生が出てきた。だが、予想通り授業中で、代わりにロングのカッターシャツと紅のサスペンダー付きのもんぺを履いたとても白く、髪の長い女の子が出てきた。俺は一応この子を知っている。藤原^{ふじわらの}妹紅^{もこう}、種族は人間・・・らしいが、千年位か昔の人間らしい。それで炎を自由に操れたり、空を飛べたりするらしい。まあ、俺に炎に魔法を教えてくれたのは他でも無い、この妹紅だからな。結局どう頑張っても火花くらいしか出せないけど。

「久しぶりだな飛脚師。まあ、来てくれ。茶くらい淹れるさ」

微妙に明るく、協調性は・・・まあある方なので付き合やすい感じといえそうなる。

「済まないな。だが、修行は全くしていないさ。したとして火花の

数が二つ三つ増えるだけだよ」

「その繰り返しが大切なんだ。十年くらいやれば火炎放射器レベルにはなれるさ」

さらっと怖い事を言ったな。そこまでいったら人間で終われるわけが無い。俺は普通の人間・・・より少し強いくらいが理想なんだ。それに、炎って・・・破壊的な想像しか浮かばないのであまり好きじゃない。と言っても他が秀でているかと訊かれたら【はい】とは口が裂けても答えられないのだが・・・

「俺には十年鍛えた脚があるんだ。空も飛べない、妖怪も倒せないけど・・・それで十分だ」

「解からない人間だな。普通の人間は何かしらの力を欲しがるものなんだが・・・お前らしいといえばお前らしい。でも、私に教えるを乞うからには何かしらの結果は出してもらうぞ」

なんとも厳しい師を持ったものだ。別に言葉の綾で――

<回想>

「妹紅って凄いな。人間なのに炎を出せるし、飛べるし、不死身だし――人間？」

「一応。ただ、私は【蓬萊人】といって不老であり不滅なんだ。厳密に言えば不死ではないからな」

「そうなのか。でも炎の扱いとか覚えるのに相当時間掛かったんじゃないのか？」

「いや、なに・・・三百年位すれば誰でも会得できるさ。飛脚師、お前もやってみればいい」

「やり方が分からないさ。それに、俺には素質が無い」

「なら、私が教えてやるよ。礼の一環だ」

「妹紅さえ良ければ是非にでも・・・」

<回想終了>

――と・・・まあ、こんな具合で今に至る。しかし、本当に大変だった。魔力の素養は人並み（決して高くない）。霊力は全くではないが、皆無（人間にもっとも近い能力なのでこれは珍しいらしい）

。妖力は人間なので当然無い、神力も人間・・・言わずもがな。で炎（火花という名の）の発生は何とか会得したわけだ。これ以上は自分が自分で見てもどうも見込めないが・・・

「いいけど・・・期待しないでくれよ」

どうも傍目にはいいように丸め込まれているであろう掛け合いを続けながら住まいの一室に入り、昼食の握り飯を食べながら出されたお茶を啜っていた。握り飯、一つ減っていたな・・・

「妹紅のお茶って美味いよな。どうやって淹れればこんなに美味しく出来るんだ？」

「簡単なことだ。やかんに井戸水を入れて、私が持つて、少し待てば丁度淹れ頃になっている」

それは・・・妹紅だからこそ成せる業だ。茶葉位なら何とか出来るが、どうしようも出来ない。

「そうか・・・こんなに美味しい茶が飲めるなら、また来ようかな・・・」

「口の減らない奴だ。まあ、慧音次第だ。期待するなよ」

素っ気はないが、嫌気はない返事だ。こういうところが妹紅の良い所なのだろう。

「ああ、期待に答えてくれよ、もこ——」

突然でもないが、開いた障子により、話は終わる事なく中断された。慧音先生・・・

「飛脚師、其処か。待たせたな、これが用意して欲しい品だ。今日飛脚師以外にも一人頼んだ」

俺以外に一人・・・珍しい事もあると思いつながらも渡される封筒の中の神に目を通すと確かに俺一人では無理だ。半紙、筆はお手の物だが、すずりや墨汁までは厳しい。種類もそうだが数が違い過ぎる。通力で運ぶなり、妖怪の圧倒的な身体性能で運ぶなりでもない限り人間には無理だ。

「補足までに慧音先生、もう一人とは誰ですか？」

「紅流の万屋に頼んだ」

紅流・・・【隻腕】の二つ名を持つ紅流くわう 紅兵こうへいか・・・一応顔はお互いに知っており、何度か共に仕事をした事がある。飛脚を主にしている俺とは違い、紅流はなんでも仕事を請け負う万屋だ。剣の腕に長けており、主に警護や妖怪退治をしているらしい。ちなみに隻腕といってもきちんとは両手はある。ただし、左の前腕から先は機械の義手だ。河童に作って貰ったらしい。

「そうか、紅流か・・・まあ、気の良い奴だから安心——」

「したかい？飛脚屋」

茶色のローブに緋色の胴衣のような上着の男が出てきた。剣の達人にしては剣を持っていないが、何処かで修行を積んでいたらしく、靈力の刃を出せる剣を使用する。確か靈剣とかいつていた気がする。

「飛脚師、だ。紅流・・・早速行くか？」

「そうだねえ・・・俺は先に香霖堂へ向かおう。道草せずに来なよ、飛脚屋」

「飛脚師だ・・・」

微妙に調子が狂う。まあ、本人に悪気はないので構いは（訂正はするが）しない。

「じゃあ行かせてもらいます。帰りも含めれば申の刻（午後六時）位には帰れると思いますよ」

そう二人に言い残し、部屋を出ると、飛んで行く紅流が見えた。異能の力に秀でていればあそこまで可能なのか・・・絶対道に迷わない俺も人のことは言えないが、あそこまでは異常だと思う。とりあえず走り出し、数分で全速になった。香霖堂まではあと四半刻・・・いや、それ以下で・・・香霖堂に着いた。一見して民家のようだが、立地が違う。妖怪の森付近にあり、店主は半妖だ。傍に紅流は見えないので中に居るのかも知れない。

「紅流・・・居るのか？」

「いらつしやい。飛脚師さん、何かいりようかい？」

異国風の服の人あたりの良い成年が迎えてくれた。この人は森近もりちか 霖之助りのすけさんだ。この香霖堂の店主・・・他には誰も居ないところを

見ると紅流は着いて居ないようだ。

「どうも霖之助さん。今日はこの紙に書いてあるものを買いに来たんだ」

「へえ・・・じゃあ待っててよ。すぐ揃えるから」

そう言って霖之助さんは店の奥に入っていった。その数分後に紅流が来た。空を飛んできたのならもう来ていてもおかしくはなく、今来る事の方がおかしい。

「いやぁ・・・飛脚屋は速いものだ」

「飛脚師だ。何をしていたんだ紅流？」

「いや、少しばかり【掃除】をね・・・で、ちよいと遅れたわけさ。で、どうだい、お目当ての物は？」

「あると思う。そうでなければ霖之助さんは奥まで取りにいったりしないさ」

「それはそうだ。なあ、飛脚・・・師。最近噂に聞いた事だけど、どうもこの辺りに妖怪が出るらしいんだ、勿論凶暴な奴だ。で、ここまででは良し。いや・・・良くはないが、数匹居るらしい」

あまり聞かない噂だ。というか、俺の家にまで噂は流れてこない。

訂正、天狗以外に流す者が居ない。そして、その天狗はいちいち妖怪がどうか言ったりしない。ただ、少し厄介だろう。妖怪退治は基本的に異能の人間数人に対して対象の妖怪は単体だ。紅流は数人分の役割が果たせるが、対象の妖怪が数匹なら大変だろう。俺の家は無事なのだろうか・・・無事でなければ紅流に手を貸す理由が一つ増える。が、まあそんな必要もないだろう。近くに守矢の巫女様も居るし、頼めば椀も手を貸す。正攻法ではないが何かとんでもない出来事を教えれば文も快く手を貸すだろう。となれば、俺が手を貸すなんて事をしたら、邪魔になるのは日を見るより明らか・・・

「頑張ってくれ。俺も口利きくらいなら出来るかもしれないな」

「おい、飛脚師、それはないんじゃないのか・・・ほら、世を渡る船の名は人の情けってさぁ！」

確かにもっともな意見だが、俺の掛ける情けはそんなに効力（戦力）

のあるものではない。

「俺には力が無い。でも情報伝達位なら任せるよ。瓦版（新聞）の半刻配りの名は伊達じゃないさ」

翌日脚が棒のようになったけどな。途中から呼吸や視界もおかしくなったし。

「まあ、そりやそうだな・・・性に合った戦いが最も重要・・・かあ」

左手で頭をかきながらため息がちに言う。紅流はそう言ったが、実際数十年単位の妖怪なら紅流の敵ではないはずだ。飄々として一見面倒臭そうなのは癖のようなものだし、意外と数だけかも知れない。

「お待たせ〜っと。そう言えば最近物騒な噂——」

「「聴いたよ／言ったさ」」

「そ、そう・・・じゃあ支払いは」

「これで。領収証も付けてもらっても？」

封筒に必要額が入っている。取り出して霖之助さんに渡す。

「あ、うん、いいよ。じゃあおつりね、で領収証。他に何か必要なものってある？」

他・・・食料は十分、薪・・・は取りに行くとして、特に無いな。

「俺は何も無いかな」

「森近の旦那、あの錆止めと、機械油を頼むよ。前回で左手の具合が良くてね、よく動いてくれる」

「紅流さん、そいつは・・・一体何だい？」

手首から先しか見えないが、完全に機械の左腕が色々な動作をしている

「見せていなかったかなあ・・・俺って万事の内に妖怪退治があつてねえ、千切られちゃった」

非常に飄々と、明るい紅流・・・事情が飲み込めていない霖之助さん・・・少し同情する。本人曰く、用心護衛で（何故話の時に退治のことだけ言っただろうか・・・）勝手に出て行った要人の子供

を助けた時に妖怪の爪でやられたらしい。俺も気を付けないといけないな。

「じゃあ、どうも／また来るよん、旦那」

ほぼ均等に荷物を分け、俺は行李に、紅流は風呂敷で持って帰る事にした。

「またお越しく下さいね」

陽気に見送ってくれる霖之助さんを背に慧音先生の寺時屋まで戻った。ちなみに妖怪には一匹も会わずに・・・同じ道を通ったので（痕跡が残って妖怪が集まりやすい）これは異常なことだった。

「遅かったねえ。俺は飛脚屋を見届けたから行かせて貰おう。じゃあ、ねえ・・・」

そう言うが早い、紅流は颯爽とその場を後にした。律儀なのか、面倒を避けたかったのか・・・恐らくは両者だろう。行李から荷物を取り出して置く。

「飛脚師だ。だが、紅流位ならもう構わない」

気づいたのか、左手を振って合図を送った？まあ、いい。

「早かったな、飛脚師。しかし、紅流も人が悪い・・・折角めばしい妖怪を先に退治しておきながら伝えないのか・・・まあ、それが奴の良いところか」

あの【掃除】はそういう意味で言ったわけか・・・どうりで妖怪に遭わなかった筈だ。何故言わなかったのか・・・考えたが、紅流はそういう奴なので気に留めはしない。

「そうだな。じゃあ俺も帰ります。これはおつりと領収証ですから、確認しておいてください」

「そうか、分かった。しかし、お前も敬語は不要だと言っておいた筈だな？」

「いえ、まあ・・・癖とでも思っておいてくださいな。敬語を使うなどと言って使わなければ遠慮したことになりますからね」

「その点では私は普通の客より扱いが上ということになるのだな？」

「勿論。これでも上得意様の一人なんですよ？」

慧音先生の依頼は報酬も良く、頻度も中々多いので当然そういう扱いを取らざるを得ない。人格も含めて失うことの出来ない人物の人だ。

「なら、まあ良しだ。これは報酬だ。今度も頼むぞ、飛脚師」

「ええ、勿論。その時は喜んで依頼を受けさせて頂きますよ」

そう言い、部屋を後にしようとする。

「ああ・・・少し待ってくれ。訊きたい事がある」

一体何があるのか・・・つり銭と領収証の額が間違い・・・そんな筈は無いのだが（霖之助さんはそんな間違いをするような人・・・半妖ではない）、どうしたのか。

「はいはい。何ですか、慧音先生」

「お前の名だ。答えづらければ拒否しても良い。どうして飛脚で収まらず飛脚師となった？」

そんな事か。理由は少し小恥ずかしいものがあるが、慧音先生の尋ね事など滅多に無いことだ。これは答えないといけないだろう。

「少し昔の話です。長いかもしれませんが――」

<発声回想>

何時、誰が、この話をしたかは記憶があやふやで性別すら覚えていないが、返答だけははつきりと覚えているんだ。

「飛脚様、何故運ぶ・・・妖怪にまでも何故運ぶ・・・」

「何故かって・・・俺は飛脚だからさ。人の為だけの飛脚じゃない。飛脚以上の・・・そう、飛脚師さ」

「そうなのかい。飛脚師様はお優しいね・・・」

「優しくはないけど、俺は飛脚師だ。それと、飛脚様は止めてくれない。俺はそんなに偉くない」

「そうかい、飛脚師」

<発声回想終了>

「――と、昔にこんな事がありました。ですから俺は飛脚師です。紅流は別としてそれ以外の名前ではありません。まあ、慧音先生に言うことでもないですけど」

「貴重な思い出話だった、ありがとう。この話だが、他言しない方が良い・・・だろうな。忘れてくれ」

慧音先生の礼は幾度となく聴いてきたが、他言・・・別に減るものではないので構わない。

「構いませんよ、この位。それ以上過去だと話は別ですが・・・」

「そうか。済まないな、だとさ妹紅」

妹紅！？聴かれていたのか・・・俺って気配感じる力が無いのだろうか・・・この仕事では致命的な気がする。まさかとは思うが、本当ならよく生きていたものなのだ。殺されそうな相手に出遭った事もあったが、刹那で逃げたので今まで生きて来れている訳だ。運が尽きない内に危機察知能力を身に付けよう。

「う！？いや・・・悪かったな飛脚師。でも、決してわざとというわけではないからな！命を掛けるぞ」

「人の命に興味は無いさ。それと同じくらい妹紅を咎めるつもりも無い。と、そういうわけで今度こそは帰らせてもらいますね」

そう言つて慧音先生の寺子屋を後に走り出す。酉の一つ（午後六時半）辺りか・・・日も暮れ、闇が支配しようとしている。このまま待つて、闇に紛れて行動すると色々なものに見つかりにくい反面、活発に活動されるので利益に危険が見合っていない。とりあえず今居る所で人里を後にしたところ、此处で酉の二つ。帰りはもう四半刻位かな。走る速度を上げて何とか自宅にたどり着いた。

「はあ・・・はあ・・・」

本気で走り続けると否が応でも肩で息をすることになる。一段落したところで部屋の電気を点ける（河童が「作ったので試してくれ」・・・と言われたので使っている）。部屋が明るくなると机の上に何かがある。文のようだ、配達用ではなさそうなので開けて中を見る。【こんにちは。守矢神社の者です、依頼を頼みたく参上しましたが、飛脚師様が不在なので書置きをしておきました。宜しければ明日にでも守矢神社にお越しく下さい】

差出人は・・・東風谷 早苗こちや さなえ・・・あの巫女さんか。最近山の頂上

に神社を作つて其処で色々やっているという・・・何度か声を掛けられたが（多分布教目的で）、神に頼つて何とかなる仕事ではないので断つていた。ちなみに博麗の巫女は何度か尋ねることがある。あそこの結界札はともよく効くので家の周りに貼つてある。でなければ家は消えているだろう。丁度良い機会なので（勿論仕事優先だが）行つてみよう。本当にご利益があつて、博麗の巫女より良い人間ならそちに行こうかな・・・近場だし。しかし・・・静かだな。昨日は色々あつたが、今は一人だけ・・・悲しくはないにしろ、寂しさはあるな。とりあえず台所に行つて味噌汁だけ作る。偏食になりがちかも知れないが、あまり気にしない。最近・・・といつても二年程前からだが、風邪やその他の病気にあまり、いや全くかかつていない。あまり無いが妖怪に傷つけられた時も骨折一つ無かつた。ただ、完全に当たつたわけではなく、突き飛ばされた感じで樹に激突しただけだったが・・・俺も丈夫になつたのかな。中身さえ大丈夫なら傷位なんてことは無い。夕餉の支度も出来たので机に並べる。

「頂きます・・・・・・・・」

俺の声・・・響くな、誰も居ないので余計に。大して箸も進まない、どうも一人に慣れていたせいか一人になるとこいしいものがある。誰が良い人見つけようかな・・・無理だな。幻想郷で強い奴らつて一癖以上はある奴らばかりだ。俺も癖の無い人間ではないが、それを考慮した上で釣り合いというものはどうしてもとりづらいものだ。といつて人里で良い人といつてもこの家に連れてきた時点で命の保障が出来なくなるので家族の人に顔向け出来ない。ならば逆転の発想で、俺が無効に嫁いでいくなら・・・どの道俺に命の保障が出来ない事実が代わるだけじゃないか・・・なんだかな・・・正直恋に興味が無いわけではないのだが、どうも都合が悪いな・・・飛脚辞めようかな——そちの方が圧倒的に嫌だな。脚が無くなつたら探すでしょう。考えている間に食事も済んで、適当に片付けてからさつと水を浴びて寢床に着く。そういえば寝巻きの中に文々。新聞の

報酬を入れっぱなしだった、取り出して確認する・・・まあいつも通りといえばあれだが、大した額は入っていない。自宅の警護も兼ねてくれていると思えば、金が入っていること自体がおかしいのだが。床板を外して、小銭は壺の中に入れておく。札があるので桐の箱の中に仕舞っておき、床板を元に戻す。さて、文々。新聞でも読むか・・・床に転がっていた文々。新聞を取って寝転がりながら開く。

「何が書いてあるものか・・・」

【今日の天気——】

その欄は読むのを止めた。意味が無い。三面記事からの方が良いのかもしれない、捲っていた新聞を元に戻す——視界に入ったところで絶句した。いや、話してはいなかったが・・・

【突撃！飛脚師密着十二刻（二十四時間）】

と、見出しにそう書かれており、一面埋まるほど大量に写真が貼られていた。何時撮ったのか・・・微妙な怒りと呆れが出てきた。見出しを見る限りでは一日中文と共に居たことになるが、まず嘘だろう。取材はあの時限り・・・で、今の今まで文とは合っても、それどころか姿さえ見てすらいないのだ。まったく、捏造がどこまでもお得意のようだ。ふと写真の一枚を見ると昨日フランごと撮られた写真もある、これは流石に我慢ならない。ただ、文も居ない、訂正の手段を持たない、それにそれを配ったのは、他でも無い自分・・・責めようがない。ただ、写真を掲載しているだけで、特におかしな記述も見られない。咎めてもあまり意味はなさそうなので、諦めてどんどんめくっていく。

【my allegiance is to the Republic, to democracy】

見たことも無い変な文字だ。気にせず読み進める。

【凶暴な妖怪現る！？ 人里付近で数十体現れ人を食べようとしたところ妖怪退治屋の紅流氏に食い止められ、そのまま逃げさった。そのことに対して紅流氏は——略——】

紅流の言っていた事は昨日の事か・・・しかし、数十体とはよくも紅流はもったものだ。それはそれとして、文も紅流を助けるよ・・・多分書かれていないだけで助けたは助けたのだろうが。

【この異変には数日中にでも大規模な妖怪退治が計画されているので、人間の皆様は避難してください。なお、協力者を募集しております。お越しの方は二日後に守矢の神社へ――】

どうもさっきの書き置きの依頼はこの妖怪騒ぎ絡みな気がする。断るつもりは無いが、念のために血染村正を持っていこうか・・・いや、俺の場合は逃げに徹するべき。余計な荷物は極力持っていかないのが最善の策だろう。後は特に大した記事も無いので豊んで電気を消す。月の光が淡く、それでいて優しさを持って射しこむ。太陽と比べれば月の方が好きだが、月の出る時間帯は嫌いだ。このまま夜を更かすのも一興だが、明日に差し支えるので眼を閉じて睡魔に身を任せる。

どんな無謀でも勝利が加わればそれは勇氣と称えられるだろう（後書き）

毎度の如くの挨拶ですが、拝見していただき真ありがとうございます。

今回では新キャラが登場しましたが、ここだけの話新キャラ（以下紅流）は本来主人公として登場する予定でした。

その理由は後の後書きか前書き、もしくは設定集にでも掲載する予定です。

では、この続きをお楽しみに…していただけると喜びます。

P S

アクセスが三桁いった事が嬉しいです。

胡蝶の夢……（前書き）

短いです。

非常に短いです。

ご覧ください……

今回もありますが、前回の話であるネタを出してみたのですが、分かっていただけましたか？

ふと思った方は感想へお書きください

胡蝶の夢……

あれは……誰だ、俺？ならば俺は……蝶？

「ふざ……夢か。変な夢だ」

誰かもこんな夢を見たことがあるらしい。誰だったか……しかし、まさか自分が蝶……。ある意味では吹き出しそうになる。ゆらゆら舞い飛ぶ様を想像すると、俺とは真逆にみえる。外で変な物音がした……。一抹の不安を抱えながら、念のため血染村正を持って外に出てみる。

「なんだ……。綿毛供か。帰れ、もうすぐ白狼天狗がやってくる。消されるぞ」

一見綿毛がほわほわと漂っているように見えるが、一応妖怪らしい。軽く二十体か、一匹位なら遊ぶことも出来るが、こつも数が多くては困る。力では俺の方が上だが、二匹以上だとスペルカードではどうしようも出来ない。ちなみに綿毛レベルなら輝符・煌・キラメキで消すことが出来る。さて、警告しても退かないなら、俺にやられてもいいわけだ。

「まったく……。剣技・一閃斬！」

血染村正を抜き、構えて、横に振る。二体くらい斬れた。ちなみにスペルカードっぽく言っただけでただ剣を振っただけなのは秘密だ。しかし逃げないとは……。明らかにおかしい。ではないが正当防衛されても散らずに留まる理由は……。妖怪か。四半理（約1km）程離れた所からでも奇妙な空気、異質な気配……。十分視認出来た。勝機があるかと訊かれれば、無いが……。桜を待つか、どうにかして勝つか……。勝てないだろうから体力の続く限り動き回ってかく乱するか……。

「あやや……。おはようございます、飛脚師さん。今日は桜に代わって文々。新聞を持つてきました」

舞い落ちる木の葉のような動き……。とは似ても似つかないような

速度で垂直に降りて（堕ちて）きた。見とれたのか、硬直したのか・
・動けない。慣れてきた今は普通に動けるが。

「文・・・とりあえず、一つ頼んで良いか？」

「はいはい、一体何でしょうか？それよりその剣・・・見事な出来
ですねえ・・・何処でこんな業物を？」

刀を持った飛脚・・・中々異様な光景なのだろう。食い入るように
血染村正を見つめている・・・まさか刀の狂気に取り付かれ――は
無いな。文は高位の鴉天狗、人間の作つたもの程度でどうにかなる
ことはないだろう。

「それよりも、あの妖怪・・・倒してきてくれないか？」

「え？あ、あんな所に妖怪が居たんですね。お安い御用ですよ・・・
轟！」

常に腰に持っている扇を手にとつて、軽く振ると瞬間的に突風が起
きて、妖怪を吹き飛ばしていった。まったく・・・その力をもつと
別なことに、更に言うなら有効に活用するべきだろう。

「ありがとう、文。それと・・・これは昨日の【お礼】だ、輝符・
煌・キラメキ」

一矢は報いる機会が出来たので文に輝符・煌・キラメキを撃つ。
眉間に当たったのが効いたのか軽い涙目になっていた。額を押さえ
ながら怨めしそうに見つめる姿は惹かれるものを感じるが、文の本
性を知っているのであまり気にならない。

「あやや！？痛いじゃないですか・・・私は！飛脚さんに！傷も
のにされました！」

少し、いや・・・かなり気に障るので再び右手を向ける。

「輝符・煌・キラメ――痛だぁ・・・駄目か・・・」

右手の前腕部から焼け付くような熱さと強い痛みが広がってくる。
人間の俺の限界というものなのだろう。本能的に腕を押さえて痛み
を和らげる。

「あや？どうかされましたか飛脚師さん」

「なに・・・天罰つてやつかな。理不尽なものだが、そもそも世界

はそういうものだからな」

押さえていても痛みが和らがないのでさすっていると、文が（文以外でもだが）気づいたようだ。

「はあ・・・よく解かりませんが、ご愁傷ですね。とりあえずこれは新聞です。それと、これを守矢神社の巫女に渡してもらえますか？」

腕の痛みも治まらないのに新聞を渡される。そして一通の手紙も・・・手紙は渡せばいいと思うのだが、出来ない何かしらの都合があるのだろう。そこまで踏み込むことは無いが

「分かった。ついでに昨日の事で訊きたいことがあるけど、妖怪退治を言い出したのは誰なんだ？」

「ええつと・・・私は霊夢さんから聴いたことなので、誰か——という所までは分かりません。それとこれは文々。新聞の分のお金とお手紙——」

「それはいい。日頃の恩返しとでも言うか、何時も助かってる（椀に）。新聞の分で十分だ」

俺自身は直接見たことが無いが、警備してくれているらしい。試しに机の上に干し肉と食べても良いという書置きをおいておいたら干し肉が無くなっていたことがあったので、見回ってはくれるようだ。家の中にまで入らないで欲しいが・・・しかし、それのお陰で現在に至るまで妖怪に何かされるようなことは起こっていない。

「そうですか？ではありがたきお言葉に甘えさせてもらいましょう。そうそう、くれぐれも妖怪にはお気をつけくださいね。流石に戦うとは思いませんけど・・・」

よく分かっているな。ならば妖怪避けの何かでも渡して欲しい。どちらかというお金より欲しいものだ。命が第一、手紙があるときは手紙の保護が優先だが、それでも届けられないというのは最も望ましくないで、命の方が優先だな。

「じゃあ大変な時はさっきのタイミングで来てくれることを祈っておくよ」

「そうですか。では、私は行きますね」

そう言つて文は地面を蹴つた・・・消えた。もう遙か上空に居るか、移動しているのだらう。羨ましいが、俺では空中で平行移動する術を持ち合わせていないので諦めるしかない。とにかくにも新聞を配達しなければいけない。余計な時間が掛かっているので痛みをおして急がなければ・・・急いで家に戻り、着替えて、行李に文々。新聞を入れて走り出す。朝食も摂っていないが、仕方が無い。いつもより多めに財布に金を入れているので何処かで食べよう。本気で走れば河童の家には投げ込むように新聞を入れ、走り抜ける。人里までは四半刻も掛からず行ける。小休止もいれず走り続け人里に着く。

「はあ・・・おう、早いねえ、兄ちゃん」

豆腐屋のおっちゃん・・・何時も着ている仕事着ではなく、目に見えて元気が無い。何時もと比べると気持ちが悪くなる。

「ああ・・・一体どうしたの、着替えてもいないしさ」

「大豆がね・・・今日から何日か危なくなるからって納入されなくてねえ。いつもの習慣でこの時間には起きるんだけど、何も出来ないんでお手上げよう・・・まったく、あんまり続くとおまんまの食い上げだい」

まあ・・・豆腐屋になったことは無いのでよくは判らないが、高給取りとはいかないのだらう。俺も人のことはいえないので気をつけることにしよう。

「まあ・・・幸運を祈るよ。それに、妖怪には気をつけてよ」

「ああ、兄ちゃんもな」

そう言つておっちゃんと別れ、やっとのことで新聞を配り終えた。

「はあ・・・はあ・・・」

休止無しの走りづめ・・・まったくきついものだ。もう日も昇り、今は辰の刻（午前十時）位か・・・

「あの、飛脚屋さんですか？」

走りつかれて下を向いている時に話しかけられたので急いで顔を上

げる。しかし・・・飛脚屋？

「俺は飛脚師だけど・・・何方？」

真正面で見えて吹きそうになってしまった。女の子ということは判っていた。しかし、緑色の長髪、そして博麗の巫女と殆ど同じデザインの巫女装束。この辺りで巫女とは守矢の巫女さんしか思いつかない。

「違いましたか？」

「大方紅流から聞いたんだろうが、俺は飛脚師。言っておくけど、飛脚師っていう名前だから間違えないで欲しいな」

「済みません。そう聞いていたもので・・・私は東風谷^{こちや} 早苗^{さなえ}と申します。宜しく願いますね」

会ってすぐだが、人当たりの良い娘だな。もったこんな感じの人が増えて欲しいが、無理だろうな。

「気にしてはいないさ。で・・・東風谷さん、とりあえず書置きは拝見しました」

「早苗で良いですよ、飛脚師さん。お仕事はもう平気ですか？」

平気と問われれば、平気になるが・・・一体何を要求されるのか。

「ええ、まあ大丈夫ですけど、俺に用事でもありますか？」

「勿論ありますよ。本当なら正午にお迎えに行こうかと思いましたが、八坂様と洩矢様が早く持って来いと言われましたのでお迎えに行こうとしている最中に飛脚師さんに出会い、今に至ります。」

なるほど・・・しかし、八坂と洩矢とは誰だろうか。更にいえば何だろうか・・・しかし会わないことには真実は掴めない。それに、守矢神社に行かないことには仕事は始まらない。

「じゃあ、行こうかな。案内をよろしく頼むよ」

「はい。お任せください」

そうして成り行きに任せ、早苗を信じ付いていく。

「早苗さん、此処から守矢神社とは距離があるが、如何様にして行くのか？」

「飛脚師さん？変な言葉遣いですね・・・そうでした、質問で返さ

ないといけないのでお訊きしますが飛脚師さんは飛行が出来ますか？」

これは仕事用の言葉遣いなので不自然に思われるかもしれない。飛行——なるほど。飛んで行けば障害物、（低級）妖怪、高低差は関係無くなるな。まあ、完全にその理論は意味が無いが……

「話し方は戻すよ。とりあえず結論から言わせてもらおうと……済まないが、俺は飛べないんだ。早苗さんには悪いが俺は走らせてもらおう」

「私にさんは良いですよ。しかし……飛べないとなると早く行くのは厳しいですね。そうです、私の修行も兼ねてお供します。これなら危険は減りますし、危険が減った分早く着けますよね」

言っていることは最もな正論だが、人が良すぎる。何にせよそうする必要があるので、あるいは本当に修行が本分なのか。どちらにせよ自分側に不都合なことは無く、有益な点は一人で行くよりも多い。唯一の不安要素があるとすれば、修行と言ったことだ。見た処で悪いが、何かしら異常な程の能力や力があるようには見えない。見た目での判断は禁物なのは重々承知。しかし、見た目も重要なものもまた同じく……永久に進歩を求める武人には見えないので、ある一定までの実力向上を目的とした修行なのだろう。

「ならば俺にもさんは要らない。敬語も……」

「それは……ちよつと難しいですね。あの、今でもこんな調子ですし……それにさんって付けないと聞こえが悪くなってしまうから……逆に敬語の方が気を遣っていないと思ってください」
「律儀な人間？だ。人のことが言えた義理でもないが……しかし、本当に人当たりが良い。今後は守矢神社に行つて加護札や魔除けをしてもらおう。博麗の巫女は仕事は上手いのだが、どうも性格に難があるのだ、正直にいつて少々難儀だ。」

「解かった。しかし……最初に言っておくべきだったが、俺に戦闘能力は無い。もし妖怪が出たら本気で走るから気にせず飛んで欲しい」

「そうですか・・・分かりました。でも無事でいてくださいね」

「ああ。逃げ足の速さは折り紙つきだ、そこは安心して良い」

平原でもなければ飛行で移動する妖怪に障害物を越えてくるのは難しいだろう。そこが大きな重点なので今移動しているような森林地区は俺向きだ。もつとも、逃げおおせる程の速さと体力が必要なので俺以外の人間では難しいだろう。加えていうなら、相手が森林等障害をもともしない能力や力・・・ないしは身体能力を有しているならばこの方法は意味を成さない。

「変な処を強調しますね・・・でもただの人間でなければこの辺りは割と安全と思ってください」

上位の妖怪やその類は居ないということか。心から安心することは出来ないが、不安でないあたりは十分だ。

「良い事を聴いたな。その内守矢神社に色々頼むと思うよ」

「ありがとうございます。これから八坂様と洩矢様を信仰してください」

「いや、俺は殆ど信仰心が無いんだ。巫女をやっている早苗には悪いけど・・・神様は何時でも救ってくれるわけでもなければ、信仰心を関係なく、皆を救おうとはしてくれないからな」

今ある苦難を神の与えた試練と考える人も居るは居るが、賛成はしたくない。苦難で人の質が高まるのなら、名瀬生きている限り苦難を与え続けるのか・・・全てを乗り越えた先に苦難と同じ価値の幸福が待っているのか・・・それとも、ただ対価として明日を、未来を与えるだけなのか・・・

「そう・・・かもしれませんね。でも信じなければ救われませんよ？」

確かにそれも正論の内だ。過去はどうなるうが変わることは無い、しかし今から先は別・・・か。

「俺は救われようとは思わない。だからこそ、自分で切り開いていくさ」

「飛脚師さんって強い人ですね」

「俺は弱いが？」

「力ではなく、精神的なことです」

上は居るだろうが——居て欲しいとは思わないが、生半可な人生じやなかったから脚は元より、神経位は一回り以上上回っても不自然じゃない。

「そうだな。さて、早苗・・・この石段は普通飛んで行くだろうが、走るわけか？」

雑談をしている間に石段まで来ていた。しかし、平面ではなく斜面を上るのは一苦労だ。

「私に捕まっていただけなら、話は別なんですけど——」

「走ろう。すぐにでも上ろう、先に行っていてくれ」

早苗の負担云々ではない。傍目は無いが、自分としてこの選択はしたくない。早苗も察したのか何も言わず突風とともに飛んで行った。見送るわけではないが、あまりにも速度が違うので見送るような形になって、石段を駆け上った。

「到着・・・か・・・はあ、次はゆっくり来たいな、はあ・・・」

やはりただ走るのとはわけが違う。疲労具合一つでも雲泥の差だ。

「来たね。一応、ようこそ守矢神社に・・・私は八坂やさか 神奈子かなこ。こ

の地に住まうことになった神さ。もう一人居るんだけどね」

早苗ではなく、しめ縄を背負った女性が迎えてくれた・・・

胡蝶の夢……（後書き）

この短さ、申し訳ありません。
程なくして設定も出そうと思いますので……

P S

アクセス数が減りましたが、頑張りますので応援をよろしくお願い
します。

次回にでも飛脚師と私との掛け合いを試みたいと思います。

最後になりますが……

飛脚師が伴侶を欲しがっています。希望等あれば感想にお書きくだ
さい。

飛脚師の秘密（前書き）

お久しぶりの投稿となります。

かなり遅めになってしまいもうしわけありませんでした。しかもその割に内容が濃くも長くもないという始末です。それではご覧ください。

飛脚師の秘密

神を見たのは初めてだが、確かに神々しさの一つも見えるものだ。信仰を集めるのも当然の話か・・・

「呼び方は間違えなければ、呼び捨てようが構いはしませんが、貴女が早苗から聴いた八坂様ですか？」

「そうさ。一応言っとくけど、私に敬語は必要ないからね。呼ぶ時も神奈子で良いから」

随分と親しみ易い神だな。しかし、逆の性格だったらその方が嫌なので嬉しいのが本音だが。

「分かった。今回の依頼を訊かせてくれ、配達物もだ」

「まあまあ・・・鳥居も潜らず、茶の一杯も飲まず、それで済む程度の依頼と思ってるのかい？」

遠まわしな言い方だが、言いたいことははっきりと解かる。そうする意味までは分からないが、此処は誘いに乗るのが定石だ。それにそつしないことには話にならない。

「手紙にも言葉にも追記はつきものだ。ご馳走になろう」

「話せる奴だね。ついでに気になったことを一つ訊いて良いかい？」

「答えられれば、何でも」

「あんたの親って神か何かかい？」

答えづらい質問だ。いや、答えに辿り着くまでが苦痛なだけ・・・

「人間だったと思う。そうでなければ鬼か悪魔かな」

「・・・済まなかったね。理由はあんたからおかしな神力が感じられたからなんだよ」

深く言わずとも察しているあたり神か・・・しかし理由はかなり気になる。俺に神力・・・しかし俺は先程神奈子に言った通り人間の筈。両親が義理でもなければ、神の一族の可能性がある筈も無く、俺が義理の子供なら、捨てた親が最初から捨てる筈が無いので其処から考えるに俺は人間だ。

「俺は・・・人間だ。確証が無いのが本当の処だが・・・それに、おかしい神力とは？」

「悪いんだけど、其処まで詳しくは分らないんだよ。ただ、言えることは・・・あんたは純粋な人間じゃない。其処は確実な処だよ。後でケロ子と調べるよ」

ケロ子？誰でも良くはあるが、結局明確な答えに行きつけていないので、例えるなら喉に魚の骨が詰まったままのような変な気分のまま神社の裏手にある家に入った。

「神・奈・子おお！私の兵六餅食べたなあ！」

白と紫の壺装束・・・と奇妙な帽子を被った少女・・・いや、幼女が叫びながら鉄の輪を投げた。避けても良いが、神奈子に当たる。話を察するに非が神奈子にあるのは判るが・・・刹那の合間に右手の人差し指を投げられた鉄の輪に向ける。

「輝符・煌・キラメキ」

指先から光の線が伸び、鉄の輪に当たった——爆ぜない！？それどころか速度が増している・・・

「下がりな。よっ・・・と。この痛さ、いつもの倍位だね・・・飛脚師、あんた何をしたんだい？」

襟を引っ張られ、強制的に下げられたと思えば、神奈子が残った片手で平然と鉄の輪を止めていた。人間業じゃない、人間でないから当然だが、此処まであからさまなものだと無力感が体の芯から湧き上がってくる。

「打ち落とすつもりだった。何故、威力が上がった。君は一体何者なんだ？」

輝符・煌・キラメキ——は邪よこしまな者——妖怪、悪魔、その類や悪人に対しては威力を持つが、逆に神や妖精、善人に放てば疲労回復であったり一時的に身体能力が向上する効果を持つ。それならばあの子が善人・・・しかし、物に対してはその効果は無い筈で結果的に相殺という結果になる筈。一体何が起こってそうだったのか。

「私はそんなに本気で投げてないよ！其処の人間・・・なの？貴方

は何なのかしら？」

心外と言わんばかりまなざしを神奈子に向け、不快感を隠そうとせずには弁解？している。掛け合いを黙って見ていると突然話を振られた。答えは決まっているが・・・

「純粋な人間じゃないらしい。神奈子曰く洩矢という者と共に、俺が何者なのか判断してくれるらしい。それは置いておくが、俺は飛脚師。名に違^{たが}うことなく飛脚だ」

「え・・・貴方が飛脚師なの？」

飛脚行李ではなく薬師行李を背負っている自分を勘違いする人間も居なくはないが、飛脚師の名と顔はまだまだ通っていないようだ。これでも人里では知らない者は居ない程なのだが・・・勿論他に飛脚をする人間が居ないからだ。

「そうさ・・・俺が人と人外を結ぶ者、飛脚師だ。君の名前はどのようなかな？」

「あつ・・・ごめんごめん。私は洩矢^{もじや} 諏訪子^{すわこ}だよ。宜しくね飛脚師」

屈託の無い笑顔と共に小さな手が差し出される。少し躊躇しそうになったが、手を握り返す。

「こちらこそ。諏訪子ちゃん、神奈子のことは咎めないで欲しい。構わないか？」

「うーん・・・まあ、いつものことだし、また早苗に買ってきてもらうからいいよ」

許しを得たから良いものの、早苗は気苦労が絶えないことだろうな・・・神と巫女の立場もあるだろう。しかし、それとは別にあんな子供のお菓子を食べる神奈子には失望する。

「ありがとう諏訪子ちゃん。確認に訊きたいが、神奈子・・・本当に神か？」

「な！？当たり前さ。あの諏訪大戦で其処の諏訪子を破ったこともあるれっきとした神さ」

むきになる処がますます怪しい。そういえば、其処の諏訪子に勝つ

た？

「何処の誰に勝とうが知った話じゃないが、埋め合わせはしておくことだな」

「ちよつと、此処の私だよ。負けたけど・・・」

言葉が自分の腰の辺りから発せられた。当然だが、見ても諏訪子ちゃんしか居ない。半分期待と、もう半分絶望を持って訊くことにしよう。

「まさか、君がケロ子ちゃ——」

「ケロ子言つな！どうせ神奈子が吹き込んだんだろうけど・・・」

ああ、この子も神様・・・なのか。そういえば早苗も八坂様と・・・洩矢様つて言つたな。しかし、改めて見てみると何処か神々しさが・・・無い。神奈子からはなんとなしに輝く光のような気配が感じられないこともないが、諏訪子ちゃんには、感じられない。餅一つでむきになる神様（達）か。

「良いじゃないかい。どうせ私以外にも呼ばれてるんだから——」

「そうだよん、ケロケロ」神奈ちゃんもお久しぶりだよねえ。俺をお呼びつてことは・・・厄介かい？」

狙い澄ましたかのように颯爽と紅流が現れた。満面に近い笑みで、しかし、眼光は間逆に・・・

「コウ？こ・・・の・・・罰当たりい！」

諏訪子ちゃんの手にいつの間にか鉄の輪が握られて、紅流に飛び掛った。

「「紅流！」」

「まあまあ、心配しなさんなって・・・」

紅流は鉄の輪を左手で打ち上げた・・・ぶつかった時に金属同士がぶつかる音がして神奈子と諏訪子ちゃんは驚いていた。恐らく義手以前の紅流しか知らないのだろう。もつとも、俺は義手の紅流しか知らないで空白の間は誰も知らないが・・・

「え！？」

諏訪子ちゃんは身体全てが空中に浮いているので打ち上げられた反

動で仰向けになりながら堕ちる・・・それに自分が気づいたときには諏訪子ちゃんも紅流の腕の中に居た。

「あらよつと。ケロケロは本当に成長しないねえ・・・」

紅流の戦う姿をこんなに関近で見たことが無かったが、明らかに人間の域を超えているのではないのか。左手は金属の腕なので威力も上がるだろうが、動きや反射神経は常人のそれと比べると人間より妖怪の体捌きに近い気がする。

「あーうー！放せえ！」

「これは愉快・・・と。暴れなさんなつて。で・・・神奈ちゃん、本題にいきましょうか？」

どうやら紅流も込み入った話のようだ。詳しくまでは知る由も無いことだが、気持ちはなんとなく解かる気がする。受け取り方は真逆だろうが・・・現に今も神の諏訪子ちゃんを撫で回している。ある意味では神以上の存在なのだろうか・・・神に無礼な態度をとると罰が当たるらしいが、紅流はそれにあたらぬのだだろうか。

「そうしようかね。用意が要るから二人とも、ちよつとばかり客間で待ってもらえるかい？」

「構わない」

「良いよん♪」

紅流が歩みを進めるので付いて行く。諏訪子ちゃんは諦めたのか、まんざらでもないのか静かになつているまま運ばれている。程なくして名も知らない一室（恐らく客間）に入り、座る。待っている間ふと紅流を見ると横になつていた。

「zzzz・・・zzzz・・・」

「すう・・・すう・・・」

紅流も諏訪子ちゃんも寝始めた。寄り添つて寝るところを見ると兄妹のようだが、紅流の左手を枕にして寝るのは如何なものだろうか・・・紅流は義手なので痛みは感じない筈だが、諏訪子ちゃんは頭が痛くなる気がする。

「待たせたね・・・おつと、ケロ子はお休みかい。紅流も・・・こ

の二人は根っから仲が良いのさ。飛脚師は覚えてるか知らないけど、最初に逢った時【罰当たり】って言ったろう？」

確かに最初会った時に罰当たりとは言ったが、呼び方の事ではなかったのだろうか・・・

「確かに言っていたが・・・呼び名の事と違うのか？」

「まあ、それもほんの少しあるけどね・・・昔の話だけど、紅流は何にも言わず姿を消したからさ。こっちでちょっと訳あって私達が戦った後へるへるになってる時に鬼が一匹来てね。名前も知らないけど強かった。まだ上手い事治められてない頃だったから言い訳も出来やしないよ。その時何も訊かずに、何も求めずに鬼を殺したんだ。で、ただで帰せないから一晩泊めてやったのさ——」

それでここまで仲が良かったわけか。しかし、紅流が呼び名が愛称なのは癖なのだろうか。

「——で、次の日消えちゃってさ。まったく、こっちが呼ぶまで来ないって・・・まあ、悪い奴じゃないから良いんだけどね」

「紙一重だがな。ただ、紅流はそれを絶妙に操れると思うな」

そうでなければ相当運の良い奴だ。そんな偶然があるわけは無いが。

「私も同じ意見だね。まあ、昔話もこの辺にしとこうかね。さあ、起きた起きた！」

「あう！？／＼＼＼・・・」

寝ていた諏訪子ちゃんも飛び起きたが、紅流は寝続けている。神相手でも動じない人間か・・・しかし、これは俺も変わらない気がするのでおいておこう。

「起きろ、紅流・・・」

「・・・あらあら？寝ちゃった？」

「ああ。準備が出来たらしい、さつさと体も起こしてくれ」

「あいさ、っと」

後転しながら脚を組み、器用に胡坐あぐらで座った。

「じゃあ始めるよ。諏訪子、裏手に回りな。紅流、中心に座りな・・・いくよ」

「あいよん」

紅流が部屋の中央に座り、挟むように神奈子と諏訪子ちゃんが座り、両手を向ける。辺りが洗に光って数秒後に元に戻った。

「紅流、あんた・・・人間だけど、高位種族の【仙人】になったようだね」

「まあ、師匠が亡くなるまで修行修行の日々だったからねえ。でも霞だけじゃ飢えちゃうけど？」

「結局は人間だからね。霞を食べるってよりも地の氣を得て存在してるっていった方が正しいよ」

「なるほど。じゃあ俺って、靈力が変換できる程尋常じゃなく高いのは？」

「それは素質って奴じゃないかい？変換も含めてね。あんたって生まれはどうなのさ？」

「心の中に居るよん。覚えてないけど・・・優しくった師匠がただ喰って鳴くだけだった俺を引き取って、育ててくれたのさ。一回でも恩返ししたかったんだけどね・・・」

「あんたもかい・・・とりあえず、こんなもんかね。修行次第で質を高められるよ。飛脚師も同じように頼むよ」

「分かった」

紅流と立ち位置を代わり、部屋の中央に座る。さっきと同じように神奈子と諏訪子ちゃん（こちらは見えないが）に手を向けられる。光に包まれると体が暖かくなった気がした。

「さて、飛脚師・・・あんたはとりあえず人間だよ。でもね、半分神になっている。あんたは人間から神になろうとしているのさ。何か祀られるような事をしているのかい？」

人から崇められるような事をした記憶は無い。夢遊病のように無意識に体が動くような事も無く、仮に動いたとしても何が出来るわけでもない。ならば何なのだろう・・・

「俺は・・・飛脚だ。俺にはそれ以外の生き方を知らないんだ・・・」

「こうはいえないかい、神奈ちゃん。まず、幻想郷には飛脚屋を除いて飛脚は居ない。そして、ただの人間じゃ出来ない事をしていて、しかもさっき言ったけど一人だけなら一手に引き受ける、その上決して断らない。崇め、祀られても当然じゃないの？」

紅流の推察の通りではないのか。冷静になれば一番思っ処の筈だ。動じてしまうのか・・・

「済まない紅流。言うべきなのか迷ったが、俺の名は飛脚師だ。早苗に違う名前で吹き込むな」

本当に今言うべきことではないと思う。しかし、今止めておかなければ他にもどんどん吹き込みそうなので仕方が無かったと思おう。

「あれ？どうして俺って分かったんだろっねえ・・・済まなかったよ、飛脚屋」

自分が呼び名を変えない辺りは紅流らしいが、恐らく変わるだろう。「ちなみに神奈子、俺が半分神になって何が起るんだ？」

神になってしまえば神奈子のような力を持つことになるのだろうか・・・それは少なからず嫌だ。逃げるしか能のない自分と比べれば良いのかも知れない。しかし、俺は無意識にでも敵意や悪意を持って他者を傷つけない。どんな悪人や人食いの妖怪であつても・・・

「まあ、あんたが力を求めるような人間じゃないことは解かってるつもりさ。その上で言うけど、安心しな。今は自分自身の身体に加護が掛かってるくらいさ。軽い病気には掛からない、種が変わったことで能力が増えたとか、神力系のスペルカードを使えないかい？」
凄いいものだ。全て当てはまっている。何時とはつきり覚えているわけではないが、風邪を引かなくなった。物の求めを感じ取れるようになったのもはつきりと覚えていない。スペルカードは飛脚をやってから何年かして、妖怪に襲われた時にがむしゃらに何かしていたら使えるようになった。

「そうだ。ものの見事に全部当てはまっている」

「ただ、社も無ければ奉納も無いその状態じゃ其処で止まっちゃうよ？」

良いことを聴けた。望む結果があるとは、まだ運が残っていたようだ。

「今はそのままが良い。で・・・神奈子、これだけの為に呼び出したわけではないのだろう？」

「そうそう。今回は守矢神社が主となって妖怪退治をするつもりなんだけど、人手が足りなさ過ぎる。紅流にも手伝ってもらつつもりだけど、最低でも後二、三人欲しい」

数が――ではないのは明白。では何故自分と呼ぶ必要があったのか・・・

「俺は何を？」

「文を何通か用意したのさ。それをめばしい所に運んで欲しい。私達は此処から離れられない、あんたなら的確な人選が出来ると思ってるよ」

神が祀られている場を離れるわけにもいかない・・・それは確かに。しかし、自分の主観だけで渡せといわれても難しいのもまた確かな処。しかし、やるしかないのが変えようのない事実。

「分かった。この飛脚師、全身心込めてこの依頼受けさせていただきます・・・」

一度立つて、片膝を付き、頭を下げる。

「おっと？いきなり畏まれてもね・・・」

「依頼を受ける時は何時もこうするのさ」

此処での依頼は初めてなので戸惑われるのも頷ける。もっと軽いものの方が良いのだろうか・・・

「そうなのかい・・・とりあえず頼むよ。早苗も書けた？」

とりあえずは了承されたのだろう。神奈子は部屋から出て行ってしまったので少し待つ。

「zzzz・・・zzzz・・・」

「すう・・・すう・・・」

「こいつら・・・もう少し自覚を持てば良いだろうに・・・」

とりあえずは人の上に立つ者達なのだから、敬われる行動を執るべ

きだろう。しかし、此処では人の目（常人）は無いのである意味理に適ったことをしているだろうか。

「お待たせしました・・・飛脚師さん、これが協力を求める文です・・・」

早苗・・・随分元気が無い。何があつたのだろうか・・・といつてもふらと聞いた神奈子の書けたかと訊くことから察するに直筆で書いたのだろくな。手紙にしては中々の厚みで五、六はある。

「何をしていたかは訊かないが、とりあえずお疲れ様と言っておくよ」

「zzz・・・zzz・・・」

紅流には恐らく何度も助けられている筈なのだが、どうも労いの一言も言える気がしてこないのは何故だろうか。

「どうもありがとうございます。あれ・・・飛脚師さん、この方は何方ですか？」

早苗は紅流と会ったことが無かつたのだろうか・・・諏訪子ちゃんと寝ているので警戒はしていないようだ、不思議そうに見ている。「紅流、起きろ。そして早苗に自己紹介をしてくれ」

「あ・・・ん？おはよう飛脚屋。と・・・おや、可愛いお嬢さんだねえ」

「え！？そ・・・そ・・・東風谷早苗です・・・」

早苗が素直に照れている。紅流は世辞が巧いのだな。恐らくだが、世辞というわけでもなく、話術全般に長けているのだろうか。

「それは親切にどうも。俺は紅流紅兵、万屋だよん・・・ケロケ口もそろそろ起きなよ？」

「後五分」

「「起きよう、諏訪子ちゃんノ洩矢様、起きてください」」

「あ〜う〜」

神の威厳は何処へと失せた。もう神から女の子になつてしまえば良いのではないだろうか。

「あ、そう言えばお土産の兵六餅があるんだけど、間食にどうかな

あ？」

「食べる！」

諏訪子ちゃんは飛び起き、神奈子は障子を開けて飛び込んできた。何だろう、自分が気づいていないだけで兵六餅は神を虜にするくらい美味しいものだったのだろうか・・・自分の味覚は通常だと思うが、普通に美味しいと思うお菓子なのでは・・・

「早苗ちゃんと飛脚屋はどうか？」

お菓子だが、朝食を摂っていない今の自分には非常に助かる。此処は素直に甘えるでしょう。

「ありがたく頂こうかな。朝飯抜きなんでね」

「私も頂きます」

「あいさ了解・・・」

懐から木箱を取り出した！？紅流の懐はどうなっている・・・しかし、自分以外そのことに触れようとしないあたり言い出すのは避けるべきなのだろう。

「いったただきまゝす♪じゃあ頂くよ、紅流」

そう言うが早いか、紅流の持っている兵六餅を食べ始めた。神奈子はそうでもないのだが、諏訪子ちゃんは両手に持って、そしてリスのように頬を膨らませながら一生懸命に食べている。見た印象は可愛いので一見すると普通の子供だな・・・そもそも神様なのだろうか。

「早苗ちゃんも飛脚屋も食べなきゃ無くなっちゃうよん？俺も含めてねえ」

「ご馳走様。良い店だったよ、紅流」

神奈子がそう言うということはもう無いのだろうか・・・

「神奈ちゃんはまだもういいらしいね。じゃあ食べようか」

とは言ったものの持っている箱の中には何も無く、木箱の底の木だけが見えているだけだ。

「紅流さん、もう無いようなのですが・・・」

懐にまだあるのだろうか・・・しかしもうあるようには見えない。

そう思った時、底に見えた木を剥がした。二段目があったのか。

「そんなこと無いよん。多分見える分はあの二人が食べちゃうからねえ。俺達も頂きますっ」と

持っている木箱を畳に置いて食べ始めた。ずっと持っていたのは覚えられないためだったのか。早苗も普通に食べ初めているので自分も一つ取る。

「いただきます」

食べると何時も食べている（何時も買えるわけでないが）ものと比べると格段に美味しさが違う。作った者は老舗なのか、相当の達人なのか・・・あの二人？が全て食べてしまう理由も解かる。

「美味しいですね。これは何処の品物ですか？」

「何処——って言われてもねえ・・・何処なら目の前、これは品物じゃなくて、手作りなのよ」

「・・・嘘！？」

全員が同じ意見を口に出すとは・・・しかし当の紅流は全く意に返さず兵六餅を食べ続けてる。

「本当だよん。俺、万屋だからねえ」

お菓子作りも万事の内なのか。自分が知らないだけで紅流の特技は他にもあるのだろうか・・・とはいっても限度はあるだろうが。

「コウ、まだ食べる」

「ケロケロは食べすぎだからお預け。じゃあ神奈ちゃん、今度は俺の仕事を訊かせてもらおうか？」

「やっぱり紅流は察しが良いね。あんたに頼みたいことは飛脚師の護衛さ」

俺の、護衛！？

「神奈子、何か勘違いしていないか？俺は一人だからこそ生き残れるんだ。紅流が強いのは十二分に承知しているが、強いが故に邪魔になる」

複数で行動すると、どうしても敵（妖怪の類）に襲われやすい。こればかりはどうしようもない。次いでの問題は紅流の移動手段は飛

行であり、俺は走行。そして、紅流は強い。その強さ故に俺では勝てないような敵に対しても警戒を解きがちになる。それが致命的な選択になりえるのでこの場合は断らなければ、俺は危険がより近くなり、紅流は手間が増える。こうなることは避けなければいけない。「そうなのかい・・・しかし、其処を曲げちゃくれないかい？」曲げて有益になることよりも曲げずに行くことの方での結果の方が見えるので断りたい。

「済まないが、お互いの長所が潰れてしまつ。そうなることは避けたいんだ」

「仕方が無いのかね？」

「コゝウゝ！」

「お預けお預け」と、でもねえ・・・人里で会うんじゃないんだから、場合によつては俺が居ないと最悪死んじゃうよん？」

それは無論覚悟の上。俺は弱い、それが即ち死に繋がることは無い。

「武器はある（使えないが）。それに、鬼の角を模した額当てがあるから大体の妖怪は避けていくさ。勿論慢心しているわけじゃない。その代わりに紅流にも手伝ってもらいたい。俺だけの交友範囲では無理がある。その点紅流は色々な場所に顔が利くだろう」

「それは、そうかもねえ・・・神奈ちゃん、依頼を変更してもらいたいんだけど良いかなあ？」

「その方が良いだろうね。じゃあ飛脚師は手紙を半分紅流に渡して貰えるかい」

どうやら自分にとっていい方向に流れたようなので紅流に手紙を半分渡す。

「じゃあ俺は行かせてもらう。紅流は何処に行く？」

障子を開けたところで紅流に訊く。行き先が被つてしまえば二人の意味が無い。

「そつだねえ・・・まずは白玉楼にでも行かせて貰おうかなあ？」

「紅流、幸運を・・・」

来た道を戻り、行李の中に手紙を入れてから少し考える。何処に行くべきか・・・無難に妹紅にでも頼むべきだろう。危険は特に無し、昨日の今日だ。石段を駆け下り、人里に向かって走り出す。

飛脚師の秘密（後書き）

ご覧頂きお疲れ様です。

今回は飛脚師の評価がかなり変わる回だと思います。ただ、今のところはバトルに特化させているわけでもありませんし、元々そういうキャラではありませんのである意味ではご期待に添えられないかと思います。

次はかなり短いと思いますが、オリジナルのキャラクターの紹介をしたいと思います。

ちなみに新キャラの追加予定もありますので名前だけでも打ち込んでおきます。

オリキャラ達紹介（前書き）

今回の更新は以前より早くなりましたが、以前よりあたためていたものなのです。

量、質共に不出来ではありますが、ご覧ください。

オリキャラ達紹介

【飛脚師】

性別・男

年齢・17（大凡）

種族・半人半神

能力

「道に迷わない程度の能力」

「物の求めを感じる程度の能力」

職業・飛脚

所持スぺルカード

「輝符・煌・キラメキ」

容姿

・黒髪、短髪

・身長170cm前後

・淡い青色の着物を着用

性格

・明るくなく、暗くなく、現実思考だが常に希望は持っている

武器・無し（スキル無し）

主な戦闘方法・戦線離脱

【紅流 紅兵】

性別・男

年齢・23

種族・人間（仙人）

能力・無し

職業・万屋

所持スペルカード
無し

容姿

- ・黒髪、セミロング
- ・身長180→185cm
- ・胸衣を模した服、緋色のローブ

性格

・飄々としていて、和やかに事を済ませる。親しみやすく、意外と世話焼き

武器・霊剣 みたまのきらめき
御魂煌

主な戦闘方法・剣術、体術、霊力変換の念動力

ここからはそれ以降に登場する予定のキャラクター達です。

【名前（振り仮名）】

【二つ名】（ある場合）

「〓程度の能力」（ある場合）
簡単な容姿

武器

・（例）両刃剣

東方幻夢想より友情出演

【紅闇 翔太】
くれやみ しやうた

【血染めの戦狼】
いくさおおかみ

「血を浴びることで強力になる程度の能力」

銀髪のショートカット 紅眼

武器

・刀

【秋山 典広】
あきやま ふみひろ

【スタイリッシュ】「他人の不幸を感じ取れる程度の能力」茶髪の
ショートカット黒眼

武器

・双銃（銃機全般）

【逆騎 離狗】
さかき りくぞうしん

【造神卿】

「理力を操る程度の能力」「雷を操る程度の能力」

黒髪のセミロング 黒眼

武器

・刃が光の双剣

オ「はい、こんにちは。オルトロスです」

飛「待て。作者が出てくる場面ではないだろう。それに話す前のオ、とか飛は一体何だ？」

オ「気持ちや状況が伝わりにくいから付けたまですよ」飛「口調を変えすぎていないか？」

オ「仕方あるまいて。こんな場合でもなくて本音が言えようか」

飛「酷いな。此处で言うべきか迷うが、あんた高校生だろう・・・」

オ「いかにも。しかしてそうあるべき義務など無い」飛「じゃあ俺も本音を言うが、どうして俺はこんなに弱く設定されている？」

オ「チートな飛脚など元より不要。剣が使える飛脚など異常。物語上最低限の生存機能を付けたのみに留めたからだ」

飛「じゃあ紅流の強さはどう説明する」

オ「あやつは本来主人公となるべき存在。強さは必然的に手にするものだ」

飛「主人公の前で言うことか・・・」

オ「貴様とて本音を言っているだろうて」

飛「じゃあ、俺が主人公になった理由は何だ？」

オ「今言つとまずかるうて。機が来れば話すことにする」

飛「それはさておき・・・後書きの嫁募集とは何だ？」

オ「貴様が個を嫌うからこそしたまで。今現在慕う相手は居るだろう。申し上げがあるなら聴かんでもないが」

飛「まずくないか？」

オ「構うまいて」

飛「あくまで理想だな、慧音先生や椛だとか落ち着きのある相手が理想だ」

オ「ならば話は早——」

飛「待て。向こうの気持ちというものがあるだろう」オ「私は作者だ。何か貴様へ不都合があるとでも言うか？」

飛「相手に不都合があるさ。俺を好いていないとしたらどう釈明する？」

オ「貴様の努力なくして相愛があるとでも？」

飛「大体、他に登場していない奴らがまだまだ居るじゃないか。主人公の二人すら出さないなんて」

オ「恋路はすぐにすぐ決めるつもりも必要も無かるうて。成すべき事を成せば良かるうよ。しかし、確かに登場人物を増やすのは最優先課題にしくはな。霊夢、魔理沙も出ないなど話にならぬ、とな」

飛「確かに霊夢達とは知り合いだが、描写されていないからな。これでも仲は良いんだが」

オ「無論すぐにでも書き出すとも。貴様の恋路は一応アンケートをとっているから暫くは保留としよう。これからも無理は無きよう仕事に精を出してくれ」

飛「言われずとも。しかし、ありがとう」

オ「ではご覧頂いている方々にお礼を言わなくては」

飛「ああ。その通りだな」

オ飛「「ご覧いただきありがとうございます」」

オ「これからも機会があればこういった掛け合いを続けていこうと思います。け、決してネタが無い訳では・・・ありませんので。ただストックを作らないだけなのです」

紅「次回は出してねえ？」

オ飛「「居たの!？」」

オリキャラ達紹介（後書き）

如何でしたか。一区切りついたと判断致しましたのでこの回を設けました。

次回は別視点から始まります。しかし、更新は遅くなると思います。

さて、お話は変わりますが、（前書き）

毎度ながらおかしいタイミングでの更新申しわけありません。
最近入試のことやらで手間が掛かり（ry
今回は本当に一人称が変わるのである意味新鮮味があります。
どうぞ、ご覧下さい。

さて、お話は変わりますが、

Side change<紅流>

「紅流、幸運を・・・」

そう言い残して飛脚屋は部屋を出て行ってしまった。律儀なのか・
・確実に律儀だろう。本人は自覚が無いようにしか見えないが、俺
にいわせれば律儀過ぎる。

「じゃあ・・・俺も行かせて貰おうかなあ」

そう言つて部屋を出て行く。飛脚屋・・・気づいてないのか知らないけども、後姿にあつたんだよ・・・神々しさの欠片が。

「おや、もう行っちゃうのかい？茶の一杯でも飲んでいきなよ」

飛脚屋に負担を掛けてもなんだし、戦うのも含めて、そういうのは俺の役目だから行かないといけない・・・

「嬉しいんだけどね・・・でも、また後でねえ」

「今度は・・・勝手に居なくならないでね」

ケロケロ・・・表情は浮かず、言い方も元気が無い。やっぱりあの時の別れ方は拙かったんだ。今度からは気をつけよう。懷に手紙をしまい、部屋を出て、靴を履いて飛び立つ。今が未の刻（午後四時）白玉楼に行くには冥界に急がないといけない・・・飛行速度を上げ、一気に冥界まで飛ぶ。

空が赤みを帯び始める頃に冥界に着いた。白玉楼まで飛んでも良いけど、打ち落とされては目も当てられない。歩きながら数分後には白玉楼に着いた。

「お邪魔するよん——」

そう言つて門を潜つた刹那白刃が迫ってきた。

「覚悟！」

良い太刀筋・・・でも、まだ間がある。跳び退きながら腰から剣の柄を取り、そのまま向ける。

「御靈煌・開放！」

剣の柄から洗^ほな光の奔流が広がっていく。相手の姿も良く見えた。白と緑を基調としたワンピースに浮遊する靈魂。噂に聞いた半人半霊の庭師らしい。若く、可愛い庭師だ。だが、庭師が剣か・・・高枝切鋏も華鋏も無し、疑いたくもなるが、此処は切り抜けることから始めなければ・・・

「何者ですか、侵入者！」

「邪魔するよん。って言ったよん・・・一步譲って侵入者だとして、どうするのかなあ？」

「決まっています。この迷いを断ち切る白楼剣で・・・斬ります」

迷いを斬る剣・・・妖刀か宝刀か・・・凄いものを持っている・・・「それも良いけど、うら若い乙女は剣より恋の方をお勧め——」

「黙りなさい！」

白刃が迫ってくる。見切れるものは何とか避けられるが、頬を斬られた。もしかすれば、迷いを斬るといのは迷いを持った【者】を斬ると言うことだろうか・・・良い事を思いついた。

「もう避けるのは止めようかなあ。良いよ、斬って・・・」

「やっと諦めましたか。恨みはありませんけど、咎を受けなさい！」

一気に胸部を断ちに来た。避ける素振りが無いので油断した動きだ。

【左腕】で受ける。

「斬って良かったんだよ？まあ、機械には迷いなんて無いんだけどねえ・・・」

金属同士がぶつかり、こすれあう音がする。思惑が当たった。迷いを斬る剣。勿論剣としての性能はあるだろうけど、同じ金属で、迷いが無い俺の左腕を切断することは出来ないみたいだ。

「こ・・・の・・・卑怯者！」

「酷い言いがかりだねえ。じゃあ訊くよん・・・警告も無く、確認も無く、いきなり斬りかかるのは道理の通ったやり方なのかな？」

「う・・・」

どうやら話を通じる相手のようで、庭師は口を噤^くんでしまった。

「別段責めるつもりは無いんだよ。もし、俺が人道を忘れた外道な

ら・・・君の判断は正しいことになるよ」

「貴方は結局何者ですか・・・」

そうだ、まだ自己紹介も無しだった。

「名乗るなら・・・ってのはあるけど、俺は紅流紅兵。隻腕の万屋。庭屋・・・いや、庭師は？」

「申し訳ありません。私は魂魄こんぱく 妖夢ようむと申します。半人半霊の庭師をやっています。その、紅流様は何故此处にいらっしゃったのですか？」

「妖夢ちゃんか、宜しく。此处に来た理由は、現状では言いづらいけど、君の力を貸して欲しいんだ。良いかな？」

「それは・・・申し訳ありませんが、幽々子様に訊いてみないと判りません」

「幽々子様？誰かは知らないけど、会わせてくれるかなあ。話が通じない相手じゃなさそうだから」

従者を見れば主人も何となしに想像出来るものだ。生真面目きまじめな妖夢ちゃんならいい主人を持っているのだろう。もしくはその真逆なのだろうが。そうなれば交渉次第で力を借りることが出来る。

「はい。しかし、一応注意致しますが、食べられないようにお氣をつってください」

逆だったようだ。しかし、人を食べる主人を持つというのも如何なものか・・・

「あいさ、了解。じゃあ、案内をお願いねえ」

それから屋敷を歩き。通常の部屋に比べて二回り近く大きい部屋の前に来た。どうやらこの先に幽々子と言う人間が居るのだろう。人間は訂正しようか、何かが・・・

「幽々子様、来客です」

「誰かしら。どうぞ」

許可がおりたのなら後は俺の力次第。障子に手を掛け、開ける。

「お初にお眼に掛かります。私は紅流紅兵、人里の万屋を勤めております」

「貴方！？何故口調を・・・」

妖夢ちゃんには驚かれたが、俺にとって場合によって話し方を変えるなんて常識。特にへりくだった言い方は相手に油断をもたらしことも多い。今回は倒したり、間違っても殺傷なんて出来ない時なので話し方を変える必要が無いのだが、頼む手前礼儀というものは要るだろう。

「礼儀正しい人ね。私は西行寺 幽々子、幽冥楼閣（ようめいろうかく）の亡霊少女で、冥界の管理をしているわ。妖夢くお茶とお菓子と食べ物とお代わり用の食べ物を持ってきてく後、貴方も喋り方を戻して良いわよ」
「寝巻きなのか普段着なのか判らないような着物を着た幽雅な少女だ。しかし、頼んだものがおかしい。何故、食べ物を二回要求するのだろうか。とりあえず部屋に入って三人で囲むように座る。」

「じゃあ、ありがたく戻そうかなあ。幽々ちゃんの良いかなあ？」

「じゃあ私はなんて呼べば良いのかしら？」

「俺の友達は何うて呼ぶからそれが一番お勧めかなあ。他に呼びたければ好きに呼んでも良いけど」

「宜しくねくコウ。でも、貴方はどうして此処に来たのかしら？」

「単刀直入に言おうかな。妖夢ちゃんを借りたいんだ。良いかなあ？」

「そうく妖夢も良い人が出来たのねく」

冗談が下手なのか本当にそう思っているのか。良く分からない・・・

「じゃあ貰っちゃうけど、良いのかなあ？」

「良い訳がありません！幽々子様も冗談が過ぎます」

「冗談はさておくよん。君が妖夢ちゃんの主と聴いたんだけど、本当に妖夢ちゃんを借りても良いのかい？」

「そうねくまあ、良いわよ。妖夢、お土産宜しくねく」

これは随分な主人だ。あっさりしているようだが、かなり読みづらい。まともな交渉術で相手になるとは思えない。しかし、了承を得たなら良ししよう。

「じゃあ、来てくれるかな？」

「分かりました・・・お供致します」

「今更言うけど、断るのは君の自由だ。嫌々じゃ最悪死んじゃうよん？」

死なないまでも代償を受けることは容易に想像がつく。自分はそう理由ではないが、代償は払った身なのは変わりない。失ってみれば十二分にでも理解出来るが、それはさせたくない。

「絶対的な根拠があるわけでも、慢心があるわけでもありませんが、大丈夫です」

その言葉に違わず、妖夢ちゃんの瞳には確かな光があつた。信頼するには十分・・・

「じゃあ、改めて宜しく頼むよ。俺は隻腕の万屋、紅流紅兵。呼ぶ時は敬称無しのコウって呼んでくれれば良いよん」

「はい。私は半人半霊の庭師、魂魄妖夢です。ご自由にお呼びください」

本当に生真面目だ。気苦労が絶えないだろうに・・・

「じゃあ、さっき言ったお供がどうかは無視して、この手紙を持つて守矢神社に行つて欲しい」

そう言つて懷から手紙を取り出し、渡す。

「承知しました。では・・・」

そう言つと足早に飛び立つていった。さて、残りは二通。他の実力者は誰が居るだろうか・・・基本は飛脚屋の選ぶ者以外だ。それなら飛脚屋が立ち寄らなさそうな地霊殿にでも行つてみよう。

「ねえ、コウ。妖夢がお茶もお菓子も食べ物も食べ物も持つてきてくれなかった責任は取つてね」

確かに幽々ちゃんの指令を遮つてしまったのは事実だが、自分にどうしろというのか。作れとでも言いたいのか・・・

「じゃあ作れば良いのかな、それとも他に何かあるのかなあ・・・」

「そうね、でも眠いから寝るわ。そうだわ、布団を敷いておいて貰えるかしら？」

存外簡単なものだ。ただ布団を取り出して、敷いて部屋を出て行つ

た。今は申の四半刻（午後四時半）程度、自分なら地霊殿に行っても死にはしない。もつとも、何度か行ったことはあるので平気は平気なのだろうが。地底だけに掘り出し物でも見つからないかな・・・飛び立ち、地底を目指す。

さて、半刻経って漸く地底に着けた。しかし、殺風景だねえ・・・薄暗いし、岩しかないし——でも、温泉は良いものがあつたつけ。妬みっ子の橋姫も、怪力陽気な鬼も、覚えてくれているか・・・半年ぶりに来るわけなので少し不安だが、忘れている方が珍しいので気にしない。ただ、たまに忘れられることもあるので気をつけないといけない。どんな仕事に就くにせよ客——そうでなくとも人間（妖怪もだが）関係は絶対に絶やしてはいけないものだ。人は一人で生きていけない、妖怪ならば話は別なのかもしれないが、自分は人間。どうしようも出来ない種族の壁がある。自分は懂れているわけでも、劣等感を感じるわけでもないが。

「当つたれー！」

不意に聞こえたその声と共に、後頭部へ痛みと衝撃が襲う。

「あぐあああ・・・痛いよん、誰かなあ#」

よく確認すると桶に入った小さな子供が脅えながらこちらを確認していた。

「あうあう・・・これは、ちよつとした事故——」

「当たれ・・・って言ったよねえ、それでも事故になるのかなあ#」

「ごめんなさい、ごめんなさい・・・」

両手を合わせて許しを請う姿を見ると責める気も失せてしまうというものだ。しかし、何も無しでは同じことを続けてしまうかもしれない。此処は心を鬼にして叱るべきか・・・

「こつというのは俺の趣味じゃないんだけど、今度やったら・・・こつするよん。」

左腕で地面を殴りつける。土に水気が無いのか思ったより輝が深く刻まれた。

「ああああ………」

本当に脅えている。これ以上やっても意味を持つ筈が無いので近寄って頭を撫でる。

「怒ってるわけじゃないんだよん。ほら……べっこう飴あげるから元氣出してねえ」

懷から飴を一つ取り出してあげると、喜びながら食べ始めた。どうやら現金な性格のようだ……

「ありがと、私、キスメ」

そう言つて子供は飛んで去つていつてしまった。あれは妖怪か……といつても地底に来る人間は殆ど居ないだろう。よつぽどの実力者でないと来る資格すらないが。とりあえず進み続けると橋に来た。

「パルパル、居るかい？」

「誰よ変な名前前で呼んだのは……あれ、貴方コウじゃない」

パルパルこと水橋みずはし パルスィが迎えてくれた。今日も金の髪風でが靡なびいて——いない。緑の眼も爛々と——死んだ魚のようになってい

る。どうして何時もこの感じなのか……

「正解。ご褒美に撫で撫でしてあげようか？」

「嫌——良いわよ／＼／」

一瞬否定の声が聞こえた気がしたが、良いのか……しかし言つたからにはするのが筋だろう。右手で彼女の紙を撫でてみる……

「／／／／／／」

短いが、かなり滑らかでシルクのようだ。撫でている方の気持ちが良いくなる。嫌がつていないのが不思議だけど、そのまま続けてみる。「ちよつと尋ね事なんだけど、強い奴を知らないかな。出来れば制限無しで地上に来れる奴で」

情報を得るのなら其処に居る人間——違つか。妖怪に訊くのが一番だった。さっきのキスメちゃんに訊けば……いや、下級妖怪に訊いたところで大した答えは貰えないだろう。

「そうね……大道芸人なら地霊殿で何かするらしいけど。結構強いらしいわ」

「そうか・・・どうもねえ。行ってみようか」

「ちよつと待ちなさい。そいつ銃を使うのよ、コウにはどうしようもないじゃない」

銃か・・・確かにそれはそうだ。俺の武器は剣、かたや銃とくれば圧倒的に不利なのは明白。近づくことが出来れば話は別なのだが、無効が実力者ならそんなことはさせないだろう。

「俺には必殺技があるから平気だよん」

弾幕に俺のような剣士では刃がたたない時なんて当たり前だ。そんな時の為の技が無いわけじゃない。

「そう言うなら、試しに行ってみれば？」

「勿論だよん。伊達に万屋とは呼ばれてないからねえ」

そう言つて橋を渡り、歩きだす。

「お兄さん！」

猫車を押しながら陽気に話しかけてきた妖怪、確か火焰猫かえんびよう 燐りんだつたと思う。相変わらず紅い髪を三つ編みに束ねている。猫のような耳と二又に分かれている尻尾が印象的だ。猫車の中身もあの時と同じだろうが、見たくはないな・・・

「どうしたのかなあ？」

「お兄さんこそだよ。久しく会えなかったから皆首を長くして待ってたんだよ」

とお燐は言つたが、すぐに帰つた理由は別の——しかも、人間の依頼で来たわけであつて、大した時間居ることが出来なかったからだ。

「お燐、大道芸人が地霊殿に来てるらしいんだけど、知ってるかなあ？」

「ああ！うんうん、知ってるよ。さとり様の所でスタイリッシュに大道芸をしてたよ。名前までは覚えてないけどね。それがどうしたの？」

「ちよつと、パーティに誘おうかつて思つたんだ。どうもねえ・・・」

「そう言い、神経を集中させて一気に地霊殿まで飛んでいく。」

「あの人つよ……」

何か言っていたような気がするが、最後まで聞こえなかったので流すことにした。幾分か地霊殿に着いたが、地霊殿の外で大道芸をやっているらしい。地面に置いていた大量の皿を投げた？

「御眼に掛けよう——hand-gun・・・shoot！」

ロングコートの中から拳銃を二丁取り出し、跳びながら全てを完璧に撃ち落とした・・・心の底から感じた。スタイリッシュだ、と・

「コウ。こつちに來たら？」

不意に声が掛かった。今居る場所は空中で、しかも数mは離れている場所なのだが・・・流石はさとり、そう思いながら降りる。

「私は何時でもこんな感じなのだけれど・・・」

一見すれば可愛い女の子だが、異様な目玉が身体の周りを通っている。

「お久しぶりだよねえ。さとりん」

さとりんこと古明地 さとり。地霊殿の主と結構な役職に就いている子だ。人の心を読むことが出来る能力があり、それで疎まれているらしいが、自分は別に気にしたことはない。

「変わらないわね」

見た目を覆す^{くつがえ}つんけんした言い方は何時もドライなのだろうか。

「明るくなるときは明るくなるわよ。貴方が明る過ぎるだけ」

「そうさせてもらおうかなあ。俺は紅流紅兵、芸人さんはどんな名前かなあ？」

「慣れ慣れしい奴だが、嫌いじゃないぜ。俺は秋山 典広^{あきやま ふみひろ}。この通

り大道芸人だ。どんな所でも芸が出来るのが強みの・・・人間さ」

中々友好的な人間のような。かなり期待が持てる。そして、スタイリッシュだ。

「頼みごとがあるんだけど、どうかなあ？」

「そうだな・・・異常に変なことじゃないなら引き受けても良い。が、信用出来るかどうかが問題だ。俺と一戦してくれれば、あんた

がどの程度の人間か分かる」

絶妙に不利な条件だ。戦って信頼を得られれば良いが、得られない場合もある。しかも、その後に依頼を引き受けるかは別。しかし、此処までの強さ・・・みすみす棄てることは出来ない。御霊煌を抜く。

「その条件、乗ったよん♪俺は隻腕の万屋・・・行くよん！」

そう言つて距離を詰めるために走りながら斬り込む・・・

「試合開始だ。俺はスタイリッシュ・・・shot-gun, shoot！」

懐から腕くらいの長さの銃を両手に構え、トリガーを引いた。

「御霊煌・開放！」

霊力を剣状から光の奔流に変えて弾丸を受け止める。幸いなのかは分からないが、銃弾の形で、銃弾ではない。受け止め切れたが、この銃は幾つもの小さい銃弾が一気に撃ち出される銃のようだ。

「sit・・・だが、あんたも実力者だな。ショットガンが効かないとなると数で削るか。Machine-gun——」

ショットガンと呼ばれた銃をしまい、短いが、弾装がはみ出ている銃を両手に構えた。開放はかなりの防御力を持つ技だが、中々に霊力消費が激しい。

「削らせないよん。御霊煌・斬」

奔流を止めて、霊力の放出形状を刃に戻し、剣の形状にする。さして離れているわけではないので一気に切り込む。

「shoot！」

その言葉と共に大量の弾丸が襲う。狙いは良い。が、良すぎるが故に手元が確認出来るなら先手が打てる。

「はああ！」

殺傷は無論論外。傷害も最低限にしなければ・・・そうなければまず足・・・切っ先が触れる寸前、

マシンガンと呼んだ銃をしまいながらバック宙・・・完全に御霊煌は空を切ったが、この剣の強みは重量を持たないことだ。簡単に斬

り返す・・・しかし、予期されていたようにスタイリッシュは着地の瞬間に手を付いて後方に下がった。これで二回剣が空を切った。このまま下がらせることは自分にとって不利になるだけだ。踏み込んで更に突き掛かるが、スタイリッシュは身体を丸めて更に一回転し、両手を付いてかなり後方に下がった。

「これでなら、どうだ。assault-rifle, shoot
！」

開放はせずに斬で弾けるものは弾き、それ以外は避ける。

「実力者は訂正するか。強者だったぜ。まさか此処までとは、sniper-rifle——」

コートの中からやけに銃身が長い銃を取り出した。コートの何処にしまっていたのか・・・しかし距離をとられて一際大きい銃を取り出すということは本気と言うことで間違いないだろう。

「開ほ——」

「shoot！」

光の奔流が間に合わない。剣を収め、左手で受ける。銃弾を受けきれずに軽く吹き飛ばされる。

「本当に強いねえ・・・でも、殺すつもりなんて毛頭無かったよね？」

「何だ、気づいてたのか。俺の銃弾は実弾じゃないことを」

葉莢が一切落ちない銃なんて無い。どういう仕組みかは分からないけど、殺すつもりなんて無い。試合と言った時から引かかっていたけど、これで結果に辿りつけた。

「で、現状を覆すか？」

「俺は万屋だよん、何でも出来るさ。御霊煌・開放斬」

光の奔流を一点に集約して、斬る。斬は短いが攻撃力を持つ。開放は広く、勢いがあるので防御に優れている。そのハイブリッドは20m程度離れていても、当たる。

「な!？」

流石にスタイリッシュも想定外だったようでまともに受けた。

「俺の勝ちだよなぁ？」

「そうだな。最後の最後まで本気で攻撃してこないとは・・・あんなら信頼出来るだろう」

御霊煌の刃を斬れる刃になかったのを気づいていたのか。まったく、本当に本気じゃないのはどっちか・・・

「じゃあ、近日中にこの手紙を持って守矢神社って所に行つてねえよ」

そう言つて懷から手紙を取ろうとすると、半分だけ取れた。さっきの衝撃で一通破けちゃったのか・・・仕方がないのでもう一通の方を取り出して渡す。

「勝手に戦つて負けておいてなんだけど・・・秋山には、私からも貴方に頼みごとがあるの」

タイミングを見越したようにさとりんがすつと割り込んできた。まあ、元々割り込んだのは俺なんだけど。

「そう言えば芸を見てから頼みたいことがあると言っていたな。何だ？」

「まずは・・・こいし、こいし・・・」

そう言つと何処からかさとりんに似た女の子が現れた。決定的な違いは帽子を被っていることと、眼の開いていないこと。気配はまったく感じなかった。何者だ・・・

「なあに、お姉ちゃん」

「この人が旅の同行人よ」

「wait、話が掴めない」

「説明するわ」

どうも俺の立ち入る話ではないので聞き流すことにしよう。

（私情も込み入っておりますのでこの場は割愛させていただきます。
byオル＝トロス・クラフト）

「なるほどな。こいしが地上の旅がしたいと、しかし一人では行か

せられない。で、俺の強さ次第で決めたと。まあ、結局了承したが・
・何故こいしが俺にくつつかないといけない？」

結局話し合いが終わり、背中にこいしちゃんが張り付いた状態でス
タイリツシュは戻ってきた。嫌々な素振りをしているが、まんざら
でもなさそうだ。

「懷かれないよりはましだと思うけどねえ。じゃあ俺はもう行かせ
て貰うよん」

そう言つて飛ばうとすると、

「コウ、この時間から地上に戻つても危険なだけよ。今日は泊まっ
ていきなさい」

地上の妖怪に比べればこっちの方が危険なのだが・・

「貴方の靈力の問題よ。気づいていないわけがないでしょう？」

さとりに隠し事は通用しないみたいだねえ・・

「当たり前よ。この時間に来て泊まらないなんて方がおかしいのだ
けれど、其処まで急ぎなのね」

「その通りだけど、其処まで心を読むのはいただけないなあ・・」

「それが私達なのよ。でも、こいしは違うわよ」

「俺はさとりの心を読むことは出来ないけど、訊かないよん」

わけありそうなのは何と無しに分かっているので深く追求すること
はしない。

「ありがとう。とりあえず地霊殿に入つて疲れをとつて。秋山もよ」
「・・・・・その方が利口だろうな。泊まるう」

全員の意見が一致したところで地霊殿に入つていった。

さて、お話は変わりますが、（後書き）

今回はオリキャラが増えました。この後にも増やす予定ですが、番外編を一つ噛ませるつもりです。（既に書いてあるものなので2、3日中に更新します）

それと、これは私事ですが、15000アクセス突破しました。閲覧していただいた皆様に感謝します。 閱

番外編・談話会（前書き）

正直ふざけて書いてみました。とんでもなく短く、内容も残念ですが、ご覧ください

番外編・談話会

オル「トロス・クラフト（以下オル「今回は幻想郷から離れ何処とも知れぬ所にて談話と洒落込む回としよう」

飛脚師（以下飛「さて、確かに此処が何処かは知らない所だ…」

紅流紅兵（以下紅「やっと登場出来たねえ」

オル「今回はゲストに大妖精を迎え談話——」

飛紅「待て… / 待ちなよ…」

オル「何か不都合でも？」

飛「何故大ちゃんが選ばれた？」

オル「仮にも第一登場キャラを蔑ろに出来るとでも？」

飛「それは…（確認中）」

？「あのー私は登場してもいいですか？」

オル「ようこそ、大妖精こと大ちゃん。何処でも適当な場所に掛けよ」大妖精（以下大「ありがとうございます。でも本当に私で良いんですか？」

紅「ようこそようこそ。早速本音談話しようか」

飛「確かに…そうだ」

大「飛脚師さん、初めて話した相手が私なのに…」

飛「悪い。最近立て込んでいて……」

紅「俺は結構楽しかったけどねえ？」

飛「バトルスキルがある奴は別だろう。なあ、大ちゃん」

大「私も弾幕出せますよ？」

飛「オル、人間のアンタなら——」

オル「我思う、故に事実となる」

飛「……俺の味方は？」

オル「無かるうて」

大「ごめんなさい」

飛「高望みはしないさ。大ちゃんはありがとう」

紅「でも、飛脚屋はスペカ持つてるじゃないか」飛「飛・脚・師な。」

紅「気にしない気にしない。今回の話題は、語られなかった飛脚屋との出会いだよん」

オル「まず私からぬ問題はどうか解決する？」

？「今宵のお話は大妖精と飛脚師の出会いのお話——」

全員「貴様、何者！？／どなたかなあ？／誰だ！？／誰ですか！？」

モノローグ（以下モノ「申し遅れました。私の名は【モノローグ】と申します」

オル「貴様…他作品に出て、咎め無しと思うてか」

モノ「私はモノローグ（独り言）聴くも流すも皆様次第」

オル「ならば語って貰おうか、私も考ええぬことを」

モノ「狭い狭い幻想郷。大妖精は何時もと変わらない日々を過ごしております——」

大「はい、その通りです」

モノ「しかし大妖精は悲しんでいました。親友と喧嘩をしてしまい、仲直りが出来てないからです——」

チルノ（以下チ「あたいつてばしんゆうね！」

モノ「恐らく親友の妖精も悲しんでいましたが、なのでどうしていいかわかりません。そのうち大妖精は親友に会えると信じて湖に来ることにしました——」

大「なんでそれを！？」

モノ「しかし、親友は幾ら待っても現れません。悲しい気持ちのま

ま去ろうとした時に、声が掛けられました——」

大「飛脚師さん！／ひきやくし！」

モノ「それは人間の男で、大妖精へ手紙を渡しました。ただ、手紙と言わなければただの落書きだと思われそうでしたが、大妖精には解かりました。そこには殴り書きで【ごめん】と書いてありました——」

大「今でも宝物だよ♪」

モノ「手紙を渡した男は飛脚師と名乗りました。大妖精は早速返事を書いて飛脚師に渡しました。飛脚師は快く引き受け、親友の元へ行きました。それを何度も繰り返し返すと、大妖精と親友との間に手紙は必要無くなりました——」

飛「チルノには読み聞かせる必要があつたがな」

大「そうだったんですか？」

飛「漢字を読めなかったのさ。平仮名もあまり知らなかったみたいだったがな」

チ「あたい、ばかじゃないもん！」

モノ「お話も佳境へ差し掛かりました。それから大妖精は子供達やバカルテットにも手紙を出したりしました。勿論今でも飛脚師が全て渡していますがね——」

大「ちなみに漢字は慧音先生から教えて貰いました」

飛「なるほどな。そういわれれば大ちゃんは賢いが、それ以外は殆ど残念だからな」

モノ「何時しか大妖精は飛脚師を慕うようになりました。そして始まりの日へと向かいます。今宵のお話は、大妖精と飛脚師との出会いのお話。これにて閉幕と致します」

紅「ねえ大ちゃん。慕うってどっち——」

オル「早まるな、コウ！タグに惑わされることなど無きよう努めよう！」

大「それは／＼／＼／＼／」

飛「オル！トロス、いつもは盾突いてばかりだが、今回は同意見だ。そうだろう、大ちゃん？」

大「／＼／＼／＼／」

紅「うりうり♪朱くなっちゃうところが怪しいなあ♪」

オル「話にならぬ程とは…致し方あるまいて」

飛「オル、どうする？」

オル「任せよ、必殺・話題替え！」

飛「心得た。続きましては、作者談！」

オル「その旨、しかと承知した！まずはこの小説を書くきっかけからお話します。私は現在高校生なのですが、クラス内の友人と話している之不意に、東方の小説書いてくれ。と言われまして、言葉の綾とでも言いますか、了承しました。しかし最初に書いていました方は自作小説との組み合わせという一般の方は理解不能な駄作でしたので全く別なストーリーを一から作りました」

飛「その時俺は主人公になる予定は無かったと言っていたな」

オル「確かに。初期の構成段階には名前すらありませんでした。もっとも、今現在も正式な名前ではありませんが…真名も決めるべきかと思いつつも、飛脚師で定着しつつありますので変えるつもりはありません」

飛「オル、質問があるのだが」

オル「何か？」

飛「俺が戦う場面はあるのか？」

オル「基本的には無いと考えて間違いは無い」

飛「悲しいな」

オル「本音を言えばもう少し強く書いても問題はありますが、他のキャラで埋めることにしています」

飛「今更だが、テーマが結束だからな。ある意味俺は体言者なわけか」

オル「そうした観点からコウが主人公になることは取り消されました」

紅「酷い話だねえ…」

オル「しかし、まんざらでもなかるて」

紅「まあ…ねえ♪」

オル「ですがコウの性格は実際の私に近いものがあります。私自身親近感があり、多用しているキャラクターの一人ではあります」

紅「確かに、俺って別の小説に出てもいるからねえ」

オル「コウ、その手の話を持ち込むな…」

モノ「私は難無く出演出来ましたかね」

オル「貴様は来てしまった。故に消すこと叶わぬ」

紅「いつそ出しちゃえば良いと思うけどなあ？」

オル「物事そう簡単にいきはしまいよ。ただでさえ更新が遅く、内容も希薄な私では上手くいく筈があるまいて」

紅「まあ、そうだねえ」

オル「それに私が今の位置に存在できるのは、東方Projectというブランドあってのもの。ZUN氏には感謝しても足りぬ程よ」

飛「それは勿論だ。特に俺はZUN氏あればこそ存在出来ると言っても過言ではない」

オル「これからその気持ちを忘れずに頑張ります」

紅「次は、新キャラクター編だよん」

オル「前回は記述しましたが、東方幻想より友情出演の紅閻翔太、私情出演のスタイリッシュ（秋山典広）、そして逆騎離狗。この三人を追加して合計五人になりました」

飛「モノローグは含まれるのか？」

オル「結論、グレーだ。東方Projectの二次創作という意味なら含むだろうが、東方飛脚伝ならば含まれまいよ」

モノ「私は今後出演予定がありません——」

オル「それより先言わせる訳が無かるうて。私の状況と都合次第です」

紅「オル、なんでもこの三人には東方キャラで恋人が居るともつぱらの噂だけどねえ？」

オル「経緯は不問とするが、確かにそれは真実よ。おいおい分かることを言う必要など無かるうて」

紅「確かにねえ」

オル「正直なところ色恋沙汰は不得意なので限界まで書くつもりはありません」

紅「フランフラグ♪」

オル「貴様！」

大「私達、かやの外ですね」

飛「ああ、茶でも飲むかな？」

大「頂きます」

飛「紅流に完全に俺の立ち位置盗られた……」

大「大丈夫ですよ。飛脚師さんは主人公なんですから」

飛「主人公が名誉職に思えてきたよ」

大「元気出してください。そんな飛脚師さん本編では絶対NGですよ」

飛「そういう話は駄目だと思うから、止めよう。な？」

大「そうですか？」

飛「大ちゃんもそちら側か……」

オル「何にせよ、飛脚師も独り身で終わらせるつもりはありませんが、正直相手が見つかりません。閲覧されている方で、リクエスト

がありましたら感想へお書きください」

飛「オル、俺は結婚出来るのか？」

オル「する予定だ。今のところは【犬走 椀】【紅 美鈴】【東風 谷 早苗】とまあこんな感じになっております」

飛「基本的に落ち着いた人間——いや、妖怪でも良いが、居て安心出来る者が欲しいな」

オル「感想等を書いて頂ければ反映可能かも知れません」

大「私は入っていないんですね……」

オル「貴様は倫理的に如何なものかと思うたから撥ねたまでの話だ。考え及ばないでもあるまいて」

大「はあ……」

オル「慰めになるかどうかは分からぬが、飛脚師絡みで出すことを約束する」

大「それは…出たいです」

オル「何時との約束はしかねるが、必ずや出してみせよう」

紅「さっきの三人以外にも追加はあるのかなあ？」

オル「先程出したのは現時点で出演している者の中だ。基本的に追加はあると考えよ」

紅「じゃあ言ってみればハーレムなのかなあ？」

オル「【候補】が数に入るのならばその考えが正論だろうよ」

飛「俺は女性を泣かせる気は無いぞ」

オル紅「早速ながらもう一人目だ／朴念仁だねえ……」

大「……オルートロスさん、コウさん、そんな悲しい小動物を見るような目をしないでください」

オル紅「済まん、先の言葉は棄て置け／それはごめんよ」

オル「さて、皆の集…存外におかしなことばかり話し込んだな」

飛「番外編だと言ってやりたい放題でな」

紅「気にしない気にしない♪」

オル「いずれは新たなゲスト達を呼び、談話会を催そうぞ」

紅「じゃあ、最後にこの言葉で締めくくるよん………次回のゲストはフランだよん♪」

オル飛大（やりたい放題の体言者はあやつよ／作者以上に暴走しているな／妖精より自由な人だな）

番外編・談話会（後書き）

ふと本編を読み返して苦笑しながら後悔しました。フランフラグ完全放置……友人に言われるまで気付きもしなかったので大変後悔しています。飛脚師は子供受けは良い方なので進めることも考えましたが、受容されるかと需要があるかという問題に突き当たりました。本文にも書きましたが皆様にあります。

飛脚師×○○は誰が理想的でしょうか。何卒感想等をお願いします。

焼き蕎麦屋は焼き鳥屋にご執心？（前書き）

今回新キャラと共に飛脚師にはありませんが新しいフラグを持てきます。しかし、今になって思うと此処まで続く事が意外でした。流れのままうpして適当なところで終わらせようと思っていたら案外続く事に驚きです。今回後書きの方でアンケートをしていますので是非とも目と通していただきたいと思います。不定期な上の駄文ですが…それではご覧ください。

焼き蕎麦屋は焼き鳥屋にご執心？

S i d e c h a n g e < 飛脚師 >

とりあえず石段を降りて、人里に来たわけだが、今自分はこういうわけか焼き蕎麦屋に居る。

「まあ、何もないところだけど一番上等な焼き蕎麦出すぜ。ほんとに助かったからな」

今話しているのは紅眼で銀髪が印象的な好青年だ。といっても年は大して変わらないだろうが。此処に至るまでのことでも思い返してみよう。

< 回想 >

「さて、人里に着いた・・・が、限界だ・・・」

人里まで走って着いたは良いのだが、空腹で倒れそうだ。守矢神社で軽食を食べるは食べたが、足りる筈がない。定食屋にでも行かなければ・・・

「なあ、あんた飛脚師だろ？」

そう不意に声が掛けられ、振り返ると紅眼で銀髪が印象的な青年が居た。

「そうだ。俺が飛脚師・・・済まないが定食屋を知らないか？」

「それなら定食は出してないけど、俺の店は焼き蕎麦で有名だ。良かったら食べてくか？」

天の助けとはこのことか・・・相手は手招きしている

「ありがたい。早速寄らせて貰う」

そう言つて彼に付いて行く。

< 回想終了 >

「いやいや、お互いに良い思いが出来ることさ」

この青年は紅闇くれやみ 翔太しょうたといって、人里に定着していない焼き蕎麦屋をしているらしい。自分自身も焼き蕎麦というものは初めての経験なので楽しみではある。そんな掛け合いをしている自分の行李の中

には手紙が一通入っている。この手紙を渡す相手は妹紅で、聞けば――聞かされたのだが、恋文らしい。妹紅はこの手のことには慣れていなさそうなので慌てる様子が目に見える気がする。不謹慎だろうが……しかし、自分も妹紅に用がある身なので二つ返事で請け負った。

「出来たぜ、飛脚師」

そう言つて皿に盛られた蕎麦を出してくれた。肉や野菜と共に炒められていて、香ばしい香りがする。

「ありがたい。いただきます」

尋常でなく空腹だったのと、それよりも初めて食べたが、かなり美味いという組み合わせでももの数分も無い間に片付いた。

「良い食べっぷりだぜ。そういえば、あんたも妹紅に用があるらしいな。逆に俺が手伝えることがあるか？」

その言葉でふと思つたが、妹紅は強いので妖怪退治に誘うつもりだが、この男は強いのだろうか……見た目で判断するつもりは無いが、人当たりが良く、決して好戦的とはいいい難そうな人間なのであまり誘う気持ちを持たなかった。

「じゃあ質問させて貰う。会つてすぐの人間に言つのもなんだが、妖怪に対してどんな対処が出来る？」

「強さにもよると思うけど、倒すか、殺すかだ」

「逃げるという選択を執らない理由は？」

「別に……逃げたら他の人間の所に行くかも知れないから。でも、滅茶苦茶強くはないから負けるときは負ける。山に行つて熊に遭つた時と同じだ」

客観的な意見だ。しかし、この人物の性格が分かる気がする。

「じゃあ武器があるなら見せて欲しい」

「良いぜ。と言つてもこの数年実際に使つた覚えはないけどな」

そう言つて店の奥に行つて一振りの刀を持って来てくれた。

「これが俺の武器【滅牙】だ。きちんと手入れはしてるけど、使つてないからな」

その刀を見ても何も分からない。こういうことは殆ど無かったので少し驚いたが、この刀はもう求めることが無いということだ。

「紅闇さん——」

「翔太で良い」

「翔太、この手紙を持って、守矢神社に行つて欲しい」

「それは、まあ・・・物騒なことだよな」

察しも容易に付いたようで手紙は受け取ってくれた。しかし行くかどうかは本人次第だ。ただ強い人間ならば自らのみを守ればそれで良いのだろうが、必要なのは他人をも護ることが出来る人物なのでどうなることか・・・

「ああ、嫌ならば断つても良い。人里が危険になるだけ——」

「おいおい、そんなこと見逃すわけにはいかないだろ。俺はそんなに出来が良いわけじゃないからどうなつても良いけど、他の人が傷つくのは我慢出来ないからな」

正義感がある人間のようなうだ。自分にはあまり力が無いので羨ましいと思う。

「ありがとう。そんな人間だから、もしかしたら良い思いが出来るかもしれないな」

「??」

あくまで、かもしれない。だが・・・しかしこんな人間に見返りが無いなんてことはないだろう。

「焼き蕎麦、本当に美味かった。ご馳走様」

「良ければまた来てくれよ。あんたは良い奴だし、もっと色んな焼き蕎麦を食べてもらいたいからな」

これ以外にも種類があるのか・・・味はかなりのものなので是非にでも食べに行きたい味だ。そういう意味でいうと、へたな定食屋よりも俄然行く気になる。焼き蕎麦屋を後にして慧音先生の寺子屋を目指す。人里を走っていると、なにやら人だかりが出来ていた。

「風邪薬はこれです。あ、はい。腹痛薬はこれです・・・」

どうやら薬師が薬を売りに来ているようだ。自分は常備薬はおるか、

薬を買ったことすらない人間——いや、もう半神か・・・

「飛脚師さん？」

「久しぶりだな、鈴仙」

薬師見習いの鈴仙 優曇華院 イナバ（れいせん うどんげいん いなば）、見た目は薄紫のロングヘアーに兎の耳が生えていて、ブレザーという着物を着ている。ある意味でいえばかなり異様だ。一応妖怪らしく、何度か合ったことがあるが、目を合わせてはいけならしい。

「お久しぶりです。師匠が宜しくと仰っていました」

師匠・・・八意 永琳^{やこころ えいりん}か。あの人は中々に無茶なことを言う人なのであまり依頼を受けたくない。頼まれてしまえば断りはしないが、それ故にあまり足を運んでいないのが現実だ。しかし、それよりも「鈴仙、人里にあまり来ない方が良いと言ったな。覚えているか？」
「はい。そうですけど・・・そういえば師匠からこの薬草が欲しいからと——」

「飛脚師じゃないか・・・おっと、脱走月兎も一緒とは珍しいな？」
理由が来るとは・・・この場では嬉しさと気まずさしか気持ちを持ちえない。

「藤原妹紅・・・別に私のことは関係ありませんよね？」

「そうだな、輝夜は相変わらずなんだらうな？」

「貴女には関係ありません」

「じゃあ——」

「止めてくれ、妹紅。この場ではどうしても妹紅が悪人になる・・・」

何の因縁があるのかは知ったところではないが、白昼から人里で揉め事は避けるべきだろう。しかもどちらも人の領域ではない。とんでもない被害が出るのは明白だ。

「悪かった、飛脚師。私も大人気無かった」

「鈴仙に言えれば、なお良いけどな・・・おっと、妹紅に二通手紙がある。一通は受け取らなくても良い。けど、もう一通は嫌でも受

け取ってもらう」

そう言つて行李の中から早苗の書いた文と翔太の書いた文を渡す。

「分かった、なにになに……」

数分後妹紅が読み終わつたのを見計らつて、

「前者の文の答えを聞かせて欲しい」

「分かつた、すぐ行かせて貰うけど、慧音に一声掛けてみる。しかし……後の文は正直馬鹿げているよ」

「他人事だから大して干渉するつもりは無いが、会ってみれば随分印象が変わると思うな」

「別に……これを書いた人間を悪く言うつもりは無いさ。でも、私は人間じゃないから色々限界があるのさ」

確かに妹紅の言うことはもつともなのだが、報われないものだ。しかし、ただ手紙を渡しただけで結果が見えているわけではないと思う。

「俺は行かせて貰うよ」

そう言つて人里を後にしようとした時、

「飛脚師さん、ちよつと待ってください」

鈴仙が引き止めてきた。そういえば用件を聴き終わる前に妹紅が出てきたから呼び止められるのも当然か……

「悪い鈴仙、話はなんだつたかな？」

「師匠が欲しい薬草があると言つていまして、でも人手が足りないので飛脚師さんをお願いしようと思ひました。これがリストです」

そう言つて少し厚い紙切れを渡してくれた。少し目を通したが、訳が解からない……

「霖之助さんに訊けば分かるよな？」

「一応分かつていただけたと思います」

「そうか。立て込んでから近日中には駄目かも知れないが、この飛脚師、全心思込めてこの依頼受けさせていただきます」

「宜しく願ひします」

「じゃあ今度こそ行かせて貰うよ」

そう言つて人里を後にする。さて、他に自分の知り合いで協力してくれる者が誰か居るだろうか・・・桜は恐らく妖怪側で均衡をとるだろう。その線でいくと、文も向こう側に近いだろう。紅魔館の人・・・いや、ほぼ妖怪に頼むのも微妙だが希望が無いわけではない。それならば博麗の巫女にでも会いに行く方が望みも持てる。異変解決が専門の巫女ならば引き受けるだろう。

「飛脚師！」

何処からか声が聞こえる。回りを見渡してみるが、誰も居ない。何かが自分の肩を触った！？枝なのかと思つたが、普通の道を歩いている自分が枝に触れるわけが無い。

「誰・・・いや、何者だ？」

声の質はただの女の子だ。微妙に聴き覚えのある気がするが、状況が状況だけに判断しかねてしまう・・・

「私だよ、にとり。光学迷彩は完璧みたい・・・」

そう言つて突然姿を現したのは、青い短髪を括つてランドセルを背負つた少女。河城にとり・・・顔馴染みの河童だ。機械類に強く家の電球やその他諸々で助かっている。しかし、何故こんなところに彼女が居るのだろうか・・・

「顔馴染みを驚かせるのは感心できないな。それにしても、どうしてこんなところに？」

今居る場所はにとりの家の近くでもなければ、誰かが好き好んで居るような場所ではないただの道だ。

「光学迷彩のテストとちよつと知り合いに会いに行こうと思つて。

飛脚師は何処でも行くのは分かるけど、最近この辺も危ないから気をつけてね」

「忠告はありがたく受け取っておくけど、まさかこの辺も妖怪が？」

「私の家の近くにも居るから弾幕で追つ払つたよ。此処最近になつて低級妖怪の様子がおかしいよ、食べ物に困つてゐるわけでもないし、私達妖怪まで襲おうとするから」

確かに、食料に困つて襲うのは生物として仕方の無いことだが、そ

れ以外の理由があるとしたら問題だと思う。

「そうか・・・とりあえず気をつけてくれよ」

「その言葉は飛脚師に返すよ」

「それでも早足、逃げ足には定評があるんだ。じゃあな」

そう言つて走り出す。危険と分かつたのならば急ぐのが定石、下手にうろろろしては餌になるのがオチだ。

「・・・」

姿は見えない、声も聞こえないのもう行つたのだろう。一度深く深呼吸をして、本気で走り出す。行李が少し煩わしいが、邪魔という意味では何時ものことなので気にはならない。

四半刻（約三十分）を過ぎるか過ぎないかのところでやっと博麗神社に着いた。着いたのだが、人氣が無い。人が来ないからではない、人以外の氣配がするわけでもない、氣配が無い・・・

「靈夢！萃香！誰か、居ないのか・・・」

声はこだまするばかりで返つてこない。もしかすれば靈夢はもう個人的に妖怪退治に行つているのかも知れない・・・靈夢は人間だが、かなりの実力者なので一人でも十分妖怪と戦えるだろう。自分がいちいち声を掛けなくても行っている可能性なんて十分考えられるだろう。

「誰？」

障子が開いて、声がした・・・

「誰か居る——うく・・・」

続きを言う前に言葉に詰まつた。酒臭い、此処は神社であつて酒蔵ではないはずなのだが・・・

「はらひらら」

栗色の長髪をした小さな女の子、伊吹^{いぶき} 萃香^{すいか}が泥酔しながら歩み寄つてきた。勿論だと思いたいが、人間ではない。頭には二本の角が生えているれっきとした鬼だ。ちなみに以前だが、角を触ると温かった。ただ、今は非常に面倒だといえるだろう。呂律^{ろれつ}が廻っていない程呑んでいるとなると対応が面倒だ。

「萃香、とりあえず水を飲んでくれ。話はそれからしよう」

そう言って水筒を投げて渡す。受け取るだけの分別はあるらしいが……どうだろうか。

「うーい……なんだ、飛脚師か……霊夢は全然帰ってこないし……」

水筒の水を一気に飲むと地面に座り込んで手招きをしてきた。他に選択肢があるわけではないので傍まで来て座る。

「愚痴はいいが、状況が分からない。何故霊夢は戻ってこないんだ？」

不思議と萃香と話す時は普段と変わらない話し方になる。見た目は完全に子供なのだが、基本的に泥酔していることが原因だろう。

「妖怪がどうって……で、変な人間が……」

変な人間……関係ないとはいえ、聞いたことは無い。紅流なら色々な意味で変だが、紅流ならば万屋と言うだろう。となれば別な人間——か、【何か】ということなのだろう。

「萃香、霊夢は何処に行ったのか分かるか？」

返事が無い。分からないなら分からないと言う筈だが、どうしたのか……

「zzzz……zzzz……」

ただ寝ているだけか……しかし放っておくわけにはいかない。萃香を抱きかかえて神社の中に入る。酒臭さが移るので嫌は嫌なのだが、我慢するしかない。布団は部屋の隅に乱雑に敷いてあったので敷き直して、萃香を寝かせる。

「zzzz……zzzz……」

フランもそうだが、騒がしくなければ可愛いものだ。数分見続けると自分にも眠気が移ったのか行李を下ろして横になることにした。ふと行李の中に目が入る。何かが光っている……気になって取ってみると銀の杭だった。以前レミリアに必要なからと貰ったものだが、いまだに真意が分からない。魔よけの効果があるらしいので身に付けておいて損は無いのだろう……

苦しい・・・気持ち悪い・・・息が出来ない・・・

「!？」

萃香が自分の胸部を枕にして寝ていた。苦しさはそこから来ていたのか。しかし、気持ち悪さは・・・^{よたれ}涎か、着物が薄い分よく分かる。本当に気持ちが悪い。しかし、なぜ萃香はこんな所で寝ているのだろうか、横にあったはずの布団は・・・乱雑な状態で隅にあった。もしかすれば自分が敷く前は寝ていたのかも知れない。とりあえずこのままではどちらも寝覚めが悪い。既に自分は悪いが、起こしておくのが定石か・・・

「萃香、萃香・・・起きてくれ、萃——」

「今戻ったわ・・・よ??」

腋が開いている独特な巫女装束を纏った少女、^{はくれい}博麗 ^{れいむ}霊夢が気だるそうに入ってきた。入ってきたところで時間が止まった気がした。

「久しぶりだな霊夢。頼み——」

言い切る前に目の前に札が迫った。避けることは叶わなかった。視界が奪われる。

「霊夢、何か勘違いしていないか？」

「私は勘の良さが売りでもあるのよ」

確かに霊夢の勘の良さには目を見張るものがあるが、手段は選んで欲しい。

「俺が何かしたのか？」

「神社に関係ない神が来ることが問題よ。前から予感してたけど面倒だから伝えなかっただけよ」

まだ人間のつもりなのだが・・・しかし、もう感づかれるとは予想外だ。

「半分だけの筈だ。それより萃香を除けてくれないか？」

「その辺に放置しても大丈夫よ」

中々に非道なことを言う・・・仮にも神に仕える巫女なのだろうか

ら慈悲を持った態度でも良いと思うのだが・・・

「寝かせるさ。例外はあるが、友好的に接することはどちらにも良いと思うが？」

「飲んだくれを泊めるくらいには良心を持っているつもりよ、まあ別に止めはしないから好きにすれば」

素っ気の無い言い方だが、これも優しいさの内と受け取っておくか・・・
・萃香を引き剥がして、再び布団を敷いて寝かせておく。

「霊夢、頼みごとがあるんだが――」

「嫌よ？」

「皆まで聴いてくれ。もし、面倒なことが嫌だと言うならばこの手紙を持って守矢神社に行つて欲しい」

「皆まで聴いても結局嫌よ。私は個人的に動くから」

予想はしていたが、霊夢の性格上こうなるか・・・

「そうか。じゃあ行かせても・・・悪いが、泊まっても良いか？」

空に蒼みは無く、紅くもない。漆黒が広がっているだけ・・・今の時間を正確に測ることは出来ないが、夜なのは間違い無いだろう。

今から動ける程の実力は無い、ならば頼むしかない。

「布団は無いわよ？」

「命は保てる。それで十分さ」

「じゃあ、早速夕餉ゆづけを手伝って貰おうかしら」

「相変わらず人使いが荒いな」

「怪我人を使うのかしら？」

そう言つて右手首を見せると包帯が巻かれていた。霊夢が怪我をするなんて早々無いことだと思つが・・・

「どんな相手がそうしたんだ？」

「さあ・・・着地の時に捻っただけよ。変な気配を持った人間だったわ、私の弾幕は消されるし、拳句軽く押されただけでこの有様よ」
それは人間なのだろうか・・・弾幕が消せる人間なんて・・・もしかすればそいつも普通の人間ではないのかも知れない・・・

「そうか・・・自信は無いが頑張るとしようかな」

そう言つて台所へ向かう。博麗神社で炊事をしたことは何度もある
ので勝手知つたるものだ。

台所に着き、冷蔵庫を開いて出来合いの食事を作る。何時も気にな
るが、この冷蔵庫と言う機械は便利すぎると思う。俺の家にも欲し
いは欲しいが、荷物が増えるだけなので必要も無いか。
作つた料理を居間に持つていく。

「へえ・・・飛脚師、うちで働かない？」

「俺は飛脚で家政婦じゃない。まあ、萃香にでも頼んでみればどう
だ？」

作つた物はただの野菜炒めなので褒めようもないことなのだが・・・

「萃香でも丸焼きなら作れるわよ。毎日ね・・・」

萃香に請つた料理が作れるとは思えないので訊くだけ無駄だった・・・

「萃香は起きていないみたいだな・・・」

「ご馳走様。私はもう寝るけど、水でも浴びておいたら？」

「是非ともそうさせて貰うよ」

胸部全体が溢まみれだったので洗い流したかったので風呂場に直行
して、軽く体を洗い流した。

それから部屋に戻つてみると霊夢が寝ていた。あまりにも速い・・・

「霊夢・・・寝ているのか・・・」

酷く無用心だと思うが、その辺りは慣れているのだろう。自分も横
になつて、明かりを消す。

S i d e c h a n g e < ? ? ? >

月明かりに照らされる辺りの土は紅く、草木の香りよりも血と新鮮
な肉の臭いの方が強烈だった。其処にたった一人、人の形をしたモ
ノが立っていた。

「・・・尽きたか——」

その声は整い過ぎた男の声で、感情も無く、決められたかのように

言葉を紡いだ。^{つむ}

「グアアア！」

傍から無傷の異形が襲い来る・・・

「——小望月^{こもちつき}」

声を発した刹那の合間、人の形をしたモノの手から光が一本・・・

・

土の血は塗り重ねられ、肉は増えた。

「八、九・・・十二か。依頼は完遂」

静かにそのモノは歩き去った。

焼き蕎麦屋は焼き鳥屋にご執心？（後書き）

今回もオリキャラを追加しました。

残るは一人ですが、結構な間が開くと思います。

今回は今まで感想をくださった【荒井 スミス】さん【POSTAL】さん【荒盗】さんに感謝の一文を添えようと思います。

「感想をくださりまことにありがとうございます」

そして今まで何もせずに申し訳ありませんでした。

今回の話では、今までもですが、私の独自解釈も含んでいるので意味不明な点があると思います。勿論今更な部分ですが…

此処からは東方飛脚伝をご覧頂いている皆様に幾つかアンケートをお願いしたいと思います。

・文章の改行について

【POSTAL】さんからの指摘なので皆様にも意見を頂こうかと思いました。

三点リーダもこの候補に入っていました今後以降しっかり変えようと思っています。

・飛脚師の真名について

私自身も考えたことはありませんが、友人から指摘されましたのでこんな名前だったらいいなというものがありましたら感想にでもお願いします。

・飛脚師の伴侶について

初回からフランフラグを建てて放置したと後悔している所存です。

ですが、今のところ大して進行もしていないのでこの人物なら飛脚師の嫁にしても良いだろう（これが一番の難関と思っています）というキャラクターを感想に添えていただきたいです。

：注意：【藤原 妹紅】【上白沢 慧音】【古明地 こいし】は私情により除外させていただきます。

・飛脚師の新しいスペルカードについて
これに関しては案が無いこともないのですが、一応アンケートをとってみようと思います。

・東方飛脚伝とのコラボについて
色々な小説で。×。×。×。というようにことに憧れている私なのですが、飛脚師を使う、ないしはこのキャラと組みせたいと思う方がもし居ましたら感想の方に一文をお願いします。
ただ、東方project関係の二次創作で飛脚師を入れて役に立つということはあまりないと思います。

集結。そして

S i d e c h a n g e < 紅闇 >

「今日の仕込みは無し。か……」

使わない道具は完璧に手入れした。数日なら戻ってきてすぐに使えるだろう。

普段しまつてあるその後戦闘用の服を着てから一振りの刀を取り出して、腰に挿す。

身体に掛かる重さは久しく感じる。昔は今のような生活は考えられなかった。でも、この生活に慣れてみると充実感で一杯になることが解かった。

一度刀を抜いてみる。いつもと変わらない…紅と黒を混ぜたような禍々しい色をした刀身が姿を現した。

昨日飛脚師が刀を抜かなかったのは今思っても幸いだと思う。こんな刀を見れば大概の人間は気持ち悪がつて離れてしまう…

「頼んだぜ…【滅牙】」

軽く一振りして、鞘に戻す。

今は何時だっけ…壁に掛けてある時計を見ると9時を少し回ったところだった。正直、ここの世界の時間の呼び方は訳が分からないので、あまり聞かないようにしている。店にあるこの時計もインテリアとしか観られていないようだし…

目指すは守矢神社…所在地や方角もしっかり書いてあったので歩き出す。

< 青年移動中 >

道を歩いていると、ふと変な気配を感じて後ろを振り返る。

「誰も…居ないよな??」

「上だ」

声の通り上を見ると、ロングコートを着た人が居た。

「あんた、人間？」

「俺は人間だ」

「俺も人間だ。名前は紅闇翔太、あんたは？」

「秋山典広、大道芸人をやっている。今はついでに用心棒も…」

大道芸人とは珍しい…しかし後に言った用心棒については疑問が残る。

「仕事中？」

「見えなかったか…こいし、面倒事の前に出て来い」

「はい」

声がした。そう思った瞬間ロングコートにしがみついた女の子が現れた！？

「な！？まあ、旅は道連れっていうし、途中まで一緒に行くか？」

「俺は構わない。こいしは？」

「良いよ」

二人とも同意したらしく降りてきた。

自分は空を飛ぶことが出来ないので少し羨ましいと思う…

「ちなみに秋山さん？の目的地って何処？」

「敬称は要らない。目的地は守矢神社だ。そっちはなんて呼べば良い？」

「あれ、一緒か…俺のことは翔太で頼む。そっちの女の子は？」

「こいしで良いよ」

「宜しくな」

「翔太、見たところ只者じゃないが…何をしている？」

少し警戒されているようだ。警戒されるのは慣れているが、嬉しいものではない。

「焼き蕎麦屋だよ。今度来てくれ。かくいう秋山も只者には見えなけれど？」

「そう…か。まあ、昔魔法をかじった程度位だ」

魔法使いか…知り合いの魔法使いにも食い逃げの達人が居るけど、随分タイプが違う。

まあ、食い逃げ対策は料金を前払いにしておけば良いだけの話なの

だが、面倒なのでしない。

「こいしちゃんは見ることがないな」

「地上にはたまに来てるよ？お兄ちゃんのご飯も食べたことがあるもん」

それって、俺のまかないが時折消える事件の犯人ってこと…？

「言ってくれば作るぜ？ツケも効くし」

忘れるからツケにはしたくないけど……

「翔太、焼き蕎麦って何だ？」

「そうだな…小麦粉をかんすい灌水で練って、茹でるか、蒸したものを刻んだ野菜や肉と一緒に炒める料理のことだ。味の保証は出来る」

「そうか…今度行かせて貰おうか」

「客が増えるのはありがたいことだから何時でも歓迎だ」

他愛ない会話をしていると石段の前まで着いた。どうやらこの上が守矢神社らしい。

「さて、登りますか！」

「俺はパスだ、飛ぶ／こいしは飛べるから先に行ってるね」
「そう言くと二人だけ浮き上がって飛び去ってしまった。」

俺だけダッシュか…魔法の類は訳が分からないので覚えようという気にはなれないが、こうまで差があるのなら飛行だけでも覚えておくべきも知れない。しかし、今すぐに飛ぶことは無理、詰まり、

「根性！」

全力疾走することにした。

「これ以上は翔太が全力疾走するだけの描写になりますので割愛致します。byオルトロス・クラフト」

side・change<秋山>

「なあ、こいし…」

「なあに？」

「飛んでから何故くつつく？」

浮遊から暫くは個人だったが、今現在は自分が飛行してこいしは背

中にしがみついている。

何故こうなったかは解からない。自分は決して人受けが良い方ではない、だからこそ根無し草の大道芸人をしているのであまり集団行動——個人行動以外の行動は苦手だ。戦闘行為を集団で行ったこともあるが、自分についてこれる人間は居ないから必然的に個人だ。

【個】なのか【孤】なのか……しかし、今は人間と妖怪。ポテンシャルが違うのだからついてこれるのは当たり前、むしろ単純な力で劣る妖怪は居ない。

振り落とすことは出来ない——するつもりも無いが、最初からこんな妖怪と共に居れば良かったのかも知れない。

「無意識にくつついてた」^{たち}

一番性質が悪い答え方だ。しかし嫌いではない。

「速度は落とさないぞ」

「うん」

コートが破れないか心配はあったが、トップスピードで上がった。

「ここが守矢神社か……」

「こんにちは」

人当たりの良さそうな巫女さんが迎えてくれた。

「hello lady」

「英語!？」

「悪いな、口をついて出ることがあるんだ」

「はあ……どのような御用でしょうか？」

「【俺が】じゃなくて、【誰か】の御用で来た。これを見せてからだが」

そう言つてコートのポケットから手紙を取り出し、巫女に渡す。

「これは……確かに【誰か】ですね。立ち話もなんですし、お茶でもいかがですか？」

「ありがたく頂くとしよう。俺は秋山典広。敬称は要らない。what is your name——名前を訊いても？」

英語は癖になつていようだ。直す気は無いが、直したほうが良い

だろう…

「東風谷早苗です。私も敬称入りません。後ろの女の子は何方ですか？」

「こいしは古明地こいしだよ。宜しくね」

「宜しくね、こいしちゃん」

背中が重みが無くなったかと思うと早苗の肩にくっついていて。早苗はまんざらでもなさそうなので中々のつわものなのかも知れない。

「こちらです」

出会って早々和みながら居間まで通され、横になっている。

「秋山さん、コートは掛けないんですか？」

「敬称は…好きにすれば良い。俺のコートを掛けて壊れないハンガーと台があつたら見て見たいよ」

そう言つてコートを脱いで早苗に渡してみる。自分が手を離れた瞬間に早苗はコートに体の全てを持つていかれたかのように膝をついてしまった。

「こ…これは……助けてください」

「i know」

そう言つてコートを受け取り、再び着る。

「何がそこまでの重さの原因なんですか？」

「武器だ。ハンドガンは腰のホルスターに入っているが、それ以外のショットガン、サブマシンガン、アサルトライフル、ロケットランチャーは二丁ずつ、そしてスナイパーライフルが一丁入っている」

「なんでそこまで多く武器を持つんですか？」

「銃が俺にとつての武装具の全てだからだ。剣や槍は全く使えない」

「そうなんですか。でも大変じゃないですか？」

「例えば、服を着ていることを大変だと思ふことはおかしいことか？」

「それは…普通ですけど、その重さは異常ですよ」

「万年肩こりは請け合いだ。一着いかがかな？」

「遠慮します。あの、気になっていたことですけど…こいしちゃん

とはどんな関係ですか？」

こいしとどんな関係……

「報酬の内というか……依頼の内というか……とにかく確実なのは同伴者つてことだ。しかし何故こんなことを訊くんだ？」

「兄妹の様でしたから気になってしまいました」

「俺に言わせればこいしとは姉妹に見えるが？」

「そうでなくとも早苗には姉のような……こまめな気配りや落ち着いた感じを視るに精神年齢が下の奴を世話する習慣が染み付いているように思える。」

「それは嬉しいです」

「それはなによりだ」

「それでは私は掃除に戻りますからそのまま寛いでください」
「そうして暫く緑茶を啜りながら待っていると翔太が入ってきた。」

「思ったよりも速かったな。茶でも飲むか？」

「ご丁寧にお出迎えしてくれてどうも。茶は頂くよ。秋山、こいしちゃんはとうした？」

翔太に言われて気づいたが、確かにこいしが居ない。

「そうだな。まあ死にはしないだろう」

「疑うわけじゃないけど、何を根拠に？」

翔太には言っていなかった。勿論他言は数えるほどしかしていないし、そこからマイナスが必要なくらいだ。

「翔太に口止めは要らないと思うが、俺の能力は『他人の不幸を感じ取れる程度の能力』だ。もし分かっていれば絶対に行かせないさ」

「へえ……じゃあ俺も言っておこうかな。『血を浴びることで強力になる程度の能力』だ。これでフェアだよな」

「ああ、そうだな」

「なあ、秋山」

「なんだ？」

「かなり長い白髪の子を見てないか？」

容姿だけ聞けばかなり特徴的なので見逃すとは思えない。その上で

見てはいない

「見てはいない。誰だ？」

「名前は妹紅つていって、可愛くて良い奴だ」

話し方が全然違った。ただの知り合いではないのだろう。だが、言葉から察するに面識も無いのだろう。

「そうか。経緯は訊かないが、逢えれば良いな」

「ありがとな」

話していると障子が開いて顔馴染みが入ってきた。

「三着かあ…残念無念、銅メダルつと。スタイリッシュは良いけど、君は……焦げ蕎麦屋！」

「焼き蕎麦だ。コウさんに出したのがおこげ蕎麦って名前なだけだから」

紅流紅兵、相変わらず訳の解からない男だ。顔も広い、腕も良い、一体何者だ…

「そうだったの。まあ翔太も元気そうで何より、でも戦うんだねえ？」

「まあ…な。俺は誰かの代わりに死ねればそれで良いって思ってるから」

「助言じゃないけど、代わりになるなら一生代わりでいること…だよん」

「元よりそのつもりだけど、ありがとな。で、コウさん——」

「コウ…遊ぼうよ」

「…ケロケロ!? / 酒臭っ! / 酒か…」

金髪の幼女が酒の臭いと共に入ってきた。酒は勝利の美酒以外好まないの鼻に付いて仕方が無い。支障は無いが、まずこの幼女は呑んでいるだろう。

「真昼つから酒なんてのは良い身分だねえ…神様だから当然かもしれないけど、感心出来ないなあ…そう思うよねえ、妖夢ちゃん」

「私は慣れていますから、この位は苦と思いはしません」

ワンピースを来た少女が慣れた様子で幼女を抱えて持っていた。

それに続くようにして紅流も出ていった。

「俺らつて、蚊帳の外？」

「そんなことは……ないだろう」

微妙な空気だけがその場を支配していた。少なくとも自分にはそう思えた。

Side - change <紅流>

「妖夢さん、本当にすみません……」

「お互い様ですよ。それよりもコウ様には感謝すべきなのかも知れません」

「そうですね。まさかあの二人を相手にして吞まずに躲^かわし続けながら相手をするなんて……」

妖夢ちゃん達は和やかに親睦を深め、神様達は酒を煽^{あお}り過^かしていい。

「zzzz…コ…ウ…zzzz…zzzz…」

ケロケロは既に潰れ、自分の膝の上で寝息を立てている。それは苦とも思わないが、神奈ちゃんが大変だ。

「なんか…もう、さ…早苗が…早苗が、一緒に寝てくれないからさ……」

「俺の知ったところじゃないけどさあ、一旦距離を置いてみるのも一つの手じゃないのかなあ？」

「コウは解かるだろ、早苗の可愛さとか愛らしさとか……」

もう、早苗ちゃんを別室に連れて行かないと襲い掛かりそうな勢いだ。それを酒で紛らわせている筈なのに何故にこうなるのか…

「それは解かるよん。でも、それを相手が分かってるかどうかはまた違う話だよねえ？」

「まあ…そうだけどさ。子供の頃の早苗はより一層可愛くて、懐いてくれてたのに……」

あまり過去のことを言われたところで答えに困るだけなので止めて欲しいが無理というものだろう。

「子からでも、親からでも、親離れは世の常だよ。これに耐えなきゃ永遠に離れちゃうかも知れないよん？」

「う……」

葛藤しているようなので放っておく。

そうしていると不意に障子が開いた。

「悪いが勝手に入ったぞ。東風谷早苗つてのは……あんだだな、先にこの手紙は返しておくよ」

長い白髪の女の子……もこたんだ。

「え？あ、はい。^{うけたまわ}承りました、妹紅さん」

「お久しぶりだねえ、もこたん」

「紅流……もこたん言うなって再三言っている筈だけどな？」

「ご機嫌斜めだと乙女が台無しだよん」

「何を言うかと思えば……人や妖^{あやし}じゃ私とは一緒になれないんだよ。たとえ億や兆の年を生きようが、無限には程遠いから……」

「俺はそうとは思わないねえ。たとえもこたんの言う億でも兆でもねえ、皆一日ずつしか過ぎないのは一緒だよん」

「ふ……そうだけどそれは所詮理屈なのさ」

「未来だけを見てたら今を忘れる。今だけを見れば過去を置き去りにする。過去だけを見る人間は経緯から未来のことしか考えない。なら人を見て見なよ、ってねえ」

「そうだな。まあ、人間や妖怪が嫌いなわけじゃないぞ、それでもなかったら焼き鳥やなんてやってないさ」

「そりゃそうだ。そういえばもこたんは飛脚師から手紙を受け取ったんだよねえ？」

自分は渡していないので当たり前のことだが……

「ああ。人里に危害は加えさせないさ」

「勿論だよん。俺はこれ以上呼んでないし、これで面子も揃ったかなあ？」

「はい。では、皆さんは居間でお待ちください。お茶を淹れなおしできます」

そう言つと早苗ちゃんは先に部屋を出て行つた。

「私達も行きましょうか？」

「来て早々だがな。コウ、その二人はどうする？」

もこたん達はもう行こうとしている。神奈ちゃんとケロケロを何とかしなければ…

「神奈ちゃん、ケロケロを頼んだよん」

「ああ、任せときな」

「ありがとねん」

そう言つて部屋を出て行つて二人についていく。

「これ以上は——以下割愛。by（ry」

「皆さんお揃いですね」

「そうだな」

「妹紅！？」

「そうだねん」

「はい」

「ああ」

「では、皆さんには三人ずつに分かれてもらいますね」

三人ずつ……その割には一人足りない。まさかこいしちゃんは入らないだろうし、神奈ちゃん達なら三人ずつにはならない。ということとは、

「ということは早苗ちゃんも戦うんだよねえ？」

「はい。勿論です」

「じゃあ、俺はスタイリッシュと組むよん」

「私はコウ様と共に行動します」

「wait、俺のいけ——」

「はい決定。意義はあるかなあ？」

「俺は構わないけど」

「私も構いません」

「二人に同じだ。誰と組もうが構わないさ」

「いや、俺——」

「さあ、決まったなら行動かなあ？」

今は酉の二つ（午後七時）程。十分妖怪退治の時間だ。

「流石にすぐにすぐは拙ますそうなので、今日は泊まって、明日に整理し直してからです」

「そんなに悠長に構えてても良いのか？」

この場に居る全員が感じた疑問を誰よりも速くもこたんが言った。

「それが…潜んでいる筈の妖怪達の三分の一位が斬り捨てられていました」

早苗ちゃんのその言葉は、その場の空気をを十二分にでも凍らせた。
「仲間割れって訳じゃないんだよねえ？」

「私にも理解出来ませんが、本当に【斬り】捨てられていたので、常人とは思えません」

殴る蹴るは知の要らない行為だけど、斬ることは知のある人間以上の存在…恐ろしいと思う。

「なら、少し休もうかなあ……」

「やるなら万全でいくべきだ、一泊に賛成だ」

「スタミナのつく料理なら任せてくれ」

「休息もまた前進の内…ですね。賛成です」

「多数決には従うさ。それと、料理なら私にも少し任せてくれるか？」

タイプは随分違う全員だけど、見事に輪になっている。

「じゃあ、確認の為に割り振りを言うよん。俺に妖夢ちゃん、スタイリッシュ。翔太ともこたんに早苗ちゃん。これで良かったよねえ？」

「はい」

「じゃあ翔太さんと妹紅さんは台所にどうぞ。皆さんはそのまま寛いでいてください。早目にお風呂を沸かしてきます」

そう言って三人は出て行った。

集結。そして（後書き）

ごらん頂き感謝と共にお疲れ様です。

正直このままのペースでいつてしまえば飛脚師が空気になりそうな予感がしてなりません。しかし、ここで迷ったり中断したりすることとは薄っぺらい信念が許さないと、内容的に支障は無いので続行します。

最近決めたことですが、月二回のペースで更新する予定なので毎月15日前後と30日前後で更新したいと思います。ただ、M○P3rdの発売で……言っておきながら出来ない可能性が大になります。います。

正直私は天性のモ○ハ○厨でして、無印から現在に至るまで【無印、G（○i i版は除く）、2、3、F、P、2nd、2nd G（アイルー村は除く）】累計時間を計って見たところ四捨五入をして、500日以上（限界が999時間の為）やっている計算になっています。

「みんな、モ○ハ○しようにぜ！」

戯言は無視してください。言い訳にしか過ぎませんが、前もって書き込んで起きます。

「遅れてしまい真に申し訳ありませんでした」

といつても、期待している人なんて居るのでしょうか…勝手な決め付けですが、お気に入り登録をされている方は今現在25名なので最低限その方の為に頑張ろうと思います。

これは独り言です。

東方projectは書いて、モ○ハ○の小説を何故書かなかったのだろう…

P S

今回は文章の改行について【POSTAL】さんから意見がありましたので三点リーダは中点を使わず書きました。改行のスペースについては未だ検討中です。

これ以下は引き続きアンケートの部分です。

・飛脚師の真名について

私自身も考えたことはありませんが、友人から指摘されましたのでこんな名前だったらいいなというものがありませんたら感想にでもお願いします。

・飛脚師の伴侶について

初回からフランフラグを建てて放置したと後悔している所存です。ですが、今のところ大して進行もしていないのでこの人物なら飛脚師の嫁にしても良いだろう（これが一番の難関と思っています）というキャラクターを感想に添えていただきたいです。

：注意：【藤原 妹紅】【上白沢 慧音】【古明地 こいし】は私情により除外させていただきます。

・飛脚師の新しいスペルカードについて

これに関しては案が無いこともないのですが、一応アンケートをとってみようと思います。

・東方飛脚伝とのコラボについて

色々な小説で。××。というようにに憧れている私なのですが、飛脚師を使う、ないしはこのキャラと組ませたいと思う方がもし居ましたら感想の方に一文をお願いします。

ただ、東方project関係の二次創作で飛脚師を入れて役に立つということはあまりないと思います。

番外編・談話会2（前書き）

終始グダグダですが、ご覧ください。

番外編・談話会2

紅流紅兵（以下紅「やってきたよん、談話会」」

オル「トロス・クラフト（以下オル「ああ…本当に次回があるとは……」

飛脚師（以下飛「それは俺の言葉だ。作者が何を言っているんだ」

オル「私とて続くとは考え及ばなかったのだ」

紅「はいはい、悲觀的にならずにさあ」

オル「悲觀したところで意味は無し。進むしかなろうよ」

飛「確かにな。さて、今回俺達は何をする予定だ？」

紅「新キャラの武器説明をしたいと思うんだけどなあ」

オル「確かにそれは必須かも知れぬな。始めよう」

紅「やつぱり前回の説明じゃあ説明が雑だと思つよ」

オル「やはり言われて当然か…なれば武器説明をしていこうか」

飛「まずは順序どおり紅流——」

オル「違う。武器の説明はまず貴様からだ」

モノ「私は何をしておきましようか？」

オル「自由に休めば良い。今は語り手の必要は無い」

オル「飛脚師の武器として定着している【血染村正】についてですが、形状は日本刀、刀身の色が紅いというだけです。ランクでいうと大業物の領域の刀になりますが、飛脚師が使わないので空気になりつつあります。飛脚師の戦闘スキルを具体的にいうと、下の上なので完全に使えないわけではありません。しかし、前記したものは常人の値なので紅流や秋山等戦闘スキルが高い者と比べると圧倒して弱いので今のような離脱戦法を特化させました」

紅「じゃあ、次は俺かなあ？」

オル「その通り。紅流の武器は通常（リアルな物）と比較しても特殊なものです。銘は【御霊煌】で形状は日本刀の柄の部分にイメージしてください。問題は刃の部分がありません。刃は霊力のものなので長さの描写が変わることもありますが、基本的に1m20cm程としています。【開放】の時の防御範囲も描写していなかった記憶があるので記載しておきます。防御範囲は半径60cm程ですが、幅があるため単純に範囲での防御ではありません」

紅「さて、じゃあ追加している新キャラの武器紹介だよん」

オル「スタイリッシュこと秋山の武器ですが、かなり種類があります。ネタバレも含みます。しかし書かせていただきます。まずハンドガンですが、【MK 23 MOD 0】です。知っている方はSOCOMの名前で御馴染みかと思いますが、正直無理があると思いますので特徴を書きます。ハンドガンとしては高い命中精度を持ちますが、サイズが大きく、そこそこ重量があります。次にシヨ

ツトガンですが、【RMB-93】という銃です。勿論一般の方の為に解説を入れたと思います。1990年代初頭に開発されたシヨットガンで、主にロシア国内で使われています。ストックがある状態スコーピオンのようなものに出来て、結構コンパクトなシヨットガンですが、ポンプアクションです。マシンガンは【PP-K2】というマシンガンで、解説をしますと、ロシアの特殊警察の使用する銃で、徹甲弾が発射可能な設計になっています。次に使ったアサルトライフルはかなり有名な【M16A4】です。アクション映画やアメリカ軍で最もよく見るタイプの銃で、様々なアタッチメントが装着可能な銃で形状の説明は必要ないかと思います。正直解説は終わった気がするので次にいきます。スナイパーライフルですが、【M82A1A】という銃です。正直もう飽きた方がいると思いますがお付き合いお願いします。解説をいれますとこの銃は【M82A1】と【SAS-R】という対物銃のバリエーションにあたります。基本的な使用用途は対テロ作戦なので結構物騒な銃です。この他にもロケットランチャーがあります、【RPG-7】なので解説は入れません。手榴弾もあります名前と種類にとどめます【MARK 141・フラッシュバン】【AN M8・スモークグレネード】の二種類です。個数はスナイパーライフルを除いて全て二丁ずつあります。手榴弾は複数とします。ただ、実弾ではなく魔力弾なのでリロード作業はありません」

紅「長かったねえ・・・さすがスタイリッシュ。さあ、お次だよん」

オル「紅闇翔太の武器は妖刀【滅牙】です。形状は殆ど日本刀ですが、刀身が赤黒いです。刀自体に呪いがあるとかそういうわけではありませんが、妖刀です。ランクでいうと大業物です。しなやかで強靱、鋭利、重量がありながら取りまわし易い。かなりチート風味な刀ですが、所詮は刀です。どんな人間にも言えることですが、使

う人間によつて業物も鈍^{なまくら}も変わりうるのです」

紅「かなり長かったねえ…飽きられてないかなあ？」

オル「確かにそれはある。ならば、ゲストを呼ぼうではないか」

紅「今回のゲストは……フランドール・スカーレット！」

オル飛「なんという…/まさか…」

フランドール・スカーレット（以下フ「此処は何処？」

オル「何処とも知りえぬ場所よ。時も止まり、望めばいかなる物もある。ゆるりと過^くこせ」

飛「まあ…慣れたから。茶でも飲むかな？」

フ「うん」

（飛脚師＋フラン談笑中）

オル「今回も時を遡^{さかのぼ}り、飛脚師とフランが会った時の事を――」

モノローグ（以下モ「お話致します。私は語り手――」

オル「また貴様が……」

モ「番外編では私もレギュラーメンバーの末席ではないのでしょうか？」

紅「確かに。彼は十中八九出ているようだし、この際構わないんじ

やないかなあ？」

オル「作者とはなんだろうな……」

紅「オルはいいからモノちゃんは仕切り直しだよん」

モノ「今宵のお話は飛脚師と幼い吸血鬼の出会いのお話。私は語り手【モノローグ】と申します。それでは……」

オル紅飛フ「来たかノ待ってました」ノ思い出したくはないがなノお話」

モノ「昔々、大きな紅い館には二人の吸血鬼が住んでいました。しかし二人は一緒ではありませんでした——」

飛「今から二年程だがな」モノ「ある日飛脚は嫌々館に来ることになりました。勿論手紙を届けるためです。残念ながら内容は言えませんがね。飛脚は着いて早々門を素通りしました——」

フ「めいりんがさぼっていたの」

モノ「飛脚は館の中へ、奥へ進み、誰に案内されるでもなく主の部屋へ着きました——」

飛「道が無い限り迷わないからな……」

モノ「館の主に会った飛脚は恐怖よりも面白さで驚き、それから主と遊びました。そして帰り際手紙を渡すと主から別の手紙を渡されました——」

飛「今思えばあれが地獄への片道切符だったな」

フ「飛脚師…酷いよ……」

飛「ああ…ごめんな」

モノ「飛脚は簡単に請け負いました。宛てた相手は主の妹と知ると二つ返事で引き受け、妹の部屋に行きました——」飛「訂正してくださいが【部屋】なんかじゃない。あそこは……牢獄だ」

モノ「さて、妹を見るなり飛脚は悲しくなっていました。四肢に鎖が繋がれていましたから……飛脚は悩みません、すぐさま外しました」飛「訂正しておくが【部屋】なんかじゃない。あそこは……牢獄だ」

モノ「さて、妹を見るなり飛脚は悲しくなっていました。四肢に鎖が繋がれていましたから……飛脚は悩みません、すぐさま外しました。すると、妹は姉と同じ事を言いました——」

フ「だって……」

飛「責めないよ」

モノ「一人が笑い、もう一人は、何も解りませんでした。眼が覚めた飛脚は全てが終わった後の後です、身体は冷たく息も苦しい中抱き着いている妹の口を拭いてあげました——」

飛「俺の血だからな……」

モノ「眼を覚めたのは飛脚だけではありません。妹も眼を覚まし

た。意外にも恐怖したのは妹でした――」

飛「ここだけの話、あの時は結構傷ついたな。子供に嫌われるのは特に……」

紅「気持ちは解かるよん。ほら、左腕が無いから怖がれることがあつてねえ……」

オル「夢い幻想で良ければ回帰も良しとなるが？」

<左腕再生中>

紅「わお、凄いねえ」

<紅流歡喜中>

モノ「飛脚は知りました。妹が何者かも、何をされたかも。解った後に飛脚は妹を受け入れました――」

飛「俺とフランは似てるんだよ」

オル「確かに初期設定の時には気づかなかったが、読み返した時に確認できた」

飛「家族絡みの場合大体厄介な関係だろう？」

オル「私は言うこと叶わぬが、同意はしておく」

モノ「似たもの同士は惹かれ合い、想い合うようになりました」

紅「フラグをより深く立てたねえ」

オル「より目立つ柄にして…だ」

モノ「今宵のお話は【飛脚と吸血鬼の妹との出会いのお話】これにて閉幕と致します」

<～全員喝采中～>

オル「さて、ひとしきりおいたところでフランには退席願おうか」

フ「え？なん——」

飛紅「消えた!?!」

オル「これより行いたいことにフランドールが居ると支障が生じるでは、はじめよう」

飛「聞いていないぞ」

紅「右に同じさ、一言あっても良いんじゃないのかなあ？」

オル「ここよりは私の独断の話だ。閲覧いただいている皆様にも助力願いたい」

飛「アンケートか」

紅「そういうことということは…」

オル「言わずもがな。このような稚拙な小説よ、感想など来よう筈

も無い。ならばここで友人からの意見を評価といかせて貰おうか」
飛「で、どんな意見なんだ？」

オル「【飛脚師×東風谷 早苗or鈴仙 優雲華院 イナバor紅
美鈴or小悪魔】という結果が得られた」

紅「フランはどうなるのかなあ？」

オル「飛脚師は子供受けが良いから好かれるがLike以上にはならない、即ち数には含まれない」

フ「ソナコトナイヨネ？」

オル飛紅「空間破壊とくるか！？/フラン！？/あれえ！？」

フ「変な部屋に閉じ込めても……きゅっとしてどかんだよ？」

飛「オル、何処にフランを閉じ込めた？」

オル「五つ星ホテルのスイートルームだ。24時間ルームサービスは勿論、プールやジャグジー……は不要だが。居心地は良い筈だ」

飛「その五つ星ホテルのスイートルームが分からないが、そこから来ることは出来るのか？」

オル「不可にしてある筈だ。控室でもある故呼べは来るが、呼ばねば移動は不可だ」

紅「きゅっとしてどかんは空間も関係ないんだねえ……」

モノ「失礼ですが私をお忘れではありませんか？」

飛「そうだったな。他には何か話でもあるのか？」

モノ「要望にはお答え出来ません。一足先に舞台を降りさせて頂き
ましょう」

飛「消えた……」

オル「我等も含めてこの世に存在を許された者にあらず。意思では
決める術が無く、いずれは元の世に還る定めだ」

紅「それはそれとして、このまま続行かなあ？」

オル「無論…といきたいが、その前に要るはフランドールに対抗し
うる者だ」

紅「嫌だよね？」

オル「私とて御免被る…ならば、フランドールは飛脚師の膝の上で
寛いで過くつろごすように」

飛「俺の生命の保障はどうなる!？」

オル「ならば民主主義だ。私の意見に賛成ならば挙手により示せ」

紅「賛成だよん/さんせーい」

オル「決定だ」

紅「でもさ、話題は変えないとやばそうだよん？」

オル「それは承知の上よ。貴様に疑問はあるか？」

紅「じゃあ、オルの自己紹介でもどうかなあ？」

オル「……致し方無しか。よかるうて」

使用技

【言霊・斬】

【言霊・爆】

【言霊・壁】

【職神召喚・天照大神】
あまてらすおおみかみ

【職神召喚・イサナギノイザナミ】
ふつのみたま

【職神武装・布都御魂】
あめのおははり

【職神武装・天之尾羽張】
やたのかがみ

【職神武装・八咫鏡】
やさかにのまがたま

【職神武装・八尺瓊勾玉】
くさなぎのつるぎ

【職神武装・草薙剣】

容姿

黒短髪・黒目

格好

男性用ブレザー

たまに眼鏡Verに

装備品

職神札 x 7

言霊札 x 3

携帯電話

P O P

イヤホン

糖分

性格

飄々としていて気分屋

協調性

人により変動

紅「技はともかく、格好と装備品はあつてゐるねえ」

オル「するかどうかはいざ知らず、介入するだけの能力は入れた。後、作者は糖分が無いと死ぬ」

飛「過言や尾ひれがあるわけじゃなくなのか？」

オル「恥ずかしがらな。と、私のことなど意にかえず要は無し。番外編なのだから趣向をこらし、普段は不可と思えることをやってのけることこそ目的よ」

飛「確かにその部分は否定出来ないな。だが、ネタはあるのか？」

オル「苦しきはそこだろうて。なにかと訊かれるならば、何も無しだ」

紅「次回くらいには考えておかなきゃまずいよねえ」

オル「終始酷いものだが、今回は幕を閉じるか」

飛「じゃあ、俺達は還るんだな」

オル「すぐにでも召喚したいが…生憎様、私では力量が足りぬ。刻を置いてまた会おうぞ」

紅「またね〜」と、その前に、みんな〜」

全員「こんなにグダグダですが、これからも東方飛脚伝を宜しくお
願いします」

番外編・談話会2（後書き）

今回はなんといいですか、時間稼ぎのようなもので申し訳ありません。

前回でお氣に入りに登録されている方の為と書きましたが、本編は進むことなく半月を頂きます。

これは私事ですが、当初の更新量から比べれば飛躍的に少ないので一層頑張るつもりですので宜しく願います。

ちなみに私の口調についてはリアルな話、一貫性がないので今と才ルどちらの口調もしています。

格好はもう普段着といっても過言でない程その服です。
学生なので当然ですが…

次回はまともに書くつもりです。時たまこうものもいれたいですが。

それでは

決戦前に（前書き）

何とか三十日前に投稿できてよかった…危ういところだった…

今回の話では特に積極的に進むわけではありませんので前菜程度の
感じです。

（毎回そんな気もしますが…）

ではご覧ください。

決戦前に

S i d e c h a n g e < 飛脚師 >

「じゃあ、私は行くからあんたも気をつけなさいよ」

日も昇った辰の刻（午前十時）あたりにそう言い残してから霊夢は飛び立っていつてしまった。

さて、これからどうしたものか…もうこれ以上協力者は要らないだろう。他に何が出来てもない。

「もう食べられないって… z z z … z z z …」

萃香の世話を何かの中に入れておくか…それはさておき、一度戻ってみるのも一つの手だ。

身なりを整えて行李を背負う。此処から守矢神社に戻って——いや、その前に一度家に戻って剣を取るべきかも知れない。力か、速さか

…自分には迷う余地無く後者だ。

「じゃあな萃香。縁があつたらまた会おう」

寝ているので言っても自己満足にしかならないだろうが、一応言うてから博麗神社を後にする。

さて、このまま行けば半刻（約一時間）程で行けるが、その前になんとかなく紅魔館に行きたい。理由は全く分からないが、ふと思い立った時から脚が勝手に進んでしまうような感覚で紅魔館に走っている。道すがらなので気の赴くま^{おもむ}まに走っているが、誰かに背を押されながら走っているようなもので奇妙な感覚は拭えないが。

「飛脚師さ〜ん！」

何処からか馴染みのある声が聞こえた。とりあえず脚を停めて辺りを見渡すと大ちゃんが現れた。

「大ちゃんか。珍しいところに居るね」

今居る場所は別に開けている場所でもなければ、妖精が好んで来る場所でもない。林の中だ。

「ええ…ブレザーを着た男の人に【この辺で待て】と言われたので

待っていました」

「はあ…まあ、てきとうなところで止めれば良いと思うよ」

「丁度良い機会なので今止めます」

そう言うтусぐ近くまで飛んできた。

とりあえず大ちゃんと二人？で紅魔館を目指すことになった。何故が大ちゃんとは徒歩なので自分は走れない。別に構いはしないのだが、何がそうさせたのだろうか……

「しかし、大ちゃんは妖精にしては珍しいよね？」

「どこがですか？」

「その話し方だったり、風貌かな。俺——いや、人間にも近づけるし」

自分が知っている妖精の知識では、勝手気ままに行動して、いたずらが好きという感じなので正直大ちゃんが妖精とは思えない。

「この話し方は最初からです。風貌は…多分チルノちゃん達のせいです。人間には基本的に近づきません」

「それだったら、まるで俺が人間じゃないよう——だったな……」

つい最近知ったことだった。忘れたくてたまらないが、忘れたところで事実が変わるわけではないので諦めておこう。

「飛脚師さん？大丈夫ですか？」

「ああ、大ちゃんに言っていなかったけど、どうやら俺は半分だけ神らしい」

「え？」

きょとした表情が可愛らしいが、よく分かっていないらしい。

自分もよく分からないので当然といえば当然か…

「まあ…別に何かが変わったわけじゃないと思う。俺は一生の内に種が変わるなんて思いもよらなかったけど」

「飛脚師さんは飛脚師さんですよ」

「そう言ってくれるとありがたいよ」

正直何が変わったかは全く分からない。筋力が上がったわけでもなければ、神の何かが身に付いたとも思えない。

他愛のない話を続けながら歩いていると紅魔館に着いた。

「美鈴さん…通るな」

「zzzz…zzzz…」

もうこの門番は起きているときのほうが珍しい。と、そう思っ
てしまっ

「飛脚師さん、私はこの辺でお暇いとまします」

「そうか。じゃあ元気で」

「はい」

そう言うで大ちゃんは飛んでいってしまった。さて、何時ものこと
だが、紅魔館に來ると良い予感がしない。かといって悪い予感がす
るのでもなく、特に何も感じなくなる。

「お待ちしておりました。飛脚師様」

言葉よりも速く、音も無く、何処からか咲夜さんが現れた。

「待たせた記憶は無いですけど、スカーレット卿が？」

「はい。ご案内致します」

視界がぶれたと思った刹那、レミリアの部屋に來ていた。

「その節は感謝するわ飛脚師。そのお礼も兼ねて此処に來てもらっ
たのよ」

紅茶を啜りながら優雅に訊いてきた。

「そうか。確か運命を操れたな…」

「そうよ。それと、もう館ではスカーレット卿と呼ばないで」

「分かった。それで、何故俺を此処に呼んだんだ？」

「貴方にとって好ましくない運命が近づいているわ」

「運命に流されはしない。それに、運命が俺を選ぶんじゃない、俺
が運命を選んだ」

「貴方らしいわね。それと、フランにも会ってあげて」

フランか…正直怖いと思う。それが会わない材料にならないのが
現実なのだが。

「顔だけでも見せに行くよ」

そう言っ

屋敷内をてきとうに歩いているとこあさんに出会った。

「飛脚師さん。こんなところで会うなんて珍しいですね」

「そうですか？まあ、こあさんとは図書館内以外で会うこと自体が珍しいですけど」

「それじゃ、まるで私が図書館にしか居ないみたいじゃないですか。それと、私なんかにさんなんて要りませんよ」

「それでも、一目置いてますから。こあさん」

「そうですか…ちょっと嬉しいです。ちなみに今は何をされていますか？」

「フランに会いに行こうと思いつながら、少し散歩を」

「そうですか。でも、なるべく速めにしておくことをお勧めします」
確かにフランを待たせるのはあまり得策とはいえない。

「そうですね」

一息いれて集中する。フランの居る場所…：なんとなく道筋が分かった。

「そういえば、飛脚師さんに頼みたいことがあるとパチユリー様がおっしゃ仰っていましたから」

「用事が終われば行きます。それでは」

そう言つて臆気おぼろげな感覚を頼りに歩き出す。この感覚に従えば迷わないのだが、何時も使つたびに疑問を抱いてしまう。

数分経つ頃には部屋の前に着いた。以前と違うことは、【普通】の扉が目の前にあつて、恐らく【普通】の部屋が待っているのだろう。自分とは全く関係が無い筈なのに口元が緩んでしまう。とりあえず軽くノックをする。

「フラン、居るか？」

「飛脚師？入つて良いよ」

相変わらずの舌足らずだ。扉を開けると、フランがベッドから眠たそうに目を擦りながら起き上がっていた。そういえば、吸血鬼なのでこの時間は寝ていて当然か…

「起こしたみたいだな」

「いいの…でも、何で来たの？」

馬鹿正直にレミリアに頼まれたと言えば、フランは勿論、自分やレミリアにとっても良い結果になるとは思えない。

「来たかったからだな。嫌だったか？」

「うっん、違うの。飛脚師は好き。お姉さまと、咲夜と、美鈴位」言葉だけ受け取ればありがたいことだが、序列があまり判らない。

レミリアは勿論のこと、咲夜さんも大事な人…なのだろう。美鈴さん……大事なのだろう。

「ありがとな。俺には比べられる家族は居ないけど、好きだよ」

「うん」

とりあえずは機嫌も良さそうだ。

「そうか…じゃあ俺は行かせて貰うな」

「もう？」

「急ぐことで…ごめんな、勝手に来て勝手に帰って」

「違うの…飛脚師は何時も笑ってくれないから……」

笑わない…確かに自覚している限りでは、ここ最近どころか、あまり笑ったことは無い。どうしてだろうか、別に愉快なことが無いわけじゃない。毎朝来てくれる桜や人里の皆、楽しい思いなら少なからずしている筈だ。

「別に面白くないわけじゃないんだ。フランと話して居れば楽しいと思うし、俺もなんで笑わないのか改めて感じたくらいなんだ…」もし、もしかすれば、親のせいかも知れない。思い出したくもない、それに思い出せるほど鮮明ではない。しかし、何か^{たが}籬のようなものが詰まっている気がする。本当の名前も分らない今に何かしらの疑問があるのかも知れない。

「じゃあ、何時か私が笑わせてあげるね」

フランは日が昇る、花が咲く——そういった形容では言い表せない程の笑顔で約束してくれた。

「お礼に俺に出来ることがあったら何時でも頼んでくれ。絶対に断らないから」

「また…来てね」

「分かったよ。じゃあ、またな」

そう言つてフランの部屋を後にする。

「zzz…zzz…もう食べられませうん…」

この人（妖怪）は…咲夜さんが生温い人とは到底思えないが、なお居眠りをし続ける根性は脱帽すべきかも知れない。絶対にするつもりはないが。

とりあえず守矢神社に向かって走り出す。今は巳の刻（午前十二時）あたりか…半刻（約一時間）で十分に着けるだろう。

<飛脚師移動中>

「なー人間」

「どうした？」

「食べても——」

「良くないな。ついでに言つとこのまま何も言わずに去ってくれると、なお助かる」

「そーなのかー」

さつきから付いてくる妖怪…全力で走り続けているというのに引き離せない。名前はルーミアというらしい。この前も襲われた気がするが、本人——妖怪から聞くに、一度退治されたから簡単に襲い掛かりはしないらしい。もう襲わないでくれるのが一番得策だと思うのだが…

「なんとなく美味しそうだから食べたいぞー」

「その風貌で神殺しは感心出来ないな。まあ、何にせよ殺すこと自体が感心出来ないがな」

「そーなのかー」

論争という言葉を知っているのだろうか…まあ、知ったところで意味は無いが。

「独り者なら、たまに俺の家に来れば飯位なら振舞うぞ。大喰らい

って訳でもないんだろう？」

「そーするかー」

そう言うところミアは何処かへ飛んで行ってしまった。見た目は可愛い子供のような感じなのだが、どうしても親近感が持てない。当然なのだろうが。しかし、

「俺の家、知らないよな……」

知っていても容易に近づくことは出来ない筈で、ついでに言えば誰も居ないので何も出来ない筈だ。最悪警戒中の天狗に襲われるだろう。

変に心配をしていると守矢神社への石段の前に来ていた。丁度整理がつくのでこの石段は便利だな。そんなことを考えるのは自分だけだろうが。

登りきって境内を見回すが、誰も居ない。しかし、何かの音が聞こえるので誰か、しかも複数人の人（それ以外も）が居るのは確かだ。

「紅流？早苗？」

それ以外（主に神）は信頼できない。二人のうち一人でも出てきてくれれば楽なのだが、そんな気配は感じないので裏にまわって勝手に入る。

「お、飛脚師。やっと来たみたいだな」

翔太… やつと言うことはそれ以前から来ていたようだ。自分は遅れたのだろうか。だが、別に自分は数に入っていないはずなので構わないか。

「ああ。それにしてもその格好だと随分と印象が変わるな」

人里で会った時は一般的な服を着ていたのだが、今では見たことがない洋服に変わっていた。

「まあ、そうだな… 戦闘服だから印象も変わると思う。でもこっちの方が俺にとっては当たり前だった服だからな」

「そうなのか。ちなみにこれ以上集まることはあるのか？」

「ないだろうな。これ以上居たら逆に面倒だ。まあ、立ち話もなんだし、居間に行っていてくれ」

確かに立つた二人で、しかも入ってすぐの廊下で話しこんでも意味は無いだろう。

「分かった」

そう言つて翔太と別れてから居間を目指す。なんとなく進んで行く
とそれらしいところにたどり着いた。

「お、飛脚屋。おはようさん」

「そうだな。紅流…」

訂正するのも無意味に思えてきた。

「あんたが飛脚師か。噂には聞いている」

ロングコートを来た青年が話しかけてきた。しかし、自分に何かし
らの噂があるのか…

「噂があるのか…まあ、名乗る必要は無さそうだな」

「敵意は向けないでくれよ、俺は秋山典広だ。別に敬称は要らない。
大道芸人をやつてはいるが、今は此処に居る」

「紅流が人選を間違つたとは思えない。紅流が間違えるのは俺の名
前くらいだ」

「それは心外だねえ。愛称のようなものと受け取つて欲しいよん」
「勘違いされやすいんだよ。名前と似てるから…」

「じゃあこの際名前決めちゃう？」

「いや、最近になつて定着してきた名前を変えないでくれ」

「そう？」

「そうだ。ちなみにいつ出るんだ？」

「今夜…かなあ。さくつとやつちゃうから気にしないでいいよん」

「俺にもその位の力があればな…」

「力は所詮力でしかないよん」

「無い者にとつては是が非でも手にしたいものなんだ」

「力よりも知恵だと思つけどねえ…」

「確かに。間違いではないと思つが、それでも…」

「何を投げ打つても欲しいものならあるけどねえ」

その一言はいつも飄々としている紅流からは予想外な程暗く感じた。

何がそこまでさせているのか…知る由も無いが、他人事と流すこと
もしたくない。

「何か手伝えたら、言ってくれ」

「それは嬉しいねえ」

「お兄ちゃん誰？」

突然後ろから声がした！？

「輝符——女の子？」

姿が見えた刹那…消えた。一体なんなんだ…

「怖いよ典君」

「秋山、その子は一体何者なんだ？」

今度はその女の子が秋山のロングコートの後ろにしがみつくように
して現れた…

「俺の連れだ。手荒に扱うなよ」

「それは悪かった。ごめんよ、君」

「私、こいし…お兄ちゃんはだあれ？」

「俺は飛脚師。もし、誰かに想いを届けたかったら俺に頼んでくれ」
「うん？」

よく分からない返事だが、さっきの不安感はぬぐえたようだ。ただ、
近くには来てくれないので完全ではないのだろう。

「とりあえず、飛脚屋には悪いけどねえ…こいしちゃんや神奈ちゃ
んの相手をしてもらうよん？」

「??」

一体どういうことだ。何の脈絡も無しにとんでもない発言をするの
は紅流の十八番だが、今それを言わなくてもいいんじゃないだろう
か…

「いや、ねえ…飛脚屋は基本的に戦えないじゃないか。だからこい
しちゃん達の面倒を見てほしいんだよん」

「まあ…定石とも言えるが、この信頼性のない時に言うことでもな
いだろう」

「それはそうんだけどねえ…でもこいしちゃんもそんなに怖がつ

てないみたいだし、ね？」

「うん…でも、なんだか近づきたくない」

この言葉は心にくるものがある。純粹そんな子供に嫌われるというのはかなり痛い。

「そうか…無理しない程度に離れていれば良いよ…」

「それは飛脚屋が神様に近いからだと思うよん。勿論近づきたくなる奴も居ると思うよん」

変な効能もあったものだ。しかし、それが真実なら文や椋さん達はどうなるのか…

「俺自身が俺自身に詳しくないからな。何とかしていこうとは思っ半分神になった。深く受け止めていなかった…」

「まあ、今のところ半分だから影響も半分だろうねえ…」

「そう考えると俺はなんとも中途半端な存在だな」

「もしかしたら飛脚屋ってまだ繭まゆの状態だったりしてねえ」

つまり、これ以上…神になるということか…どうしようもないならばともかく、選択できるのなら嫌だ。

「笑えないな。神になったところで何が出来るわけでもない」

「そう言えば飛脚屋はスペルカードを持っているんだろう？」

「ああ。輝符・煌・キラメキだ。特に攻撃性能があるわけじゃない」

「進化してるかも知れないよん？」

「そうだとすると何も兆候がない。あれが使えるようになった時は俺の中で何かが光った気がしたんだ」

それが右手に集まって撃ち放ったものが輝符・煌・キラメキだ。今のところそんな気はしないので何がどうというわけではないだろう。

「そう…かあ。飛脚屋、俺の御霊煌を持ってスペルカードを使ってみなよ」

そう言っって紅流は剣の柄を投げてきた。受け取って力を込めてみる。「これは霊力で作動する剣だと思うがな…輝符・煌・キラメキ…」

剣から出た光は何度も見た奔流ではなく、光の直剣が出来た。

「見事だねえ…」

「紅流のものよりスマートに見えるな。Nice, sense」

しかし、数秒程で刀身に輝が入り砕け散ってしまった。硬度を確かめることも出来なければ、実践に使えるものでもない。

「でも、所詮こんなものか…」

御霊煌を返す。こんな剣がこの世に二本も存在する筈は無いだろう。

「俺みたいに持続的に力を出せるなら話は別なんだろうけどねえ」

「制御なんてしたことがないからな。不完全でも神通力が使えるかも知れない」

「俺と違って態々変換する必要が無いからねえ」

「少し気になっていたが、紅流が持つているのは霊力じゃないのか？」

「ちよつと違うんだよん。俺が持つているのは【気】さ。修行して変換できるようになっただけ」

「それなら妖力や神力にも変換できるんじゃないのか？」

「一番人に近い力が霊力。それ以外はよっぽどの才能を持つてる人間じゃないとねえ」

「天才のあんたが言えることじゃないよ、つと。さて、そろそろ頃合さ」

神奈子が入ってきた。どうやらもう行く時間なのだろうか…

「へえ…もう夕飯時かあ。今日はなんなのかなあ？」

「どうやら違うらしい。申の刻（午後六時）なので夕餉時か…」

「翔太と早苗が作っているよ」

「それはそれは。今回も楽しみだねえ」

「昨日も食べたけど中々の味だったね」

翔太の料理は一目置ける味なので紅流の気持ちは解かる。

「話し中のところ悪いが神奈子、ちよつと神力の使い方を教えてくれないか？」

「飛脚師じゃないかい。神力の使い方…：生来神力を持つ私と後天

で神力を持った飛脚師じゃ難しさの度合いが違うよ」

確かに元々持っている神奈子にとっては呼吸のような容易さなのだろうが、自分は力を数秒放つことしか出来ない。慣れ親しんでいない能力が成長する筈もない。

「それもそうだな。ちなみに俺の神力はどの位のものなんだ？」

「そうだね…今感じたあたりでは、私の百分の一位かね」

半神といっても本物の神とはかなりの差があるようだ。

「それならキラメキも一回しか撃てないわけだ。ただ、神奈子が百回撃てるわけじゃないと思うが」

「まだそんなに信仰があるわけじゃないからね。それはケロ子も一緒だし、飛脚をやり続けるなら間違いなく信仰は集まる筈さ」

「なるほど…じゃあ俺は間違いなく神になるだろうな」

飛脚を辞めるつもりは毛頭無い。それに飛脚以外の何が出来るわけでもない。

「嫌かい？」

「心変わりかな、まんざらでもないと思うようになってきた」

「人生は一回きりなんだから何でもやった方が得さね」

「まったくだと思う」

もし、自分が神になって何か掴めるようならもつと踏み出してみようと思う。

「あ、そうだ。ちょこっと用事を思い出したから出かけるねえ」
飄々とそう言うのと紅流は部屋を出てしまった。

「落ち着きの無い奴だな」

「それがあいつの十八番さ」

「否定する要素が無いな」

「神奈子、ちょっと一部屋借りる」

「どうしたのさ？」

「銃を整備しておきたい。ついでにこいしを見ていてくれ、来られたら色々大変だ」

「そうかい…まあ、自由に使いなよ。譲ちゃんの面倒も引き受ける

よ、おいで」

「はい、神奈子おば——」

「讓ちゃん？」

「——お姉ちゃん……」

なんだろう。一瞬空気が凍りついたような気がする。しかし、此処で下手に何か発言しようものならただでは済まない気がするので語りではなく、聴きに徹していよう。

決戦前に（後書き）

今回はいかがでしたか？

私自身は糖分がないと最悪死んでしまうので糖分補給できる方の小説が好物ですので（そういう意味でもありませんが）今回自己生産したつもりです。

今回は普通に進めるつもりです。

これ以下は引き続きアンケートの部分です。

・飛脚師の真名について

私自身も考えたことはありませんが、友人から指摘されましたのでこんな名前だったらいいなというものがありましたら感想にでもお願いします。

・飛脚師の伴侶について

初回からフランフラグを建てて放置したと後悔している所存です。ですが、今のところ大して進行もしていないのでこの人物なら飛脚師の嫁にしても良いだろう（これが一番の難関と思っています）というキャラクターを感想に添えていただきたいです。

：注意：【藤原 妹紅】【上白沢 慧音】【古明地 こいし】は私情により除外させていただきます。

・飛脚師の新しいスペルカードについて

これに関しては案が無いこともないのですが、一応アンケートをとってみようと思います。

・東方飛脚伝とのコラボについて

色々な小説で。。。×。。。というようにに憧れている私なのです

が、飛脚師を使う、ないしはこのキャラと組みせたいと思う方がもし居ましたら感想の方に一文をお願いします。

ただ、東方project関係の二次創作で飛脚師を入れて役に立つということはあまりないと思います。

決…戦？（前書き）

若干遅くなりました。申し訳もありません…

本当なら土曜日に更新する予定でいたところをカラオケ（ry

日曜日は体がだるく（ry

今回は微妙にグロいのがありますので注意書きをしておきます。
では、ご覧ください。

決…戦？

Side - change <紅流>

おかしな気配がする。人でも妖あやしでもない。かなり異質な気配が近づいてくる。

「さて…と——」

あつて欲しい、過ぎて欲しくない、そんな時間程すぐに無くなっていくものだ…しかし、そんなことでは未来はつかめない。

「出てきたらどうかなあ？」

「隠れたつもりはないが、警戒されるとは思った」

夜空の様な黒髪にそれと同じ位黒いコート…異常に整った顔立ち、身長は高いほうか…歳は二十歳辺りか…

「まあ、石段を登ってきてくれた位だしねえ。俺は紅流紅兵、君っ

て【何】かなあ？」

「逆騎さかき 離狗りく、人間だ」

「へえ…それで、何でこんなところに？」

「妖怪を処理する為だ。紅流紅兵、見たところ人間だろう」

「生まれもつての人間だよん」

「しかし、この奥に妖怪が居るだろう」

飛脚師は勿論、もこたんも違う。翔太とスタイリッシュも違うだろう。だとするとこいしちゃんのことだろう。

「まあ…ねえ。でも、妖怪なら殺すつて言うのかなあ？」

「この近辺の妖怪を殲滅するのが私の受けた依頼だ。善悪は関係ない」

「そんな依頼をする人間つてまだ居たんだねえ…じゃあ離狗は情けも無しに殺すのかなあ？」

「依頼はこの近辺だ。話が分かる妖怪には近づかないように伝えるが、それ以外は殲滅する」

妖怪を倒していたのは離狗だったのか…確かに身体に纏う覇気は尋

常ではない。

「冷酷非道な殺し屋ってわけじゃないならその依頼主を替えてくれないかなあ？」

「替えたところで内容は違たがわないだろうな」

「妖怪なら殺すって考えの奴に良い奴は居ないよん。そんなところの傀儡かいらいになるならこっちに來ることをお勧めするよん」

「そうかも知れないな。その前に…」

ちら、と視線で後ろを指した。

「ああ…そういうことかあ」

「「出てきなよん／姿を見せろ」」

「あつれゝ？バレっちゃった？」

「そんなに気配全開にしているからだ！」

「あだっ！？手ひどいな妹紅」

緊張感の欠片もなく翔太と妹紅が出てきた。スタイリッシュはどうしたのか…あいつが一番先に勘付くとふんだのだが…

「白髪の少女…不滅の人間とは君のことか？」

「誰かは知らないが…そうだ。それがどうした？」

「この里近辺から去れ。出来ないようなら斬り棄てる」

「断る。言われることは慣れている。言った奴も知っている。それ

に私は不め——」

ふしまちつき
「臥待月」

刹那の間に自分を越えてもこたんの目の前まで移動していた。さっきまで居たところの地面が抉れているのを見るに縮地のようなものを使ったとしか思えない。

「「な！？／妹紅！」」

「今度は訊く。去るか？」

「愚問だな。そんなこけおどしで屈する程——」

せんげつ
「纖月」

異常な速度の抜き手が襲う。自分の位置からでは走っても間に合わない…

「甘いな。俺が妹紅の味方だ…腕が斬れても文句無しだぜ！」

翔太が赤と黒を混ぜたような刀身の刀でいなしていた。飛脚屋の目は確かだったようだ。

「そうか。人を傷つけるつもりは無いが、故意で邪魔をするのなら話は別だ」

「恋で邪魔をするだって…その通りだ。俺は、妹紅が——」
たちまちつき
「立待月」

翔太が言葉を言い切る前に上段の回し蹴りが襲った。

「うがつ!？」

まともに回し蹴りを受けて吹き飛ばされた。翔太は決して軽いわけではない、それなのに吹き飛ばということは相当な脚力…縮地が出るなら当然か…

「翔太！」

「後戻りは出来ないぞ。織——」

「遅い、御霊煌・斬」

もこたんを突き飛ばして間に入り、霊力を御霊煌に注ぎ、斬り掛かる。

「新月」

威嚇ではなく、倒すための一振りが右手だけで止められて、掴まれた。

「止められちゃったかあ…」

何故斬れない…刀身が当たって切れないものはある。しかし、それは厚い金属や岩の話、相手が身に着けているのはそんな鎧ではなく、ただの手袋のようなもの…こんなことは初めてだ。

「おっさん、ちょっと本気でいくぜ！」

翔太がさっきの縮地並みの速度で斬り掛かる…あの刀は相当な業物の筈、斬れるなら幸いだが…

「新月、織月」

翔太の刀は離狗の左手が受け流して、勢いそのまま進みすぎた手首に掌底が当たった。

「いつ…」

手首を傷めたらしく刀を離してしまった。離狗の手が伸びる前に刀を引き寄せ――

「実体剣か…もう手加減はしない、小望月^{こもちづき}」

それよりも速く刀を掴まれた…刀が翔太に――

「させるか…く…あああっ！」

翔太を突き飛ばしたもこたんの右腕が…地に落ちた。

「四肢は落とす…喉も潰す」

その言葉を発した刹那、刀が振られ…残った手足が身体から離れ、残った身体は重力で地面に落ちるよりも先に首に刀を突きたてられて、空中に留められた。

「妹紅おお!!」

「俺が甘かったみたいだねえ…御霊煌・開放斬！」

一旦霊力をうちきつて、本気の霊力を込め、巨大な光の剣で斬り掛かる…

「滅符・虚無回帰・リバース・エンド」

離狗の身体に当たる手前で刀身が霧散してしまった!?

「てめええ！」

翔太が飛びかかっていく…離狗の左手は塞がっている。なら俺のすることは…

「鉄拳！」

左手で離狗に殴り掛かる…実体を持たない剣が消えたなら御霊煌で攻めるのは良いと思えない。

「新月…その拳は効くな」

自分の拳は受け止められ、すぐ後に翔太の拳が離狗の腹部へ的確に叩き込まれた。

「俺の拳も効くだろうよ！」

「そう…だな」

離狗の身体が微かに浮いた。威力は申し分ないのだろう。

その僅かな間に翔太は刺されたままのもこたんを引き抜いた。その

隙が続いていたので左手で翔太の刀を掴んで引つ張り、奪い取った。

「形勢は…悪いけど、ここから反すよん…」

「そうか…かえて槭、桜」

コートをずらし、腰から筒のような物を取り出した。あれは一体…次の瞬間筒の先から光が伸びて光の剣になった。

「!？」

解からない。離狗からは靈力や妖力は感じられない…それなのに何故実体を持たない光が形を保って剣になっている…自分はいくまでも変換した靈力を送るだけ、それだからこそ靈力を感じ取れる。しかし、向こうは何かの力は感じられない。

「満月」

離狗の剣が消え——違う…

「翔太、刀を——な!？」

翔太に向かつて刀を投げた瞬間刃が襲い、左の肩への攻撃は何とか左腕で受けられた。右肩はかるうじて右に一步下がり、切断にはならなかったが、少し深い…久しぶりに感じる熱さ…あふれ出てくる自分の血液が服を濡らしていく。

痛い…

「よく避けた…」

「まあ…ねえ…とりあえず、拙ますいまま、だねえ」

「人と言葉で従う妖怪は見逃したい。屈せ」

ここで膝を折れば、言葉通り自分はこれ以上の被害を受けることはないだろう。たかだか知り合いなのだからと見限れば楽にはなれるだろう。昔はそれが出来なくて腕を失った…今回も前と同じ、何の犠牲もなく帰れるとは思えない。しかし、

「ごめんねえ…俺は中々前に進めない人間で…まだ子供なのさあ!

御霊煌・斬」

右腕は痛みで感覚が無い。その状態で剣を握っても打ち合いに持ち込まれれば抛ほうってしまうのは必至…左手に持って斬りかかる。

双剣使いは右を狙っても左を狙っても防いで残りの剣で斬られる。

そして肩の傷は片腕の力と侮れる程の威力ではない。ならば…剣技最速の突きだ。

「十六夜——」

刀身が胸元まで及んだ頃合を見計らって双剣を交差させて受け、右腕を落とし、誘導するように左の剣で上手くずらす。拙い、今あるのは生身で、かつ、不完全にしか機能しない右腕…絶好の的だ…両足に力を込めて、後ろに跳び、最速で飛ぶ…

「——満月」

両の剣が…避けきれない…両腕を落とそうとしているのは明白なので腕を引き、身体を反らせる。

「うぐあ…ああ…」

酷い痛みと異常な体勢で飛行したことで地面に叩き着けられながら転げ回った。

胸を横斜めに一撃、軸足の左腿ももに一撃…これでは踏み込むことが出来ない…それどころか歩くことも難しいだろう。全力を掛けて出来たのは後遺症が残らない程度の傷に留められただけ…格の差なんて言葉で一蹴出来るものではない。

「リザレクション！」

喉を貫かれた筈のもこたんの声がした…もう再生出来るなんて羨ましい限りだ。

「本気で、あんたを…叩き斬る！」

誰の血かは定かではないが、全身に血を浴びた翔太が激昂している。もこたんに敗北（死）はないが、翔太は…しかし、身に纏う覇気が桁違いに上がっている。この二人なら…

「すみません、遅くなりました／皆さん遅くなりました」

上空から臨戦体勢のさなちゃんと妖夢ちゃんが降りてきた。良い状況になってきた…

「紅流！」

「飛脚屋！？」

突然後ろから飛脚屋の声がした。これだけ派手にやっければ気づく

のは当たり前か…しかし、飛脚屋には何も出来ない…

「何で来たの——」

「話は今度だ。受け取れ…輝符・煌・キラメキ——」

自分に向かつて光が一筋差し込む…その瞬間から身体中が軽くなって、痛みも引いた。流血も止まっている…暖かい布に包まれているようだ…

「じゃあな！」

そう言つて飛脚屋はとんでもない速さで走り去つて行つた。本当に逃げ足が速かつたのか…

「五対一だ。ただで済むと思うなよ！」

翔太の言葉に今味方になつている全員が賛同している。士気は限りなく高いだろう。

「No six…You lose. Do you understand it (いや、六だ。お前は負ける。解かるな)?」

丁度離狗から死角になる位置にスタイリッシュが長銃を両手に持っている。いつでも撃鉄は引けるのだろう。

「銃使い…It is mistake. (それは間違いだ。) 不動・超重円掛・グラビティ・サークル」

離狗が言葉を発した瞬間から異常なまでに身体が重くなつた。足だけでは支えきれない程の強力な何かがまるで錘おもりのようにのしかかってくる…それは自分だけではなく、この場にいる全員が苦しそうに…翔太とスタイリッシュ以外は膝を折つてやつと身体を支えている状態だ。

「Exciting…skill. (刺激的な技だ。) But (だが、) Hand-gun……」

スタイリッシュが着ているロングコートを脱いで離狗に肉迫する…普段どんなことをしていたらこの重さの中動けるのか…

「この程度で…本気の俺を縛つたつもりか！」

翔太も走り出している…一体どれだけの身体能力を持っているのだろうか…

「俺だけが… いかないわけには… いかないよねえ！」

堪える足に鞭を打って走り出す。今度は両手で御霊煌を持っている。押し負けることはない筈だ…

「量り間違ったのは私のようだな… 神技・鏡花水月…」

その言葉を発した途端に離狗の眼が黄金に光りだした。そして、ゆつくりと自分達の方に歩み寄ってくる… 今までの戦い方からしてこけおどしで光っている眼ではないのだろう…

「そんなこけおどしで… 怯むわけないだろうが！」

翔太に退く気は無いようだ。勿論スタイリッシュや自分にも無い。自分達は徐々に迫っていく。離狗は二者を確実に止められるだろう。しかし、三角形に囲った今の状況では無傷で済みはしない筈… 届いた…

「「御霊煌・開放斬！／羅刹一閃！」」

「いまちつき
居待月」

一瞬のことだった。

自分の霊力を殆ど注ぎ込んで創った刀身が砕け散った。

翔太が本気で握り締めていた刀が宙を舞った。

スタイリッシュは離狗が振り向いた刹那の間にバク宙で避けようとした。この判断は賢明だろう。しかし、普段と違う何かの力で上手く着地出来ていなかった。その状態で斬られれば致命傷は避けられない…

「鉄拳！」

霊力はさほど残っていない。刀身を創って振り上げる時間は無い。

左手で殴りかかる… その瞬間離狗は自分の方を振り向いた。

「とおかんや
十日夜の月」

狙われたのは… 俺の腕。かなり丈夫な金属で出来ている筈なのに、溶岩に浸けでもしない限り破損はしない筈なのに、人間の力では軋みもしない筈なのに、前腕部から先の金属部分は脆い硝子を割るように、温められた氷が融けるように、いとも簡単に歪み、砕け散った。

「俺の…腕が……」

「your arm——（お前の腕も——）」

「ゲイ・ボルグ」

背を向けたままスタイリッシュに手のひらを向け、そこから雷を放った。

「ぐあああ!？」

まだ力の底を見せていなかったのか…

身体にのしかかる重さで動けない。ただでさえ重症なのに鞭を打って動いたツケが回ってきたか…離狗は一切の負担を感じさせないような足取りで歩き、もこたんの目の前に行った。

「伝える言葉はあるか」

「無い……」

「そうか——」

離狗の手には輝く光の剣が二振り、もこたんはまともに動けない…

詰まれたか……

みそか

「三十日——」

「そこまでよ」

離狗の行動を遮るかのように不気味な空間から眼前に現れ、言葉を塞ぎ、異常な妖力で手を止めさせた。

紫を基調とした白いドレスと帽子を被った長い金の髪の女性。人間ではないのは明白、普通の人外でないのも明白。ならば何故此処に…

「妖怪だな」

「ええ♪貴方は人間のようね」

「ああ、人間だ。此処に来た目的は？」

「貴方がしたことはとんでもない間違いよ。ちなみに私から神隠ししてこんなに予定が狂わされたことは初めてだわ」

「そうか…ならば私を元の世に帰せ」

「そうしたいのは山々なんだけど、まずはこの空間を何とかしてくれないかしら」

「それならば私の間違いを説明しろ」

「正確にいうなら貴方は間違えていないわ。貴方を間違えさせた人間が居るのよ。徹底した妖怪撤廃主義者がね…」

「偏った知識を植えつけて私の力を利用し、自らの理想を完遂させる——そういうことか」

「貴方の思考には一目おくわ」

「そうか…」

その言葉の直後から急激に身体が軽くなった。あの何かはもうないらしい。

「ちなみに…貴方に依頼した人間はもう居ないわ」

「始末されたのは私の側の人間。余す私を始末するか？」

「いえ。貴方にはこの幻想郷で過ごして貰うわ」

「私を生かして益になることはないぞ」

「じゃあ…今度こそ味方に…ならないかなあ？」

「そうね。彼の言う通りにしてみるのはどうかしら？」

「……今更手を取り合えるとは思わない」

確かに一方的に、圧倒的に力を振るってそんな相手と結託できると訊かれれば大多数の人間が否というだろう。提案した自分自身もいまだに友好関係になれるか不安がある。しかし、

「俺には…まだ取り合う為の手が残ってるよん。踏み出す足も、差し伸べる意思もおまけしちゃうよん」

軽くなったか元に戻ったのかは定かではないが、負担はなくなっているのに離狗に歩み寄る。

「その手を取って、引きずり込むかも知れない」

確かに、自分一人が許してもそれ以外がそうなるとは限らない。もこたんとか、酷いやられようだったな…

「手を引かれても俺は残った足で踏ん張るだけ。逆にこっちに引きずり込むよん」

左手は無い上に回線や金属片が飛び出していて色々拙い。右手をさし出す。

離狗は光の剣を収めて放り投げた。

「その前に詫びておきたい。この場の全ての者に、理不尽な苦痛を与えて済まなかった」

その言葉と共に地面に膝を折り、手について頭を下げた。

「……」

「その、逆騎離狗だったか…私は構わない。利用されていたならお前を責めてもどうしようもない」

「俺も…別に、妹紅が良いなら咎めない！」

「私は特に何かされたわけではないので…」

「同じく右に賛同します。それに何事も咎めれば良いというわけでもありませんので」

「Please relax.（気楽にしてくれ）全員に分かるように言う。俺は問題ない。咎めない」

スタイリッシュ…軽く痙攣しながらその言葉を言っても説得力に欠ける。しかしその中でも言葉はスタイリッシュだ…

「その上で、済まなかった…」

「もう、いいよん。それより、言葉より形で示してもらいたいんだけどねえ？」

「済まないが、その手は握れない」

「そんなこと言わずにさあ……」

そう言つて無理矢理に離狗の手を掴む……

ふと眼を開けて最初に見たものは守矢神社の天井だった。

「???これは、夢？」

しかし、左手の感覚が無い。義手になってからは感覚が無いが、動かす感覚はあるのでそれが無いということは……やはり左腕は無かった。

「コウ？」

横から声がした…

「ケロケロ…久しぶりだねえ。神奈ちゃんはどうでもないけどねえ」

「え、何のこと？」

「出ば——いや、こつちの話だよん。此処がどこかは何となく分かるんだけど、何があったのかなあ？」

「それについては離狗の方から言ってもらおうかい。頼んだよ」

「ああ。まず私の能力について言わなければいけない。私の能力は

【理力を操る程度の能力】【雷いかずちを操る程度の能力】だ」

まず、どちらも【程度】じゃないと思う。常軌を逸している能力じゃないか…しかも二つ…

「まあ…そう…ちなみに俺は無能力だよん…」

「その雷というのは私の身体を常人の何倍もの値で廻めぐっている。強化された直後の私に触れると感電してしまう。紅流、君はそれで感電、気絶して今に至るわけだ」

で、あんまり記憶が無いわけか…これからはよく気をつけよう。

「ちなみになんだけど、理力って何かなあ？」

「理力とは全ての力だ。必然の力も人為的な力でも私は全ての力を操れる」

「そこで質問なんだけど、離狗の剣って理力を注いで剣にしているのかなあ？」

「いや、高濃度の光に能力で質量を与えて硬質化させているだけだ」

「なら、あの時の異様な重さってなんなのかなあ？」

「それは私が持つ技で、指定した範囲内に約三倍の重力を掛けただけだ」

それであそこまで動くことが出来なかったわけか…しかし、本当に離狗は人間なのか気になってくる。戦っていた時に自分達の剣を軽く捌いていたが、片手で流せるような斬り方をしていたわけではない。味方になっっている今そこまで気にすることでもないだろうが…

「まあ…とりあえず、一件落着。つとねえ」

「馬鹿を言っんじゃないよ。片手落として何が落着だい……」

「大丈夫。昔落としてきたから」

まさか義手になってから落とすとは思ってもみなかったが、これは

義手を新調するいい機会かも知れない。

「だからって……どうせ聴きやしないんだろうけど、これだけは言っておく……裏切るんじゃないよ」

誰かに想われるのは悪いものではないが、守れる自信がないので苦しい……しかし、

「俺は人間、儚い現にやるだけやって朽ちるのみ……さ」

自分は妖怪でも魔法使いでもましてや神でもない。どうしても短い命を歩むことになるのなら急ぐ位でないと……

「でも……コウ、無い腕はどうするの？」

「そんなに心配しなくても、また作ってもらうよん」

幸い根元の接続部分は無傷なので上着を脱いで使えない根元の部分を取り外しにかかる。

「ちょ……コウノノ」

ケロケロは顔を真っ赤にして出て行った。自分の身体を見て出て行かれるのは微妙な気分だ。

「それは……どうなってるのか私にはさっぱりだよ」

動く義手の仕組みは自分もよく分からないが、神でも分からないとなればにとりんは神を超えたのか？

「俺の知り合いが作ってくれたんだけど、今度はもつと頑丈なやつを頼もうかな」

「私に協力できることがあればなんでもするが……」

「そう言ってくれるのは嬉しいんだけどねえ……俺は製作過程を知らないからどうしようもないんだ」

「そうか……出来ることがあれば何でもいつて欲しい」

「ありがたく覚えとくよん……取れた♪」

取った部分は一応ポケットに入れておく。接続部分から腕に掛けている金属部分には神経が通っているので取る瞬間は微妙に痛かったが、たいした痛みでもない。

「腕に金属が入っているのかい？」

「神経と繋がないと動かせなかったからねえ」

「随分グロテスクだけどね。ケロ子も見なくて正解かもね」

それには賛成したい。自分でも見ていて気分が悪いのでさっさと服を着る。

「ようは慣れらしいんだけどねえ…まあ、腕が戻ったのに文句なんか無いけどねえ」

「そういうところで人間は不便だね」

「神奈ちゃんも大変なことはある筈だよ。多いか少ないかだけ」

「達者な男だねえ…まあ、天才のあんたには普通なのかね？」

「俺は完璧じゃないからねえ。ちなみに飛脚屋達は？」

「今は晩酌でもしてるんじゃないかと思うけど、行くのかい？」

「勿論」

「まったく…あんたって奴は…」

若干呆れ顔の神奈ちゃんを通り過ぎて皆のいる部屋に行く。

「やつほう皆」

ふすまを開けて右手をひらひら動かしながら席につく。

「紅流！？もう動いていいのか？」

全員驚いているようで面白い気分だ。特に飛脚屋は人一倍驚いていて見ていて面白い。

「もう平気だよ。飛脚屋の技があったからこそだけど」

「運が良かったとしかいいようがないがな。四半刻（約三十分）もおかずに二回目が出来るとは…」

「誰か飛脚師に相当な信仰を与えたとかかなあ？」

神が力を増すには信仰を集めて神力とするしかない。信仰を集める方法は神によって様々だが、数日で限界値が伸びる程の信仰を誰が与えるというのか…

「いや、俺には信仰がどうかというのはさっぱり分からない。ただ、なんとなく出来そうだったからしただけなんだ」

成長を感じることができるといふことなのか…

「その調子で神になっちゃいなよん」

「それもまた一興だけど、まずは仕事だな」

「飛脚屋らしいねえ。でも別に蓄えがないわけじゃないんだよねえ？」

「一応…きちんと数えたことはないがな。二、三年は問題ないくらいの量はある筈だ」

「凄いいねえ…」

「金を使うことが少ないからその分貯まっていくな。追加報酬の方が報酬に近い」

「それには俺も同感できるかもねえ…」

報酬の金子きんすより追加で貰った食品や道具の方がよっぽど有意義なものだったりする。

「そうだ。飛脚屋は妖怪の山周辺に住んでるよねえ？」

「周辺…まあ、そうだが。それがどうした？」

「ちよつと依頼があるかも知れないから、先に言っておこうと思つてねえ」

「そうか…腕か？」

「まあ、ねえ。暫くは休業かなあ…といっても大した依頼なんか来ないんだけどねえ」

来る依頼は別に自分に頼まなくても出来るようなことなので断ればいいだけの話。それでもいうのなら完璧に出来ないことを言っただけならやればいい。

「これで面子は揃ったみたいだね」

神奈ちゃんが離狗と共に一升瓶を両手に持って入ってきた。

「宴会でもするのかなあ？」

「離狗の歓迎会だよ。結果的に人里の方の問題とこつち側の問題を解決してくれたのさ」

「確かに妖怪は殲滅した。しかし、人間の方は八雲紫が済ませた」

「私だけが済ませたわけではないけど…きっかけを作ってくれたのは事実よ」

「そう言えば俺も誘われたことがあったからねえ。反吐が出るよう

な言い分だったから断ったけどねえ」

確かにそんな奴らが居た。妖怪は悪で自分達は善と言い張って、その上で高圧的に力を貸すように命令してくるので二つ返事で断った思い出がある。

「俺もあつたな…その後ケツに弾をぶち込んだが」

「こつちに來てすぐ言われた気がする」

スタイリッシュと翔太も思い当たる節があるようだ…

「飛脚屋以外は声を掛けられたんだねえ」

「俺を使っても妖怪は倒せないからな」

「サポートは上手いと思うが…俺の銃を使ってみるか？」

「使っても大して神力が無いから持ち腐れになるだけだろう」

「そうか？」

「秋山の魔力程の神力があれば話は別なんだがな…」

「別に高い魔力を持っていることが戦いに勝つための絶対条件ではないだろう」

「俺もそれに賛成だ」

「皆さま、もう準備出來てますよ」

どうやら自分達は話しこんでしまっていたようだ。卓袱台の上には酒と肴がこれでもかという程おいてある。どうやら宵越しが前提らしい。

「そうだな。じゃあ…早速」

「今日の酒は一段と旨いだろう」

「こんな賑やかな酒なんて久しぶりだ…」

「じゃあ、皆そろって……」

「……乾杯！」

決…戦？（後書き）

ごめんなさい、離狗はチートです。

後書きの開口一番謝罪です。前書きもですが…

今回で主要人物がそろいました。これからは飛脚師が空気になりがちなことになるかも知れません。

懲りもせずに息抜きに番外編を書き始めているので笑って下さい。

P・S・感想が…欲しいです。

これ以下は引き続きアンケートの部分です。

・飛脚師の真名について

私自身も考えたことはありませんが、友人から指摘されましたのでこんな名前だったらいいなというものがありましたら感想にでもお願いします。

・飛脚師の伴侶について

初回からフランフラグを建てて放置したと後悔している所存です。ですが、今のところ大して進行もしていないのでこの人物なら飛脚師の嫁にしても良いだろう（これが一番の難関と思っています）というキャラクターを感想に添えていただきたいです。

：注意：【藤原 妹紅】【上白沢 慧音】【古明地 こいし】は私情により除外させていただきます。

・飛脚師の新しいスペルカードについて

これに関しては案が無いこともないのですが、一応アンケートをとってみようと思います。

・東方飛脚伝とのコラボについて
色々な小説で○○×○○○○というようなことに憧れている私なのですが、飛脚師を使う、ないしはこのキャラと組みせたいと思う方がもし居ましたら感想の方に一文をお願いします。
ただ、東方project関係の二次創作で飛脚師を入れて役に立つということはあまりないと思います。

戦いの終わりと宴の始まり（前書き）

前回はなんともいえない終わり方でしたが、今回もグダグダだと思います。

そして、糖分を自己生産出来るようになりたい今日この頃…ではお楽しみください。

戦いの終わりと宴の始まり

Side - change <飛脚師>

今日という日は誰もが大変だったと感じただろう。自分はさほどの働きはしていないが、紅流にとって腕を無くしたのは相当の痛手だと思う。妹紅も今はよく分らないが、相当な痛手を被_ひつたらしい。しかし、逆騎離狗という人物は人間でありながら異常なまでの強さを持っている。敵対しているわけでもないので危機感というものは無いが、一体どうやってあそこまでの強さを手にしたかは気になる。「逆騎さん？」

神奈子達と酒を呑んでいた離狗に声を掛けてみる。

「どうした…その、名前を聞かせてくれるか？」

「俺は飛脚師。名前通り飛脚だ」

「飛脚師、訊ね事か？」

「ああ。逆騎さんは外来人なのか？」

「そうだろう。この世界は完全に未知だ」

そうでもなければあれだけのことをしている人間をこの幻想郷で名前を知らない筈もないか…

「訊ね事は、これから逆騎さんは何をするつもりなのかってことだ」

「……そうだな…話は逸れるが、この世界と私の居た世界とでは文明のレベルが遥かに異なる。それを活かせることならなんでもするつもりだ」

確かに幻想郷に来る外来人は幻想郷よりも発達した文明を持っていることが多いと聞く。髪などの容姿も入るのだろうが、服装や口調で判断できるくらいだ。

「それなら良いつてがあるかも知れない。機会があれば紹介したい人間——いや、河童が居る」

「河童…そうか、済まない」

見た目は人間に近いのだが…説明が難しい。それにあいつなら人間

とも親しい筈なので紹介して損はないだろう。

「困ったときはお互い様、外来人の逆騎さんはこれから少し大変かもしれないけど頑張っただけ欲しい」

「ありがとう」

「あれ、離狗さんも外来人？」

頬を軽く朱に染めた翔太が話しかけてきた。この話し方からして翔太も外来人なのだろう。それでいうと秋山もそれらしいと思う。

「そうだ。君はどの世界から？」

「俺の居た世界なんて思い出したくもないよ。毎日飽きずに戦ってるようなそんな所だ」

「俺の世界と似ているな。もっとも、翔太程剣術に秀でた奴は中々居なかったが……」

「それを言ったら俺の所も。秋山並の銃使いはそうそう居なかった……」

「「大体その前に死んだから」」

かなり盛り上がっているが、二人の話は随分笑えない話だ。ただ、此処でも大人になる前に死ぬ人間はそこそこ居るが……

「そういうえば秋山は変な話し方をする時があるが、あれは何だ？」

「ああ……いや、いつもはこれだが……テンションが上がりすぎたら英語で話すようになるんだ」

英語……自分にはさっぱり理解出来ないものだが、他の奴には理解出来るのだろう。

「俺も話せないことはないけど、苦手だ」

「翔太はそうなのか。離狗、あんたは普通に話してたな？」

「ああ。他にも言語は習得しているが、好んで使う時はない」

「しかし、つくづくあんたを見てると思う。まるで完璧と言葉の体現者だ」

秋山の言うことは確かに的を射ている。大して逆騎さんという人間を知っているわけではないが、あまりにも欠点が無く、技能は一流だと思う。

「飛脚師、ちよつとこつちに来てくれ」

横から妹紅に声を掛けられた。何か用事でもあったのだろうか…確か何もなかったと思うのだが…

「分かった…」

そう言つて席を外れ、部屋の隅に行く。

「飛脚師、お前…狙つただろ」

狙つた…そう言われたところで何を狙つたのかはさっぱりだ。ただ狙うだけなら——主に妖怪だが、数え切れないほどのもの狙っているので答えようがない。

「何の話だ？」

「白々しい。翔太をけしかけておきながら言えることじゃないぞ」それか…すっかり忘れていた。しかし、そのことを忘れていたにしても会つてからのことは自分に一切関係ない筈だ。

「俺は俺の知り合いで実力者を守矢神社に呼んだだけだ。言いがかりじゃないのか？」

「そう簡単には認めないか」

「だから、言いがかりだ。疑わしきは罰せずだ、それにずいぶん印象と違つたろう？」

「まあ…確かに。馬鹿正直で真つ直ぐな奴だ」

真つ直ぐ過ぎて引かれるところもあるだろうが、比較的気の長い妹紅には合うのかも知れない。

「じゃあ酌の一つでもしてやればどうだ？俺もちよつと思ひ出したことがあるから」

「……そうしてくる」

妹紅はまんざらでもなさそうに戻つていった。

さて、自分も今の内に頼んでおかなければ…妖夢と吞んでいる早苗のところに行く。

「早苗、ちよつと頼み事があるんだが」

「飛脚師さん？なんででしょうか？」

「近いうちに妖怪避けの札をお願いしたいんだが良いかな？文や栴

さんのような強い妖怪には大して効かなくても良いから」

霊夢に頼んだものはもう効き目が無くなってきそうなので今頼んでおかないと家が無くなる。

博麗神社まで行くのは案外疲れるので近場で済ませられるものなら済ませたい。

以前構わないだろうと思って放置していたら自分が居ない間に殆ど全壊していたことがある。それ以来こういうことにかけてはかなり気を遣うようになった。正直低級の妖怪が近づかないような人里が親交が深い妖怪の所に住めば良いのだろうが…それかもつと力を付けて自衛出来るようになれなければ…そんなことは無理だが。

「ありがとうございます。まだちょっと慣れませんが頑張ってますね！」

「あの…家が掛かってるから出来なかつたら先に言つて欲しい」
精一杯頑張った結果であつても家が無くなつていたらしゃれにならないので困る。

「大丈夫です。人を崇めることと再生と復活にかけては霊夢さんにも負けませんから」

そのどれも自分が求めていることを気づいて欲しい。だが、後者の再生については家が対象に出来るのなら構わないのかも知れない。破壊されることが前提なので真つ平御免だが…

「そつえば飛脚師さんは妖夢さんとお知り合いなんですよね？」

「そうだが、それがどうかしたのか？」

確かに何度か仕事を頼まれたことがあるので知り合いだが…

「いえ、本当に珍しい人だと思ひまして…」

特に強いわけでもない人間が——という意味でなら心にくるものがあるが…恐らくそついう意味だろう。

「それは、まあ…皆が良い人達だからだ。殆どが人じゃないけどな」
自分の知り合いで人間とそれ以外とで計れば圧倒してそれ以外だろう。

「飛脚師さん、私はどちらで数えられましたか？」

唐突に妖夢が問いかけてきた。確かに妖夢は半人半霊なのでどちらに入ればいいのだろうか… かくいう自分も半人半神なのでどうみればいいのだろうか…

「そうだな… 妖夢は人して半霊は霊としてかな。俺も半人半神だからなんとなく気持ち分かる」

「飛脚師さん… 神様でしたか？」

妖夢は不思議そうに訊いてくる… 言った覚えもないので妖夢はこのことを知らなくても当然か…

「最近知ったことで、やっと受け入れられたことだ。神奈子達と違ってご利益は無いけどな」

単純な信仰だけでこうなっているので神として何か干涉できるわけでもないだろう。今のところはキラメキが二回撃てるまでに神力が上がったということだ。

「それでもお祈りしておきます」

そう言うのと本当に手を合わせて何か祈ったようだ。叶えられる筈はないので少し苦しい…

「心なしが身体が軽くなった気がします」

世辞なのは分かるが、それでもありがたいと思う。

「ちなみに何を願ったのか聴かせてもらえるか？」

普段真面目な妖夢が何を願うのか… 少し気になる。

「無病息災、開運厄除、幽々子様が謹みを持ってくださいること、幽々子さまの食欲が少なくなってくれること、夜雀さんの災難と御冥ふ——」

「その辺で十分だ。ありがとう」

十二分に分かった。自分には一つとして叶えることが出来ないだろう。そして妖夢には気苦労が耐えないこと。

「そうですか？」

「何も出来ない俺を許して欲しい… むしろ俺を神と認めないで欲しい…」

「え！？ 飛脚師さん、そんな… 大丈夫ですよ。自信を持ってくださ

い」

「ありがとう…」

「さなちゃん。ちょっと頼み事があるんだけどいいかなあ？」

若干不自由そうなのが気になるが、酒が入ってますます上機嫌な紅流が来た。

「はい、どうしましたか？」

「暫く此処に住んでも良いかなあ？」

「はい??? どういうことですか？」

早苗はかなり困惑しているようだ。このまま見ているのも面白そうだが、悪趣味か…しかし自分としても気になるのでそのままに居ることにした。

「この辺りに腕を作ってくれた知り合いが居るんだけど、俺の家から通うのは骨なんだよねえ…だから直るまで泊まらせて欲しいんだけど」

紅流の家というものが何処にあるのかはまったく分からないが手を作る奴なら自分も知り合いだ。だからと言って自分の家は狭すぎるだろうが…

「それは…空き部屋もありますし、後は八坂様達が良いと言われれば私は構いませんよ」

「はい、じゃあ決定。宜しくねえ」

紅流…やり口に抜かりがないな。あの二人は了承するだろうが。

「え!? あ…宜しく、お願いします?」

「飛脚屋も住む?」

思わぬ方に話しの矛先が向いた…しかし、答えは決まっている。

「断る。と言うよりも守矢神社の人…いや、神達が迷惑だろう」

「いえ。もう、一人増えても二人増えても同じようなものですよ」
早苗の順応ぶりが少し恐ろしく感じてしまう。慣れなのだろうか…
もしそうなら普段が凄いのだろう。あの神達と居れば当然なのかも知れないが…

「まあ…それでも俺は戻るよ。これで二日空けているから心配なん

だ」

「そうですね…旅館ではありませんが、いつでもお越しく下さいね」
早苗の心遣いが素直に嬉しいと思う。人なのだとは思うが、自分以上
に神の器だと思う。

「早苗に信仰が集まらないのが不思議でならないな」

「それは…私はあくまで巫女ですから。その内には神になれるらしい
ですけど」

その内神になる…よく解からないが、自分に近いのか…遠いのか…
「俺…みたいなものかな？」

「そう、ですね…当たらずとも、と言ったところでしょうか。私は…
分かりやすく言うなら、蝶のようなものでして…現人神なんです」
現人神とは人の姿の神…の筈だが、正直神奈子や諏訪子、知っている
仲では豊穰の二神も居るが、全員が人に近い形をしているのでそ
のあたりはどうなのだろうと思う。

「まあ…同類ということなのか、似て非なるものなのか…」

「人の身の神という意味では同類だとも思えますけど…」
「なるようになるか」

深く考えても変わらないこともある。それなら少し流されてみるの
も良いかも知れない。

「楽観的ですね」

「楽観的なのは紅流の専売特許だけだな。それに思いつめて良いこ
ともないからな」

「どっちもその通りですね」

「しかし、もう殆どの連中が出来上がっているな…」

男集は逆騎さんを除いて完全に酔っている。女性は…妖夢は節度を
持っているのだしなむ程度なので早苗と共にさして酔っていない
部類に入るだろう。

「そうですね…いつもなら何とか治めるおさことが出来るんですけど」
神奈子に諏訪子、どうみても呑んだくれにしか見えないこの二人？
を早苗一人で治めるのか…自分は多分酔っていない方なので妖夢と

共に止める側になるだろうな…

「えへへ〜典君の鉄砲〜」

こいしちゃんが秋山のコートの中から先端が妙な形をした鉄の筒のようなものを取り出した。銃というよりも大砲に近いもののような気がするが…大したことはないだろう。

「ちょ…秋山、あれRPGじゃん。あれで祝砲でも撃つのか？」

「は！？下手に撃つたら此処が消し飛ぶぞ」

「いや、秋山の銃って魔力を込めて銃弾にしてるんだろ？加減すれば良いじゃないか」

「あれだけは実弾だ。魔力では限界がある、それに最終兵器だからな」

「こいしちゃんが持つてるんだけど」

「嘘だろ、あれは俺の着ているコートの中に…あれ？一丁無い」

「秋山、俺からも言う。こいしちゃんが持つている」

酒が入っていても気づかないはずはないと思うが、それよりもあれが危険なものだということは理解できる。

「私も言える。あの少女が所持している。トリガーに指こそ掛かっていないが」

「譲ちゃん、一発ふつ飛ばしてやんな！」

酔った勢いなのだろうが、神奈子がこいしちゃんに煽^{あお}りを掛けたことでこいしちゃんは銃を構えて引き金に指を掛けた。

「こいし、止めるおお！」

「え〜い〜」

こいしちゃんが引き金を引こうとするよりも先に秋山が跳びながら体勢を変えてこいしちゃんを押し倒した。

「あああ／＼典君のバカあ…」

その直後秋山のコートから何かが抜けるような音がした。

「グレネードのピンがああ！」

「指輪はこれで良いよ？」

「Such a n r i n g i s u n p l e a s a n t ! !」

そんな指輪はごめんだ）Please help me！！（助けてくれ）」

「飛脚師、障子を開けてくれ。秋山、グレネードを軽く抛^{ほう}つてくれ」
「Roger…（了解だ）」

秋山は訳の分からない言葉を言いながら拳大の黒い塊を投げていた。自分はそれを確認するよりも先に走り、障子を全開まで開けておいた。歩いても数秒掛かるかどうかなので自分が走ればほんの一秒程度で開けられる。

「立待月」

逆騎さんは…あの塊をを蹴ったのだろうか…脚は振られているのだろうか、見えなかった。

その直後漆黒に染まつた空の彼方で何かが爆ぜた。

「It is dirty fireworks…（汚ねえ花火だ）」

「落ち着いたか？」

「ああ、今最高の気分だ…助かった、離狗。命の恩人だ」

「不可抗力だろう。気にすることはない」

「時化^{しけ}た花火だねえ…こんなのじゃ興も冷めちまうよ。そうだろうー
ーぐへえ…」

「もう…そろそろ寝ましょうか？」

巨大なハリセンで神奈子を叩き伏せ、そう言う早苗が居た。後ろに阿修羅が見える気がする…

「私は阿修羅すら凌駕する存在ですよ♪」

「済まない…いや、ごめんなさい…」

とりあえず謝らないといけないような気がしてならない。そうしなければ…考えたくもない…

「あれ？別にオコッテナンカイマセンヨ？」

なんだろう、恐怖が止まない。それ自体はこれが初めてではないが、相手が人間で生命の危機とまではいかないがここまでの恐怖は初めてな気がする。

「ああ…とりあえず、神奈子を運ぶのを手伝おう…いや、手伝わせてくれ」

「本当ですか？ありがとうございます。洩矢様と違ってちょっと大変なので助かります」

早苗の言っていることは確かにそうだ。体格ではどうみても神奈子の方が大きい。それを毎回布団に運ぶ早苗には脱帽ものだ…裏が怖い。

「このしめ縄のようなものは外しても良いのか？」

これがどうして背中にくっついていてるのが気になって仕方がない。気には行けない気がする。

「はい、大丈夫ですよ。というより、それを外さないと動かさせませんよ」

「それもそうだな」

とりあえず引つ張ってみると、すつと離れたが、代わりにしめ縄の重量が腕に掛かった。

「手伝おう、飛脚師。神奈子を運んでくれ、私はこれ運ぼう」
後ろから声が掛かり、相当な量の重みが減った。

「逆騎さん…助かった」

そう言ってから神奈子を背負う。神だからかはよく分からないが、思ったよりも重くはなかった。

「洩矢様、行きますよ」

「あーうー…コウー」

「俺が運ぶよん、ほいさ…つと」

紅流も呑んでいないのか…いや、抜けるところまで計算していたのだろう、頬がまだ赤い。

「私は案内しか出来ませんね」

苦笑しながら進み、寝室まで案内してくれた。

「さなちゃんももう休んで良いんじゃないかなあ？妖夢ちゃんもだけど」

妖夢はともかく翔太達は放置しても良いだろう。

「その前に水を用意しないといけないですよ、明日が大変ですから。それに皆さんの分のお布団まで用意出来なかったの……」

「神奈ちゃんもケロケロも呑みすぎだよ。昔から加減を知らないからねえ」

「紅流も人……？のことは言えないだろう。早苗もちよつと忙しすぎないか？」

「それでも慣れてますから。でも、ありがとうございます」

「俺は命だけは守ってるから平気だよ。さ、残りを片かたしに行こうか？」

「そうだな」

「ああ」

＜～諸々移動中～＞

「今戻ったけど水が要る奴は……居るのか？」

紅流と逆騎さんは居間に戻る前に飲んだので訊くまでもない。一応全員分の量はあるのだが、もうこの部屋でも起きているものは殆ど居ない。

「一杯、貰えるか？」

言葉は良いのだが、現状はそれとは全く違うものだ。秋山の身体はこいしちゃんの布団だか抱き枕だかよく分からない状態になっている。本人は慣れているのかも知れないが自分からみてみれば奇妙としか思えない。ちなみにコートは脱いで部屋の隅に置かれている。

「秋山……こいしちゃんをどかしてから頼んでくれるか？」

「いや……布団が無いかららしい。俺は慣れているけど、拙いんだろ。掛け布団も頼めるか？」

「早苗に訊いてみないと分からないが、あると思う。敷き布団もなければ無くて欲しいよ」

切実なのは分からないがとりあえず早苗に訊いてみないことには始まらない。

「早苗、まだ布団の予備はあるかな？」

「あ……はい、ありますよ。少し待ってくださいね」

そう言つて早苗は別の部屋に行き、すぐに布団を持って戻ってきた。
「速いな…」

敷いてはいなかったものの用意はしていたということなのだろうか…
「前の日に寝室に敷いたものを持ってきただけですから。飛脚師さん達の分も用意しないといけませんね」

さて、この神社には幾つ布団があるのだろうか…気にしてはいけな
いような気がするので触れないでおこう。

「秋山、お休み。背中を痛めないように座布団でも使ってくれ」

「thank you・good night（助かったよ。お休み）」

「???そうか…」

意味は分からなかった。しかし、なんとなく感謝なりしているのだ
ろう。

布団も敷き直されていたので翔太と妹紅を起こしてから少し部屋を
片付けて寝室に行く。

「紅流、此処が旅館に思えてきた」

「俺も同感だけど、良いことだから喜んで寝るよん。おやすみ」
「そう言うが早いか布団に入り眠ってしまった。不覚なのは分から
ないが、凄いと思った。」

「私も床に着かせて貰う。お休み」

「zzz…妹紅お…zzz」

「zzz…zzz…」

今日もなのかも知れないが疲れたのでとりあえず上着だけ脱いで床
に着いた。

戦いの終わりと宴の始まり（後書き）

なんだか申し訳ありません。

今回は本編そつちのけで紅流の左腕再生編に移りたいと思います。
ぶつちやけ、金属集めてにとりに作って貰う回です。そして、飛脚
師のあれが役に立つ時がきます。

左腕再生（前書き）

ちよつと長いのでまとめました。

左腕再生

Side - change <紅流>

やけに明るいで瞼を開けると朝の明るさではなかった。

「ふあゝあ…れ？」

そして腹部にある重さ…考えるまでもなかったことだが、ケロケロだった。

「今、何時なんときなのかなあ？」

自分が昼間まで寝ているのは分かる。幸いなのか二日酔いにはなっていない。右手で枕を引き抜いて、自分の腹部にもたれ掛かっているケロケロの間に差し込んで抜け出す。

「zzz…zzz…」

片手が無いのはやはり不便だ。早い内に作って貰おう。

朝餉も食べていないが、いいだろう。というよりも昨日呑みすぎて食欲が無い。

「じゃあ…ねえ」

恐らく自分に第二のふるさがあるとすれば、此処だろう。神社に仙人というのはどうかと思うかも知れないのだが、なんであれ来る者を拒まないのでありがたいことこの上ない。

自分はどうも軽い人間と見られがち——それもあながち間違いいではないのだろうが、それでもそういう判断で依頼がなかったりするの
は拙い。

御霊煌を腰に引っ掛けてから、部屋を出て、浮遊する。一旦人里に行って手土産でも買っておこう……

八分刻（十五分）程で特に障害もなく人里に着けた。さて、八百屋は……あった。

早速品揃えを見してみる。中々いろんな野菜がある。特に季節ものは

安く、多い。勿論味も良いだろう。

「こんにちは。ご主人、ここにきゅうりは置いてるかなあ？」

「あらあら、万屋さん。勿論置いてるよ、この時期冷やしたきゅうりやトマトは酒のあてに丁度いいからね」

人あたりの良さげなおばさんが店番をしていた。指差した先には籠に乗ったきゅうりがある。程よい太さに水々しさもある。間違いなく上物だ。

「そうそう。ぬかで漬けるのも良いけどねえ…っと、それはさておき、こいつを貰いたい」

そう言つて値札にある金額を渡す。

「毎度あり。ご贖目にね」

持ち帰るための籠があるわけでもないので服の中に入れておく。

「また困ったことがあつたら言つてねえ」

そう言つて八百屋を後にする。これで一応の目的は達成出来た。飛び立つて位置を確認する。次の目標は滝の近くにある河童の住処…すみか目視できる距離ではないが、大体あっているだろう。腕の出来はかなり良かったらしいが、元々試作品らしい。確かに人の腕を機械で作るなんてまずないことだろう。

「はあ……」

そういえば今現在自分を守るもの——盾になるようなものが御霊煌の開放以外何もなかった…なるべく低級妖怪にはあわないようにしなければ…

ふと遠くを見ると青い髪をした女の子と緑色の髪の女の子が二人で飛んでいた。勿論人間ではないだろう。空を飛べる人間はかなり限られる。だとするなら妖怪かそれ以外だが、妖怪が昼間から活動的になることはあまりないので妖怪でもないだろう。近づく毎に見覚えもある顔になってきた。

「コウさん？」

【氷の妖精】チルノ、それに大妖精…日中から遊び回っているのは【宵闇の妖怪】ルーミアか天人か…そのくらいだ。

「やっぱりチルチルに大ちゃんかあ。今日も自由に遊んでるねえ」
「コウ！？ここであつたがひやくねんめ！あたいがボドボドにしてやる！」

「俺の身体はボドボドだよん」

茶色のローブを左側半分取り、緋色の着物から左手を出す。

「コウさん！？」

「コウ…いたくないのか？」

二人の表情が暗くなつていく…流石にこれは酷だつたのかも知れない。

「もう痛まないよん」ただ、無いだけ」

「でも、それじゃお仕事が大変なんじゃないですか？」

大ちゃんは妖精にしては珍しく、優しく、周囲の心配りが出来るのでそれだけに負担を掛けてしまったかも知れない。

「心配してくれてありがとねん。確かに仕事にはかなり差し支えるんだけど、もう一回義手を作つてもらうから大丈夫」

そう言つて大ちゃんの頭を撫でる。

「／／／／／」

「あたいをむしするな〜！」

「はいはい。な〜でな〜で〜」

「おう／／／おう／／／」

チルチルの場合はしっかりと力を入れて飛んでいないのか、撫でる度に身体が揺れる。まんざらでもなさそうなので続けてみる。

「しかし…今は午の二つ（午後一時）位かねえ…飛脚屋に言つておけば良かった……」

飛脚屋に頼んで向こうに一報でもいれておけば良かった…しかし、今となつては後の祭りか…

「飛脚屋つて、飛脚師さんのことですか？」

「あ、そういえば大ちゃんは飛脚屋と仲良しだったんだっけ？」

「はい。と言つても、会えた時しか話せませんけど…」

「でも、飛脚屋相手だったら当然かもねえ…その内家にでも行つて

みれば？」

「え！？でも、迷惑じゃないかと思って…」

「オルに言ってみれば良いんじゃないかなあ。ブレザーを着ていて青いイヤホンをつけた外来人を見かけたら言ってみると良いと思うよん」

「その人なら一回会ったことがあります。今度会えたらお願いしてみます」

「こっちで会ったんだ？いつもなら——」

「これ以上こっちでそういう発言はしないで欲しい。よって必殺【割愛】！」

これがクラフトクオリティ……

「まあ、俺はもう行こうかなあ。暗くならないうちに帰るんだよん」
かくいう自分も気をつけないといけない。

「気をつけてくださいね」

「つぎにあつたときにはぼどぼどにしてやる！」

「じゃあねえ」

そう言つて妖怪の山に向かって飛ぶ。

「にとり〜ん、にとり〜ん？」

滝のふもとにある家の前で家主の名前を呼ぶ。此処に来るのは久しぶりだ。普段腕に油をさしたりするのは一人でも出来ることなのでかなり間が経っていた筈…

「はいはいっと…おっと、これは珍しい。コウが来てくれるとは…さあさ、立ち話もなんだし、入った入った。盟友が来てくれたんだ、とっておきの茶菓子か…あれ？」

ランドセルを背負った河童、河城かわしろにとりが出迎えてくれた。相変わらず威勢がいい。

「お邪魔するよん。今日はちょっとお願いしたいことがあるんだ」

「とりあえずまあ、粗茶で済まないが」

「ありがとねん」

「しかし、急ぎなのかな？」

「ご明察。腕をもう一回作って欲しいんだ。金子きんすはいとわらないよん」
「よっぽどらしいね…ただ、お金はどうともなるんだ。問題は鉱石が足りない。外装に上質な玉鋼、内部配線にはなるべく通電性が高い金属。それ以外にも関節には柔軟な金属、錆止めにめつきも要る…」

道のりは長くなりそうだ…勿論一日やそこらで解決できるとは思っていないが…

「俺に出来るのは？」

「鉱石を集めて欲しい。加工は私が出来るんだけど…」

「なるほどねえ…まあ、何とかしてみせるよん。鉱石といえば土の中…地底にでも行つてこようかなあ」

「行けるだろうけど、無事で戻つてくれる？」

もう気づかれていたとは…

「言った覚えはなかったんだけどねえ…」

「人間は河童の盟友。そこに言葉は必要ないのさ」

「恩に着るよん」

「その言葉はまだ早いよ。とりあえず腕の状況を見せて欲しい」

「了解」

上着を脱いで腕を見せる。

「根元が残ってる。これなら少しは楽になるね」

あまり知識がないので詳しくは分からないが、好都合ならいい。

「じゃあ、早速地底に行こうかなあ…」

「いや、コウだけ行つてもよく分からないのは目に見えてるよ。私も行く」

確かに鉱石についての知識は殆ど無い。このまま自分が行つてもただの石ころを持ってきて二度手間になることを考えると、一緒に行つた方が遥かに良い…いや、一緒に行かなければいけないだろう。

「面目ない。お願いねえ…」

「なに、構いはしないよ。盟友の頼みを断るとあっちゃ河童の名折れ。このにとり、天地明道に誓ってコウの腕を直す…いや、【作るかな?】」

「そこまで言われたらねえ…俺も何かしらに誓ってにとりんを守るよん」

「じゃ、早速行こうか?」

「あ、その前にちよつと…」

「どうしたの?」

「これを渡しとくよん」

手土産に買っておいたきゅうりを渡す。

「そ…それは…流石だよ。やっぱり人間は河童の盟友だ!これで勝つる!」

やる気は急激に上昇したようだ。一体きゅうりのなにがそうさせているのかは定かではないが…

「そう? まあ…今度こそ行こうか?」

「行こう。さあ行こう、今すぐ行こう」

そう言って飛び立つ。何というか…現金——ではないのだろうが、仁義ともいいづらい。しかし、実質無償に近いかたちで手を貸してくれるのだから義に厚いのだろう。

「しかし…何をすればコウの腕が壊れたの?」

「斬られたら壊れちゃった。こつ…一息にすつと」

何をしたわけではなく、何をされたかなので微妙に違つかも知れない。

「え??」

「実体剣じゃないんだけどねえ。まあ、びつくりしたよん…」

岩と殴り合ってもへこみ一つつかない筈の腕が一太刀で壊れたなんてにわかには信じがたいだろう。しかし、現にこうして左腕は無くなっている。

「そんな…馬鹿な。しかし、私が信じなくとも腕は無い。気の持ちようは上がるけど、ちよつと悲しいよ…」

「まあ…四年も使えば寿命かも知れないけどねえ」

「なにぶん前例がないからなんともいえないけど、今度は傷一つつかない程丈夫に作り上げるよ」

金属である時点でもう十分だと思うが、そうでもないのだろう。

「なんにしても、片手じゃこれからが大変だからねえ」

戦闘は勿論体が資本といっても過言ではない万屋を続けるのなら五体は保ち続けておかなければ…最近鍛錬もそこまでしていないので成長もない。このままではいけない…

「私ののびるアームと違って必要なものだから急ぎたくもなるけど、それなりに時間は掛かるよ」

「大体何日くらい要るのかなあ？」

昔腕を作ってもらった時に何日掛かったかは覚えていないので若干不安にもなる。

「鉱石が無いとそれこそ百年でも。あればあるで製錬からだから…二十日くらいかな…早かったら二週間くらいかな」

微妙だが、腕が戻るまでと考えれば奇跡のような短さだろう。

「なるほどねえ…」

仕事はきっちり出来る筈もないのでそれまではおとなしく鍛錬でもしていよう。

地底へは若干時間が掛かり、半刻（一時間）掛かってやっと着いた。相変わらずじめじめと薄暗い。

誰か知り合いでもないものか…大して地底に来ているわけでもない。人間関係は希薄だろう——地底で人間に会ったことはないが、関係があるのはそれこそ橋姫か、さとりと愉快な仲間達とか、そういうえば以前来た時は桶に入った少女が居た。地底妖怪というのも中々個性があるものだ…

「うゝん…コウ、この辺の鉱石は石ころばっかりだよ。もつと奥に進んでみよう」

「そう？じゃあ、早速行こうかねえ」

そう言つてにとりんの後をついていく。自分に出来るのはにとりんが色々やっている時に変な妖怪が来ないよう目を光らせることだけだ。左腕が無かうと剣は振れる。ただ、体のバランスが崩れるので微妙に正確さを欠いた剣だが。

「この辺はそこそこ銅鉱石や鉄鉱石もあるんだけど、質が悪い。もつと――」

「やつほう、お兄さん。と…お連れのお嬢さん」

お燐が猫車と共に颯爽と現れた。猫車の中身は相変わらず何かが飛び出ている。中は見ないほうがいいのだろう。

「お燐」

「??誰？」

「お初にお目に掛かりますは地獄の運び屋、火焰猫燐。お嬢さんは？」

「これは申し遅れ。私は河童の川城にとり。ちょいと訊きたいんだけど、良い鉱石が採れそうな場所を知らないかな？」

「鉱石探しとはまた珍しい…この地底には腐るほどあるけど、珍しいやつならこのまま進んで灼熱地獄にお空つてやつが居るからそこで訊けば良いかもね。お兄さんなら分かるよね？」

お空…鳥頭の痛い子だったな…それと、灼熱地獄は本当に暑いので行く気があまり起きない。

「勿論知ってるよん…」

「よし、じゃあ灼熱地獄へ！」

「あいさ、了解」

そう言つて進み出す。微妙に不安もあるが、何とかなるだろう。

「うあ…暑い…」

先ほどの温度とは打って変わってやけに暑く、河童のにとりんにはかなり堪えているようだ。何か水分を持ってきておけば良かった…

「きゅうりでも食べて回復したほうが良いよん？」

「きんきんに冷えたきゅうりが食べたいけど、背に腹は代えられなさそうだからなあ…うん、食べよう」

そう言ってきゅうりを取り出すとそのうちの一本を一本渡してくれた。

「良いの？」

「勿論だよ」

にとりんの性格上そうなると思うが、これで脱水にでもなられば立つ瀬がない。しかし、受け取らなければそれもとりんの誇りを傷つけることになるだろう。

「ありがたく頂くけど、無理は駄目だよん？」

「ありがとコウ。今日は準備不足だから探すだけ、だから大丈夫だと思う」

なるほど…流石にきちんとした準備もなしに出来るものではないか…きゅうりを受け取って、食べ始める

。

しゃくしゃくと良い音がする。水気も損なわれることはなかったよ
うでいつそう美味しさが増した気がする。

「うにゅう？コウだ！」

いきなり頭上から声がしたと思い、首を上げ、見た。

その瞬間、そこそこの大きさを持つ棒が顔面めがけて襲いかかろうとしていた…

「危ない…」

本気で念動力を使って無理矢理止める。本当に危なかった…こんなものを生身の人間が受ければ重大な怪我は免れない…これ以上機械の部分が增えるのは勘弁願いたい。

「うにゅにゅ？どうなってるの？」

「コウ！こいつは…」

にとりんは戦う気が満々だが、相手が悪過ぎる上に敵というわけではない。

「にとりん、一応安心して良いよん。この娘は地獄鴉の靈鳥路れいじ 空うつほ、通称お空だよん」

「コウ、下ろしてよ」

「はいはい。でも今度やつたらお仕置きだからねえ……」

そう言つて力を解く。恐らく次回もこうなってしまうだろう……

「ごめんなさい……」 「もう、いいよん。ちょっと訊きたいことがあるんだけど、この辺に良い鉱石はないかなあ？」

「鉱石？ うゝん……ごめん、五秒以上考えたら急に頭痛が……」

「うん、無理はよくないから休んでおこうねえ」

「うにゅ……」

お空の肩に手を当ててすつと避けさせる。期待は出来なかったが、ものの見事に当たってしまった……

「あ、そこにあるのつて玉鋼……」

にとりんがそう言つて指差す先には金属で出来た砂山程度の大きさの山があつた。

「あれは私が暇つぶしで作つたものだよ？ こつ、溶かして、制御棒でござんつて叩いたら綺麗になるから……」

「ええ……まあ、探し方はともかく、お願い、それを譲つて欲しい」

「うゝん……まあ、いいよ。いっぱいあるし」

「そうなの！？」

「暇だつたからいっぱい作つたけど、欲しいの？」

「是非ともお願い！」

さつぱり会話についていくことが出来ない。しかし、これが誰のためと考えれば自分のためなのだから自分も頼むのが筋だろう。

「俺からつていうのはおかしいけど、お願いだ」

「え……ええっ！？ そんなに欲しいものならどれでもあげるよ？」

願つてもない奇跡だ。

鉱石を探す手間が省けたといえは簡単に聞こえるかもしれないが、

見つからなければ無限の時間を探すことに費やすことになる。

「ありがとう、お空！」

「本当に助かったよん。今度何か食べたいものや欲しいものがあつたら言つてきてねえ」

どうしても人間というのはこう、現金な性格なのだろうかと思うが、今回は少し忘れておこう。

「そんなに言われると嬉しいな／＼／」

見た目より子どもっぽく無邪気に笑うところは可愛らしいと思う。

見た目は背中の羽や腕の制御棒のせいでどうしても人間には見えな
いが、頭脳がきちんとしていれば嫁にもいけるのだろうに…しかし、
ペット扱いなので主人の許可なしには無理か…

「じゃあ…さつそ…あれ？身体が…」

にとりんが歩こうとするが、ふらついている。もしかすれば、拙い
かも知れない。額に触れてみると汗をかいていない。それだけでは
なく、身体もかなり熱い。素人目にも脱水だということは目にみえ
る…

「にとりん。すぐ帰るよん…お空、また来るから」

にとりんを抱えて全速力で飛び出す。

「コウ…ごめん……」

「にとりんは何も悪くないから、今は休んで……」

地底へはゆっくりくりくれば半刻（一時間）は掛かるが、本気でなら四
半刻（三十分）まで縮められるだろう。

「ふいゝ生き返ったよう…」

地底を出て、すぐ見えた川の中にとりんを漬けて何とかことなき
を得た。

「いや、まったくびっくりしたよん…本当に無理はしたら駄目だか
らねえ？」

「ごめんごめん。どうも興奮しちゃって…とりあえず今日は帰って

明日調達に行こう」

確かに日は落ちかけの申の刻（午後十八時）…これでは準備で夜になってかなり危険度が増す。それよりも今日のところは一旦出なおしてきつちり準備をしていくのが定石だろう。

「そうだねえ…じゃあ送るよん。動ける？」

「もう全快——って言いたいけど、最近色々やってたからなあ…」

「それなら俺が運ぶよん」

そう言うてにとりんを川から引き上げる。

「そんな…悪いよ／＼」

「元を正せば俺の責任だからねえ…それに、幾らにとりんでも夜になつてから動くのは拙いよねえ？」

「それは、まあ…」

人に友好的な妖怪——人外の生物は極端に強いが、微妙に弱いからだ。にとりんは後者なので普段来ないようなところをうろついているのは好ましくないだろう。

「じゃあ今日はゆっくり休んで、明日きちんと準備して来よう」

「うん」

抵抗する様子もないのでそのまま飛んで行き、にとりんの家についた。

「じゃあ俺は帰るけど、大丈夫？」

「あれだけ休めばもう全快だよ。明日こそ原型だけでも作ろう」

「そこまで急いでるわけじゃないから、大丈夫だよん。じゃあまた明日ねえ」

そう言うて今度は洩矢神社に帰るために飛び立つ

人里の上を飛んでいると、八百屋の方にさなちゃんが入るのをふと見たので降りて、自分も八百屋に入ってみる。

「あら、またきてくれたの〜」

朝と変わらず人あたりの良さげなおばさんが店番をしていた。その

横にはさなちゃんがいる。

「知り合いが居たからねえ」

「紅流さん？なんで私が此処に居ると？」

「人里の上を飛んでたらチラツと緑色の髪が見えたからねえ」

「あ…なるほど。確かに分かりますよね、この髪じゃ」

「俺も茶色だから人のこともいえないけどねえ。ちなみに買い物？」
基本的に人間の髪の色は圧倒的に黒が多いので、その中から自分やさなちゃんのような人を見つけるのは洞察力が普通の人間でも容易だろう。

「はい。今日の分を買いにきたんですけど、冷奴と何にしようか迷ってるうちに着いちゃって…」

「それなら温野菜でも出せば良いんじゃないかなあ。季節柄あつさりしてるし、あの二人のことだから肴にもなると思うよん？」

「そうですね…今日はそれを作ってみます」

「それならこれがお勧めだよ」

そう言っておばさんが差し出す野菜類はうってつけだろう。

「じゃあ、それを頂きます。紅流さん、お肉を買ってきてもらっても良いですか？」

「勿論。ついでに絹豆腐も買ってくるよん」

「お願いします」

そう言つて桶を受け取つてから先に八百屋を出て行く。人里の売り場は一つの場所に集中している商店街風になっているので近場に豆腐屋と肉屋がある。とりあえずより近い肉屋に入る。

「ご主人、四人前くらいでそこそこの豚の肉を貰いたいんだけど？」

店の主人に声を掛ける。

上質な肉は脂が多く、温野菜にすると殆どの脂が抜けるのであまり美味しくない。ついでというと牛よりも豚の方が美味しい。

「久しぶりだね、紅流さん。はいよ、四人前だ」

一見して普通よりも多めに包まれているのが分かる。こういう人情は非常にありがたい。

「御代はこれで。お釣りは要らないよん」

そう言つて多めに金を置いて豆腐屋に行く。

「やつほう、ご主人」

「いらつしゃい！」

豆腐屋の主人は相変わらず威勢がいい。この氣風きふうの良さもこの豆腐屋が好かれる要素なのだろう。

「絹を六丁分お願いするよん」

普通に夕餉に出す分と晩酌に出す分を別個にしていこう。桶に水をはつてその中に豆腐が入れられる。

「お待ちどう！あと、おからもつけとくよ」

そう言つておからの入った小袋も渡してくれた。

「御代はこれで」

そう言つて金を渡して店を出る。

「紅流さん、こつちは終わりました」

そう言うさなちゃんの籠の中には野菜が詰まっている。

「こつちも終わったよん」

「それでは帰りますか？」

「そうだねえ……」

同時に飛び立つて守矢神社を目指す。

「紅流さん、ちょっと気になったことがあるんですけど」

「どうしたの？」

「紅流さんは八坂様と洩矢様を助けたことがあると言っていましたか、いつですか？」

あの時のことはかなり時間が経っていて正確には思い出せないが、

「三年半くらい前かなあ……さなちゃんは見かけなかったけど……」

「三年前……多分、私が本格的に家出した時だと思います……」

「そんなことあつたんだねえ……俺は居候なんだから愚痴ならいつでも聞くよん」

大してあの二人のことを知っているわけでもないが、それでも一緒に住んでいるとなると巫女と神の間柄もあれば、家の中ではその真

逆の立ち位置なのだろう。気苦労も絶えそうにない。

「済みません…」

「まあ、幻想郷では楽しんだ者勝ちだよ。泣くより笑えってねえ」

「そうですね。ところで、腕の方はどうでしたか？」

「見てもらったけど、直りはしてないよん。見ての通り——あ、見れないか」

ただでさえ着物で見えない上にゆったりしているロープに隠れていて更に確認は難しいだろう。

「確かに確認は出来ませんね。それに見たら気持ち悪いので」

それは確かにそうなのだが、面と向かって言われるとちよつと…

「さなちゃん、意外に酷いねえ…」

「あはは…済みません」

「ほんとのことだから何もいえないけどねえ」

「ちなみに…お肉は何処に入ってるんですか？」

今自分が右手に持っているのは豆腐の入った桶で、もう片方の手はそもそも無い。それで先ほど買った肉の行方が気になるのは当然といえは当然…

「俺のロープの中。結構なんでも入るよ」

「そういえば兵六餅もその中に入っていましたね…」

籠や袋の類はかさばり、邪魔にしかならないので基本的には持ち合わせないようになっている。その点ロープならゆったりしている分物に入る、そして最終手段として脱いで逃げればいい。

「生きる知恵って奴かなあ。まあ、生物の運搬には適してないけどねえ」

「それはそうですね…」

談笑をしながら飛び続け、大して時間も経たない間に守矢神社へ着いた。

「それでは食材をお預かりしますね。晩御飯が出来上がるまで少し

お二人の相手をお願いします」

「あいさ、了解」

そう言つて居間へと向かう。あの二人の相手か…回数はないが、慣れていないわけではない。

「紅流、ようやく帰ってきたね」

「お帰り、コウ。腕は？」

「ただいま、腕はまだ無いけど、作れるところまではこぎつけたよん」

室内でローブは邪魔になるので脱いでその辺に放置しておく。

「そうかい…今は落ち着いてるから良かったけど、無茶はしないでおくれよ」

「まあ…どうしてもねえ、退いちゃいけない時つてあるから約束は出来ないけど。それより、二人とも」

「なんだい？」

「どうしたの？」

「風の噂で聞いたけど、随分さなちゃんに迷惑掛けてるみたいだねえ」

「う…それは、まあ…否定はしないよ」

「あーうー…」

どうやら自覚はあるようだ。これならば別にどうにでもなるだろう。「別に起こるわけじゃないけどさ…神様だったら、どうするべきか解かるんじゃない？」

「それは…そりゃ、恩返しに何かしたことはあるけど……」

「ちなみに？」

「酒盛りの主役にして、わいわいやったら家出された……」

「……」

それが原因だったのか…

「いや…ね、焼酎とか日本酒とか肴も珍しくさしみとか出したんだけど……」

「この時点の問題はなさそうだけど……」

「後で知ったんだけど、誕生日の翌日に勤労感謝のお祝いって言うちゃって…そもそも早苗は酒も呑まないんだけど、ちょっと調子が上がりすぎちゃって呑ませすぎたら三日連続二日酔いにして…起きたら置き手紙が…早苗え…」

なるほど…上げて下げられたわけか…結局誕生日は忘れられるわ、嫌な酒は飲まされるわ…普段が普段だったからそれが引き金になったわけか…

「さなちゃんが大事なものは十二分に分かったけど、それじゃあねえ…結果が全てとはいわないけど…」

「紅流、恥をしので頼むよ。もう一度早苗に祝いの宴をしたいんだけど、早苗が好むようなものをそれとなく訊いてほしいんだ」

神奈ちゃんの意志は固そうだ。勿論自分も賛成だ、それに友の頼みを聞けない程おろかな人間になった記憶はない。

「喜んで引き受けるけど、多分、あの年代の娘なら酒やその肴より甘味の方が良いと思うし、飲み物酒気が薄くて甘い果実酒もそれなりにあると思う」

「な…何でそんなに分かるんだい？」

「似たような依頼を受けたことがあるからねえ。その時は外来の甘味で餡蜜に似た感じのプリンとか、煎餅に似たクッキーとか…そんなものを作ったけど」

「そいつを作れるかい？」

「多分…何かは出来ると思う。ただ、手が足りない、作り方をもう一度思い出す必要がある」

手が足りないのは二つの意味で。そして、作り方が曖昧にしか憶えていないのでこの二つが合わされば、変な何かしか出来ないことは請け合いだ。

「すぐにすぐじゃなくていいさ。まずはあんたの腕から、その後にまとめて祝おうじゃないかい」

「うん、それが良い。神奈子は色々しがらみがあるから駄目だけど、その甘味の作り方は私がちょっと人里に行って調べてくるよ」

「確かに…一度その地に祀^{まつ}られたら移動にしても面倒になる、勿論出来ないわけじゃないよ。だから今は待機しか出来ないね。頼んだよ、ケロ子」

「ケロ子言っな！」

「ケロケロ」

「コウだから良いかもと思ってるけど、それもやめい！」

「分かったよん…諏訪ちゃんが良い？」

「うん」

「ちなみに、腕の状況を詳しく教えてくれないかい？」

「俺自身が詳しくないから微妙だけど、材料は揃っている。後は腕の形に成形して、俺の腕の神経と繋げるらしいけど、正直材料の部分までしかよく分からないからここまでかなあ…」

「じゃあ、遠くない先には腕が戻ってる。と考えても良いのかね…」

「悪くはないと思う…なにぶん、出来てから腕のことが終わってからこの話が進むから不確定なことこの上ない」

「それもそうだけど…なに、あんたなら信用できる」

「ありがとねん…」

信用にはそれなりの行動で返さなければ…そのためにも早く腕を直さない…」

「晩御飯が出来ました。とりあえずお茶をどうぞ」

「俺も手伝——えなかった…」

そう言って立ち上がるうとしたところで気づいた。お盆があるとはいえ、片手で何が出来るものか…念動力では人や布団みたいな大きい物は動かせても、細かい操作が出来ないので結局手伝いは出来ない。

「大丈夫です。それに紅流さんは【お客さん】ですから、ゆっくりしてください」

そう言われ、肩を押さえられて再び座ることになった。そこから数分もしないうちに夕餉が運ばれてきた。

「…いただきます」

しゃきしゃきとした食感が保たれている温野菜も珍しい。冷奴とも相性は良いので箸が…進めにくい。左手が添えられないので食器がぐらついてしまう。汁椀が一番難儀に感じ、飲むためには箸を置いて、中の具は揺れて取りづらい。

「コウ、食べさせてあげる」

「いや、この位……やっぱお願いするよん……」

無理だった。一昨日まではあったのでどうしても片手で食事するのは慣れていない。

「はい、あゝん……」

「うん……」

「おいしい？」

「いや、ふつ——」

「紅流さん？」

さなちゃんから射抜くような視線が向けられた…射抜かれたのかも知れない。

「美味しいでした」

言葉がよく分からなくなったが、何とかなるだろう。

「あゝう」

ケロケロこと諏訪ちゃんが喜んでいたのでさっきの殺気？はもう忘れよう。

結局夕餉は全て食べさせられ、晩酌になった。

「いやまったく…手酌もいちいち置いてしなきゃいけないとは面倒だねえ」

左手がなければいちいち盃を置いてから酒を注がなくてはいけない。

「そんなの…私が注いでやるさね。私とあんたの仲だろう？」

「ありがとねん…おっとつと」

酒はほろ酔いまでが気持ちいいのであまり飲まない主義だ。しかし、この二人…明らかに呑みすぎだ。

「あゝうゝ早苗ゝ熱燗もつと持ってきてゝ！」

「はい。すぐに持って来ます」

熱燗をあおる諏訪ちゃんはかなり異質に思うのは自分だけ——だろう。しかし、本当にこの飲兵衛をどうやって相手をしているのだろうか……

そう考えているうちに新しい熱燗が来て、更に盛り上がっていく……

「さなちゃん、この二人、いつまで呑んでるの？」

「気の済むまでといいますが……本当に駄目と言うまでは呑み続けません」

それは人として——神だろうがどうかと思う。もっと節制に気を配るべきだと思うのは自分だけではないだろう。

「諏訪ちゃん、神奈ちゃん、そろそろ寝に行ったほうが良いんじゃないかなあ？」

「何言ってるんだい、ここからが本番だよ」

「そーだよーコウも一緒に呑もーよー」

「ねえ……さなちゃんに何をする予定だっけ？」

「……！？」

一発で酔いが醒めたようだ。これからは少し節制というものを学んでおかないとさなちゃんの崇める神としての格が上がることはないだろう。

「さなちゃん、諏訪ちゃん神奈ちゃんがもう寝たいって準備をお願いねえ」

「は！？はい……すぐに準備をしましゅ……」

まるで青天の霹靂、仰天動地といった顔だ。言葉も囁んでしまったようで少し赤くなりながら部屋を出て行った。

「紅流……これはちと厳しやしないかい？」

「そーだよ……せめて後半刻（一時間）は呑んでいたかったよ」

「神奈ちゃんは酔いつぶれた身体で何が手伝えるの？諏訪ちゃんも二日酔いじゃ覚えることも覚えられないよねえ」

「あーっー」

「言い得てるけど、最後に一杯だけは良いだろう？」

それは確かにそうかも知れない。いきなりこれ以上呑むな——で、

その位も叶えられなければ士気は下がり、呑んで酔いつぶれた時と結果は変わらないだろう。

「勿論。さなちゃんのお祝い会の成功を祈ってね」

近くの徳利とくりには酒がまだ残っているので三つの杯さかづきに注いで二人の前に一つずつ置く。

「そいつは良いね。じゃ、いっちょ乾杯しとこうかい」

「うん。絶対に早苗に喜んでもらうために」

「「乾杯」」

こういう時呑む一杯の酒は一段と味を深く感じる。

数分後にさなちゃんが布団の用意を終えて二人は寢床についた。

「紅流さん、一体どんなことを言っただんですか？お二人が宵越しせずに寝ることなんて稀なのに……」

「詳しくは言えないけど、身近な弱みってとこかなあ……」

「どうも……思い浮かびませんが、これからもちよつとだけ使って欲しいです」

流石に自分のことだとは気づく筈もないので少し残念だ。その気になればいつでも使えるのだろうが、そこはいえない。

「そこそこにしとくよん……」

「ありがとうございます。一応紅流さんのお布団も敷いていますから、いつでも眠れますよ」

「そう。じゃ、少し風呂に入ってから寝ようかなあ……」

男とか…男の入浴シーンとか…描写は割愛。byオルトロス・クラフト

「あゝさっぱりした。今日はいつもより暑かったからねえ」

初夏の今だが、灼熱地獄は真夏よりも熱いと思う。聞いた話では地底には良い温泉があるらしいので全ての事が終わったら行ってみよう。

「そうですか？確かに初夏というよりは真夏に近かったですけど……」

「さなちゃんはそうだよねえ……まあ、明日明後日まではそうなるかも知れないから今日は早めに寝ようかなあ」

「紅流さんもまだまだ大変でしょうからそうした方が良いと思います」

まったくもってさなちゃんの言う通りだ。これから本当の作業が始まるのだ、それに自分が寝なかったとしても何の利益にもならない。それならばさつと寝るのが定石。

「思い立ったがなんとやら。じゃあ、お休み」

「はい。お休みなさい」

部屋から出て、寝室を目指す。ただ、客間に布団はなかったためあの二人と寝るということだろう。

「入るけど…寝てるよねえ？」

「zzzz…zzzz…」

完全に熟睡している。呑まない割にはよく寝ているものだ。ただ、寝相は悪い。全員分の布団があるが、端の二人が総面積の四分の三を取っている。一人どう寝ると？

「紅流さん」

「わおう！？さなちゃん…どうしたの？」

突然話しかけられたので驚く。袖が眺めの寝巻き姿は可愛さをあげているが、それよりも問題はどうか寝るかだ。

「ちよつとお願いがありました…理由は訊かずお願いします」

一体この時に何があるのだろうか…その辺で寝るとか以外ならきけるのだが。

「まあ…分かったけど、何をすれば良いの？」

「私を一番端に寝かせてください…二人の魔の手から……」

つまりは二人の間に自分が入った状態で寝ることか…別にそのくらいなら構わないが、その前にやる必要がある。

「みなまで言わなくて良いよん。とりあえず……」

念動力で二人共少し浮かせてずらす。これで十分な範囲が確保できたので布団に入る。

「ありがとうございます…では、お休みなさい」

「お休…み…zzzz…zzzz…」

床に着いたらものの数秒で睡魔に襲われ、意識が飛んでいく。
「紅流さん、はや!？」

諏訪ちゃんが、帽子の中身を…触手が…床が融けてくる…逃げられない……

「zzz…zzz…はっ!？」

悪夢…だったのだろうか…身体が動かない。金縛りなのか…

「あーうー早苗ー」

「ごっごっした…早苗…」

未だに熟睡中の寝言を言っている二人がまわりついていて。悪夢も金縛りも二人のせいか…

「さて——」

さなちゃんはまだ既に起きているらしく、布団もたたまれている。しかし…こういう理由だったのか。流石に念動力でどうにか出来るような状態ではないので深く深呼吸をする。そして、

「朝ですよ!!」

全力で叫ぶ。一人暮らしに慣れてしまつて全くやっていないので音量が劣ってしまった。

「「あう!？コウ!？/なんだい!？」」

「おはよう♪そして、離れてくれないかなあ？」

「ええ??あ、悪かったね…」

「わかったよー」

しかし、謎なのはなんで諏訪ちゃんが神奈ちゃんを通り越して自分の布団に入ってきたのか…寝相云々のではないと思うが、それよりもさなちゃんは寝室を分けるべきだろう。

「さて、一運動しますか」

朝も明けて卯の半刻（午前七時）…朝飯前とは今のことだろう。誰の物かは知らないが、縁側に草履があつたので履いて、御霊煌を取る。

「紅流：あんたもよく朝っぱらから動く気になるね」

「神奈ちゃんが遅いだけだよ…なにぶん、時と場所を選べない仕事だからね——」

時間は何とか選べても場所や内容はどうしようもない。万屋の弱みでもあるが、それをいつているようでは飯の食い上げだ。

「御霊煌・斬」

御霊煌に霊力を注ぎ込んで刃を作り、適当に振っていく。石や木を斬っても大して意味は無い。

御霊煌の振り幅を広め、跳びながら舞うように振っていく。身体の時勢も殺さずに、剣の速度を上げていく……

「紅流さん、おはよう…ございます?」

さなちゃんが起こしにやってきたようだ。割烹着を着ているので何処となく大人びている気がする。

「おはよう、さなちゃん。多分二人も起きてるよん」

「起きてるよー。早苗ーお腹空いたー」

「おはよう、早苗。こんな時間に起きたのは久しぶりだね…」

「そうですね…最低でも後四時間は寝ていますから。朝ご飯は出来ていますから食卓に行っていてください」

二人は未だ気だるそうに食卓へ向かって行った。流石に続けてるのはどうかと思うので御霊煌の刃を消し、腰に戻してから食卓へ向かう。

「いったただっきまーす」

「いただきますっ」と

どうやら二人とも食べ始めたところのようだ。しかし、食卓には二つ分しか用意されていない。さなちゃんの手際を考えれば少し不自然だ。

「あ…それ、私と紅流さん用の朝ご飯だったんですけど…」

「!?!」

そういうことだったのか…というよりも、この時間に起きることを想定していない辺りは慣れたところもあるのだろう。

「そうなんだ…」

「いや、その…」

「お腹が空いててー」

「はぁ…紅流さん、すぐに作ってきますね」

流石に責めることも出来ないので呆れたように台所に向かっていった。

「ごゆっくり」

さなちゃんを見送ってから席につく。

「その…済まないね」

「別に良いよん。それよりも…」

出されていたのは普通のご飯に味噌汁、イワナの開きに漬物なので、ただイワナを焼けば済む話だ。

「計画のことは勿論覚えてるよ。私は待機」

「私はお菓子の作り方を調べる」

「俺は腕を直す」

「全ては…」

「…早苗のために／さなちゃんのために」

人が人、言葉が言葉ならこの世にあだなす悪党の台詞だ。しかし、使いどころは間違っていないのでしっくりきてしまう。

「本当に、何とかしないとねえ…」

感覚の無い左腕の場所を撫でる。実際には撫でることは出来ず、服をなぞるようなかたちになってしまうが。

「コウが妖怪とかだったら生えてくるのにね…」

確かに妖怪は人間の何倍もの寿命や生命力を持つので肘から先が吹き飛んだくらいなら一週間程で治っているだろう。

「悲しいけど、これが現実なんだよねえ…まあ、物の上に人があり、人の上には人外ありってことだけど、人間なりに工夫が出来るからまだましだよん…」

自分ならずとも人には虎や獅子のような爪や牙は無い。しかし、その代わりに動物には無い考えて行動できる頭脳がある。

「ちなみに、人手はあるのかい？」

それは…どうだろうか。加工に自分が協力出来るであろうことはたかが知れている。しかし、他に協力できる程の技術力を持っている人間か妖怪を自分は知らない。いや、一人知っているが、その人物はまだ空いた時間があるとも思えないので駄目だ。

「あるわけじゃないけど、腕は出来る確信はある」

そもそも最初の腕もとりん一人で作ったので今度も出来るだろう。なるほど…勝手に朝飯を食べちゃった私が言うのもなんだが、すぐ行く予定だったのかい？」

「いや、そんなこともないよん。向こうにも都合があるだろうし、今日で必要なものを持っていく予定だからそこまで急がなくて良いし」

「それなら…そうだね」

話していると商事が開きさなちゃんが入ってきた。

「お待たせしました、紅流さん。朝ごはんです」

お盆にはさつきと同じような朝食が乗せられていた。湯気が立っているのがまた一段と食欲をそそる。

「ありがとねえ。ところで、ここに水筒ってある？竹筒でもいいけど、なるべく温度が変わらないやつを」

一応昨日のこともあるので準備は欠かさないようにしたい。

「多分あります。今日は一段と暑くなりそうですからね…中身は麦茶で良いですか？」

暑い時期に冷えた麦茶…これは良い。汗をかくことが必至なので念のために塩でも入れておいてもらおう。

「中にちよつと塩を入れておいてねえ」

「あ、なるほど…分かりました」

さなちゃんは理由が分かったようで用意に行ってしまった。とりあえず冷ますのも悪いので朝食を食べるとしよう。

「いただきます」

そう言ってから食べ始める。美味しい。しかし、食べにくい。最初

こそは取れるものも取れるのだが、問題は後半から、そして、魚に至っては普段絶対にしないことだが、箸を刺してからかじっていた。全く何もしていないので骨が喉に刺さる…

「本当に難儀そうだね」

「食べさせてあげるよー？」

その選択を選んだ結果は昨日の教訓でもある。

「それは止めとくよん」

念動力の応用で器を持ち上げて食べる。少し疲れるが、最善の策だろう。何故昨日の時点で思いつかなかったのか…後悔しても仕方はないのだが。

朝食も食べ終わり、一段落していると鈴の音が聞こえた。参拝者だろうか…時間も時間なので多分そうだろう。それなら自分もそろそろ行こうか。

「よし、行こう。今日もちよつと行ってくるよん」

傍に置かれた水筒を持って飛んで行く。きゅうりを買ってとってもいいのだが、二日連続で持っていくと逆に気を遣われそうなので必要ないだろう。

いつもより少し強く風を感じる。向かい風なのか、風が強い日なのか。この快晴の天気が嵐の前の静けさとも思えないので心配は必要ないだろう。

急に突風が吹き荒れたかと思ったら、見知った顔が現れた。

「あややや？紅流さんではありませんか？これは偶然」

「あややか。久しぶりだねえ、まだエセ新聞売ってるの？」

「エセ新聞とは随分なことですな。清く正しくの射命丸ですよ」
口達者ですいすいと鬱陶しいほどに飛び回る…相変わらずといったところだ。

「コールドタルで出来た心を持つてるあややが言えることじゃないよねえ」

「紅流さ〜ん、意地悪もそこそこでお願いしますよ〜」

そう言いながら抱きついてくる。身体の重心がかなりずれるので非常に飛びづらい。

「で、偶然とはいえあややにも用事があるんじゃない？」

会いにきたわけでないのなら目的があって行動していたのだろう。自分も長々と話し込んでいるわけにもいかないのもうそろそろ別れ時だろう。

「まあ…私は記者として何かスクープがないか飛び回っているだけなので用事はあつてないようなものです」

「なるほどねえ……」

「しかし、人間にはいい身体をしますよね——あや？左腕はどうしました？」

「壊れちゃった。今から作りにいくところだよん」

「そうなんですか…何にせよ、無事でいてくださいね」

「スクープのために？」

「私もそこまで非情じゃありませんよ」

そう言われても昔のことがあるので中々信用できない。あまり隙を見せたら痛い目を見ることがになるので自然と話し方も刺々しくなる。

「まあ、そういうわけだから俺は行くよん。じゃあねえ」

あややを引き剥がして再び移動する。

いつそのことにとりんの家に泊まろうか…いや、流石に迷惑か……

それに直った以降の段取りも考えるところのままの都合の方が良い。

そうこう考えているにとりんの家に着いたので呼んでみる。

「にとり〜ん。起きてる？」

「コウ、こつちこつち！」

家の裏手から声が聞こえた。どうやら裏にある作業場に居るようだ。

「おはよう、にとりん。なにやってるの？」

一見すればガラクタか金属の塊にしか見えない中にうずもれながら何かをしていた。

「昔作ったコウの腕の配線の設計図がないか探してるんだけど…」

「あれば都合が良いの？」

「一から作らなくていいから時間の短縮にはなるよ。無くてそこまで違いはないけど」

あればあるで良し、無くてもそれはそれでいいということか。一分一秒を取るようなことでもないのでそれよりは材料を持ってきたほうが有意義かも知れない。

「それなら時間もそこそこだし、地底に行く？それとも、今日は別行動にする？」

「材料は私が居なくてもいいかも知れないけど、もしもがあつたら困るし、設計図は参考にするために探してたから一緒に行くよ」

「今日は水筒もあるから時間の余裕もある。にとりんの準備が出来次第行こうか？」

「私も水筒はしっかり用意してるよ」

勢いよく飛び出してきたにとりんの腰にはまるで腰布の如く大量の水筒が括りつけられていた。

「確かに準備万端だねえ」

「まあね。流石にあんな醜態を見せた後で何もせずってわけにはいかないし、水筒をかき集めて一括りにしたんだよ」

「へえ…それはまた凄いねえ」

「早速地底に行こうよ、準備万端でも流石にあそこはきついから早めに済ませたい」

「にとりんの気持ちはよく解かるよん。じゃ、行くけど、あれはそのままでもいいの？」

あのガラクタの山はどうするのか…整理してから行けばいいのか、それとも放置していてもいいものなのか。

「どうせ使い道も分からないものばかりだから前も今も変わらないよ」

そう言いながら飛び立っていく。後れ^{おく}を取るわけにはいかないのですぐさま飛び立ち、にとりんの横に着く。

「コウ、昨日はどうだった？」

昨日……特に何も変わったことはない。少し脱水に近いものもあったが、たいしたものでもない上に既に治っている。

「別に……可もなく不可もなしってとこかなあ、体調も良いままだから。にとりんは？」

「私も同じくだよ。体調はもう大丈夫」

「何をしようにもにとりんが居ないと話にならないからねえ」

「それって褒めてる？」

「勿論。持つべきものは友達だと思うよん」

「それは確かに。そういえばコウと会ったきっかけってなんだったっけ？」

「ほら、腕が千切れた時にどうしようか彷徨^{さまよう}ってたらきゅうりをくれて、【そんなことなら作ってあげる】って言うてくれてからかなあ」

「へえ……そういえばそんなこともあったね。最近特に噂もたつてないし、無事で居るものかとも思ったけど、コウは殺しても死なないような奴だからね」

「それって褒めてるの？」

「さっきのお返しだよ」

全てがさっきの通りならつまり、褒めているということか……

「ありがとねん」

ただの移動も二人居ると楽しいものであったという間に地底に着いた。

「到着……したねえ」

「うん。これからがある意味大一番だよ」

暑さとの戦いがにとりんにとって一番ということか。しかし、にとりんなら同じ間違いは二度としないだろう。

「力仕事なら何とかなるからねえ。どんどん使ってよん」

「うゝにゅゝうゝにゅゝ」

灼熱地獄まで到着すると、お空が柔軟体操のような、器械体操のようないきなり動きをしていた。

「お空、今日はちゃんと金属を集めに来たよん」

「あ、コウだ。私も今まで作ったの集めてみたよ」

そう言うお空の後ろには確かに光沢のある塊が多数あった。種類の判別はとりん任せになるが、揃っているのなら運ぶのは自分なのでどちらにしても助かった。

「よし、私は早速必要なものを見つけよう。それまではちょっと待ってね」

「あいさ、了解」

そう言うてにとりんは金属の塊のところに行ってしまった。特に何か出来るわけでもないのだからその間は待機になるだろう……

「コウ、さとり様がたまには会いに来て欲しいな、って言うてたよ」ととりんか。最近会うにはあったが、殆ど関わることなく別の場所へ行ったので会っていないようなものだろう。身長が伸びたとか、目が増えたとか、何かあるのかも知れない。

「まあ、最近会ったのも殆ど偶然みたいなもんだし、つもる話もしてないからねえ」

「お燐も楽しみにしてるから地霊殿に行こ」

「お燐も仕事中の筈だし、せめて腕が出来てから会いに行くよん」

「コウって珍しい人間だから割と地底の中でも有名なんだよ？」

確かに機械の腕をもつ人間は珍しいだろう。それ以外にも自分は仙人なわけでもある。

「まあ、普通がよく分からないけど、自分でもそこそこ異分子だと思っし、そういう意味でなら有名なかなあ」

「そうじゃなくて、地底の妖怪って地上よりも危険なのが多いから関わるのが珍しいんだよ」

【自分が】ではなく【自分の行いが】ということか。それならば確

かに珍しいことこの上ないだろう。

「ああ…そういうことか。俺は妖怪も含めて万事を請け負^{もち}ってるからねえ。飛脚屋もやってるけど、俺の方が危険でも出来る分こっちのも顔が利^きくからねえ」

実際金銭的な部分は人間から、妖怪の依頼を請け負うことで何が良いのかいうと恩を売れるということだ。いくら自分が強かろうと人間の域を出ていない限りは妖怪の方が強い。それに、友好的な妖怪には情に厚い者が多いので暮らしていく上での重要な助けになってくれる。

「へえ…。じゃあ早速地霊殿に行こ」

「人の話は聴いてたよねえ？」

「途中からよく分からなかった」

「……」

お空の鳥頭を忘れていた…。しかし、知り合いにも鳥の妖怪は居るが、計算高かったり、料理上手だったりなので一概にはいえないのだろう。

「あ、お腹空いた」

「流石に昼食まで準備はしてないよん…」

さっきまでの流れを完璧に無視した言葉だ…一度何を考えているのか見てみたいと思う。更には飛び立って何処かへ行ってしまった。管理を任されているのではないのか……

「コウ、集め終わったよ」

「それなら俺が——少ないねえ」

にとりんが分けたであろう金属類は小さめの風呂敷に包める程度のものだった。

「前腕一本ならこんなもので足りるよ。これでも大目に見積もってるからね」

「へえ…じゃあ早速持つて帰ろうか？」

これで十分なら出来るだけ早く帰るのが上策だろう。現にとりんは息をするのと汗をぬぐうのがほぼ同じ規則で行われているので精

一杯なのだろう。

「うん。ここからはコウに頼むよ…あと、飲み物を……」
「全部飲んじゃったの？」

あの竹筒は十数本程度あっただろうに、さっきの合間に飲みきったとは…疑うわけではないが、それでも早いと思う。

「うん……やっぱり此処は河童には合わないよ」

懷から水筒を取り出してにとりんに渡すとすぐさま飲み始めた…

「コウ…さとり様が今日のお昼ご飯、親子丼だつて」

お空にとつては共食いということに突っ込むべきなのか、いつの間にかさとりんに誘われていることに突っ込むべきなのか……

「にとりんも一緒だけど？」

「大丈夫だよ。二、三人増えても別に気にしないと思うし、こいし様とスタなんとかの分もあるから」

「スタイリツシュだよん…まあ、にとりんに訊いてみるから答えは保留でねえ」

そうか…スタイリツシュも来るのか。多く接点があるわけではないが、不思議と縁がある気がする。

「うん、分かった。行かつて言つとくね」

そう言つて飛び立つて行つた。保留の意味を確実に解かつていなかっただろう。にとりんは回復したのか少し楽そうにしている。

「にとり〜ん。知り合いのところで昼飯を食べることになったんだけど、いい？」

「其処つて此処とどっちが暑いのか？」

恐らく暑いのは地底でも此処だけだろう。

「此処よりは涼しいよん」

「ご馳走になるよ。ちなみにそこまでは飛んでいくのか？」

地霊殿までは歩いてでも飛んでも行けるが、手間を考えると飛んだほうが無難だろう。

「そうなるよん。俺が道を知ってるから、先導するからさつさと袋に詰めちゃおう」

手早く風呂敷に包んで飛び立つ。お空が知らせているのでこの場所に長居をしても無駄にしかない。

「随分暑さも引いてきたねえ」

灼熱地獄から離れると嘘のように熱もなくなってひんやりとした空気がなった。こうなると昨日は大した時間居なかったが、今日は半刻（一時間）以上は居たので服にじっとりと汗がついていて気持ち悪い。

「生き返るような気分だよ…やっぱり河童は水の子だからうだる暑さは勘弁だね」

「人間でも勘弁だよん。」

「それもそうだね…」

それから数分で地霊殿に着いたが、結局案内人も居なかったので直行で食卓に向かった。

「いらっしやうい。何名様ですか？よく焼きますか？生焼けにしますか？」

エプロン姿のお燐が用意をしていた。確かに妥当な組み合わせなのだが、少し意外に思う。

「二名だよん。それと、食べ物にはちゃんと火を通してねえ」

「冗談だよ。今日はお兄さん以外にもお客さんが来てくれてるし、私達もさとり様も嬉しいんだよ」

確かにこの地霊殿に客が来ることは稀だろう。それにお空やお燐、地底の妖怪は基本的に明るい性格が多いので嬉しいのだろう。

「暇があればねえ…働かなきゃ食べてけないし、色々大変だからねえ」

「それはごもつとも。毎日遊んで暮らせたら良いと思えども、上手くならぬがこの世の常…」

「それでも食えるだけましと思って汗を流すさ——ってね？」

「ええっと…にとり？だよね。どうも、気が合いそうだよ」

どうやらにとりんとお隣の波長が上手い具合にかみ合っているようだ。話に割り込む気もないので一足先に食卓に居ると、さとりんがやってきた。

「いらつしやい、コウ。大変みたいだけど、平気？」

心を読んでいるのだから平気も問題も分かっているのだろうが、そこまで言ってしまうば会話にはならない。

「全然平気だよん」

「嘘。貴方は喪失ということに対して人一倍恐怖を感じているのに…」

隠し立てするつもりはなかったが、全てお見通しということか…確かに喪失は怖い。一度その恐怖を味わえば、それは慣れることなく増していくばかりだ。

「さとりんには敵^{かな}わないねえ……」

「コウ…」

自分には人の考えていることが分かる能力を備えているわけではないが、表情から感情を読み取ることとはなんとなく出来る。

「心配は要らないよん、これは本当。俺は失うことは怖いけど、失ってからになるようになる。そういう人間だからねえ」

無くなったら埋めればいい。物事は失うだけではなく、創ることも出来る。損だけなんてまっぴら御免だ。

「強いね」

「強くしてもらったからねえ。もっとも、さとりんの方が数段上だと思っよん」

生きた時間、受けた経験、双方共に自分では比較にならない程のことがあっただろうに…

「コウ、私は上も下もないと思うわ。その人の経験はその人にとって最も高い意義を持つと思うわ」

「さとりん…」

これで見た目が成長していれば…

「それは別問題よ…それと、私も努力してるから……」

「ごめんね…」

さとりんは心を読めることを忘れていた…思ってもいないことを言うことはある、しかし、思ったことはその人物にとっては紛れもない真実なので言い訳のしようもない。

「別にいいわ。悪意を持って思ったわけでもないし…」

しかし、あの二人…お空もどこへ行ったのかは分からないが、少し遅い気がする。

「ちよつと二人の様子を見に行ってくるよん」

そう行つて台所へ向かう。

「そう、その通り——あ、コウ」

「そうだよん。二人共少し話しこみすぎじゃない？」

「あ…流石に話しすぎたね〜にとり」

「うん。でも、新しい親友が出来たことが二番目の収穫だよ」

お互い明るく友好的なのでこの打ち解けの早さも当然なのだろう。

「まあ、つもる話を話すなら人が多い方が良く、運んじゃおうか」
お燐が手早く盛り付け、お盆に載せる。そして運びきれない分は念動力で持つて行く。

「あれ〜？お空はまだ来てないの？」

依然として食卓にはさとりんしか居ない。お空が来た形跡もないので来なかったのだろう。

「目の前に居るわ——」

目の前…親子丼…鳥肉…まさか！？

「——冗談よ」

「勘弁だよん…さとりんが言うことは冗談に聞こえないんだからねえ…」

「それはごめんなさい。お空にはこいし達のところに行つてもらっているから先に食べましょう」

確かにそれなら妥当だろう。しかし、スタイリッシュも地理に疎い

わけではないのだから平気だと思う。

「ふうん…じゃあ先に食べようかなあ。いただきます」

料理も冷めないうちに食べた方がよいので机に置いて食べ始める。卵はふつくと、鶏肉にもすっかり味がついていて美味しい。が、丼ものの嫌なところである汁のせいで飯が上手いこと掴めない。いくら器が留まっても箸では難儀なことこの上ない。

「コウ、スプーンでも使う？」

心を読んだのか察したのかは分からないが、さとりんが訊いてきた。「あのレンゲみたいなやつか…そもそも最初から頼んでおけばよかった…お願いするよん」

「すぐ取ってくるからちよつと待っててね、お兄さん」

そう言うが早いかお燐が脱兎の如く――兎ではないが。走って数十秒後には持ってきていた。

「あ、ありがと、お燐…」

この速さは飛脚屋といい勝負をするかも知れない。もつとも、かたや妖怪、かたや人なので飛脚屋の方が凄いのか…

スプーンを使っただけで食べてみると、これは楽だ。箸よりも数段食べやすい。

「まったく、最後とはな…」

「「お腹空いた」」

「お帰り、こいし、お空。秋山もくつろいで頂戴」

随分遅れて三人がやってきた。スタイリッシュは普段の倍くらい気疲れしているような表情をしている。

「スタイリッシュは随分お疲れのようだけど？」

「こいしだけならまだいい。が、空と組むと手に負えない。まったく…とんだ案内人だ」

確かに三人中自由人が二人ならさぞかし苦勞するだろう。

「それはそれは。でも、苦勞分の味は保障するよん」

「そいつは楽しみだ。かなりの絶品なんだろう？」

「お待ちどう…三人の分持ってきたから冷めない内に召し上がれ！」

いつの間にかお燐が三人分の親子丼を持ってきていた。

「「いただきま〜す」」

更にこいしちゃんとお空はいつの間にかきちんと準備したのか置かれた瞬間からがつついていている。

「早いねえ……」

「現金だといった方が正しいんじゃないか？流石に俺もコートを脱いで食べたいしな」

「こいし様との旅はどうでしたか？」

「お燐だったか……いや、まあ……一人よりも遥かに疲れて、充実しているだけだ」

「こいし様も楽しそうですし、これからもお願いしますよ〜」

「飽きるまで付き合ってやるさ。それと、紅流の言った通り美味しいな」

「それはどうも。料理人の気持ちも解かるようだよ」

「ちなみに、スタイリッシュの旅の目的ってなんなの？」

「俺の旅の目的か……」

実力者なのだから武装せずとも翔太のように人里で働けば稼げるだろうに……

「あたいも訊きたいよ。是非とも聴かせてくれないかい？」

「別に……あるとすれば、こいしが居るからだ。少なくともこいしが満足するまでは旅を辞めるつもりはない。これは確定しているよ」

「ちなみになんだけど、その旅が終わったらどうするの？」

「まあ……そうだな……根でも張って暮らしてみようか。逆にあんたはどうなんだ？」

自分か……これからのことに計画性を持って生きているわけではないので急に言われると答えに詰まってしまう。

「そうだねえ……弟子でも取ってきてままだに過ごしてみるのも一興あると思うから、道場でもやってみようかなあ」

「あんたが師範か……悪くない。弟子の負担は大きそうだな」

「その頃には丸くなってる筈だよ。最悪この剣を託せる人間に会

えれば満足かなあ」

今のままでは弟子を取れたとしても教えられることは無いに等しい。
「その剣には何か思い入れでも？」

「剣だけってわけでもないけど、形見なんだよねえ。手足のように使えるようになったのは四、五年前だけど」

これが無ければ恐らく思い入れもない何かしらの剣か刀をただ買っていただけだろう。

「なるほど…ちなみに腕はどうなんだ？」

「そこに居るにとりんに頼んで新調してもらってるからもうちょっと掛かるけど、直せるよん」

「そうか…身体の方は？」

そういえばそこそこ斬られていたが、今はよっぽど強い力で何かしない限りは痛むこともない。

「殆ど全快みたいなものだから平気だよん。これはスタイリッシュも同じことじゃない？」

「俺ももう全快…いや、正直こいし達のせいで少し疲れたくらいだし、まんざらでもない表情をしているので嫌な気疲れではないのだろう。案外世話焼きなのだろうからこいしちゃんとの旅はお互いに得るものもあるのだろう。」

「ごちそうさま、美味しかったよお燐。まだ話しこんでいたいけど、成すこと済ませてまたくるよ」

にとりんも食べ終わったようだ。これからが本番、気を引き締めておこつ。

「ごちそうさま、俺も帰るよん。縁があつたらまた会おうねえ」

そう言つて地霊殿を抜け、地上に戻る。「コウ、早速だけど寸法を測るから右手を出して」

「あいさ了解」

上着のローブは邪魔になるだろうから先に脱いで右手を見せる。

「大人だからそんなに変化があるとは思わないけど……」

しっかり寸法をとること数十分、外装の設計図が完成したらしい。

「外装は何とか作れるよ。問題は内部で、神経と繋がないと動かないから慎重に作らないと……」

確かに外側は鎧のようなもので腕になるための要は中身の方だろう。動かない腕なら無い方が良く。そうしたくないからにとりんのところに来ているわけだが。

「前は神経の具合を試すための機械を別に作ってもらったけど、何か参考にならないかなあ？」

以前はその手順の段階で具合を試すための機械で良い具合に調整できたのもう一度同じようにすれば設計図が無くてもかなりの時間短縮が出来る筈だ。

「あ、その手があった。流石コウ！」

そう言っただ礫の中に特攻して数分、回線だらけの腕を持ってきた。ただ、合わせれば良いだけだよねえ？」

「まあ……そうなるかな。いくよ……」

そう言っただ腕の根元に回線を合わせる……合わせた瞬間に強い電気が通うのであまりしたくはないが、背に腹は変えられない。

「いつでも——あいだっ!？」

「よし。コウ、動かしてみて」

せめてなにか掛け声があれば良かったのだが、仕方がない。てきとうに握ったり離したりを繰り返す……別に違和感を感じない。

「こんなものだねえ。違和感もないし、この通りかそれ以上——は望めないかなあ」

「スペックアップは出来なくてもないけど、あんまり意味がないと思う。よし、じゃあ銀を……」

そう言っただ金属の塊から探していく……

「全部銀色だから分かんないけど、あった？」

「ない……ない、ない。どこにもない!」

どうやら銀がないらしい。詳しくは分からないが、大変なのだろう。「銀がないと困るの?」

「ないとスペックアップどころか、ダウンしちゃうかもしれないん

だよ。銅線もないからこれから……」

「探せば良いんだよん。銀位なら紅魔館辺りに行けばあると思うし、行ってくるよん」

なければ…香霖堂やその他諸々いくらでもある。

「お願い。私も探すから一旦二手に分かれよう」

「申の刻（午後六時）には戻るよん」

そう言つて飛び立つ。最初は……紅魔館にしよう。

飛び立つてからは直線距離なので数分もあれば紅魔館に着けるだろう。

「紅流紅兵！私だ！」

突然下の方から声が聞こえた…この声は、

「離狗で合つてると思ふけど、どうしたの？」

今居る場所は紅魔館と人里の間くらいなので意味もなく来たりはしないだろう。

「合っている。鍛冶屋で薪集めを頼まれたから樹の一本でも取つてこようとしていた」

離狗なら本当に樹を一本取つてきそうだ…

「なるほど…鍛冶屋かあ」

意外といえば意外だ。しかし、離狗は外界の人間なので殆どなんでも出来るだろう。もしかすれば万屋になったのかも知れないが、その辺は別に構わない。

「その節は済まなかった。腕はどうなった？」

「お陰さまで今製作中だよん。まあ、そろそろ新調時だったから気にしないでねえ」

「そうか…私で助力出来ればなんでも言つてくれ」

頑固かどうかは分からないが、律儀な人間だ…

「じゃ、その時は是非ともねえ」

「そうだ、翔太から魔理沙を見かけなかったか訪ねられたが、見た

「よねえ……」

疑う余地なく完全に熟睡している。どうしたものか…無視して入るのは容易いことだが、そうした場合の後が怖いのでおいそれと入るうとは思わない。

「やつほうく朝——間違えた、昼ですよ」

「zzz…zzz…」

さて、どうしたものか…このまま留まり続けるのはあまりにも無駄だ。

「さくちゃん、さくちゃん！」

「寝てません！寝てなんていませんとも！！」

あたかも起きていたかのように取り繕っているが、残念。「お手間を掛けさせてしまつて申し訳ありません。美鈴、三本よ」

次の瞬間美鈴の額には三本のナイフが刺さっていた。

「いつも思っけど大丈夫なの？」

「なんとか平気です」

涙目程度で済むのは彼女が妖怪だからなのだが、額から流血しつつ平気と言われるのはどうも違和感が満載だ。

「それなら後でまた追加してあげるわ、中国」

「美鈴です…」

「中国」

何となく口走ってしまった。

「紅流さく…」

恨めしそうなジト目で見つめる美鈴を避けてさくちゃんのところに行く。

「さくちゃん、ここに銀つてないかなあ？」

冷静に考えればこの屋敷に入らなくともさくちゃんに訊けば紅魔館の大体のことが分かる筈だ。

「そうですね…恐らくこの屋敷内には存在しないと思います」

意外な返答だ。

「訊いておきながらだけど、ないの？」

「お嬢様方から小悪魔までの種族は銀を非常に苦手とするので銀食器のたぐいから家具の装飾にも一切使われていないと思います」

確かに吸血鬼は銀が弱点というのは有名な話だ。同じく悪魔や魔女も苦手とするのでよくよく考えれば紅魔館に銀があると考えるのは難しい……今更だが。

「確かにねえ……」

「お役に立てず申し訳ありませんが……」

「いや、こつちこそ下手な考えで来たのが間違いだし。香霖堂に行ってみるよん」

半妖の主人だが、あそこならなんとかなるだろう。

「そうですか……健闘をお祈りします」

「頑張ってくださいね」

「ありがとねえ」

そう言つて飛び立ち、香霖堂を目指す。

銀…普通の鉄よりも手に入れられないものだとは分かるが……そうだが、香霖堂までには人里を経由するのでそこでも少し探してみよう。しかし、自分の家は今頃どうなっているだろうか……霊山の頂上付近に作っているでたまに変なものが棲みついていることがある。ネズミやそのたぐいならば気にすることもないが、妖怪に壊されていないか…危険がないわけではないので近いうちに見に行っておこう。

「呼んだかな？」

「ん？誰かなあ？」

空中で不意に話しかけられるとは…と、振り返ってみれば鼠妖怪のナズーリンが居た。

「私だよ、紅流。いつぞやは世話になった」

詳しくは忘れたが、寺を建てるというので、確かにその通り妖怪では頼みようもなく、最悪退治されるだけだろう。かといって数人しか居ない面子で寺は建てようがないということで自分、飛脚師が資材の運搬や職人の手配をを請け負ったことがある。

「お礼は半分受け取っておくよん」

「ふふ、紅流らしい。なにか探しているのなら任せてくれ」

そういえばナズーリンは物探しの達人だった。かなり漠然とした注文だが、いけるかも知れない。

「じゃあ、銀を探すことは出来る？」

「銀、貴金属の銀かい？」

「そう、なるべく誰の物でもない銀があれば教えてほしいんだけど出来る？」

「ふむ…とりあえずやってみよう」

そう言つてナズーリンは杖のようなものを構えてから瞑想し始めた。

「むう…ただの銀は幻想郷中に存在するからその辺を掘れとしか言えない。まとまった銀なら…動いている。恐らく誰かが持ち歩いているものだろう」

誰かのものならあまり期待できない。なにか対価になるものがあれば別だが、さしあたっての持ち合わせはない。

「そうかあ…仕方ないねえ、香霖堂に行ってみよう」

「確かにあそこなら他人のものでも手に入るだろう」

そこが駄目ならもう諦めるしかないかも知れないが、行かないことには始まらない。

「健闘を祈るよ」

人里への道は諦めて、香霖堂を目指す。

にとりんの方は銀を見つけられただろうか……

「いらつしゃい——と、紅流さんか」

「やつほう森近の旦那。突然だけど、銀はない？」

いつも店に行けば居るが、一体どんな一日を送っているのだろうか…

「銀かい？」

「そう。あれば譲ってほしいんだけど」

「探してみるよ。少し待っててね」

「しかし……本当に色々置いてるねえ」

あれは、御霊煌！？いや、ただの剣の柄か。これは、乾燥ワカメに鰹節…知り合いの猫叉にあげようか……しかし、会える機会がないので今回は断念しよう。

「紅流さん、申し訳ないが、うちには今銀は置いてないみたいだ」

「本当に!？」

「いつもちゃんとお代を払ってくれるお客さんに嘘なんて吐かないさ。もっとも、探し物を出せないのは本当に申し訳ないけどね」

これは困った。ここに無いということは幻想郷中のどこを探しても無いだろう。

「さて…どうしようか……」

「知り合いに銀を持っていそうなのも居ないから……」

「ちなみにどんな知り合い？」

「主に貧乏巫女と盗難魔女、たまにその他かな」

確かにその両者なら共に銀を持っているとは思えない。

「にとりんに期待かなあ」

「力になれなくてごめんね」

「旦那のせいじゃないよん」

落ち込んだまま香霖堂から出て、飛び立つ。

さて、一体どうしたものか……

「おかえりコウ。どうだった？」

「思い当たるところを手当たり次第にいったけど、収穫なし……」

「はあ……そっちも……」

「ということは、お互いに駄目だったみたいだねえ」

これは本当に死活問題になったかも知れない。

「ごめんねコウ。地底にも行ってみただけ見つからなかった」

地底に行つて見つからないのなら諦めた方が良いのかも知れない。

「にとりんのせいじゃないよん。無いなら無いで作っても良いんじゃないかなあ？」

「にとり、夕刊を——紅流？」

意外な人物がやって来た。

「飛脚屋」

「飛脚師だからな。とりあえず夕刊だ。紅流、腕の調子はどうだ？」
飛脚屋か……もしかすれば力になるかも知れない。

「まあまあ、かなあ。ところで、銀を探してるってチラシを幻想郷中に配れない？」

「銀？どんな銀なんだ？」

「何でも良いけど、飛脚師がまさか持ってたりするの？」

自分が言うよりも先ににとりんに先を越されてしまった。

「意外だと思うのは解かる。でも持っている、他人のものだがな」
完全に盲点だったとしか言いようがない。

「ちなみになんなの？」

「先祖の胸に刺さっていたらしい杭だ。レミリアから預かった通行証のな」

吸血鬼を封印した杭……紅魔館に存在しないと思っていたが、そういう形で持っているとは……

「使っちゃ……駄目？」

「ばれなきゃ良いよねえ？」「いやいや、俺にどうやって責任を取らせるつもりなんだ……」

当然そういう結論に至るだろう。自分も他人からの預かりものを許

可も取らず人に渡すようなことはしない。

「ま、当然だよねえ……」

「渡しても良いような気もするがな……」

「というところ？」

「いや、単純にレミリアなら【これも運命】とか言いそうだと思うてな」

「確かに言いそうだけど、言いそう——で使っちゃうのはねえ……」

「そうだな……言い訳をどうするか……」

「問題はそこじゃないよねえ？」

「見るからに値打ちものだとは思いつし、勝手に使うのも悪いとは思う。でも、それが友人を見捨てる理由だとは思わない」

「うーん……じゃあ、訊きに行ってみる？ 今からならそんなに時間もかからないだろうし」

「それが一番——いや、レミリアに訊くよりも……」

飛脚師が普段見せることのない黒い笑みを浮かべた。

「ちよつと、ごめんねえ……作者、作者！」

「どうした？」

「「作者！？／ひゅい！？人間！？」」

「そうだが、何か不都合でも？」

「いや、都合どころじゃなくてねえ、飛脚屋の性格を変えちゃ駄目なんじゃない？」

「まあ……広い意味で致し方なしよ。前後編と言いつつも無視したこの体たらくで続ける得がなにもない。というわけだ、紅魔館までは走るなり飛ぶなり好きに行けばよからうて」

「手伝ったりしないのか？」

「勝手に呼び出し説明をさせた上手伝いまで強要など言語道断よ、手前の力で臨め」

「まあ、流石にこのメタ展開はまずいよねえ」

「そういうことだ。では、物語を続ける」

「フランに頼んでみよう」

「コウ、飛脚師が黒い……」

「うん、作者が悪いねえ」

「俺の脚なら半刻（一時間）あれば悠々着けるが…訊くだけならどうだろうか…」

走って飛脚師本人が訊いても、自分が飛んで行って訊いても結果はほぼ同じだろう。

「俺が飛んでいくのと飛脚屋が走るの、どっちがいいかなあ…」

「一応持ち主は俺だから訊きに行くのが筋だろうが…」

「使うのが俺だからそれも…ねえ……」

「それなら二人で行くのが定石だと思う」

「飛脚師の言う通りだねえ、ということ…俺は飛ぶけど」

「俺はそもそも飛ぶと言うより浮くだから…走る方がよっぽど性に合ってるよ」

「二人共、私は——」

「待機」

「用無しおk」

にとりんの話し方までも変えられるとは…うかうかしていると移動中も割愛されそうだ。

「ggdgd乙」

割愛。

「……もう、気にしないことにしようかあ…」

一瞬のうちにしてにとりんの工房から紅魔館へと到着した。正直疑問や不満が満ち満ちとしているが、それよりも飛脚師だ…

「それがいい。美鈴さん、入るよ」

「勝手知ったるってやつ？」

「かなり馴染みがある方だな。といっても、レミリアへの用事は少ないが」

「フランちゃんに？」「それもどちらかというと仕事ついでに会い

に行くといった方が正しいな。俺が一番呼ばれることがあるのは図書館だ、例えば新刊を届ける、定期的に魔理沙の盗っていく本の返却位が紅魔館で請け負う仕事だ」

確かに紅魔館に手紙を届けるというのは少ないだろう。紅魔館に用事がある主な人物達は手紙なんてよこさずに直接何かしにやって来る。

「それもそうかあ……」

「まあ……日用品を頼まれたりすることもままあるがな」

そういえばこの屋敷で使いを頼もうと思っただけかなり苦労するだろう。さくちゃんは居なくなると紅魔館が成り立たなくなる、それ以外ではまともに仕事が出来るかどうかわからないものばかりなので飛脚師はあらゆる意味で紅魔館に必要な存在だろう。

「そういうことは俺には依頼されないからねえ」

「流石に万屋じゃ範囲が広すぎるから飛脚の方が適しているんだろうな」

「まあ……ねえ。じゃ行こうかあ」

飛脚師と話しているだけでは状況は発展しないので屋敷の中へと進む。

「俺は地下に行ってくるが、紅流はどうする？」

飛脚師が地下に行くならば自分はレミリアに会う方が良さそうだ。

「じゃあ俺は主の間に行つとこうかなあ。一応、生きて帰つてねえ」

「……大丈夫だ、何とかするから。それでも怖いんだから縁起でもないことを言わないでくれ」

「それはごめんよ」

「じゃあ、そつちも健闘を祈る」

そう言つて飛脚師は地下へと向かつていった。

確かここが主の間だった筈……一応女性の部屋なので数回扉を叩く。
「入ってきなさい」

威厳と幼さの降り混ざった声で返答がされたので扉を開けて入る。

「じゃ、お邪魔するよん」

「貴方は、紅流ね……」

「その通り、いきなりの来訪は詫びるけど、その上で頼みたいことがあるんだ」

「ええ……知っているわ。飛脚師も見た筈なのに……」

「ああ……飛脚屋なら地下の方に行くって——」

「えー！？ちよつと、それは本当なの？」

なにかまずいことでもあるのだろうか……

「そうだけど？」

「癩癧かんしゃくを起こしているのよ。私のせいで……」

癩癧を起こすには何かしらの理由が必要な筈だ。一体何をしたいというのだろうか……

「ちなみにどんな理由なのかなあ？」

事と次第によつては手出しが出来ないが、逆に手出しが出来るかも知れない。

「フランの……ケーキに乗っていた母を食べてしまったのよ……」

「へえ……それで、今は？」

「咲夜が必死に宥めているけれど……飛脚師が行っているの？」

これは飛脚師の命が心配になつてくる。

「うん……さくちゃんだけでなんとかなる？」

「そうね……飛脚師なら……」

「駄目じゃない？」

「飛脚師を失うのは大きな痛手ね」

「じゃ、ひとまず地下に行つてくるよん」レミリアの返答は待たずに地下へと急ぐ。

「紅流様……」

地下牢の中から土煙で汚れたさくちゃんが現れた。飛脚師の姿が見

えない…

「飛脚——」

「ストップ……」

一言を言い終わるその一瞬よりも速く、口を塞がれた。

「えっと…今どういう状態なの？」

「簡潔に申しますと、癪癪を起こされた妹様が地下に閉じ籠ってしまっただので説得していた時に飛脚師様が参られてふて寝の相手をするということ今丁度落ち着いたところです」

さつき大声をあげていれば最悪挽肉になっていたかも知れない…危ないところだった……

「助かったよん、さくちゃん」

「お礼を言われる程ではありません。しかし、飛脚師様の様子が気になります」

確かに。死地に赴いた人間——しかも自分と親しい者ならなおさら気になる。

ゆっくりと部屋のなかに入り、飛脚師の安否を確認する……

「飛脚師？」

番外編・談話会3（前書き）

O
r
z

番外編・談話会3

飛脚屋（以下飛「酷くないか？」

オル＝ト（ry（以下オル「何か異があると？」

飛「三文字目から誤字を出す作者が何処に居る？」

オル「これはとんでもない領域の息抜き…本気で楽しまずになんとする！」

紅（以下紅「俺の名前略す意味無いよねえ？ていうかこれ以上略せないよねえ？」

オル「この企画に最適な貴様がそんなノリで誰が勤められようよ？」

紅闇翔太（以下紅「俺だっ！！」

全員「名前が被るから却下」

紅「不幸だー！！」

紅↑コウ「はいはい某幻想殺しさんは下がってねえ」

↓紅闇強制帰還中↓

飛「紛らしさ回避の為にっ前の名前を使っているのに本末転倒だからな」

オル「その辺りは私の一言なのだが……しかして手間を省けたことは感謝する」

飛「礼はいい。それより今回のゲストは誰なんだ？」

オル「早々だが喚ぶとするか……いでよ、藤原妹紅！」

藤原妹紅（以下もこ）「私の名前が何故あなつた？」

オル「構うまい」

もこ「いやいや……お前……」

紅「まあまあ、昆布茶でも」

もこ「コウか。済まないな」

飛「一つ貰えるか？」

紅「どうぞ」

<～一旦休憩中～>

飛「で、妹紅を喚んだ理由は？」

オル「たいした話でもないだろうが、恒例の過去話を――」

モノローグ（以下もこ）「私が承^{わたくし}りましてお話致します」

紅「レギュラーメンバー勢揃いかなあ？」

モ「身に余る光栄です。それでは――」

飛「ちよつと待ってくれ。前回、前々回は俺絡みだが、妹紅とそこまでの関係があるわけじゃないぞ」

紅「俺ももこたん絡みでたいしたことはなかったけどねえ？」

オル「……実は紅闇の話だ」

飛紅「翔太… / 最初の方で…」

オル「そうだ。再び喚ぶしかあるまいよ…私は気が乗らない、しかしてそんなわけにもいくまいで…いだよ…血染めの戦狼、紅闇翔太！」

紅闇翔太（以下血「ちよwww以下血つて、おいwww俺扱い乙orz」

オル「黙れ…言霊・爆」

血「あぎゃあああ！！！」

飛「爆発の最中だが済まない…本編では三割方真面目な方なんだ。視聴者の方々に勘違いされないように訂正を――」

スタイリッシュ・秋山典広（以下スタ「大丈夫だ、問題無い」

飛「秋山？よく来れたな」

スタ「何も考えずにこいしについていった結果がこれだよっ！帰ろうにもこいしとはぐれてしまった…」

血「何となく来れるって…流石秋山wwwそこにシビレるッ 憧れるッ！」

オル「人選を誤ったか……」

飛「いや…否定は…しない。だが、他にゲストは誰が居る？」

オル「それならば喚ばずとも来るだろう」

チルノ（以下チ「あたいがきてやったぞー！」）

大妖精（以下大「駄目よ、チルノちゃん…すみません」

オル「来る者は拒まぬとも。気に掛ける必要など無し」

大「クラフトさん……その節はありがとうございます」

オル「ああ…約束は果たす。今話すのも憚るうかとも思ったが言うでしょう」

紅「新しいネタでも思いついたのかなあ？」

オル「いや、大妖精絡みの話を一話な。鰻屋・万屋・飛脚屋の三拍子込みだ」

紅「俺も入ってるんだねえ」

飛「飛・脚・師だからな、作者」

オル「貴様の名は…語呂が悪い！」

飛「じゃあ初期段階から失策しているだろうが…」

オル「貴様はただの飛脚ではない。神たる人だ、師の文字を冠するのは当たり前よ」

飛「ちなみに俺以外の半人半神は誰か居たりするのか？」

オル「出ることはまず無いが、ケルト神話の英雄クー・フリーンだ」

飛「なるほど…考え無しに色々しているわけじゃあないんだな」

オル「この作品にも一応コンセプトがある」

飛「【絆】とか【繋がり合い】だったかな？」

オル「その通り。だが、制作において私が心に留めていることが【実際にありそうなこと】だ」

飛「それで俺は飛脚か」

オル「それもある。万屋も鍛冶屋も幻想郷にあって不自然にならな
いもの考えた」

紅「俺の仙人設定もかなあ？」

オル「その通り。離狗の鍛冶屋兼金物屋もありそんな職業という理由で就かせた」

飛「だが、翔太や秋山はどうなんだ？」

オル「あれは例外だ。正直翔太が一番手に負えない」

血「イイイヤッホオオ!!」

オル「現に今も手に負えない」

紅「一回殺つとく？」

飛「いや…流石に拙い^{ます}だろう。実害もないわけだし…」

血子「俺達 最強オオ!!」

大「駄目だよチルノちゃん。翔太さんも…」

オル「気にせず休め、大妖精よ。職神召喚・天照大神^{あまてらすおおみかみ}」

天照大神（以下天「我呼ぶ声に答え、ただいま推参…っと、何用だい旦那」

オル「滅せ」

天「え！？いやいや」突然何かと思ったらそんなことって、勘弁してくださいよ…」

オル「殺れ」

天「まあ、そんなに慌てずに…明るくて良い感じじゃないですかい？」

オル「強き陽は邪魔になるのみ、均衡とは総和零にならないといけない」

天「いえいえ、今で十分均衡とれてますって。この理論で手打ちにしましょう」

紅「ちよつといいかなあ？」

オル「どうした」

紅「この子の見た目とか皆様が分からないんじゃないのかなあ？」

オル「確かに…失策した。これは天照大神。私の職神で身長は150cm辺り、体重は無く顔立ちは黒の短髪で中性的、性別も無い」

紅「どんな服なのかなあ？」

オル「布切れに穴を開けて被り、腰布で縛った和製ポンチョとでもいうものだ」

紅「寒くないんだ？」

天「特に感じたことはありません」

オル「橙や藍と違い、創った職神のせいだろう」

紅「じゃあ、天ちゃんあまは本人というわけではないのかなあ？」

天「勿論ですよ。そんな恐れ多い…」

オル「そんな愛称では威厳が消えようが」

天「あつしが威厳なんて100年早いですよ」

紅「あれ？天ちゃん一人称我じゃあないのかなあ？」

天「出てくる時は良いんですがね…あつしの性に合わないんで」

紅「実際に天ちゃんに尋ねるけど、男の子？女の子？」

天「あつしは……どちらでもないでさあ……」

紅「オル、性別くらい固定したらどうかかなあ？」

オル「ならば上書きしようか……」

天「あつしが…変わった！」

オル「気分はどうだ」

紅「天ちゃん…どっちなのかなあ？」

天「女です…旦那、なんでですかい？」

オル「幻想郷に逃げ」

天「はあ！？なんでですかい？」

オル「変なフラグは建てたくない。辺りが主な理由だ。ついでに服も新調しておく」

天「新しい服ありがとうございやす」

紅「ちなみにこの娘って強いのかなあ？」

オル「業は中々だ。体術は体重のせいで芥あくたにも等しきものよ。とりあえず茶でも一息いれよ」

紅「俺が取るよん」

オル「済まないな」

血「俺は…全てを超越したッ！何か当たった？」
ガシャン……

紅「ねえ、逝くよねえ？」

天「あつしにお任せを…日輪一片拝借シ我ノ掌に掌握シ永久ノ陽ヲ産ム…偽符ぎふ・灯あかり！」

血「熱ッ！？しかも消えないWWW」

天「旦那…一つ頼みがありやす」

オル「なんだ？」

天「火を消してくれませんか？」

紅「消えないの？」

オル「太陽の一片は伊達にあらずよ。対象には半永劫の熱を与える」

紅「いや…翔太燃えつぱなしたよん？」

オル「忘れていた…」

<～作者消火中～>

血「逝くと思つた…」

モ「埒があかないのでお話を初めましょう。今宵のお話は【戦士と不滅の少女のお話】です。では――」

「これは、どこかの世界のお話。あるところに戦士が居ました。勿論戦士は戦っています。しかし、何故戦うのかは分かりませんでした。

戦士はある時、ふと思いました。もし戦わなければどうなるのだろう…」

この話は誰からも相手にされませんでした。

そのうち戦士は戦わなくなりました。戦いの場所にも現れなくなりました。

戦士は独りでした。戦士の居た国からも戦っている国からも追われていました。

戦士の運命はここで終わりでしょうか？

いいえ。戦士は強かった。どんな強く、多い敵でも屍に変えていき

ました。

そして常に血に濡れていました。

戦士は思いました。これが自由なのだろうか……

答えは出ません。与えてくれる人間も居ません。

いつしかそんな話は語り継がれるお話になりました。

では、戦士は妄想の産物だったのでしょうか？

いいえ。彼は世界から消えたただけでした。

彼は違う世界をさ迷い、ひたすら考えて、求めていました。
答えを。

彼は戦士を辞めていました。ですが、戦うことから逃れられませんでした。
ん。

人ではないものと戦ううちに彼は大変なことをしてしまいました。

初めて逢えた少女に向かって刀を振ってしまったのです。戦い続けるうちに彼の感覚は鋭敏になり過ぎていました。そんな彼を誰が責められたでしょうか……

彼は酷く悔やみました。この感覚は彼にとって初めての感覚でした。今までは何かを殺めることは呼吸あやと同じことでした。

ただ……今回の相手はいつもとは違いました。

そんな少女を見た彼は死とは別の恐怖に襲われました。

彼は人間。仕留め損なったことは何度かあります。しかし一度殺した人間が蘇ることなんて見たことがありません。

少女を介抱しようと近寄った彼は更に驚くことになりました。

少女には傷がなかったのです。

わけが分からなくなっている彼を少女は家に招き、食事をしました。彼は知りました。此処は異世界であること。少女はどんな手段を使っても死を与えられないこと。自分は里の人間として生きれば良い

こと。

彼は自分を変えてくれた少女に感謝し、お礼をいいましたが、気持ち収まりません。

彼がその気持ちに気づくのは、ほんの少し先のお話……

では、これにて戦士と不滅の少女のお話…閉幕と致します」

オル「大儀だったか？」

モ「いえ。これが私の存在理由です、苦と思つたことはありません」

オル「そうか…これからも言葉を紡いでくれ」

モ「仰せのままに」

血「まさか俺のことを知っていたなんてな……」

オル「この語り手は身体の内無限の夢幻を抱えた存在よ」

血「それなら知ってて当然か…」

オル「さて、では今までのおさらいとでもいくか…まずは自己を語ってくれ」

飛「じゃあ俺から始めるか。俺は飛脚師。悠々自適に飛脚をしている。半人半神で微量に神力を持っている…位だな」

紅「次は俺だよ。名前は紅流紅兵、愛称はコウ。気楽に万屋をしていて仙人って位かなあ」

血「俺 参上！」

オル「厨二。以下割愛」

血「ちょwww俺の扱いwww」

割愛。

スタ「俺は秋山典広、人間で、大道芸人をしながら根無し草をしている。今はこいしが旅の供だ」

オル「逆騎離狗は代わりに私が紹介する。種は人、職は鍛冶屋兼金物屋だ。現時点で最強の存在位か…」

モ「残念なお知らせですが、別に設定を考えて頂くことになりました」

オル「なんと……」

モ「このような雑さでは到底理解などされないでしょう」

オル「確かに一理以上賛成だ。別に見やすく書いたものを書こう」

飛「ちなみに、最近俺が空気になっていないか？」

オル「否定はせんよ」

飛「要求するわけじゃないが、出ないのか？」

オル「予定ではしばらく出ない、ちなみに…貴様の家の住人に居候が増える（笑）」

飛「狭いぞ？」

オル「知っている」

飛「食材也大してないぞ？」

オル「知っている」

飛「重ね重ねだが、作者だから当然だろうが、俺の家は誰かを泊めるのは難しいぞ」

オル「最悪食事を与えなくとも生きる。浮遊させれば布団も不要よ」

飛「それは一体何なんだ？」

オル「天照大神だ」

飛「！？いやいや、そんなぞんざいに扱っても良いのか？」

天「極限まで空腹で苦しんで寝る時は力の使い過ぎで疲れたままになるだけです」

飛「どう考えても駄目だろう……」

天「まあ…気にしないでください旦那。これも宿命です」

飛「そんな理不尽な宿命があつてたまるか。ちゃんと食べさせるし、寝床も作る」

オル「それでこそよ。しかして、天照はよく他の場所に移るのでたまにくる居候とでも考えれば良いだろうよ」

飛「何にせよ飯と布団くらいなら用意するから気兼ねなく泊まりに来てくれ」

オル「では、この辺りで現の夢を終わりとしよう。次に目覚める時は天照を頼む」

飛「任せてくれ」

オル「今回は本編となんの関係もありませんでした。が、本当にキヤラは追加します。次回からは参加できませんが、近い内に出します。定期的にこの番外編は行われるのでネタや絡みを大募集します」

番外編・談話会3（後書き）

次回は本編に戻ります。

神は言っている。此処で——（ry）（前書き）

お願いします。後半で出てきますが、天照をいじめないでやってください。

神は言っている。此処で——（ry

<Side-change 飛脚師>

しかし…なんの因果か——レミリアの杭の因果か。フランに会うのは良いことなのだが、不安な気持ちでいっぱいなのはどのようなのだろうか…そもそもフランに会うならば【普通】の部屋に行けばよかったのにも関わらず、進んでいるのが【地下】の部屋というのが理由だろう。

「いやなの！！とっておいたイチゴじゃなきゃやだ！！」

随分と不機嫌なようだ。不用意に自分が入ったら骨も残らないことになるかも知れない。

「咲夜さん、フラン…」

「飛脚師！？」

相変わらずの舌足らずな声がする。心なしか不機嫌さも少し横に置かれたようだ。

「舌足らずは健在だなフラン。咲夜さん、何があつたんですか？」

フランは少し情緒が不安定とはいえ怒りっぽい性格ではない筈だ。

どんな理由があるのか…

「それが——」

「お姉様が私のイチゴを勝手に食べたの！せつかく残したのに…」

なんともフランらしいといえばそうなるが、本人？にとっては重要なことなのだろう。

「その…代わりのイチゴじゃ駄目なんだよな？」

さっきの話から察するに代わりのものは存在しないだろう。

「うん……」

「そうか…」

「私もう寝るから。お姉様には大嫌いって伝えて」

「そんな…機嫌を治してください」

「やだ！飛脚師、一緒に寝よ」

「済まないフラン、よく聞こえなかった。もう一回言ってくれないか？」

「一緒に寝よって——」

「作者権限・時空凍結」

「作者は言っている。ここで死ねば良いんじゃないね（笑）」

「待て、明らかにおかしいだろう」

「その台詞番外編でもほざいていたな」

「いきなり死ねってなんだ、ふざけるな」

「貴様も煮え切らなぬ奴よ、貴様に気がある者が行動を起こしてそれに答えぬとは愚者もいいところよ」

「つまり？」

「逝ってこい」

「ふざ——」

割愛。

「いいでしょ？ベッドは飛脚師と一緒に寝てもまだ一人くらい寝れるから大丈夫だよ」

そういう問題ではない。

「その…フランは嫌だろう？それに今日は暑かったから汗でべったりだし、そもそもなんの得もないだろう？」

「やじゃない…」

「それに——」

次の瞬間、床が陥没した。

「やだ……」

「私からもお願いいたします」

咲夜さん…多数決では敗けだ、実力は考えるまでもない。

「分かった…」

行李を置いてフランの近くへ行く。覚悟を決めるしかないな……

「早く」

そう言ってベッドを叩きながら催促する姿は可愛らしいのだが。

「急かさなくても逃げはしないよ」

とはいっても普段が床に直に布団を敷いて寝ているので少し落ち着かない。

「ねえ、飛脚師は何で来たの？」

「ちよっとした頼みがあつてきたんだ」

「どんな？」

「フランに言っても仕方がないかも知れないが、銀の杭があるだろう」

「うん」

「それが必要になつたんだ。詳しいことは分からないが」

「でもあの杭ってお姉様のものでしょ？」

「ああ…そうだと思う」

「じゃあ、あれ飛脚師にあげる」

「いや…フランから言われてもな……」

一応先祖代々の品ということだったのでフランがいいと言えばいいのかも知れないが、どうするべきか……

「どうせ銀なんてあつても触れないし、お姉様も文句は言わないよ」

確かに家の中に触れないものを態々置いておくこと等はないだろう。

「……それでも一応訊いてみるよ」

色々と良い方向に向いてきているが、それでも筋は通さなければ……

「ねえ飛脚師……なんだか飛脚師の周りがピリピリするよ？」

ピリピリする……一体どういうことなのだろうか……

「銀の杭は置いているが……」

「太陽に当たった時みたいな……でもそんなに痛くないし……」

光についてなら何となく見当もつくが……もしかすれば、

「多分だが、俺が神に近づいているからかも知れない」

邪神なら逆なのかも知れないが、自分はどうやら魔に対して討ち払う力を持ってしまったのもうどうしようもない。

「飛脚師って神様なの？」

「いや、今はそんなこともない筈だが…いずれはそうなるかもな」
「でも、飛脚師は飛脚師だね？」

「ああ、俺はどこまでいつても俺だ。人で一生を終えると思ってい
たがな」

望んで神になろうとしてもいなければ、神の証は何一つとしてない。
あくまで聖者留まりだろう。

「吸血鬼にはならないの？」

「これ以上人間以外になるのはごめんだ。それに矛盾した存在とい
うのも後が怖そうだ」

曖昧な存在というのも必要なものだとは思う。しかし、矛盾した存
在はまた別のものになるだろう。

「いつでも…吸血鬼に……」

「フラン？」

「くー…くー……」

「お休み」

眠るのに邪魔になりそうなので帽子を取ってからベッドを出る。

「飛脚師…生きてる？」

この声は紅流…向こうはどうだっただろうか…

「勿論生きている。ちなみにフランの許可はとった」

紅流は自分の心配をしているのだろう。ありがたいことだが、フラ
ン相手に死ぬわけにはいかない。

「俺の方はちよつと微妙なところだけど、いい返事がもらえそうだ
よん」

「それなら行くか？」

「安眠を妨害して細切れにされるのはごめんだからねえ」

それは確かに。故意にはないとはいえ、寝ぼけていて府とした拍
子に——では目も当てられない。機嫌が治った時にでも出直すとし
よう。

「そう…だな」

「それで、結局フランはふて寝をしているわけね……」

「そういうことになるな」

張本人なにもせずに解決——しているかはさておいて。とはレミリアらしいといえばそうなる。

「そう……最悪紅魔館が無くなっているところを救ってくれたのだからその杭は差し上げようかしら」

「ねえ、飛脚師……」

紅流がかなり小さな声で話しかけてきた。レミリアとの間にはそこそこ距離があるので聞かれることがないので何だろうか……

「どうした？」

「レミリアって、反省してないよねえ？」

「まあ……」

「お嬢様、明日はおやつ抜きです」

「うー……しゃくやあ……」

「当たり前です。それとうー言うのはカリスマが消滅するので自重ください」

「何気にさくちゃんが紅魔館最強だねえ……」

「そうだな……」

「というわけで俺はおいとまするよん」

「俺も用は済んだから帰ることにする」

「またおいでください」

「zzz……zzz……」

「動かない門番って紅魔館の名物になってるよねえ……」

「ああ……ナイフで刺されても動じない門番だからな……」

「あの、飛脚師さん！」

かなり急いでいる様子の赤ちゃんが文字通り飛んできた。

「大ちゃん？」

「はあ…飛脚師さん…に…お願い…が……」

「とりあえず落ち着いてから用件は聴くよ。水でも飲むか？」

流石に依頼内容が聴けないのであれば話にならない。行李から竹筒を渡す。

「ありがとうございます…」

「まあ、飲みかけで悪いが——」

「ぶほあ!？」

言葉を言い終わる前に水が胸を濡らした。

「気を悪くしたなら済まないな……」

「す、済みません。でも違…います……」

最後の部分は微妙に聞き取れなかったが、構わないだろう。

「まあ…別にこの暑さだから気にする必要はないよ」

「で、用件はなんだったんだ？」

そういうとどこからか封筒に花がそえられたものが出てきた。

「少し前のことですけど、慧音先生に勉強を教えてもらったのでお礼を渡してほしいんです」

なるほど…納得のいく理由だが、別に渡すだけならば大ちゃんだけでも事足りそうなものだが……

「だいちゃん、はやく〜!」

少し離れた木陰から声が聞こえてきた。大声で急かすチルノを見るに大方何かしらに誘われて断りきれなかったのだろう。

「ごめんチルノちゃん。あの、お願いできますか?」「分かった、必ず届けるよ。そうだ、紅流…これを渡すのを忘れていた」

行李から木綿布で包んだ銀の杭を投げ渡す。

「この恩は忘れないよん!」

紅流は器用に受け取り、そう言って飛び立っていった。

「それじゃ…お願いします飛脚師さん」

「いたずらはほどにな」

と言ったが、大ちゃんが主犯のいたずらというのはこの暑い季節に突如猛吹雪が降るような確率なので大ちゃんに言っても効果はないだろう。

「zzz…zzz…」

「……行くか」

もう今日の仕事は済んでいるので特に寄り道なく寺子屋に行けばいい。今は未の三つと九分（約午後一時四十五分）程度なので余裕だかといって怠けて歩くわけにもいかないので全開の半分くらいの速度で走っていく。

「ふう……到着か」

道中は何の問題もなく進めたので思ったよりも早く寺子屋に着いた。

「さて、慧音さん、慧音さん」

もしかしたらまだ授業中かも知れないが、どうだろうか…

「飛脚師か。どうした？」

「大妖精からの届け物です。以前のお礼らしいので」

「大妖精……ああ、なるほど。しかし、まったく…飛脚師、もう少し碎けて話しても構わないというのに……」

「尊敬している人には敬語で話すようにしているだけです」

「なんとも飛脚師らしい。折角の客なのだから茶の一杯でも出させてくれないか？」

どうせこれからは食料品を買って家に帰るだけなのだ。それに殆どの場合には急いでいて断ることが多いので誘いに乗ってもいいだろう。「今回はごちそうになります」

「やはり言ってみるものだな。丁度新しい茶葉を買っていてな、気に入る筈だ」

「香り高く程よい苦味です、本当にいい茶葉ですね」

内にある茶葉とは大違いだ。もっとも、自分の目利きではどれだけ時間をかけようが見つかりそうにないのでそこその茶葉を買っているのだが。

「誉めたところで茶菓子くらいしか出せんぞ」

そう言いながら盆に盛られた饅頭を差し出すあたり流石だと思う。

「丁度良い感じで甘さが引き立ちますね」

「ありがとう。少し話は変わるが、大妖精のことをどう思う？」

大ちゃんのことを……考えてみると存外難しいものだ。友人のような、兄のような……

「少し例えが悪いかも知れませんが、友人の妹というのが一番しつくり来るような……そんな感じです」

「そうか……それはなんとも報われんな」

「一体誰がですか？」

「ふ……当人がこの始末ではしまいに刺されそうだ。一つ忠告だ、物の求め以外にも大事なものはある、そこを敏感に察知しなければ到底幸せは来ない。そもそも飛脚師たる――」

色々と話が誇大化しすぎて一体何を言いたいのかわからない。途中から意味が分からなくなつたので聞き流してしまった。

「――というわけで今後は自分の能力を過信せず……いや、こんな話ではなかつたのだが……」

「なんとなくのさわりは掴めましたよ」

自分の能力に傲らずに善行を積みと^{おこ}いうことだろう。以前閻魔にも同じようなことを言われたのでなんとなく意味は解かる。

「そうか……私の杞憂か……説教臭くなって済まなかつた、寛いでくれ」

「はい？」

結局大した意味もわからないまま時間だけが過ぎていくことになった。

「さて…俺はこの辺で帰ります」

「そうか、もし会えたなら大妖精によく伝えておいてくれ」

「分かりました。また何か必要な時は一報ください」

殆どは寺子屋で必要なものの買い足しなのだが、これが意外に依頼が多いので気を付けなければ…

「頼りにしているぞ」

「どうも…じゃあごちそうさまでした」

商店街に着いたが、今日の夕餉はなににしようか…川魚も微妙なので肉にしようか、それとも大豆にしようか…特に思いつかないのできとうに散策していると豆腐屋の前に着いた。

「お、兄ちゃんじゃねえか一つどうだい？」

もうここでもいいか。

「おすすめはありますか？」

「そうだなあ……どれも良いが、特には絹だ」

絹か…この暑さならネギを生姜を添えて冷奴でもしよう。

「じゃあ一丁…いや、二丁お願いしようかな」

いつもより空腹感が増している気がする。どうせ余っても味噌汁の中に入ればいいだけなので構わないだろう。

「じゃあおまけでおからと揚げもつけとくよ」

話しているほんの少しの合間に包まれた豆腐とおまけが差し出された。

「お代は——」

「いらねえよ。いつも断ってた分だ」

確かに早朝会う時には荷物になるので断っている。それを覚えているとは律儀なものだ。

「それはどうも。また何かあったら呼んでください」

「そうだな。やっと商売が再開したところだから案外早くになりそうだ」

騒動も収まったのでひとまずはなにもない平和な幻想郷になるだろう。

「ちええええん！ちええええん！！」

家まで走っているのと九つの尾を持つ狐妖怪の籃さんが居た。やけに大きな声で叫んでいるが、なにか重大なことでもあったのだろうか…

「籃さん、どうしました？」

「飛脚師が…いつもなら橙が帰ってくる時間なのだが…」

今は申の半刻（午後五時）程度なのにこと橙のことにに関しては細かいことまで気になる人だ——大妖怪らしいが。

「あと半刻（約一時間）して帰らなければ大々的に探せばいいと思いますよ」

「ふむ…そもそもこの辺に居るとも限らないわけだからもう少し待ってみるか…しかし、飛脚師…少しいい匂いがするが、何を持っている？」

いい匂いのするものなんて持っていない筈だが…

「さあ？心当たりはありませんが…」

そもそも行李の中にあるのは空になった竹筒と握り飯の包みと買った豆腐しか入っていない。

「まあ、橙を見かけたらこのことを伝えてくれ」

「はい」

「そうだ、一つ訊きたいことがあった」

「なんですか？」

「マヨヒガに来ることは出来るか？」

橙や籃さんの家ということしか知らないが、道に迷わなければ行けるだろう。

「必要があれば行けるとは思いますよ」

「そうか…では、今度こそまた次回、だ」

橙は猫又、籃さんは九尾の狐…親子関係があるのかは分からないが、少し過保護だと思う。

家の前まで来ると少し違和感があった。薪が少しなくなっている上に、家の中から話し声がする…誰か依頼でもするのだろうか…

「誰か居るのか——」

「おにぎり…食べていいのかなあ」

「サニー食いしん坊」

「うるさいルナ！」

「このけんかつこいー」

「ダメだよチルノちゃん。それ…本当に怖い感じが…」

「はあ…大ちゃん、そっちも大変そうねえ」

「いけませんぜ、嬢さん方…あ、おかえりなさいませ旦那」

家の中には団体客が居た。全員が子供の姿といえども六人も居れば家の中はぎゅうぎゅうだ。

「何故妖精達が…それと君は誰？」

見た感じは十とおにもなる少女のようだ。話し方に明らか違和感があるが、気にしてはいけなйдらう。しかも着ているものは大きい布に穴を開けているものを被って腰ひもで縛っているだけなので親は何をしているのだろうか…

「服のネタが出なかっただけのことよ、許せ」

「作者か…」

「済いやせん…あつしは職神しきがみの天照大神あまてらすおおみかみというものでして…ついでに言わせてもらいやすと猫又娘も居やす」

「みゃ」

天照大神の足元から尾が二つに分かれた猫が出てきた。

「橙？」

「みゃ！」

「まったく…で、妖精達はなんでここに来たんだ？」

特にいたずらをしているわけでもないのになにか別の理由があるの

だろう。

「それは…私が飛脚師さんにお礼をしようと思つて橙ちゃんに案内をお願いしたら皆ついてきちゃつて…済みません」

「いや、大ちゃんに責任があるわけじゃないよ。で、天照大神は何故ここに？」

「言つてしまえば主人の気まぐれでさあ…申し訳ないのですが、しばらくお世話になりやす」

確かに昔そんなことを言つていたが…本当にやるとは……

「まあ…仕方はないさ。で、薪が減っているのは何故だ？」

「ちよいと昼飯にいただかせていただきやした」

「薪をか？」

「いえ、あつしの飯は火にくべるものなら大体なんでもいいんです。あ。燃費がいいものほど好きです」

「なるほど…炭がなくて済まないな」

「いいえ、全然構いません」

「そうだ。橙、藍さんが早いうちに帰つてこいと伝言だ」

「みゃ…」

怒られるのが嫌なのかしゅんとしてしまった。そうだ、行李の中に油揚げがある筈だ。

「橙、これを土産に帰れば大丈夫だ」

行李の中から油揚げを出して部屋の中にある布で包み直し、軽く首に巻いてやる。

「みゅあゝ」

嬉しそうに頬を擦り付けて去つていった。生き物を飼うことはないのてこういった可愛らしさはよく分らないが、悪いものではない。

「で、旦那旦那、妖精達の始末はどうします？」

一人——いや、一匹帰つたところで騒々しさは変わらない。

「そうだな…だが、始末はないよ。客に変わりはないからな」

「そうですか…夕餉はどうしやすか？」

「ああ…そうだった、天照でよかったか？」

「そもそも主人が古代神からつけた名前なんでどんな呼び方でもかまいやせん」

「じゃあ天照、食べたいものはあるか？」

「好物は備長炭ですが…」

「無いな…豆腐の汁と冷奴でいいか？」

「申し訳ないことですが、汁は飲めません。冷えたものも食べられないんで薪で済ませやす」

燃えるものならなんでもいいわけではないのか…

「炭はその内買うとして…ただの飯は食べられるか？」

「はい。炊かなければ大好きです。炊いていてもうまいですが」

どうやら水気が駄目らしい。茶の一杯でも思ったが、断るだけだろう。

「飛脚師も帰ってきたし橙ちゃんも帰ったから私達も帰ろ」

「いたずらもできそうにないしね」

「お邪魔しました」

「今度は茶でも出すよ」

「あたいもかえる」

一斉に妖精達が帰っていった。行動動機が単純なのはいいが、配置を変えたものは直していつてほしかった。

「おや？大妖精の嬢ちゃん…みんな帰って行っちまいやす——おつと…旦那、あつし夕餉の支度をしてきやす」

「そうか？じゃあよろしく頼む。大ちゃんは帰らないのか？」

「いえ、あの…お礼を……」

「要らないよ。勿論必ず届けるが、正式な依頼でもないし、友達から料金はとらない」

「友達…ですよ…いいえ、でも……」

「妖精の嬢ちゃん、ちよいと顔貸しな」

台所から天照の声がした。しかし、あの話し方はどうなのだろう。

「はい…？」

いったい何をするつもりだろうか…危害を加えるとも思えないが…

<Side-change天照>

旦那…旦那の能力は主人から教えて貰いやした、しかし、肝心の想いが分からなきゃ意味なんて無いも同然。

「あの…なんでしょうか？」

「細かなこたあ省いて話す。嬢ちゃん、旦那を慕ってんだろっ？」

「飛脚師さんを！？い、い…言わないでください！」

「落ち着きなつて、あつしは嬢ちゃんの味方さ」

「でも…飛脚師さんは——」

「そこまでだい。嬢ちゃん、あんたはちつと肝を据えな。やつてもみずに止めちまうなんざ…そんな腑抜けじゃ旦那も見ちゃくれねえさ。あつしにちよいとした案があるのさ」

「案…ですか？」

きょんとしている姿は守りたくなるような雰囲気なのに活かなさいとはなんとも齒がゆい…

「あつしは生まれてそんなに経たない一介の職神さ、だが、志は本物の天照様のように！だから嬢ちゃんにも突っ走ってほしいのさ。

で、案つてのが……」

「大丈夫でしょうか…」

「この期に及んで退くなんざしなさんな」

「分かりました、頑張ります」

主人、こいつは少し長旅になりそうであ。

神は言っている。此処で——（ry（後書き）

いやはやゝ本当に慣れとは怖いもので。

大学にもそろそろ慣れはじめてきたので更新ペースを回復できればなゝと思っています。

これは個人的な話ですが、私の書くペースを単純計算したところ一日に大体500文字書いている計算なんですよ。

これをちよつとアンケートにしてこの量は客観的にどうなのかを判断してもらいたいと思います。

アンケートにお答えいただいた方の中から抽選で3名前後の方には空白の一話をプレゼントします。

空白の中にリクエストを入れていただければできる限り全力でお応えします。

大妖精、飛脚一日体験（前編）（前書き）

若干量が少ないですがご勘弁ください。

大妖精、飛脚一日体験（前編）

<Side-change 飛脚師>

さて、どうしたものか…ひとまず物の配置を直しておくか。色々な物を引っ張り出してきたようで報酬として貰った茶碗やら布団までもが出されていた。布団…あったな。今度干しておこう、今使っているものもそろそろ寿命だろう。

考え事をしているとばやばたと落ち着かない様子で大妖精が走ってきた。

「あ、あの…飛脚ちつ——ううう……」

よほど緊張していたのか声も裏返り、あげく名前を囁むとは…

「そんなに緊張しなくても俺は逃げないから、深呼吸をしてゆっくりとでいいよ」

「はい…」

さっきの間に何があったのか…詮索するつもりはないが、どうしたものか……

「落ち着いたか？」

「はい、飛脚師さん…一日飛脚をお手伝いさせてください！」

「え?？」

大ちゃんが飛脚を…お礼のつもりだということは分かるが、何故飛脚の手伝いなのかさっぱり分からない。

「その…飛脚師さんみたいに速く走ることはできませんけど、飛べばなんとかついていきますから」

「いや、そういう意味じゃないが…とりあえず先に言っておく、朝は早いし終始走り通しの日だってある。正直大ちゃんには向いてないよ」

自分はその他にも妖怪から逃げることがあるが、これは大ちゃんには関係ないだろう。

「それでも、お願いします」

果たしてどうするか…大ちゃんがここまで食い下がるというのはよっぽどの思いだ。

「分かった、そこまで言うなら……手紙は必ず届けてほしい。これ以上俺からはなにも言わない。ただし、行李はもうないんだ」

「それなら私のリュックがありますから大丈夫です」

リュック…行李のようなものなのだろうか……自分も物を入れるためのものならば大体なんでも良いと思って薬師行李を選んだので別に構わないか…しかし、一応見ておいた方がいいだろう。

「今そのリュックというものはあるか？」

「いえ…今はありませんから取ってきます」

流石に今あるわけではないか。ただ、取つてくるとは？

「大ちゃん、さっき取つてくると言つたよな？」

「はい…天照さんが泊まつた方がいいって……」

確かにただでさえ朝刊りという仕事で朝が早いのに大ちゃんの家からここまで来るといふ負荷をかけるのはよくないとは思うので天照の判断は正しい。もっとも、大ちゃんの家は知らないが。しかし、問題はあつた。

「そうした方が良いとは思つたが…そこまでの広さは……」

二人は問題なく寝られるだろうが、三人は厳しい。何より結局布団が足りない。今度質屋に物を売りにでもいこう。

「旦那…ちと訪ねることがありやす——水がああ!？」

「天照!？」

突然の叫び声に嫌な予感がするが、振り払つて台所に向かうと天照が水浸しになつていた。傍らには逆さになつた鍋が転がっているの運ぼうとしていたのだろう。

「みずが…みずがああ……」

「天照、何があつた…いや、水がどうした？」

「あつしは水が苦手なんでさあ…火ならともかくとして……」

太陽の光が駄目な者も居るので不思議とは思わないが、とりあえず体を拭いた方がいいだろう。

「分かった、とりあえず拭くものを持つてくるから待っているよ」

「済いやせん旦那……」

本当に濡れネズミそのもので風邪をひきかねない。

妖精達がそこらじゅうを引つ掻き回してくれたお陰か手近なところに体を拭く布があつたので取つて台所に戻る。

「これで——」そこにはその場に着ていた布を脱いで置いていても身に付けていない天照が居た。白子しろこにも思えるほど肌は白く銀の紙とよく映はえるしかし、服が穴の空いた布と腰ひものみというのはどうなのだろうか……

「済いやせん旦那……失礼ついになにか服を貸してもらつてもいいですかい、主人のそこからは着の身着のままできたもんで……」

「それはいいから風呂場に行け！」

「え？」

「恥じらいを持ってと言つたんだ……」

流石にもとの布を再び着せるわけにもいかなないので乾いた布を羽織らせて抱えあげ——軽すぎる、おかしいほど軽い。

「あつしには体重はありやせん……けど、脇の下は……痒いです旦那……降ろし……はははっ！」

「暴れるな天照……」

確かに重みというものをほとんど感じない。それ故に暴れてもあまり効果がない。

「旦那……」

「近くだから我慢している」

そう言つて風呂場につれていき、降ろした。

「旦那、あつしの服は……」

「ひとまずは俺の服で代用してくれ、明日にでも色々買いに行く」
普段浪費する癖はないので持ち合わせはなんとでもなる。さしあたって必要なものは天照の服と炭、後は食料があればいいだろう。

「飛脚師さん、リュックを持ってきました」

さつきから気配がないと思つていたが、そうしたことだったのか……

もう末の刻（午後六時）はまわっただろうから戻ると危険なので本
当に泊まり込みになったわけか……

「ああ……もう腹はくくってあるからゆっくりしていつてくれ」

なんの因果でこうなったのかは分からないが、こういうのも悪くな
いと思う。

「はい！」

それから四半刻弱と少し（約四、五十分）掛かってで夕餉にするこ
とができた。

「……いただきますノいただきます」

食料はないこともないのだが、一人分の蓄えな上豆腐は二丁しかな
かったので天照の分の食事は妥協案として薪になっていた。

食べはじめてから気づいたことだが、天照の食事は種類もそうだが、
食べ方も少なからずおかしい。薪を割って食べやすくすることもな
くそのままかじりついているところを見るに確かに人ではない。食
べる音もむしゃむしゃというものではなくばりばりといっている。

大ちゃんもこれには面食らっているようで箸が止まっている。

「メキ——どうかしやしたか、旦那に嬢ちゃん。ボリ——食える時
に食つとくのが……バリ——いいですぜ」

「ああ……どうも慣れなくてな……」

天照の味付けは食材に合っていて美味しいのだが、どうも心のへだ
たりが埋まらない。

「あの、天照さん……それって美味しいですか？」

「あつしが食う分には美味いけれども、嬢ちゃんには向いてないぜ。
それでも要るなら食べやすい端っこを」

一体大ちゃんは何をもってそんなことを訊いたのだろうか……しかし、
確かに天照が無邪気に食べているところを見ると案外薪も食べられ
るのではないかという錯覚にかられる。

「固つ……」

「結構柔らかいとこ選んだ手前申し訳ないとは思えども、諦めた方がいぜ」

「済みません天照さん」

「謝られるのもちよつと心苦しいけども……こいつは好みの問題だから気にしないことさ……」

少し悲しそうな顔をしているが、慰めの言葉は思い浮かばない。しかし、食べる勢いは変わらないのでそこまで響いていないのだろう。ふと天照の頬元を見ると木屑が付いていた。

「天照、木屑が付いてるぞ」

普段の食事で頬に付くということは絶対にあり得ないようなものが、何故か妙にじっくりとくる。

「済いやせん旦那……」

「しかし……本当にどうなることが……」

これからの見当がつかないので一抹の不安はある。しかし、二人ともに良い子なのでそれほど重大なことにはならないだろうが、それでも心のどこかの不安が拭えない。

「大丈夫ですぜ旦那、あつしも手伝いやすから」

「「!？」」

「一宿一飯の恩義は返さないと主人が怒るんでさあ。一飯じなやくだですが……」

「回数はまあ……構わないとして、そうか……」

苦勞が増えそうだと思つてしまった。

「旦那？よからぬことを考えちゃいやせんか？」

「気の……せいだろう。もう俺は寝るが、二人はどうする？」

朝が早く、疲勞がそこそこあるので遅くても酉の刻（午後十時）には寝たい。

「あの……旦那、そう言つてゐる割には布団に入らないんですかい？」

「流石に二人に一つの布団は小さいだろう」

両方小柄な方だが、布団に入つて寝るとなるとどうしても狭くなる

だろう。

「そうですかい？でも、家主を床に——ってのは…」

「私が帰りましょ——」

「そうだ！皆で川の字に寝ればなんとかなる気がしますが」

確かに二人で二つの布団では広いのでそうすれば寝られるだろう。

「しかし、な……」

「「平気でさあ／大丈夫です！！」」

同時に否定されるとは…どちらも芯が強い方なのでこのまま堂々巡りというのも無駄なことだろう。

「分かった…」

「それなら…嬢ちゃん、真ん中に行きな」

「天照さん！？」

「一番小柄なのが真ん中って相場は決まってるのさ…」

「でも……」

「じれったい嬢ちゃんだ、つまり……して……という算段なのさ」

「それって！！」

「ちつとずれた部分もあれど、これでなんとかなる筈さ」

「早起きの算段なら別にしなくていいぞ、手伝ってもらうのは朝刊配りを終えてからだ」

流石に朝刊配りから手伝わせるとんでもない手間になりそうだ。

「そういう意味じゃ——ああ、そう。そうですね」

「まあ…あまり夜更かしはしないようにな」

そう言い残して布団に入って布を被る。

「済みません…飛脚師さん……」

夢…ではないのか…？

「大…ちゃん？」

「はい」

虫の羽音のように小さな声だったので半信半疑だったが、声を出して正解だった。

「寝苦しかったか？」

「その…もう少しそっちに行っても良いですか？」

「どうした？」

「天照さんに押されて…苦しいです」

自分は寝相が良すぎるくらいなので天照に押されてしまうと中央に居る大ちゃんはとうしようもなくなるのだろう。

「分かった——」

そこまで言っただけいいが、もう開けられる余分な場所はなかった。

「どうかしましたか？」

「ああ…その、俺の上くらいしか場所はなさそうだから出ていく——」

「だ、駄目…です……」

「え？」

「乗ってもいいですか？」

「それは言葉の綾だが…」

自分の言葉は耳に入っていないようでもぞもぞと動いて自分の上に乗ってきた。

「大ちゃん？」

「…くう…くう……」

どうやら随分前から寝ていなかったようだ。うつ伏せの背中を数回撫でてから眠ることにした。

「……朝か」

恐らく寅の半刻（午前五時）程度だろう。椀さんが瓦版を持ってくるのも時間の問題だ。

布団から出ようと思った瞬間、身体の中から金縛りのような感覚

がした。大ちゃんはまだ乗っていたままだったのか…

「ちよつと済まないが…」

脇の下を持つてずらしながら布団から出る。

「飛脚師さん、犬走です」

扉が開いて椀さんが入ってきた。

「おはよう椀さん」

「おはようございます。今日もよろしくお願いします」

「ああ、任せてくれ」

「それでは」

そう言つて風呂敷ごと瓦版を置いて飛び立つていつてしまった。とりあえず瓦版を行李の中に詰め込み、慰め程度に服装を直して草履を履く。

「それじゃあ、行ってくるよ」

起きていない二人に声を掛けてから走り出す。

いつも通り野道を走り、にとりの家に着いた。

「おはよう飛脚師」

今日は珍しく朝から会うことができた。

「おはようにとり、紅流はあれからどうなった？」

結局最後まで居たわけではないのでどうなったか分からない。にとりが本気になって作つた腕なら失敗はないだろうが、それでも気になるものは気になる。

「ばつちり——過ぎたかなあ…」

「どういうことだ？」

「ほら、コウつて飛び道具を持ってなかったからこつそり腕に気の圧縮と発射機構を取り付けたら…窓が一つ増えちゃって……」

そう言つて指差す先には確かに閉じることのない窓が開いていた。

「それはなんとも…」

「いや、言わずに付けた私が悪いんだけどね。それに今日中には本物の窓になってるから大丈夫さ！」

「窓だらけの家にならないように祈っておくよ。それと、瓦版だ」

「お、ありがとー。どれどれ……ほう……」

にとりにとつてよっぽど気になる記事だったらしく食い入るように読み続けているので人里に向けて走ることにした。

人里に着いてからは起きている人間もまれなので瓦版を家々に挟みながら走り続けた。

「よう！兄ちゃん」

「おっちゃんか、おはよう。調子は戻った？」

「まあ、ボチボチつてところだ」

「なるほど……」

「そっぴやあ……昨日のことだが、紅流の奴がやたらせわしく動いていた気がするぜ」

腕を治して早々とは……ある意味紅流らしい。

「それがあいつの証明みたいなものだと思うよ」

「違えねえな」

「それじゃ、また会えれば」

といつても今日は主に必要なものの買い足しをする予定なので大いに会う機会はあるだろう。

「おう、じゃあな！」

やはり早朝ということもあって特別な職種の人間でない限りは会うこともない。四半刻（三十分）程度で瓦版は配り終えたので帰ることにした。

「ただい——」

扉を開けると、何故か朝食ができていた。しかも、川魚の塩焼きがある。どうやってとってきたのだろうか。

「あ、お勤めご苦労様でした旦那」

「お帰りなさいです、飛脚師さん」

「ああ……ところで、朝食を作ったのは誰だ？」

「一人ではなく両方かも知れないが……」

「「あつし達でさあ／私達です」」

やはりそうか……

「ちなみに川魚はどうやってとったんだ？」

「私が弾幕でとりました」

確かに昨日の水嫌いから察するに水辺へ天照が行くということは考えにくいので当然といえば当然だ。

「そうか……まあ、そうだろうな」

しかし、案外二人とも寝起きは早いようだ。性格を考えれば当然のことかも知れないが。

「さあさあ、もう出来てやすから冷めないうちに食べてください」

「そうか……じゃあ先に食べさせてもらうよ」

帰ってきて即座に朝食の支度が出来ているのは中々いいものだ。

「嬢ちゃん、これで一歩先に出たみたいだ。この調子なら旦那をものにできるのも遠くないぜ」

「あ、天照さん！？」

「天照がどうした？」

「いえ、なんでもないです……」

「そうか……それじゃ、いただきます」

少しためらいはあったが、米もうまく炊けている。塩もいい塩梅で美味しい。昔に人外が食べるものに疑問を持ったこともあったが、別にさほど変わりないのかも知れない。

「味はどうですか？」

「美味しいよ。大ちゃんの良いお嫁さんになれるな」

「はい！頑張ります！」

大ちゃんにしては珍しく大きな声だった。

「まあ…頑張ってくれ？」

「嬢ちゃん、旦那に一服盛ってやんな」

何やら天照が不穏な空気を纏いつつあるので一度喝を入れておいた方がいいだろう。

「大ちゃん、桶いっぱいに水を張ってきてくれるか？」

「旦那！？後生ですから勘弁を…」

「あまり変なことを言っていると水風呂に叩き込むからな。それと、寝相はもう少し直すことだ」

寝相普段気を付けるようなものでもないのに他の誰かがいなければ分からないだろう。

大妖精、飛脚一日体験（前編）（後書き）

本編行くことなく終わるのはオルトロスクオリティー。次が後編と思われないうちお願い申し上げます（笑）
リリなのの方もそのうち更新します。

大妖精、飛脚一日体験（後編）（前書き）

いや、本当に遅れましたw一回授業が始まると中々時間がとれませんねw

まあ、そういう時間割にした私が悪いんですけど。
では、ご覧ください。

大妖精、飛脚一日体験（後編）

「ごちそうさま」

やはり食事は自分が作るよりも誰かの作ったものを食べる方が美味しい。

「お粗末様でした」

「大ちゃん、天照、ちょっと来てくれ」

「はい」

「ただ今行きやす」

「大ちゃんには残念だが、今日運ぶものは特にない。というのは人里かその道中によく頼み事をされるからだ。だから今日は人里に行つて必要なものを買つてくることにした」

「はい」

「良い返事だ。天照はどうする？」

「あつしは…ついて行きやせん。ちょいと野暮用があるもんで…でも、日が沈むまでにはここに帰つてきやすので服はこのままでいきやす」

そういえば天照の服は自分のもののままだった。返したら返したで厄介になるだけだろうからこのままの方が、ともすれば、このまま服を渡したままにするのも良いかも知れない。一着程度無くなつたところで大して影響はないだろう。

「分かった。別に構わないが、きちんと帰つてこい、きちんとしたものを買ってくるから」

「り、了解でさあ…あつし、お先に行かせていただきやす！」

そういうと足早に飛び立っていつてしまった。ふと、天照は草履を持っていないのかと思った。大ちゃん達妖精は基本的に靴なので気にすることもなかったが…飛べるとはいえ履き物も無しとは…天照の主人は相当酷い扱いをしていたのだろう。

「気をつけてなー！」

「行っちゃいましたね」

「素性は分からないが、根は良い子だろう。さて、俺達も行くのか？」

「はい！」

「そうだ、少し待ってくれ」

とりあえずは人里へ行き、食料品と衣類一式を買うことが必要だ。部屋の一番隅の畳を外し、壺の中にある金子をてきとうに小袋の中に入れて行李の中へ入れる。

「凄いですね……」

「まあ、金銭を奪^{やから}う輩も居ないから必要ないとは思うが、それでもな」

今のところはまだなにもされていないが、ここは人里から離れており、一応友好的とはいえ、妖怪の山もある危険な場所にあたるので賊はまず入らない場所だ。そういう意味では人里よりは治安は良い。「飛脚師さんってお金持ちですね」

確かに家具や衣類は殆ど貰い物で済む上、置き場がなくそのつど売りに行き、そこそこ満ち足りているため金を使うことが少ないので必然的に溜まり続けるだろう。

「備えあればというでもないが、先立つものは要るからな」

「なるほど……」

「大ちゃん達妖精にはあまり関係ない話だけだな」

恐らく、人間だけが生きるためのものではなく、生きるためとは関係ないが、価値を見いだしたものを手に入れようと一生を掛けるのだろう。

「そうですね、私達のお金っていえばお菓子やお花ですから」

随分ほのぼのとした金子だ。しかし、悪いものとは思わない。

「俺も人間じゃなく妖精だったらな……」

「飛脚師さんは真面目過ぎて妖精っぽくないです」

確かに自分と自由とはかなりかけ離れていると思う。

「それもそうだな。じゃあ行くのか？」

「済みません、少し待ってください…」

大ちゃんは行李のようなものを背負おうとしているが、羽につかえておるおろとしている。

「手伝うよ。その…リュックだったかな、貸してくれ…ほら、ばんざいして」

「は、はい…」

あげられた両手に紐を通し、リュックを背中に置く。手習いに行く子供（現在でいう児童）のようで可愛い。

「これでいいな。他には忘れ物はないか？」

「大丈夫です」

今は大体辰の半（午前九時）なので申の半（午後三時）あたりには済ませられるだろう。

「じゃあ人里へ行こうか」

そう言つて、走り出す。そういえば大ちゃんは飛ぶのだろうか…

「飛脚師さーん！ちよつと待ってくださいーい！」

かなり離れた、しかも、上空ではないであろう距離から大ちゃんの声が聞こえた。

「大ちゃん？飛んできていいんだぞ！」

どうやら走っているようだったが、こと走る力で自分に勝るような者はよほどの肉体派か、人外だ。大ちゃんは人外ではあるものの比較的非力な部類に入る妖精なので飛んでこなければ付いてくることはできないだろう。

「済みません…」

「いや、別に構わないことだが、これからは自分が一番楽な移動手段を使うことだ」

「はい…」

走ると飛ぶのではどちらが疲れるものなのか分からないが、なるべく負担の無い方が良い。

「じゃあ俺は走るから飛んでついてくるなり先に人里に行くなりしてくれ」

「ついていきます！」

両手を握りしめて宣言する姿に、つい頭を撫でてしまう。

「そうか…偉いな」

「あ、あうあう…」

足に力を入れていないのか撫でられるまま身体ごと揺れている。大ちゃんも天照程ではないが、相当軽いのだろう。

「おっと、済まなかった。そろそろ行こうか」

「はい…」

自分のせいとはいえ、思わぬところで時間をくってしまったので本気で走る。飛んだ大ちゃんなら本気で走っても追いつけるだろう。

「大ちゃん、ついてこれているか？」

「大丈夫です！」

流石に追いつけないということもないだろうが、心配は心配だ。しかし、それも杞憂だったようだ。

一人の時とさして変わらない速度で走ったので、ほどなく人里に着くことができた。

「あの、飛脚師さん…」

「どうした？」

「私、目立っていませんか？」

確かに大ちゃんの外見は普通の人間とは若干違う。服装も若干違う上、薄い緑色の髪と背中の中も羽もそれに拍車をかけている。到底人間と同じとは思えない。

「目立つことは目立っているが、平気だ。危害を加えなければ基本的に敵視はされないよ」

「そうですか…」

もともと、今の大ちゃんに敵意を抱く人間など居はしないだろうが。「さあ、まずは質屋に行こう」

とりあえず邪魔な荷物から先に片付けるのが先決だ。

「いらつしゃい…ああ、飛脚師か。久しぶりだな、調子はどうだ？」
店のなかは独特の雰囲気を持っており、店の主は一見すれば七十は越えている白髪の翁が一人だけだった。

売買目的とはいえ、質屋には何度も来ているので顔馴染みになるのだろう。自分に対する口調も客に対するものではなく、砕けているものだ。

「まあ、上々です。今回もお願いします」

そう言って行李の中のを台に置いていく。

「別に骨董でもなければ業務でもない。家具屋に売っちゃう方が賢いと思うんだかな」

床の間に置くような壺を持ちながら話す。せとものだというのに手慣れている。その辺りは経験なのだろう。

「その家具屋からの報酬なんですよ、おまけの報酬で貰ったものですから返せないのここに持ってました」

「まあ、深くは訊かない。今回はこんなもんでどうだい？」

そう言っただけ渡された紙に掛けられている金額は中々のものだ、異論はない。

「十分ですよ、それでお願いします」

「そういえば今日は昼から雨になるらしいからこれでも持っていけ」
そう言っただけ差し出されたのは紫色の番傘だった。色彩の異様さでけっして万人受けするようなものではないだろう。

「なんですか？これ」

「捨て傘だ。誰のかは知らんが、持っていけ」

「まあ…調度よく傘も持ってないし、ありがたくもらいます」
変な傘を受け取り、行李の中に入れておく。

「そついや…そのガキは人じゃないな」

「え…あ、はい。妖精です」

「別に変な意味ではないが、おかしいことはせんようにな」
店主の言うことはいたずら好きな妖精に対するものだろう。自分も
いたずらには悩まされたことがあるので気持ちは解かる。

しかし、

「大ちゃんに關しては一切の心配は要りませんよ」

「この店の隅でぢこまつてるような妖精に心配なんざしちやいな
い。年食うと肝も座るが、そうじゃない奴も居るってだけだ」

確かに人里の中には良し悪し関係なく妖怪全般は退治すべきと考
えるものも居る。

「忠告感謝します」

「あんたはこれでも得意様なんだ、生きててもらわなきゃな」
本心なのか、どうなのかは定かではないが、どちらにせよ肯定的な
意味なので構わないだろう。

「それじゃ、また来ます」

そう言つて質屋を出る。

「飛脚師さん。私、人里の外で待つている方がいいですか？」

うつ向きがちに言うところや雰囲気で何となく意味と理由は察せる
が、

「そんなことはしなくていい。少なくとも俺と一緒に居れば誤解は
されないし、妖精を見ただけで敵意を出す奴なんて居るとは思えな
い」

そう言つて頭を撫でる。

「はい…」

「悪く言う人間が居たら俺が止めるよ、だから安心して」
人間以上となると厳しいものがあるが、人間相手なら話し合いでな
んとでもなる。

「ありがとうございます…」

「よし、とりあえず…腹ごしらえからかな？」

もう巳の刻（午後零時）近いので先に食べてから行動した方が良く

だろう。今日はあいにく弁当を用意していないのでその辺で食べるしかないのだが。

「どこにしますか？」

「そうだな……」

普段からそういうことをしていればどこに何があるか分かるのだろうが、この付近では……翔太の焼きそば屋があった。

「知り合いの店が近くにあるんだが、どうかな？」

「私は平気です」

「じゃあ決定だ、早速行こう」

開店時間はよく分からないが、恐らくやっているだろう。

「いらつしゃ——飛脚師じゃんか！連れも一緒か。丁度良い席が空いてるから座ってくれ」

「いらつしゃいませだぜ……」

いつもの服ではなく、翔太の着ている調理服を模したような服を着ている。予備かなにかを加工したものだろうか……

「魔理沙！だぜは失礼だから止めろって言っただろ」

「ああああ……」

席につきながら何故魔理沙がここで手伝いのようなことをしているのか考えるが、答えは出ない。当然といえば当然なので気にしないことにしておこう。

「しっかし……妖精が客なんて珍しいこともあるもんだ」

「人外は来ないものなのか？」

「そうでもないけど……圧倒的に少ないんだ。みすちーとかリグルは割と来る方だけだな」

なるほど……彼女達なら割と人里付近でも見かける上、友好的に接するので人里の中に入ったところで警戒されることはないだろう。

「なるほど……」

「というわけで、うちはお代を出してくれるなら人妖怪関係なく歓迎だからいつでも来てくれよ？」

翔太のことだ、恐らく少なからず無償にしているのだろう。

「はい、また来ます」

「今日のはじめて来てもらった記念ってことでタダでいいから好きなものを頼んでくれ」

ガラガラと扉が開かれ、新たな客が入ってきた。

「いらつしゃい、逆騎さんか」

「逆騎さん——って逆騎離狗か？」

「いかにも。何か不都合でもあったか？」

「いや…まさかこんなところで会うと思わなかっただけだ」

この人は人間なのか人外なのか分からないのでただ会っただけなのだが、身構えてしまう。

「私も食べなければ死んでしまう身だ。翔太、いつものやつと同じものをテイクアウトしたい」

「了解です！魔理沙、いつもの二つだ、一つはあら熱をとって包むぞ」

「いつものなんて知らない——ですよ」

「それもそうか…じゃあ俺は行くから注文は魔理沙に言ってくれよ」
「分かった」

「大ちゃん、決まった？」

あれから数分経つもの的大ちゃんはまだ品書きを見ている。

「済みません、もう少し考えさせてください…」

「好きなだけ考えていいよ。それにしても魔理沙は何故ここに居るんだ？」

「よくぞ訊いてくれたぜ。私はいつものようにここに来て焼きそばを食べて、帰ろうとしたら翔太に追いかけて回されてこの店を手伝わ

されているんだぜ」

なんの先入観も持たずに聞くと人さらいともとれるが、相手は魔理沙、そこから察するに、

「金を払っていないだろう」

「ツケにしているんだぜ」

「実際に払ったことは？」

「この次には払うつもりだったんだぜ！」

「当然の結果だ。しかし、どうして捕まったんだ？」

翔太には空を飛ぶことはできない筈だが、よく捕まえられたものだ…

「離狗のせいだぜ」

「どう客観視したところで非は魔理沙にある。それに私は飛んでいる小鳥を捕まえて引き渡したただけだ」

「私を小鳥扱いなんてな…今度会ったらただじゃおかないぜ？」

「せめて両手を使う位には強くなつてほしいものだ」

けっして魔理沙は弱いわけではない筈だが、それを片手で制するというのはどうしてできるのだろうか…

「私の誇り（マスタースパーク）を片手で破壊（防御）したあの時の屈辱、忘れたわけじゃないんだぜ」

逆騎離狗という人間が完全な人外に思えてきた。

「では、次戦う時はもう少し本気でいこう」

「臨むところだ——」

「魔・理・沙…言葉づかいは丁寧にしろって言っただろ…！」

「うう…」

しおらしくなつた魔理沙というのも珍しいのでしばらく口を挟まないようにしておこう。

「たまの薬はよく効くだろう。しかし、翔太も変に畏まる必要はないといっているが？」

「一応考えてはいるんですけど、逆騎さんって俺の世界に居た気がするんですよ。無茶苦茶強いのにどっか優しい人…まあ、どこにもそういう人って居るかなって思ってるんですけどね」

「私も心当たりがある。他が為に拳を振るう戦士がどこかに居た気がする」

「じゃあ、私はどうなんだ？」

「基本的に女の子は居なかったからなんとも…」

「私の世界は男女関係なく居たが、魔理沙の風貌に似たものとなると思い当たらない」

「い、言ってみただけなんだぜ！」

「少しだけ悔しそうな顔をしているのも黙っておいた方がいいだろう。もつとも、二人とも常人ではないので気づいているのかも知れないが。」

「飛脚師さん、決まりました」

「大ちゃんが着物の裾を引つ張りながら囁く。場の雰囲気にも飲まれてしまつて小声で話しているのにはなんともいえない感覚を覚える。」

「翔太、決まつた。普通の焼きそばと…」

「三色焼きそば…をお願いします」

「案外大ちゃんは挑戦心がある方だつたようだ。しかし、そんなものがあつたのか。焼きそばをどう三色にするのか非常に気になる。」

「じゃあ、早速作るからちよつと待っていてくれ」

「そう言つて厨房へと行つてしまつた。」

「お待たせ。飛脚師のは普通の焼きそばで…大妖精ちゃんのは三色焼きそばだ」

「そう言つて机に置かれたのは普通の焼きそばと確かに赤、茶色、なにも掛かつていないのか黄色い麺のままの三色になつていた。」

「翔太、ちなみにどんな味付けをしたんだ？」

「茶色はいつものソースで、赤はケチャップ—トマトをすりつぶしたソースだ。最後のはシンプルに塩焼きそばにしてみた」

「よくアレンジしたものだ」

「逆騎さんのアイデアのお陰で品数が倍増しましたよ」

「私は自分の世界の味付けを話したただけだ。実際売り物にした行動力は翔太自信のものだ」

「それでも…ですよ。ところで鍛冶屋の方はどうなんですか？」

「修練不足で駆け出すことすらままならない」

「でも、玉鋼製の道具を打てるのは逆騎さんくらいしかできませんよ」

「必要なものは業だ。それに、今は鉱石を採りに行く時間すらないからと直すことしかできない」

「十分だと思えますけど」

翔太たちの話はよそに食べることにした。

「いただきます」

「いただきます」

相変わらずなのは判断しかねるが、美味しい。季節を問わずいつ食べても美味しいものだと思う。

「赤い色が一番美味しいです」

「それはケチャップでできたナポリタンもどきだ。子どもにはそういうのがつけるのか…」

「子ども…」

大ちゃんも扱いが嫌いなようで顔に出る程堪えている。

「大丈夫だよ、大ちゃんは皆よりはお姉さんだから」

少なくとも自分の知っている妖精達とは格段に精神年齢が違う。

「一応大妖精ちゃんは子どもというか、飛脚師の妹みたいな感じだ。逆騎さんもそう思いませんか？」

「確かにそうだ。友という言葉よりも家族という言葉がしっくりくる」

「飛脚師さんの家族…」

ほわほわした表情で考えていた大ちゃんが不意に答えが浮かんだのか小難しげな顔をしている。感情が表に出るということは第三者か

ら読み取りやすいということだが、大ちゃんの表情はころころ変わる
ので判断もしにくい。

「妖精はまんざらでもなさそうな顔つきのようだが、当の飛脚師は
これをどう思う？」

「俺は…まんざらでもないが、人一人——いや、大ちゃんは妖精だ
が…養うのには飛脚を辞めないといけないからどうだろうな…」

少なくとも今の家では配偶者に迷惑がかかる。大ちゃんは飛べると
はいえ、負担にあることに変わりはないだろう。

「まんざらでもない…まんざらでもない…まんざらでもない……」
「大ちゃん？」

翡翠のような澄んだ緑色だった瞳がひどく濁った曇天のような眼を
していた。

「なんですか？」

自分の見間違いだったのか、今は大ちゃんの眼は爛々と輝いている
翡翠色だ。

「いや…何でもない……」

「逆騎さんですか？ありがとうございます」

「礼は承諾されてから飛脚師に言うべきことだが…末恐ろしいもの
だ」

なにかを感知取ったのかは分からないが、万が一のことが起こった
時は手を貸してほしい。

しかし、実際になにか起こったわけでもないので普通に焼きそばを
食べて終わるだけとなった。

「「ごちそうさま」」

「お粗末様。そういえば飛脚師、今日はなにも運んでないのか？」

「ああ、今日は最低限の仕事をやって休業だ。流石に買い出しに行
かないと困るからな」

本来はもつと前に行かなければいけなかったのだが、立て込んでいて今になってしまった。

「なるほど…で、大妖精ちゃんは何でついてきてるんだ？」

「それは…その……」

「手伝いをかってでてくれたんだ」

「なるほどね…そういえば、通りのすぐ近くにスイーツショップがあった」

「なんだ、それは？」

外来語なのか自分にはよく分らない。

「甘味処というのが一般的だろう。翔太のいうことは確かだ」

「ああ…甘味処か」

基本的に行く理由がないのでそういう場所には行ったことがないが、翔太はどういうつもりで言ったのだろうか…

「この季節ならば黒蜜葛くろみつくずや餡蜜あんみつ辺りが勧められる」

「何故二人から勧められるのかは分からないが、行ってみるよ。大ちゃん、甘いものは好きか？」

「はい。大好きです！」

妖精とはいえ大ちゃんも女の子なのだから当然の話だろう。

そうと決まれば自分も大ちゃんも食べ終わったので少しふらついてから行くとしてよう。

「翔太、勘定はここに置いておくぞ」

「飛脚師の分だけでいいぞ」

そつえばそんなことを言っていたな…

「わかった」

値段も品書きの中に書かれていたので自分の分を机に置いて店を出る。

「さて、少し歩こう——」

言葉を遮るかのごとく、鐘の音が何度も鳴り響く。

「飛脚師さん!？」

あまり聞くことがないとはいえ、鐘が鳴る時は危険だという認識はある。そして、そう遠くない先に煙が見える。

「私、先に行ってきます」

そう言っただちゃんは飛んでいってしまった。先に行くということは後から自分も行くということだろう。それならば迷う余地などない。

一呼吸おいて、地面を蹴り、煙の出る場所へと走る。

「火消しはまだか!」

「間に合わねえ、三つ隣まで逃がせ!壊すぞ!」

「手斧でいけるか?」

「さて、少し歩こう——」

言葉を遮るかのごとく、鐘の音が何度も鳴り響く。

「飛脚師さん!？」

あまり聞くことがないとはいえ、鐘が鳴る時は危険だという認識はある。そして、そう遠くない先に煙が見える。

「私、先に行ってきます」

そう言っただちゃんは飛んでいってしまった。先に行くということは後から自分も行くということだろう。それならば迷う余地などない。

一呼吸おいて、地面を蹴り、煙の出る場所へと走る。

「火消しはまだか!」

「間に合わねえ、三つ隣まで逃がせ!壊すぞ!」

「手斧でいけるか?」

どうやら家は二階建てのようで一応自警団の人達は居るが、さすがに本職ではないので身重のようだ。

「大ちゃん！どこだ？」

「ここです」

「よかった。どんな状況なんだ？」

「済みません、子ども達……が……中に……」

着物が少し焦げ付いている女性が息も絶え絶えに懇願しているようだが、気づかれていない。

「そ、その子はどこに居ますか？」

「二階と……一階の奥に……」

「自警団の人！子どもが二階と一階の奥に居るんだ！」

「あんた、飛脚師か。一階ならばまだ助けられるだろうが、二階近くから火が出るんだ。空を飛べるなら話は別だが……上白沢の先生なら……くそ、時間がねえ」

一階ならば自分の脚で火の手から逃げ切ることも可能だろうが……

「私が行きます！」

「大ちゃん！？確かにこの中では大ちゃんしか居ないが……」

「大丈夫です。案外妖精って丈夫ですから」

確かに人間よりは丈夫といえは丈夫になる。本人がそこまでの覚悟を見せるなら応えないわけにないかない。

「一分で水を持つてくる……」

井戸までの道は迷うことがないので何となく分かる。迷うことなく走り、水を二杯汲んでくる。

「一つは大ちゃんに……もう一つは……」

火に弱い上に荷物にしかないなので行李を置いて、水を被る。

「飛脚師さん！？」

「流石に大ちゃん一人じゃ二人は助けられないよ」

「俺達も手伝うぜ！」

「避難なら任せろ」

翔太と逆騎さんが手助けに来てくれた……今ならこんな火事くらい余

裕な気がする。

「先に行ってるぞ」

頭から水を被って燃え盛る家の中へと入る。

『あの子を助けて』

「誰…だ!？」

確実に誰かの声が聞こえた。通常熱を帯びている空気は簡単には吸えない筈だが…しかし、そんなことに構っている暇はない。炎の中に取り残されている子どもの元へ…

「あ…う…」

燃え盛る炎の中、布にくるまれた赤ん坊が居た。

周りは燃え盛っているというのにも関わらず、大黒柱の周りだけは焦げ付くことがない。まるで、赤ん坊を守っているかのようだ…

『お願い…この子を……』

これは…この家自体!？」

しかし、自分は今まで物の求めを感じたのはあくまで雰囲気のようなもので声として物の求めを聞いたことはなかった。

「分かった、任せてくれ」

赤ん坊を抱えて一目散に家を出る。

「飛脚師さん!」

「大ちゃん…」

流石に飛べる方が速かったか…しかし、大ちゃんはかなり消耗したようだ。

「飛脚師、下がっている…」

「逆騎さん?」

「神界・創成世界ーワールドオブエデンー」

逆騎さんの右手から灰色の弾が飛んでいき、不意に弾が巨大化し、家の周囲が灰色の世界になった。

「これは…」

「私の操る世界だ。中に生物が居る状態では使えなかった」
確かになにか異質な雰囲気がこの色のない空間にはある。

「じゃあ、火も？」

「熱エネルギー——いや、熱量を消した。それよりも大妖精に治癒術をかけてやれ」

正直人のなせる技ではない。燃える炎を消すなんてもはや大妖怪級の所業だ。

「ああ…輝符・煌—キラメキ—」

「ありがとう…ござい——くう…くう……」

礼の言葉を言い切る前に寝てしまうとは…

「どうやら、もう一泊だな」

そう言つてゆつくり大ちゃんを行李の中に入れる。フランとさして変わらない大きさなので悠々とはいかないものの余裕はある。

本当ならすぐに帰らなければいけないが、食材を買わなければいけないので最低限の店にだけ寄り、ものを買つて帰る。

「飛脚師—！」

人里を出ようとした時、不意に翔太の声がした。

「翔太か…どうしたんだ？」

「どうもこうも、子ども二人助けておいてそのまま帰るやつは居ないだろ？」

「残念ながら、一人は参加しない。俺はその一人の傍に居るつもりだ」

「だろうと思った。だから、こいつを渡しに来た」

そう言つて手渡されたのは竹が二本と竹の葉に包まれたなにかだった。

「これは？」

「竹に入ってるのが水羊羹、こっちのがどら焼きだ。二人分入ってるから【一緒に】食べてくれ」

やけに一緒の部分を強調された。ただ、強調されずとも一緒に食べ

る予定だが。

「ああ…ありがとう」

「でも、今度は資材運びで手伝ってもらうかもしれないけど、確かに焼けた家をそのままにはしておけないだろう。」

「そうだな…依頼なら明日から受け付けるからその時に言ってほしい」

「分かった、じゃあ…また」

「また、な」

日はもう雲を朱に染めているが、大ちゃんのことを考えれば安静第一だ。

ゆっくりと自分の家を目指して帰る。

大妖精、飛脚一日体験（後編）（後書き）

そうそう、天照のしゃべり方って廓言葉、または花魁言葉というわけではありません。前回出すべきだったことですが、忘れちゃいましたw

そして、まあ…何も配達してないことwww精々、家の想いを運びました。というところでご勘弁ください。

人によっては歯切れが悪いかもしれませんが、これで終了です。次回は、読者の方とはリリなの方でお会いできることを期待します。

作者の方とは活動報告かコメントでお会いできることを期待しますw
それでは！

血染めが走る(若干暴れる)(前書き)

八月は西向く侍ではないということ。一日早く投稿してみます。普通は逆でしょうけど。

血染めが走る（若干暴れる）

<Side - change 紅闇>

「ちくしょおおお！！待て、魔理沙あ！」

「ツケが欲しけちゃここまで来てみな」

今ツケの支払いを求めて全力疾走しているのは焼きそば屋を営んでいるごく普通の青年、強いて違うところをあげるとすれば、もう魔理沙のツケを信用できなくなったとこか。名前は紅闇翔太。

その時、空き地の木材に腰かけている逆騎さんを見つけたのは…

「あれ？逆騎さん…」

「翔太か。どうした？」

「あ…そくだ！魔理——居ないよな…」

気づくと魔理沙は空高く飛び立っていったところだった。

「追っていたようだ、魔理沙がどうかしたのか？」

「何ていうかその、ツケを払わないんで流石に他の客にも示しがつかないってことで取り立ててたんですけど…」

「そういうわけか」

「はあ…逆騎さんって飛べるわけ、ないですよ…」

「いや、能力を隠す必要がなくなったから短時間だが、飛行も可能だ」

人の身で飛行ができるとは思わなかった。流石というか、逆騎さんなら当たり前というか…

「ちなみにどのくらいですか？」

「高度にもよるが、五、六時間程だ」

「いや…十分長いです」

それだけ飛べれば十分だろ…

「そうか…国境は越えられないがな」

この世界って国だったっけ…いや、そんなことは…自分の足で行ったことがないだけか…

「十分ですよ。そういえば逆騎さん、昼飯はもう食べました？」

「いや。ついさっき薪を取ったところだ。もう一本取らなければいけないが」

薪：目の前には誰かが植えたような木があるだけでこの空き地には薪どころか炭もない。

「はあ…？まあ、なにも食べてないならうちで食べていきます？」

「そうだな…そうさせてもらおう」

「そんじゃ、立ち話もなんですし…」

「これは…焼きそばか、いただきます」

逆騎さんの世界では存在しない食べ物なのか…だが、見たことはあるらしく普通に食べている。

「はい、逆騎さんの世界にはないですか？」

自分の世界では携帯食料の一種を加工して作っていたものなのでもさか店が出せるとは思わなかった。

「いや、パスタがある。麺の種類が様々あるが…分かるか？」

そういえば昔に似たようなものは見たことがある。

「お偉いさんが軽食に食ってました。俺はその護衛でしたけど」

これ見よがしに食べていたのでイライラしながらの護衛だった…

「世界がどう変わろうが人に違いはないのか…」

「逆騎さんも苦労してたんですね…」

「いや、まだその最中だった。弟子が居たが…いや、もう飛びたっていた」

「弟子って…どんな奴なんですか？」

自分は独学なのでなんとも分からないが、弟子と師は似ると聞いたことがあるのでどうなっているのかが気になる。

「なんのことはない…しかし選ばれた人間だ。誰をも包み込むが悪意のある者には絶対零度の能力で挑み、勝つ。氷騎卿と呼ばれる…」

そんな奴だ」

あまり深く知っているわけじゃないが、逆騎さんは寡黙な方だと思う。それがここまで饒舌に喋らせるとは…よっぽど恵まれた奴に違いない。

「会ってみたいっすね…」

「役目を終えれば来るかも知れない。しかし、生涯くることはないかも知れない」

「どう転ぶかは運次第ってことですか…と、お待ちどうつす。シンブルな焼きそばですけど、どうぞ」

「ありがとうございます」

「失礼、私にもお一ついただけますか？」

声は男のようだが、フードを目深に被っているので容姿がよく分からない。不審といえば不審だが、変な違和感がある

「ああ…すぐに用意するよ。ところであんた、見かけない風だけど、誰だ？」

「私はモノローグ。語り手を生業にしている者です」

語り手…それなら雰囲気作りの一環ということで説明もつきそうだがこの男が怪談を語る姿も用意に想像できる。

「俺は紅闇翔太。見ての通り焼きそば屋をやってるんだ。まあ、詳しくは作ってからだ」

そう言って厨房へ行き、焼きそばをもう一人前作ってくる。

「お待ちどう」

「ありがとうございます、では早速いただきます」

「ごちそうさま、美味かった。補足になるかどうかは分からないが

私の世界の味付けを書いておいた」

「ありがとうございます」

テーブルの上の紙を見てみると確かに色々と書いてある。実現できそうなものから試していくしかないけど、これで一気にレパートリーが増える。そう考えると口元が緩む。

「ごちそうさまでした、対価はここへ」

「ああ？早いな」

「何事においても速度は不可欠ですから。機会があれば立ち寄りさせていただきます」

そう言つてモノローグも出ていった。

確かモノローグって【独り言】って意味の言葉だったと思う。語り手が独り言つても皮肉なものだと思うけど、あいつも外来人か……「さてと……」

もう一度冷静に考えてみよう。魔理沙はこれで何度飲食代をごまかしてきたか……初回は奢った、二回目はまあいいってことで返した、三十四五……客に出すのをパクられたのを入れずに十二回、いれたら二十越えか……無意識に滅牙を手にしていた。あと、たまに扉を破壊して入ってきたな……おっと、血液の入ったアンプルに手が伸びていた。

「おう、紅閨……どうしたんだよそんな難しい顔をして」

昼飯時なのでちらほら人が入ってきていたようだ。しかし、おつちやんは除いて何故自分に声を掛けなかったのか……

「豆腐屋のおつちゃん？ああ、悪い悪い。ちよつと魔理沙絡みで……

あ、メニュー開発ありがとな」

そういえば新メニューで岩豆腐入り焼きそばが中々の評判だった。

「めにゅー……そのめにゅーって言い方なんとかならねえか？」

「え？ああ……悪い。品書きって言わなきゃな」

どうもこの世界では通じない言葉があつて面倒くさい。外来人の自分がいえることではないけど。

「まあそれはいいとして、さっき魔理沙が調理表を借りただとか

んだとか…おい、紅闇？」

おっちゃん言葉に答えることなく厨房へ行き、戸棚の中を確認すると、ある筈のレシピはなくなっていた。

「皆、悪い。今日は臨時休業だ…」

アンブルが入っているホルダーと滅牙を手にして店の外へ出る。

この上なく頭は煮えたぎっているが、そこは冷静に。思い出せ、魔理沙はどこへ行くこうとしていたのか…人里での用はもう済んでいると思っていいだろう。次に行きそうなところといえば…まずは紅魔館だろう。

「久しぶりに尾が切れた！全身洗って待ってるよ魔理沙！！」

「そーなの——」

「だあああ！！」

紅魔館へ行くために雑魚妖怪は秒単位で蹴散らして突き進む。

「あたいがさいきょ——」

「知るかああ！！」

「チルノちゃああん！」

一応鞘でぶつとばしているので酷い怪我はない筈、大妖精ちゃんが何とかしてくれるだろ。

「zzz…zzz…」

「通りまーす」

荒事は極力避けたいので一直線に屋敷の中へ入る。

「パチユリーさまあゝ！悪魔が居ます！」

「それは貴女でしょ——」

「よう…ここに魔理沙が来なかったか？」

「小悪魔、十字架を…十字架を持ってきたさい」

「そんなものありませんよ」

「血染め程度でびびるなよ。で、魔理沙の居場所を知らないか？」

アンプルの中の血を浴びているので傍目には重傷者か殺人者にしか見えないだろう。

「残念ながら魔理沙はここに来てはいないわ。それと、絨毯は汚さないでちょうだい」

「そうか…次は、アリスの家にでも行ってみるか」

能力のお陰で一暴れしても息があがることもないので紅魔館から全力失踪で走り去る。

「ちくしょう…影も形もないときた…」

妖怪達のなら嬉しいところだが、魔理沙の痕跡は一切見当たらない。

「あら…？よく人間がこの瘴気の中生きていられるわね——って貴方！？」

確かに息苦しく、頭が痛くなってきている。正直こんな立地に家を建てたアリスに八つ当たりしそうだが、ここは堪えないと…

「お察しの通り、紅闇だ。ところで、ここに魔理沙が来なかったか？」

「来たわ。でも直ぐにどこかへ行ってしまったわ」

「何か手がかりはないか？」

「そうね…地底がどうか言っていた——ってどこへ行くの？」

「地底かああ！！」

「魔理沙と大して変わらないわね…」

「シャンハイ」

「釣瓶落と——」

上から桶に乗った少女が降ってくる…落下だから峰打ちでも切れる自信がある。腹でうち飛ばすのも刀が痛むので鞘を構えて一気に振り抜く。

「さねええ!!」

「ヤマメええ!!」

「安心しろ、鞘だ」

桶少女を一蹴し、走り続けていると、一本の橋と少女が見えた。

「お、ちょうど良いところに。なああんた——」

「パルパルパルパルパルパルパルパルパル」

幻想郷では変わり者しか居ないので対応に困るが、せめて話せる相手であってほしい。

「その…」

「パルパルパ——なにかしら？」

ただ集中していただけなのか、意外にも少女はすんなりと反応してくれた。

「この辺で魔女っぽい魔女を見なかったか？」

「……地霊殿の方に向かっていったと思うわ、保証はできないけど」

「ああ…いや、別に構わない。ところであんた、なにやってたんだ？」

「久しぶりに覚の妹を見たと思ったら、男連れだったのよ」

「どんな男なんだ？」

「炭のような真っ黒いこーとって服を着たイイ男だったわ」

「こーと」

「戻ってきてたのか…」

「知り合いなの？」

「まあ…腐れ縁というか袖すりあった縁とでもいつところか。そんな感じだ」

「へえ…まあ、行ってくればいいんじゃないかしら？」

スタイリッシュが居るのなら訊いてみればいいだろう。あいつなら

対空も十分だろうから手伝いを頼んでみよう。

「ここに居てもなにも変わらないし、行くとするか」

「悪かったわね」

「悪い意味じゃないさ、じゃあまた来るぜ」

そう言つて橋を後にする。

「地霊殿はまだか…」

走るだけでは中々着かない。幻想郷^{こく}に来てやっと飛行能力者の有能さが解かった。

しかし、このイライラを何とかしたい。魔理沙を取り逃がして、かつ、見つけられもしないこのやり場のない怒りをなんとか…張り紙…？

「相撲大会？」

人里で参加したのは力自慢の大会みたいなものだったけど…妖怪相手なら…本気でやってもいいんだよな…

「お前、人間か？」

少しのめり込んでいて背後の妖怪にも気づかなかつたか…

「おう、人間だ。ちよつと訊きたいんだけど、相撲大会のエント

ーいやいや、受付つてどこにあるのか知らないか？」

「お前、その若さで死ぬつもりか？」

相手がとんでもない強さだということなのか…

「つていうと？」

「あの勇義さんが出るんだよ」

地底世界には初めて来たので個人名を出されてもよく分からない。

「誰だ…？」

「怪力乱神、鬼の四天王が一角の星熊^{ほしぐま} 勇義^{ゆうぎ}さんだよ！」

「はあ…」

「本当に凄い方なんだよ！」

凄い奴ってことは解かった。解かったならなおさら戦ってみたいと思うのは当然のことだろう。

「まあ…戦ってみたいことには話にもならないし、殺し合いじゃないんだから別に平気だろ」

「お前も命知らずだな、気に入った。向こうの方で賑わってるのがそうだ。精々死なないように頑張れよ」

「死なれないように頑張るぜ」

「どいつもこいつも張り合いがないねえ…」

土俵の上に居るのは額から一本角を生やした美人さんだった。多分さっきの奴が言ってた勇義さんなんだろうな…

「じゃあ、次の相手は俺でいいだろ？」

滅牙は邪魔になるので鞘ごと抜いて土俵の外に置いておき、上着も一枚脱いで放っておく。

「人間かい…血まみれで闘^やろうなんていい根性してるね」

「いや、怪我をしてるわけじゃないよ。これが本気の状態なんだ」

「レフェリー、さっさと始めさせろよ」

「……なんだい？それは」

そうだ。前もレフェリーって言って混乱させた記憶がある。何て言ったっけな…

「あの…審判^{ぎやうはん}っていう意味なんだけど」

「それなら行司^{ぎやうし}のことだろう。私も早いとこ始めたいね」

「は、はい…両者、見合って見合って…」

静寂と緊張がその場を支配する。自分は相手の、相手は自分の両目を見据え、気を張り巡らせる。

「はっけよい……のこった——」

「「先手は譲るよ／後悔するなよおお!!」」

距離にすれば１メートルもないその距離を全力で走って掴みかかる…
「ひい…」

行司は何故か土俵から降りて行ってしまった。

相手も見越していたようで自分の手を掴んで踏ん張った。自分も若干手加減したとはいえ止められるわけには…

「人間の力じゃないね…下手な妖怪よりももっと強い。でもね…鬼の力を舐めない方がいいさね！」

止めた…いや、押し返してくる。

「そっちこそ…」

押しきられてたまるか…

「手加減してたのかい」

「あんたを知らないもんでね…」

やばい。本気でいつても拮抗で精一杯だ…空元氣は得意分野だけど、これは洒落にならない…

「割と力が入ってるんだけどね…私は星熊勇義。あんた、名前は何ていうんだい？」

「紅闇…翔太だ、翔太でいい」

「そうかい。じゃあ翔太、後で一杯やらないかい？」

「そりゃいい——なあ!？」

突然土俵が割れ、手をつこうにもしっかり握り合っているので自分も勇義も地面に頭から落ちた。

「土俵を作ったのは誰だい、砂山じゃないんだよ」

「痛てて…勇義さんの言う通りだ。今度は鉄を溶かして作ってくれよ」

あの力で戦ってれば砂なんかじゃ崩れて当然だ。

「翔太、さんなんか要らないよ」

「あのまま戦ってたら俺の方が負けてた。あの時の力が俺の本気なんだ…だからあんたはさんで呼ぶ」

「じゃあ、早いとこ勇義だけにしてもらいたいね」

簡単に言ってくれる…

「負けたわけじゃない、その内絶対に勝ってやるからな！」

胸の前で拳を作って言い放つ。

「頼もしいね。ところで、何でっただってこんなところに来たんだい？少なくとも観光には向いてないよ」

「あ…それなんだけど、ちよつとこの血を流させてくれないか？」

「いいよ。一汗かいたついでに温泉に行きな、その角をまっすぐ行けば煙が見える。効能は保証するよ」

「助かった。じゃあな」

「あゝ良い湯だ」

人里では味わえないこの解放感と独特の匂いは魔理沙を追うという目的とは別にまた来たいと思う。

そういえば、温泉で卵を茹でると新感覚なものになるらしいからレシピに加えられるかも…

「加減はどうだい？」

「最高だ——勇義さん！？」

後ろを振り返ると手拭いを頭に乗せた状態の勇義さんが居た。目の毒どころか、劇薬だ。でも、見てしまうのは男の性なんだろうな…

「どうしたんだい…この温泉を紹介したのは私だよ、私も来るのは当然だろう？」

「まあ…当然だよな…」

落ち着け、落ち着け。素数を、素数？素数ってなんだっけ…

「ほら、私一押しの銘酒【淡雪】だよ。風呂に入りながらも気持ちよく呑める。呑んでみな」

差し出された盃さかずきを受けとる。透き通っていていい香りがする。このまま眺め続けても美味しさは分らないのでゆっくりと飲む。確かにすっきりしていて酒が回りやすい温泉の中でも美味しく呑める。

「美味い。雰囲気は丁度よく合った酒だ」

「当然だよ。で、翔太…何でそっぽ向きながら呑むんだい？」

「そりゃ…面と向かって呑めるやつだったんだけど…せめて何か羽織ってくれよ」

普通は男女別に入る筈だけど、あの体でその辺が無頓着だとただの凶器だ。

「何か着て風呂に入る奴なんていやしないだろう？」

「それは、まあ…」

言い返すにも勇義さんの言葉が道理過ぎてぐうの音もでない。

「一人酒じゃあるまいし、面を合わせず酒を交わすなんて無礼だよ」
「それもそうなんだけど…とりあえず俺は先に出るから。」

自分には妹紅という恋人も居る。竹林にあった病院に配達に行った時、その主と談笑していたら消し炭にされかけた経験から今の状況はかなり危険な状態だと解かる。

「そうそう、泥棒魔法使いが地獄鴉に用があるって言ってたね。大方、火力倍増でも考えてるんじゃないのかね…」

どうやら魔理沙は確かに地底世界に居るらしい。

「その情報、ありがたく頂戴しとくぜ。じゃあ、またな」

勇義さんへ後ろ手に手を振り、脱衣場へと行き、服と滅牙を身に付けて地霊殿を目指す。

歩くこと三十分程度、民家とは確実に違う西洋屋敷が見えた。確実にここが地霊殿だろう。

「お邪魔し——」

突然一発の銃声がして、一メートル程先の地面に穴が開いた。

「無断でこの先に行きたきゃ俺の銃に合わせて一踊りしてもらおう」
声のする上空を見ると、見覚えのあるやつが居た。

「その声…スタイリッシュ！」

「What?そういうお前は…紅闇じゃないか。どうしてここに？」

「泥棒魔女にお灸を据えに来たんだ。居所を知らないか？」

「居所は知らないが、俺がここで門番の真似事をしている理由なら泥棒魔女のせいだ」

理由はどうあれ苦勞する人間だ。

「それはご愁傷さまだな。その分の借りも返しとくぜ」

「お前は危険でも用もなく来たわけでもないからさとりに訊いてみることをお勧めする」

知らない、じゃ答えようもないし、ここで談笑しても事態の解決にもならないのでその通りだ。

「そうさせてもらうぜ。そんじゃ、門番頑張ってくれ」

「Of course I do so it（言われるまでもない）」

習つてもないし、覚えられもしないからあんまり他の言葉を使われなくても理解できないんだけど…

「あ…ああ、うん。そうだな」

そう言い残して全力疾走する。これ以上は勘弁だ。

「すみませーん、誰か居ませんか？」

「はいはい、お呼びとあらば玄関先にでも、運び屋お隣、ここに参上」

やけにテンションが高い猫耳っ娘だな…

「ここに白黒の魔法使いが来たと思うんだけど、どこに居るか検討つかない？」

「あたいもさつき帰ってきたばかりだから詳しくは分からないよ。でも、さとり様なら知ってると思う。さとり様、さとり様！」

口数も多い。地底っていったら暗いイメージがあるが、勇義さんといい、この娘といい、微塵ふみも感じさせないな…

「急かさなくても典ふみさんの思念を感じましたのでもう来ています」

柱の影から薄紫の髪をしたちっちゃい女の子が出てきた。アクセサリーなのか付属品なのか分からないが、眼が、その眼光が、えぐい。「えっと…さとり——ちゃん？」

「失礼な方ですね、なれていますが…そうです、私が地霊殿の主、古明地さとりです。残念ながら魔理沙は地底を出ていくところです」ということは、俺が余計な道草を食わなければ追い付いていたかもということか…でも、余計…でもないな。

「楽しい思いが出来た分のツケですね。魔理沙さんを追う理由もツケなんですね」

「いやいや、楽しいなんて…向こうが勝手に…」

そうだ、あれは俺が悪いんじゃない。勇義さんが、勇義さんがあんな破壊力抜群の身体をしているからだ。

「勇義さんは無頓着ですからね。言っただとこで聞く相手でもありませんし。ですが、嬉しかったでしょう？」

「……うん」

「正直な人ですね」

「うん？ちよっとおかしいな。俺は一言もここに来るまでの経緯を言っていないし、勇義さんが居たことも言っていない。どういうからくりなんだ？」

まさか、上空から監視していたわけでもあるまいし…

「ふふ、私はそこまで暇ではありませんよ。『心を読む程度の能力』って言えば解かりますね？」

口に手をあてながら笑うところはなでなでしたい衝動を掻き立てる。妹紅もあんな感じで笑ってくれるかな…おっと、心を読む…なるほど。

「それでか！」

「中々危険な思考を持っていますね。少し距離をおかせてもらいます」

「大丈夫だって。冗談…でもないか」

「そこは嘘を言っただけいいところです」

でも、この環境じゃ秋山も大変そうだな…あいつ常に考え事をして
そうだし。

「彼は思考を読まれたくない時は別の言語で思考するので私にも判
断が付きません」

「凄いな…」

「私もこんな方法があるなんて思いもしませんでした。そうそう。
紅闇さん、無駄話も程々にしないと目当ての人が遠くに行かれます
よ？」

「大丈夫。妹紅は簡単に居なくなったりしないし」

「そういう意味ではありませんよ。魔理沙さんを逃がしてしまうと
いう意味です」

「!？」

「完全に忘れていましたね」

「い、いや、そんなこと、ことは…」

「嘘ですね／＼どう見ても嘘だよ」

「……うん。なんか迷惑かけたな。後、俺の名前は紅闇翔太だ。必
要なくても自己紹介はしないとな」

「あたいは火焰猫^{かえんびょう} 輪^{りん}、お隣^{りん}つてよんでね。でも、殊勝^{じゆせう}な人間も居
るものですね、さとり様」

「そうですね。では、ご武運を」

「ありがとなー！」

走りながら思う。地底世界…来る価値はあったな。

地底から出てみると、上空二、三メートル位のところに二つの人影
があった。よく見ると、片方が魔理沙っぽい。もう片方は…樹木を
持った逆騎さん？どんな力をしてるんだ…

「逆騎さーん！何で木なんか持つてるんですか？」

「槓^きと椀を奪われた。手持ちの木では取り回しが利かない」

逆騎さんでもそんなミスをするんだな…魔理沙は逆騎さんの剣撃を

ひらひらと避けていて、考えるまでもなく苦戦している。助けに行こうにも上空では手出しができない…そうだ、

「逆騎さん！こいつを受け取って——」

滅牙に手をかけるのと殆ど同じタイミングで魔理沙がなにか取り出した…まさか！？

「決めるぜ…マスタースパーク！」

魔理沙の手のひらから極太のレーザーが放たれ、逆騎さんは木で防御したものの、直撃は避けられず、木は砕け、その場には煙が上がっていた。

「逆騎さん！？」

「あつけないぜ…とりあえず光の刀は借りて——」

逆騎さんの剣の柄を弄くる魔理沙の頭上に黒い影が見えた。

「ま、魔理沙、後ろ見ろ！」

「え？」

「おいたが過ぎるな。歯を食いしばっておけ…せんげつ織月」

魔理沙の背後に移動した逆騎さんは魔理沙の頭に掌打しょうだを打ち込んだ…勢いを殺せないので軽く吹き飛んだふらついた魔理沙が落ちてきた。

「オーライオーライ…よし、捕まえた」

逆騎さんは狙って打ち飛ばした…というのもあり得ない話じゃないけど、人間離れし過ぎだと思う。

「翔太、槓と柁はあるか？」

「えっと…これですか？」

二本の柄をポケットから取り出す。これ、よく見ると柄じゃなくかなり精密な機械だ。

「そうだ。済まないな」

「いえいえ、俺の方こそ助かりましたよ。レシピもあつたけど、どうしようか…」

財布を抜いて…というのはどうなのだろうか。

「私のところでこの子の箒と武装品の類いを預かるう。少なくとも空には逃げられなくなるがどうする？」

「そうですね…ひとまず店で寝かせることにします」

「そうか。経過報告は鍛冶屋に来ればできるだろう、私は先に帰らせてもらう」

「そうですか…じゃ、また行きます」

魔理沙を担いで店へと帰る。どうしようかな…

<Side-change 魔理沙>

「ん…どこだぜ？ここ」

自分は確か…離狗とやりあって、倒した…後のことが思いだせない。

「お、起きたな魔理沙」

「げ…翔太かよ……」

「げ——じゃない。さ、今までのツケ、払ってもらっぞ」

「幾らなんだぜ？」

ポケットに手を入れ、八卦炉を…ない！？マジックアイテムも全部ない…

「扉の修理費込みでこのくらいだ」

差し出された紙にはおかしな桁が書いてあった。

「おいおい、これはいくら何でもぼったくってるぜ？」

「焼きそばはそこまで高くない。けど、扉ってな、お前が考えてるより高い買い物なんだよ」

「こんなに持つてるわけないぜ…」

「ま、普通はそうだろうな。俺も突然言われたら持ってないって答えるし。でも、ないならないで稼いでもらおうか——」

稼ぐ…って、

「わ、私はまだそんなことしたくないぜ！心の準備とか、そもそも好きでもないのにそんなことをしようってのか？」

「は？ちよーどいい助手だと思っただけだな…じゃあ運んだりするだけでいいよ」

「え？助手？」

「それ以外にどうやって金を返す方法があるんだ？」

「いや。いやいやいや。勿論そうだよな、助手だよな！」

「変な魔理沙だな…じゃ、とりあえず基本を叩き込んでやるから覚悟しろよ……」

どことなく間の抜けた感じだった雰囲気^{雰囲気}が狼のような鋭く、半ば殺気にも感じるような雰囲気^{雰囲気}に変わった…

「お手柔らかに——」

「できるわけねえだろおお！！」

「止めてほしいんだぜ！」

そうそう。この後翔太の恋人が来てなんか勘違いしてばや騒ぎを起こした隙に逃げ帰ろうとしたけど、篝^篝がどこにも見当たらなかったのでお茶を沸かしておいてやったぜ。

血染めが走る（若干暴れる）（後書き）

今回は一話完結で終われました。私の中でこの作品とは四人の主人公達がそれぞれの道を行く中で、たまに交わり、繋がり合い、その集合体が物語になればいいなと思っています。では、次回予告でも。

次回予告、スタイリッシュがスタイリッシュに火を吹くぜ！

次回、見えないオモイ

見えないオモイ（前書き）

はい、いつもは8000程度ですが、ちょっとおまけしました。

見えないオモイ

<Side-change 秋山>

「平和だ——ヘドが出そうな程に」

ただの平和なら嬉しさと退屈さでくたばれる。しかし、この平和の時間はあの戦いから別れてからというものの能力が知らせている状態のままだ。こいしに何かが起こる。しかし、何も起こりそうな気配はない。

「典君〜早く〜」

現在とはとりあえず泊まることを考え、人里へと向かっている最中だが、一瞬先からの未来に何か悪いことが起こるとなるとやるせない。「俺と一緒に歩きたいなら、そこで止まって俺を待つことだ」

「はい」

そう言うが速いか、消えた。次の瞬間には背中に何かが貼りついた。

「【そこ】だ、【ここ】じゃない」

「もう【ここ】だもん。早く〜」

「It's...Selfish princess（とんだわがまま姫だ...）」

「典君、また変な言葉言った〜」

「こいしにとつてはどうでもいい言葉だ。それより、落ちるなよ」

おぶっているわけではないのでコートには破れないようお願いするしかない。

「うん！」

コートはふざけているような重さだが、人一人支えられないほど非力ではない。

「ギヤアアア！！」

毛の生えていない熊のような化け物が現れた。雑魚妖怪か…

「Shut up（黙ってろ）。Hand gun shoot」
腰に備え付けてある拳銃を取って眉間を撃ち抜く。ただの魔力弾な

のでどうせ死にはしない。しかし、これでいい。殺さなきゃいけない奴以外は生きていればいい。というのが持論なのでこの雑魚を殺すことに意義を見いだせない。

「典君つよい！」

「的に当てただけだ、敵じゃない」

こんな雑魚が危険な筈はない。拳銃をホルスターに戻し、歩き続ける。

「ふ〜ん…ねえ、典君…典君の絵が書いてあるこれ、なあに？」

自分の絵…人相書きをされた覚えはない。後ろから伸びてきた手の先には、以前居た世界のＩＤカードがあった。

「これは！？返せ、アタツシケースから勝手に持ち出したのか？」
自分の商売用の持ち物入れであるアタツシケースは現在地霊殿の中にある。理由は自分に課せられた仕事がいしへの大道芸の披露でなく、一人旅の護衛をさせるためだ。

「やだ。これ、お守りだもん」

本当はいしに渡してしまってもいい。この世界ではあのＩＤカードは犬の餌にもならないごみのようなものだが、未練がないわけでもない。しかし、それよりもこいしの欲しいという気持ちの方が大きいことは確かだ。

「Great…（上等だぜ）好きにしろよ」

アタツシケースがここにはないので当然だが、仕事は殆どできない。勿論必要な金銭は渡されているのでそこその環境で暮らせば四、五日は十分賄える。こいしの機嫌次第でどこへでも行く旅なのでその辺を考慮すると三日以内には一度戻るだろう。

「典君、この数字がいっぱいななあに？」

識別番号のことか…

「ただの落書きだ。もう俺に関係するのは…斜線の入っている――」

「これ？」

「そうだ。それは俺が生まれた日だ。この世界でも時間は同じく流れているらしい」

「へえ、典君の誕生日、知ってるの？」

「いいや。俺は昔居た世界ではな、いかに人を信用しないかが問われる仕事をしていた。どれ程頑張っても信用はされないし、とてもじゃないが人には言えない。だから共通点を持ちたくなかった」

救われた人間が居たのは確かだ。しかし、救った人間が喜ぶとは限らない。存在を否定されることがや居場所がなくなることなんて何度もあった。

「典君……」

「なんだ？」

「こいしのこと、信じてる？」

顔は見えない。しかし、声には震えがあった。

「さあな……とりあえずわがまま言わない内は好きなだけ居ればいい」「いじわる……」

「なんとでも、お嬢様。首が苦しいから背負うぞ」

「は……い！それで、典君——」

今は平均台の上を歩くような平穩を楽しむというのも悪くない。その時がくれば、何とかしてみせる。

人里に着く頃には日没は過ぎ、家路につくものが殆どだった。人里もそこそこの大きさがあり泊まり込み用や人里以外の者を泊めるための宿屋はちらほら見受けられる。

「いらつしやいませ。お泊まりで、二名様ですか？」

「ああ、金は前払いか？」

「できるならそっちの方がありがたいです」

「そうか。じゃあ先だ、部屋はどこだ？」

コートの中にある財布から料金を払っておく。昔もホテル暮らしだったのでチェックアウト方法が脱出か見送られるかの違いに慣れれば大したことはない。

「二階の木の葉の間になります。では、ごゆっくり…」

部屋の中は綺麗に掃除されていて眺めも中々のものだ。

「そろそろ離れろ、寝たければ布団でだ。風呂も好きに行けばいいだろう」

「じゃあお風呂行ってくる」

そういうと軽快に走って行った。ようやく自由の身だ。コートの中に入っている銃器を全て出し、携帯用の部品ケースセットを出す。分解と油でもさしておいた方がいいだろう。優先度が高いサブマシンガンから始めてみるか……

「きゃああああ！！妖怪！！」

下の階で女性の叫び声が聞こえた。人里に入り込む妖怪なんて珍しいものもいたものだ。室内なのでグレネードや重火器は持てない。ハンドガンが一番適している。両手に持って下へと急ぐ。

「俺が始末する、妖怪はどこ——」

そこまで言ったところでわめく女と、大粒の涙を流すこいしの姿を見た。

「お客様、何かございましたか？」

宿屋の手伝いがなだめようとしているが、双方に効果はなさそうだ。「妖怪が…いきなり締め付けてきたのよ！殺されるわ！」

「ちが…う…のお……」

「この妖怪——」

「黙れ、俺の連れだ。一つ教えてやる、妖怪っていうのはな、考えなしに人を殺す化け物のことをいうんだよ。こいし、行くぞ。店主

に伝えとけ、五分以内に消えてやる」

ここまで排他的な集団が居たとは…迂闊だった。

「さっさと消えなさいよ！」

「おい、擦り傷もなくて泣くほど苦しんでるやつを尻目にして殺される——なんてほざくなよ。なんなら黙らせてやるのか？」

「あんたもこれと同じ化け物よ！」

何故が無意識に引き金を引いていた。最初から当てるつもりはなかった。ので柱が少し爆ぜただけだった。

「今の俺は最高に上機嫌だ、おまけが欲しいならいつでも言ってい」

こいしの手を取って部屋へと戻る。銃の分解に一区切りついていたのは運が良かった。

「ふみ…くうん、ごめんなさい……」

帽子の上から頭を撫でる。嗚咽混じりでもこんなことが言えるか…ハンカチの一つも持っていない自分が恨めしい。

「この宿を決めたのは俺だ…悪かった。俺が軽率だった…」

銃器をコートの中にしまいこみ、部屋を出る。

「お、お客様…先程は——」

入り口のところには苦虫を噛み潰したような顔をしている店主が居た。その表情も当然といえはそうなるのだろうが、同情の義理はない。

「ゆっくりできたよ、ありがとう」

外は月夜が照らす穏やかな明かりと静寂に包まれていた。

「Great…（最高だぜ）」

「典君…」

重みがかかる場所がいつもと違う。背中に張り付くような全体にか

かる感じではなく、腰の辺りを掴んでいて、迷子の子供だ。

「Ride me Shall we date?（乗れよ、デートといこうか?）」

「典君、怒ってない?」

「怒る理由か…少なくともこいしにはない。と、さっきの言葉の意味も知らないだろうな」

「うん…」

「もう少し大人になったら教えてやる」

「いじわる…」

あてもなく歩き続け、気がついたら竹の生い茂る林に来てしまった。

「Great…（畜生…）」

「どうしたの?」

「迷った。せめて日が照っていれば——」

「典君、向こうは明るいよ?」

「え?」

確かにこいしが指差す方向には明かりが見えるが、上空な上にまるで火事のような感じだ。

「ひとまず向かう価値はあるか…飛ぶぞ」

「うん!」

前傾姿勢から踏み込んで跳び、身体中に浮遊魔法を掛ける。

距離自体はそれほどでもなかったが、明かりの場所では少女二人が手加減なしの殺し合いをしていた。

立派な庭園の上でよくやるものだ…建物も見た目は大きめで和風な

作りの好印象をうけるが、それはさておき、火事になる前に止めるべきか……

「お嬢さんがた、その辺で——」

飛び続けるのも疲れるので一旦塀の中へ降りながら話しかけていると、横から声が聞こえた。

「貴方、誰ですか？」

「What?? Bunny girl? (ウサギっ娘だと?)」

「バニーガールじゃないです！薬師見習いです！」

「Oh sorry: Can you understand English? (それは済まない。あんた、英語が分かるのか?)」

「話せませんが、ほんの少しだけなら分かります……」

「じゃあ、戻した方が良さそうだ」

「できればそのままお願いします」

「そうか。俺は秋山、横に居るのは連れのこいしだ」

「私は鈴仙 優雲華院 イナバです」

「自己紹介はその辺で、あの二人を止めないか？ガキの殺し合いは好かない」

殺し合い自体も好きなわけではないが、考えが甘いガキの殺し合いは後が面倒だ。

「そんな……姫様に向かってガキなんて……」

「姫だろうが神だろうが、ガキはガキだ。そもそもあんたの許可も要りそうになかったな」

鈴仙が今戦っている人物を目上のものと見なしているのなら第三者が物騒な手段で邪魔をすることを認めないのは当然だ。

「心配する必要はないわ。あと数分後には両者飽きて引き分けになるから……The gun master boy (銃使いの坊や)」

鈴仙の横には、いつの間にかとんでもない長さの銀髪を編み束ねた女性が居た。赤と青がついになったナース服を着ていてかなりのプロポーションだ。月明かりに煌めく髪と瞳は幻想的ともいえる。

「まだ、トリガーに指もかけていないんだがな。Ms・Artem

is（月の女神様）」

「月…ね、いい得ていて面白いわ。私は八意 やごころ 永琳 えいりん、この永遠亭 えいえんてい で医者をしているわ。手足や臓器の三つくらいならなんとかできるからいつでもどうぞ」

「そうか、さっきの治せるレパトリーの中に心つてのを追加しておいてくれ。しかし、どこで英語を習ったのか…」

「ちよつと昔に調べただけよ。面白そうな言語だったので調べてみると、ひねりも言い回しも殆どない単調なものだったわ」

確かに英語は今話している言語と違って意味をそのまま言っているのでそういう見方もある。

「単調で悪いか？」

「いいえ。つまらないだけよ」

「言葉の解釈については同意見だ。ところで、ここは泊まれるか？」

「私は医者をしているっていった筈だけど？」

「不可能とは言っていない」

「対価は？」

「ものにもよるが、仕事か、大道芸ならいつでもできる」

「じゃあ簡単な仕事をお願いしようかしら。上で戦っている黒髪の女の子の脳天を吹き飛ばしてほしいの。さっきはああ言っただけど、もういい加減に目障りでしょう」

しかし、どう見てもそちらが姫の方だろう。

「自分の姫を撃てとは…素晴らしい従者も居たもんだな」

「その従者の願いを叶える貴方も十分素晴らしいわよ？」

「そうだな…じゃあ早速撃たせてもらおうか。Sniper——」

コートの中に手を入れ——

「ちよつと、師匠も秋山さんも物騒なことをしないでください！」

「何が？」

「こいしちゃんも止めるのに協力して…」

しかし、こいしは帽子や髪をいじっていて、その姿からは話の内容を理解しているのかすら怪しい。

「いゝよ」

そう言う自分の元に走ってきて、正面から抱きついてくる…更に自分はコートに片手を入れているという不利な状態だ。

「クソッ…」

避けるわけにもいかなないので抱き止めつつコートに入れている左手でグレネードを取りだし、逆さの状態にして小指でピンを抜く。

手榴弾はピンを抜いてから爆発まで五秒程度の感覚がある、こいしが抱きついてきた時の衝撃を殺すためにバック回転のように体制をそらし、グレネードを蹴り飛ばす。

「くたばれ輝夜あ！」

「甘いわね妹紅…」

蹴り飛ばしたグレネードは狙い通り両者の中間へと飛んでいった。

「なんだこれ——／なにかしら——」

少女たちの言葉を完全に無視し、爆発が二人を飲み込んだ。

「The poor fireworks (汚ねえ花火だ…)」

「姫を受け止めてくれれば結果は十分よ」

「Great! (上等だ)」

右手で抱きつくこいしを支えながら走り、庭園の岩を踏み台に姫の方を左手で抱え、体を反転させてもう一人の少女を背中に乗せ、着地する。

「凄い…」

「うちのお姫様をたぶらかさなかったらもつと楽だった」

「あ…済みません…」

どうやらこの鈴仙は師匠に似て察しいらしい。こいしを下ろしながら声を掛ける。

「別にいいさ、楽しんだようだからな。姫は渡すが、この娘——妹紅じゃないか」

よくよく見ると人里の焼きそば屋が執心中の少女、藤原妹紅だった。殺しやすいものの、勘違いも起こしやすいので夜に戦うものではないな…

靴を脱いで縁側から適当な部屋に入る。

「ウドンゲ、姫を回収なさい」

「はい…済みません………ありがとうございます」

駆け寄る鈴仙に姫を渡す。そして、未だに手を離さない連れの姫様も離す…

「やゝ！」

思いのほか離れない、まるでコアラだ。

「離れる。鈴仙、こっちの姫も引き取ってくれ」

「お姫様の傍には王子様がお決まりですよ」

「Great…（上等だ）」

帽子の上から頭を撫でる。すると、くつつく力が強くなった。こいしには皮肉もなにも通用しない…疲れるが、悪くはない。

「貴方達も入ったら？夕食くらいならあるわよ」

「こいつを横にさせたらそうさせてもらうよ。こいし、先に行つてろ」

「はい…」

こいしは気の抜けた返事でコートから手を離し、永淋について行つた。

「起きろよ、狸寝入りの眠り姫」

最近こいしが背中に張り付くことが多いせいで変な感覚が研がれた。妹紅を背中受けて止めた直後から規則正しい寝息は聞こえていないので今の今まで起きている筈だ。

「誰が姫だ…寝てたつもりもないよ、ただ、冷静になっただけだ」

「復讐か？」

「どうしてそう思うんだ？」

「その先を見ていないんだよ。あの姫だけを見ていて殺した後どうするかを考えていない」

「別に関係ないだろ…」

「ガキの殺し合いが嫌いなだけだ。復讐をやめろなんて言わないが、せめて殺した先にあるものくらい見つけろよ」

「そ、そんなこと——」

「殺つてから考えるか？ いいことを教えてやる、復讐した後つていうのはな…嬉しさとかくだらなさでなにも考えられないんだよ」

「それじゃ…お前も……」

「昔の話だ。今は殺すのが人から妖怪になっただけだ、お守りは除くがな」

このジャンルは今まで一度もつけたことがなかった。もっとも、頼むようなやつも居なかったが。

「どんな気分だったんだ？」

「さつきも言つたら、嬉しさとかくだらなさでいっぱいになった。実感も達成感も消えた、その上殺したところで自分の状況は殺人犯から変わらないんだよ…」

この世界には警察も裁判所もないから殺人犯でも関係ないと思うが…

「じゃあ、なんでお前は生きているんだ？」

「死にたくなかったんだよ。ただ、それだけだ」

本来ならその時に死んでおくべきだったのかも知れないが、一回チヤンスを逃すと中々そんな時はこない。

「そうか…」

「そうだ。確か死ねないっていうのは聞いたが、死なないことと生きることとは違う。少なくとも俺よりましな人生を送れよ、じゃあな」

「生きる意味か…考えてみるよ」

「時間は十分ありそうだしな。それに、惚れた奴も居るわけだ？」

「ち、違う！ あいつとはまだ…」

「のろけ話は今度聞かせてくれ」

背中から妹紅を下ろしてこいしの行った場所を目指す。

賑わう声が聞こえる部屋の障子を開ける。

「あ、秋山さん」

「まだみたいだが、賑やかなディナーだな。済まないが、ハンガーにこれをかけたいんだが、どこかにあるか？」

「ウサウサウサ。お兄さん、私が親切丁寧に運んであげるウサよ？」
こいしと殆ど変わらなくらいの背丈で桃色のワンピースのような服を着た幼女が近寄ってきた。鈴仙の真似なのかは定かではないが、この娘もウサギの耳をつけている。

「悪いが、持っていくのも掛けるのも俺がやる。場所だけ教えてくれ。それと、名前くらい名乗るべきじゃないか？」

「私は馬鹿っぽい相手には名前を名乗らないウサ」

「主義が似ているな、そんな時俺は名乗ることにしてる。秋山だ」

「その子は因幡（いなば）てゐです。お客さんだからそんなことを言っちゃだめですよ」

「ぐぬぬ…まあまあ、お客様の荷物持ちくらいしますウサ」

うさんくさいことこの上ない。そもそも人を信用しないことに長けているのでそういう直感がこいつは信用するなといったている。

「じゃあ、持ってもらおうか…ディナー前の一運動にはちょうどいいだろう」

「はいどー——もお!？」

思った通りコートを受け取った瞬間崩れ落ちてしまった。妖怪でも重いものは重いらしい。

「というわけだ。ハンガーまでは俺が運ぶよ」

そう言つてコートを取つて羽織る。

「私が案内します。ついてきてください」席を立てて部屋を出る鈴仙に続く。

「まったく、この診療所にはわけありな奴が多いようだな」

「あはは…てゐも本当は素直なんですよ。でも、てゐをあそこまで言い負かしたり出来るなんてちよつと尊敬します」

口先程度がどんなレベルでも関係ないとは思うが、鈴仙はどう見ても言い負かされっぱなしのようなのでそういう気持ちもあるのだろ

う。

「口で済めば可愛いもんなんだ、牙でも向けられたら撃ちづらい」
外見で力が測れるわけではないのは百も承知だが、それでも一定の基準になって自分が一瞬ためらうので結局手を出すことなく済むのが一番だ。

「意外と優しいんですね」

「優しさの定義が随分と見直されたもんだ…」

「そんな言い方じゃなかったらもつと伝わりますよ？」

「話し方も生き方の内なんadena、直す気はない」

口が上手くないとより良い選択もできない。

「その方が秋山さんらしいですけど…」

「変わるだけが進化じゃないさ、そうだろう？」

「そう…ですか……」

うつむく目と低くなる言葉から察するに過去の琴線きんせんに触れてしまっ
たようだ。

「悪かったな…」

「あ、いえ……秋山さん」

「なんだ？」

「私、脱走兵なんです…」

「それが？」

「貴方もそんな気がして…済みません、変なことを言って」

「俺はいつでも逃げ出せたから関係ないな、人里の焼きそば屋に相
談しろよ」

あいつは確か元兵士だった筈なので自分よりもいい相談相手になる
だろう。

「そうなんですか…ありがとうございます」

律儀にも腰を折って礼を言うとはな…こんな奴初めて見た。

「普通は役に立った時に言うものだと思ってたよ」

一室の前で不意に彼女が止まった。

「この部屋に泊まってください。ハンガーはその棚のなかにあっ

て、お布団も用意していますから」

銃器類にセーフティーを掛けてハンガーにかけ、腰のサブマシンガンとグレネードも添えて置く。早くもきしんでいるが、これ以上増えなければ何とかなるだろう。

ありがとう

「Thank s」

「ゆーあ、うえるかむ…」

「師匠に教わることが増えたな」

「どういう意味ですか!？」

「さあな…」

ハンドガンは腰のホルスターに入れたままにしてさっきの部屋へと戻る。

「秋山さん、待ってください」

「丁度道案内が欲しいと思っていたんだ、頼めるか？」

「こいしちゃんの言う通りです…」

「何が？」

「いじわるです」

「なん——」

「なんとでも？」

「Great…（最高だぜ）」

部屋では早くも食べ始めていた。理由は…考えるまでもなく三人のようだな。

「お帰りなさい、悪いけど先にいただいてるわ」

「「気にしないさノいえ、大丈夫です」」

さつさと席について食べ始める。

「美味しいな」

「その煮付けは私が作りました」

川魚の煮付けは珍しいが、美味しいので何ら問題はない。

「というか全部鈴仙が作ったものだし……隙あり！」

てゐは一瞬の間を逃すことなくこいしの皿に乗っている魚をかつさらった。

「あゝ！てゐちゃんがお魚取った！」

「さつさと食べないからだ。半身でよければやる」

「やった〜！」

「一応言うが、次やったらこいつ（銃弾）をたらふく食わせてやるからな」

ホルスターを軽く叩いて言うのとてゐの箸は止まった。

「敷居は高いウサ〜」

「じゃあ、足を鍛えるんじゃないかって羽を生やすんだな。ウサギ程度には越させない」

「じゃあ付け合わせの人参ちようだい」

「は？物好きな奴……まあ、当然といえばそうか」

よくウサギが好むものとして人参があげられるが、まさか妖怪ウサギも例に漏れないとは思わなかった。

皿の上にある人参をよそつてやると急に上機嫌になった。魚を奪うよりは人参を分けると言った方が効率的だと思うが……その辺は性なのだろう。

一気にメインディッシュが減ったので食べ始めた遅さの割には一番抜けすることができた。

「ごちそうさま、先に抜けさせてもらっ」

「それじゃ、お風呂に案内しますから少し待っててください」

そう言うのと、残っている食事を勢いよくかきこんだ。本気を出せばどうということもなかったのか……

「遅いわねウドンゲ」

さつきまで悠長に食べていた永淋の椀が静かに置かれると、そこには何一つも残っていないかった。

「師匠にはまだ及びませんね……」

「先に言うておくが、これは早食い大会じゃない」

「つい、ね。年甲斐もなく早食いなんてしてしまったわ」

「あんだ、そんな年か？」

「少なくとも二十歳は越えているだろうが、それ以上は見た目から察することはできない。」

「貴方、何歳？」

「二十一だ、多分」

「そう、残念ながら私は八桁よ。年齢だけなら最年長かしら」

「三桁を生きる人間なら見たこと位はあるが、次元が違いすぎる…」

「は??」

自分の口から出たのは、肯定でも否定でもなく、ただ、理解できない時に言うごく一般的な言葉だった。

「というか、二桁なんて赤ん坊の範囲よ？」

「それはどうも。参考に、人外の成人って何歳だ？」

「妖怪の場合は千年が一区切りでしょうね、神は…信仰次第でピンキリね、他も大体が千年かしら」

「参考になったよ、ありがとう」

「そう言って席を立つ。」

「じゃあ、お風呂まで案内します」

「コートの時と同じく鈴仙についていく。」

「まったく…ここ（幻想郷）じゃ人間もネズミと同じだな。いや、それよりも悪いか」

「きつとここ以上もありますよ」

「どうせそこでも生の渴望はあるがな」

「そうですか？」

「一秒でも長く生きたい奴が居たんだ、不思議じゃない」
「もつとも、その人物は既にこと切れているが。」

「ここがお風呂です。代えの服は…」

「辺りを見回しているが、普通そんなものがあるとは思えない。」

「あるわけないな。構わないさ、このスーツはすぐ乾く」

「済みません…」

「それよりも部屋を空けてくれるとありがたいんだが？」

「済みませんー！」

ただ言っただけで顔を真っ赤にしながら出ていくとは…初心^{うぶ}なんてレベルじゃない。

さつさと体を洗ってバスルームを後にし、思い出しながら食事をした部屋へと戻る。

「あら、案外早かったわね。晩酌でもいいかが？鈴仙の酌も飽きてきたし、何よりあの子あまり呑めないもの」

「医者が勧めるか？」

「適量ならむしろ健康に良いわよ。それで？」

「付き合うよ。子供達は？」

「鈴仙が付き添ってお風呂に行ってるわ。今日のは少しいいものよ」
二つある内の一つのグラスによく冷やされた冷酒が注がれる。二つあるところを見ると、元から狙っていたようだ。

「いただくよ。もう一つのグラスを」

差し出されるグラスに酒を注いでいく。

「ところで、貴方の持っていた銃器からは火薬の臭いがしないのだから？」

「実包じゃなくて魔力弾だからだ。この世界ではどうやら魔力の素養があつたらしい」

込める魔力次第では鉄板も貫通できるが、別に言う必要はないので黙って酒をあおる。

「珍しいわね…」

物静かにグラスを持つだけでも絵になるものだな…

「しかし、ここは随分愛で溢れてるな」

「そうかしら？てめはいたずらし放題、鈴仙は私とてめと姫の板挟み、私も研究に仕事、姫は滅多に出てこないこの永遠亭がかしら？」

「それでも、繋がってる。愛なんて絆の内の一つじゃないか」

「そういう貴方はどうなのかしら。何かに怯えているように見えるわよ？」

「そうだな、実際怖いことだらけだ。それでも生きなきゃいけないんだから、神様はよっぽどサディスティックな趣味なんだろうな」
「神なんてそんなものよ。色々とくれるくせに本当に欲しいものは嚴重に守っておく……」

「違いないな。済まないが、銃の分解清掃が終わってないんで一足先に……おっと、少し呑みすぎたか」

それとも座りすぎなのは分らないが、足元がふらつく。

「倒れるなら鈴仙か私の前にしておきなさい、すぐに処置できるから」

「悪いが、今度にさせてもらう」

部屋に戻って銃器を広げる。

「典君」

ロケットランチャーは一度使ったら終わりなのでそれ以外の銃器をばらしていると、襖が開いて、背中いつもの重みが掛かった。

「こいしか？」

「うん——典君お酒臭い……」

「そうだな……」

「典君、私今から行きたいところがあるの！」

今から……なんて、ふざけているのか。

「何を考えてるんだ？夜に守りきれ自信はないと言っただろう」

「だって……今日じゃないと——」

「出るな、絶対にだ」

何だ……異常な不安感が拭えない。今出たらまずい。

「典君……」

「くどい！」

「典君のバカ……」

こいしが叫んだ瞬間、その姿が消え、気配も瞬時に無くなった。これは……能力を使ったのか。

「くそ……どこに……」

視界がぼやける……意識が……

目が覚めると、雑に布団が掛けられていた。

「今は何時だ…こいし、どこだ？」

外に出てみると、月は頂点から落ち始めていた。三十分はゆうに経ったかも知れない。当然、こいしの声はしない。

「こいしちゃんなら西の方に行ったよ、あんた、ちよつと言い過ぎ

——」

「てゐ…何故——いや、そうだよな。使えるのはハンドガンとロケットランチャーか…」

自分の能力も、危険のことも言っていない、止める義理もない。当然だ。

「早く帰ってこないとあんたの銃、持っていつちゃうからね」

どこまでも口が減らないウサギだ…ロケットランチャーを持ちながら目を合わせて、

「それは名案だが、明日の朝飯にウサギのソテーが増えることになるだけだ」

全力で西の方向へと飛び立つ。速度なら自分の方が上なので少しの間なら何とかなるだろう。

十数分ほど空を飛び続けると、森の中に何か明かりのようなものが見えた。何かしらの生物が居るのなら訊けばいいだろう。

「おい、そのの——こいし!？」

明るかったのは一瞬だけでそこにはやたら大きな岩とこいしが居た。

何をしているんだ…

「そう…こいし。こつちに来て」

変だ。自分を責めるでも謝るでもない。口調や様子も何かぎこちない。

「……一緒に居たお前の姉は今どこに居る？」

「お姉ちゃん…はぐれちゃった」

ビンゴ…まったく嬉しくないのも珍しい。ロケットランチャーを傍に置いてホルスターからハンドガンを抜く。

「姉は居るが、一緒には居ない。お前は誰だ？」

「この子にはやけに移りやすかったんだけどな…気を抜いたら…この子の首、刈るよ」

背中に何かしがみついているようだ…狐の悪霊か…しかも片手が鎌のようになっている。

「弾丸より速く動けたらいつでもやってみる。それと、もし人質を殺したらお前を考える限り残虐に殺してやる」

「この子は頭がいいね。ほら、これ爆弾だよね？」

そっぴいば無くなっていた。無意識を操るってのはそういう応用もできるのか…しかし、まさかグレネードを持ってきていたとは…つくづく運が悪い。それにしても、何故あれが爆発物だと知っているんだ…

「どうやって使うのかなんて分からない筈だが？」

「さっき使ってくれたんだ。優しい子だったよ、光るだけのものだもの。でも、これは爆発するよね？」

あれはフラッシュバンだったのか…それで使い方も分かったわけか。

「Great…（くそつたれ）」

こいしの手がグレネードを掴む。ピンを抜く気か…武器のように弾き飛ばすにも撃てば即爆発だ。

「どうするの——」

瞬間、左手の銃を放って駆け出し、ピンだけが抜かれたグレネードを掴む…

「おそ——」

ピンを抜いただけでは信管にまで点火されたわけではない。

掴んだ…その瞬間、妖怪狐の片腕が異様な長さに伸び、伸ばした左手の前腕部分に鎌が突き刺さった。

「左腕はもらったよ」

予測はできていた、ハンドガンで鎌に突きつける。

「お前の鎌もな！ Hand gun shoot」

突き刺さっている片腕の鎌を抜いてグレネードと共に放り投げる。

数秒後にグレネードが爆発し、鎌は跡形もなく消えた。

「ああああ…」

「気分はどうだ？」

「うるさい！ 岩亀で殺してやる！」

しがみついていたこいしの背中から恐ろしい早さで傍にある岩にとり憑いた…あれも妖怪、しかもこいしと違って戦闘用か…

さっきの拍子で傍に落ちたグレネードの一つを岩に向かって放り投げると同時に走りだし、こいしを抱き抱え、ロケットランチャーを取りに行く。

「……典……く……」

爆発の音に混じってこいしのか細い声が聞こえる。憑き物が落ちて意識が戻ったのか…しかし、今は片腕が殆ど使えない上、相手の力量も分からない。「ちょっと黙ってる、もう危険はないんだ…終わったらいくらでも付き合ってやる」

こいしの身にふりかかる危険はもうない。つまり、今さえ何とかできればそれでいいということだ。

ハンドガンホルスターに戻し、ロケットランチャーを構える。

「そんな玩具じゃこの体は傷もつかないよ」

グレネードの直撃を受けても焦げ目だけで済んでいるのか…ロケットランチャーとはいえ、ダメージを与えられるだろうか…

「典君、ごめんなさい…」

「何が？」

「憑かれて、迷惑…かけて…」

「俺は迷惑とは思ってない…行け、こいしなら絶対に逃げられる」
無意識を操れる彼女なら簡単に逃げられる。しかし、自分にまで効力はない、ついでに腕から出ている血にも意味はないので自分が戦うしかない。

「や——」

「これは…頼みだ。行ってくれ」

こいしの気配が消えると同時に岩亀と呼んだ妖怪が自分の方へ向かってくる。亀の割にはかなり素早い速度だ。

「Rocket launcher shoot！」

関節部分に破壊魔力を込めた弾頭を撃ち込む…いくら装甲が硬かろうと弱点はある筈だ…

煙が止み、岩亀の体を見てみると、ヒビが入っているものの、一向にダメージは与えられていないようだった。

「ふざけた野郎だな…」

「ヒビが入っただけでもおかしいんだよ？」

岩亀が地面に亀裂を生ませながら近づいてくる…

「お褒めに預かり光栄だよ、くそつたれ…」

自分の頭より二回りは大きい足が目の前に迫る…避けても数秒の命だ。しかし、ホルスターからハンドガンを抜いて、本気の魔力を込め、連射する。

「痛くも痒くもないね…」

こいつ…口ぶりがまるで自分の体のようだが…もしかして岩亀はすでに事切れていたのか…だとすればこいつを殺せばことは済む筈だ…

左肩から腹部にかけて岩亀の足が直撃した。踏み留まれず、数メートル吹き飛ばされる。

「が…はあ…」

身体中が痛い、息ができない…それでも、何故かハンドガンは握っているところは自分らしい。

「お前が死んだら乗り移ってやる…」

何とか木に寄りかかってハンドガンを構える。魔力もあまりない。

「ビンゴ…」

スナイパーライフルの威力があれば何とかなったかも知れないが、今は永遠亭でバラバラになっている。もしいけるなら、最後の賭けでロケットランチャーを使うしかない。

「死ね！」

「遅いんだよ！」

足を振り上げた瞬間を狙って、魔力で最大強化した弾丸で眼を撃ち抜く。

「痛い！痛い！痛い…」

奴が混乱している数秒間でもう一丁のロケットランチャーを取って飛びながらとんぼ返りし、大口を開けている口に弾頭部分を突っ込む。

「Good night…（いい夢見るよ）Shoot！」

トリガーを引くと、二、三秒で【ポン】という間の抜けた音が聞こえた。

「グエエエ…アアアアアア…」

「はあ…はあ………」

岩亀の口からズタズタになった狐の霊が這い出て、迫ってくる…まだそんな力を残していたのか…

「お前に憑いて——」

「Don't accept the アンコールはなしだ encore」

ロケットランチャーを放り投げ、近づいてきた狐の霊の眉間にハンドガンを向け、引き金を引く。

乾いた銃声が辺りに響き、響いた音が静まり返ると見慣れた人影が見え始めた。

「典君、これ…」

左手に持っていたハンドガンをまるで宝物を持つように大事そうに抱えている。

「どこまでもわがままなお姫様だ——うつ…」

月明かりに照らすと左腕の刺し傷はどうやら少し貫通しているらしい。コートは一点ものなので脱いできて正解だったかも知れない。

「腕…ごめ——ふみゆ…」

ハンドガンホルスターに戻し、フリーになった手で口を塞ぐ。

目は背^{そむ}けられて今にも泣きそうな顔をしながらでもそんなことを言えるなら言わないこともたやすい筈だ。

「この程度じゃ後遺症も残らないさ、だから…そんな顔をするな」

こいしの頭がコクコクと縦に振られるのを確認し、軽くこづく。

「今日…典君の誕生日だったから、なにかあげようって……」

「別に、こいしが気づいていないだけで俺は毎日もらっているんだがな」

「ほんと!？」

泣きそうな表情が一変、嬉々とした表情になった。本当のことを言うつもりだったが、少しはお灸を添えておこう。

「苦勞という名のプレゼントと——」

「苦勞!? そういうのじゃないの——!」

「安心しろ。もう一つある。ただし、秘密だ」

「教えてよ典君」

「いいとも。The being worth living」

生き甲斐だ) 飛ぶぞ……」

「いじわる——!」

ふとこいしの気配が消え、後ろを振り返ると、正面に何かが張り付く感覚がして、次の瞬間、唇に暖かいものが触れる感覚がした。

「なっ……!？」

「プレゼント!」

気づいた頃には胸の中にこいしが収まっていた。まるで熟れた林檎のように顔を真っ赤にしている。そして、きっと自分も同じような色をしているのだろう。

都合よく月が雲で隠れたのでこいしの服の首根っこを掴み、背中に

乗せて飛び立つ。

「Great…（最高だぜ）」

神様達の恩返し・蛇（前書き）

これは前後編なのであまり落ちがありません。伏線も回収しきれませんでした。後書きも書きません。

そうそう。皆様のお陰でこの東方飛脚伝、なんと80000アクセスを突破することができました。読者の方々には厚くお礼を申し上げます。

神様達の恩返し・蛇

<Side - change 紅流>

「出来た？にとりん」

あれからゆうに数刻は経って、夜も更けてきた。にとりは腕を作る作業に没頭しているが、流石に重労働ではないのだろうか…

「大丈夫。もうすぐ出来るから…」

こういう時は何もできない自分がやるせない。仕方がないので井戸に水を汲みに行く。

「コウ、新しい腕ができたよ！」

綺麗に研磨され、光沢を放っている義手を差し出してくれた。しかし、義手が綺麗すぎて作ったにとりの手や顔は油と擦り傷で目立つ。

「ごめんよ…でも、ありがとう！」

感情を押さえられずにとりを抱き締める。

「ひゅい！？」片腕がない上に身長差があるので右手で抱えるような体勢になっているので少し苦しそうだ。

「ありがとう！ありがとう！！」

「コウ…」

「なに？」

「油とかで汚いよ…」

それ以外にも息を止めていたのか顔が赤くなっているのにとりを下ろす。

「ああ…ごめんごめん。でも、本当にありがとう」

「お礼はちゃんと動いてから。さ、つけてみて」

差し出された腕を神経の繋がっている根本部分にはめ込んで押し込

む。

「動いた。しかも、かなり動かしやすい」

以前のものよりも軽いので負担は減る。そして、きつと強度も増している筈だ。ただ、手のひらの中心部分にはなにか水晶のような丸みのあるなにかが煌めいている。

「それと、これに靈力を込めてみて」

親指くらいの大きさの金属製の筒が五つほど手渡される。

言われた通りその筒に変換した靈力を込めるとその瞬間、ごっそりと持っていかれた…

「にとりん…これって一体なに？」

「あ、ごめん。言い忘れてたね…剣しか持っていないコウのために新しく靈力を溜めて打ち出す機構を作ったんだよ！」

「へえ…それはありがたいけど、どんなものなのかなあ？」

仕組みを知らないのであれば氣を持つていくだけの左腕になるので知らなければ…

「簡単に説明すると、その筒は靈力を溜めておくためのもので、手の甲側の手首にそれを入れるための部分を作ってるから開けてみてその部分を確認すると、確かに蓋のような感じになっている。しかし、うまく開かない。

「左手を捻ったら蓋は開くよ」

その通りに捻ってみると、透き通った金属音がして蓋が開いた。その中には渡された筒が一つ入る分の穴があった。

「ありがと…」

「その筒を入れて、蓋を閉めてから掌打みたいに構えると靈力の弾丸が出るんだよ！威力は普通の木を吹き飛ばせる程度なんだけどね」筒を一つはめ込み、蓋を閉め、手を開いて横に構える。

「へえ…こんなかん——」

瞬間、飛脚師のような光がにとりの家の窓に張られた硝子が砕け散った。水晶の部分からは煙が出ている…

「……威力は申し分ないかな？」

「妖怪相手でも十分通用する威力だねえ…それと、窓割っちゃってごめんねえ」

「まあ…そろそろ模様替えしようと思ってたから気にしないでよ。それでね、一発撃ったら筒の中にある霊力は無くなっちゃうから入れ換えて撃つて。それと、一発くらいなら平気だけど、回線が焼き付いちやうから五発が限界ってことも覚えておいてね」

腕を捻ると筒が飛び出してきた。排出機能もあるのか…筒を拾うと少し熱くなっていた。

「凄いいまけだねえ…」

「外界の武器を参考に作ったんだけど、どうかな？」

「直接当てなくても威嚇に使えるそうだし、具合もかなりいい。最高だ」

「その言葉が一番疲れを癒してくれるよ」

「ありがとう…この恩は絶対に忘れないよ」

「じゃあ…また遊びに来てよ、いつでもいいから！」

遊びに行くとまた手間をかけることになりそうなので逆の方がいいのけれど…

「今度は俺の家でもてなしたいんだけどねえ…」

「コウの家に行ってもいいの？」

霊峰の山頂付近にある大きめの山小屋なのだが、普通に飛んでも中々見つけられない。

「俺が案内しないとたどり着けないようなへんぴな場所だけどねえ…それでよければ——」

「行くよ！今すぐでも——！」

「そ、そう？それでもいいんだけど、ちょっとした依頼があつてねえ…」

「どんな？手先が要るのなら力になるよ？」

「妖怪の山に神社があるのは知ってるよねえ？」

「うん、色々と神様も居るし」

「その巫女さんに恩返ししたいって神様が居るんだけど、腕が直

「つたらそのために力を貸すって約束しちゃって…」

「現人神のお嬢ちゃんのこと？」

「そうそう。いつも苦労してるからねえ…」

「それには同意するよ…それに早苗とは色々話したりするから顔馴染みだし、そういうことなら喜んで力を貸すよ！」

「それじゃ…お願いしていいかなあ？」

「勿論！でも、ちょっと窓を直してから行きたいから先に行つてよ」

確かに、家を空けるのに窓がない状態では不都合だ。自分のせいなのだが、にとりはまったく気にしない…いい友人を持った。

「分かったよん」

筒を懷にしまい、飛び立つ。まずは報告からだ…

道中は妖怪に会うこともなく、守矢神社には半刻もかからずに着いた。

「あ！お帰りなさい、紅流さん」

境内ではいつも通り早苗がほつきで掃き掃除をしていた。

「二日ぶりかなあ？ただいま、さなちゃん」

「そういえば洩矢様と八坂様のお二人がやけに気がかりそうに待っていましたか…」

あの二人、嘘が下手そうなので見破られたということはないだろうか…まあ、神奈子の機転でなんとかなるだろう。

「ああ…すぐ行くよん」

神社の裏に回って居間に向かう。

「はあゝコウはまだかな？」

「じっくり待ちなよ、それでも二柱の一つかい？」

「そうだけども」

障子を隔てた先では二人がせわしなさそうに話している。

「神奈ちゃん、ケロケロ、戻ったよん」

「「コウ！？／紅流……」」

「死人じゃないんだからそんな反応しなくてもいいんじゃない？腕も直ったし」

握り、開きを繰り返しながら新品の左腕を見せる。

「相変わらず仕組みは解からないけど、直ってよかったよ。誰が作ったんだい？」

「にとりつていう河童でねえ……親友さ」

早苗とは顔馴染みといったが、この二人とも知り合いなのだろうか……

「あ、あの河童かい。この家の家電も世話になってるよ」

神に恩を売っている河童というのも珍しいと思うが、にとりも中々顔が広い。

「二人とも、まさか覚られたってことはないよねえ？」

「勿論さね。早苗はあれでも聞き分けはいいからそういうそぶりを見せればなんとかなるんだよ」

「ケロケロ言うなあ！そうそう、お菓子と料理のレシピはもう貰ったよ」

そう言うのと、かぶっている帽子の中に手をつ込んでまさぐり、文章が書いてある紙を取り出した。

「はいはい。で、レシピって何？これ？」

「ああ……外界の調理表のことだよ。これの通り作れば成功するの」
なるほど……それは便利だ。受け取って内容を見ると、若干不明な点はあるが、調味料は揃っていいそうだ。

「ちなみに食材は？」

「何一つもない。ただでさえ保存がきかないこの季節、買った覚え

のない食材が増えるってのはどう考えても怪しまれるだけだからね」

「それもそうだよねえ…じゃあ、俺の家にでもしまっておく？」

「そういえば、コウの家ってどこにあるの？」

「ここから十里（約40km）…もないけど、霊峰にある山小屋だけど？」

実際はそこまで単純ではないが、一度場所を覚えれば誰でもたどり着けるだろう。

「普通の霊峰はそこらじゅうにあるけど…」

「行ってみる？ 神奈ちゃんはこのに居なきゃいけないだろうからケ
□——」

「諏訪子」

帽子の目と諏訪子の目が笑っていない…このやり取りは何度かあったが、こんな目を見たのは初めてだ。

「諏訪ちゃんが来てくれる？」

「勿論！ 皆蛙扱いして…コウはそんなことないよね？」

「え？ まあ、諏訪ちゃんは諏訪ちゃんだし？」

少しの間沈黙が流れ、息をついた瞬間、諏訪子が走って迫ってくるしかし、見切れない程の速度ではなく、座っているわけでもないの
で体を捻って避ける。

速度を止める対象が居なくなった諏訪子が障子に激突する前に肩を
掴み、止める。

「あれ？ おかしいな…コウが避けるわけがないのに…そっか、私が曲
がっちゃったんだね。うん、そうなんだ！」

「神奈ちゃん、なんだか諏訪ちゃんがおかしくなってるじゃない？」

どう考えても自分が避けたからこうなっているのにも関わらず、認
識は明らかにおかしい。

「まあ…茶でも飲みながら話そうじゃないかい」

「そう、しようかねえ」

神奈子と話をしている最中も諏訪子はベタベタとまとわりついてくる。神奈子の話を聞くと、どうやら原因は自分にあるらしい。

「うん、で、俺のせいってこと？」

盆に乗せられた緑茶を飲む。

「ざっくり言うとな。とりあえず懷かせておきなよ、祟らない祟り神だからお守りがわりにはなるさね」

神様自体をお守りに持てるということは稀よりも少ない確率だと思うのだが、仕方がないといえば仕方がない。

「あゝうゝコウはずっと私のところに居るもんね？」

「いや、仕事とかあるからそんなこともないけどねえ…食いぶちは稼がなきゃ」

「私とコウの二人分？」

「二人分くらいならなんとかなと思うけど…」

「そうだよな、じゃあ今すぐ愛の巢に——」

「いや、行かないよん？にとりんを待ってるし。そもそもお礼にとりんを家に泊める予定だし」

にとりなら窓を直すのには半刻（一時間）もかからないだろう。もう少しすればやってくる筈だ。

「そんなことないよね？コウは私だけ見てくれるよね？」

「そうしてもいいけど、不便だと思うよ？」

そう言つて実行してみる。よく観察するとあの帽子の目は独立した動きをしている…

「コウ、なんでずっと見てるの？」

「え？諏訪ちゃんがずっと見ろつて言つたから？」

「コウ〜！」

噂をすればなんとやら、にとりがやってきたようだ。

「にとりん、こっちだよ〜」

諏訪子を見ながらてきとうに手を降っていると足音が大きくなってきた。しかし、座りながらの動作は中々難しいものがある。

「なにやってるの？」

「諏訪ちゃん観察。案外面白いよん」

「じゃあ…」

「ちよつと信仰力が上がってきた…」

自分は神ではないのでよくは分からないが、たかが二人が見るだけで信仰は集まったことになるのだろうか…

「それで神力つて上がるの？」

「ううん。そんな気がするだけ」

「な…そうだ、お二人ともお久しぶりにお目にかかります」

「あ…そんなにかしこまらないでくれよ。とりあえず茶でも飲みながら話そうじゃないかい」

「そうだよ。にとりのお陰で色々便利に暮らせてるんだし」

「それはありがたいんですけど、流石に神様に馴れ馴れしくつていうのも…」

「慣れだよ、にとりん」

あぐらで座っている状態からにじって移動し、諏訪子を持ち上げて足の間に座らせ、ついでに撫でる。

「そんなことができる人間はコウだけだよ…」

「まあ、こんなことさせるのもコウだけだね…」

「で、早苗に恩返しするって話を聞かせてもらえないですか？ものによつては手伝えるかも知れません」

「そうだねえ…まあ、泡立て機はあるから、金型くらいだね」

「どんな金型なのかなあ？」

「ケーキのスポンジ型さね」

「それなら鍛冶屋に知り合いが居るから頼んでみようか？」
離狗ならその金型も知っているだろう。

「それって、逆騎離狗かい？」

「あれ？離狗が鍛冶屋をやってるの知ってるんだ」

「早苗が言ってたのさ。欠けた包丁をただで直してもらったってね。しかも、かなり丈夫になったらしい」

外界の技術と離狗の力なら何でもできそうな気がする。

「まあ…離狗ならやりかねないよねえ。それじゃ、にとりんと諏訪ちゃんとを連れて人里へ行くつてのでもいいかなあ？」

「いいよ！ついでに鍛冶の技術も見たいしね」

「私は構わないけど…河童…抜け駆けしたら——」

「はい決定。ちよつと待つてねえ」

意見は一致した。緑茶を全部飲んでから立ち上がり、部屋を出る。

「あれ洩矢様に紅流さん、にとりちゃんも…どこかに行くんですか？」

部屋を出た矢先に早苗とばったり会う。よくここまで丁度よく鉢合わせするものだ…

「ちよつと俺の家までねえ…さなちゃんは？」

「私は…恥ずかしい話なんですけど、まだお掃除が済んでない部屋がありまして。お天気もいいのでじつくりお掃除です」

「なるほどねえ…そうだ。さなちゃん、これの名前分かる？」

懐からあの筒を取り出し、手渡す。確か早苗は外来人なのでこの名称も分かるかも知れない。

「これって薬莢じゃないですか。紅流さん、銃を使うんですか？」

「ああ…まあ、そんなものかなあ。左腕に入れて使うんだけど、スライリツシュのような実体の無い弾を撃つものなんだ。薬莢ねえ…」

「へえ…カッコいいですね」

「俺は本物の方が好きだけどねえ」

見た目は良いかもしれないが、実際使うと左手の部分だけが不自然に重いので上腕にかかる負担が多いので普通の腕の方がよっぽど良い。

「あ…済みません」

何故か申し訳なさそうに謝られてしまった。自分は別になんとも思っではないない。早苗の肩を軽く叩き、

「さなちゃん、別に気にしてないよん。仕事の邪魔をするのもなんだし、俺達はもう行くから頑張つてねえ」

そう言つて守矢神社を後にする。

「これつて薬莢つて名前なんだねえ…」

懷から一つを取り出していじつてみる。見た目は小さいが、威力が高すぎるので左腕のあの空間は空にしておかなければ…

「爆発とかはしない筈だから安心して。でも、それに靈力を一回入れたら撃ち出すまで戻せないから気を付けてね」

「了解」

人里に着くと、畑の方で騒ぎが起こつていようだった。

「ちよつと畑の持ち主さん、この騒ぎどうしたの？」

「え？その恰好…万屋さんか。いや…毎年よくあるんだけど、夜の間に猪がきて荒らしていつたんだ」

低級の妖怪は入り込めないようになってるが、動物の類はその範囲外なのか…

「へえ…罨とかじゃ駄目なの？」

「張つてはいるけど、向こうも中々物覚えが良くて効果はあまりないんだ」

「そうか…苦しむ民を放つてはおけない。この洩矢諏訪子にお任せだよ！」

後ろで話を聞いていた諏訪子が勇んで前に出た。が、辺りの反応はあまりよろしいものとはいえない。

「万屋さん、どこのお嬢ちゃんだ？」

「まあ…家族みたいなものだけど、神様。おおっぴらに祭られてないだけですごい神様らしいよん」

「はあ…？まあ、怪我しないように夜は早めにおねんねするんだよ、お嬢ちゃん」

「ちよつと！私は神様なんだつてば…！」

半分涙目で叫んでいるものの、完全に子供の癪癪扱いされている。

「はいはい…これで解散だ。他の畑のみんなも気を付けてくれ！」

「コウ、私が罷作ろうか？」

「いや、罷はあまり効果がないってあの人も言ってたし…そうだ。今日の晩御飯にする？」

「……」

「駄目かなあ？」

「食べちゃったなら不自然だよ。コウが依頼として受ければいいのに」
確かにそれなら一石二鳥だ。

「もしもし」

「どうしたんだ？」

「その猪捕つていい？」

「あんた、できるのか？」

そう言う畑の持ち主の顔は半信半疑といったところで頼られていたり信頼されてはいないようだ。

そういう顔で訊かれてしまうとは…格好や名前だけ知られているというのも考え物だ。

「まあ…十匹単位や化け物だったらきついけど、普通の猪なんだよねえ？」

一応出来ない以来ではないものの、探すのに時間がかかるかも知れない。

「実はマタギに頼んであるんだ。あんたは所詮便利屋つてところだろう？」

「万屋だからねえ。本家の人よりは専門性には欠けるけど、下手な鉄砲も——ってやつで俺にも依頼してくれない？」

「……まあ…解決してくればいいよ。じゃあ説明するけど、普段はあまり野生の動物を殺すことはないんだ。ただ、今年はやけに数が多くて少しは減らさないと食い扶持や捧げものにも影響があるんだ。そこで、猪集団の長を何とかしようってことになったんだ」

そういえば毎年秋になったら収穫祭や奉納もしていた気がするので神奈子や諏訪子にもかかわりがあるということになる…

「なるほどねえ…じゃあ見かけたら持つてくるよん」

「期待しないで待つてるよ」

畑の持ち主は家へと向かっていった。人の居なくなった畑を見ると、確かに作物が手ひどくやられているのが分かる。土に埋めて食べにくい筈の芋や玉葱まで掘り返されている…

「むう…コウ、にとり、どうする？」

諏訪子はほほを膨らませ、不服たつぷりの顔で自分とにとりに問いかける。

「俺は運に任せるよん。期待されてないみたいだし、マタギの仕事を盗つちやうのも嫌だしねえ…」

万屋といつても無理矢理に他人の仕事を引き受けるわけではない。そんなことをすれば多くの人間から恨みを買うだけだ。あくまで正規の職種がなくその場で終わるようなものを選んでやっているつもりだ。

「でも、私やコウを馬鹿にされた気がして嫌だよ」

「まあ…商売道具の畑を荒らされたら少なからず気も滅入る筈だし、口も悪くなって当然じゃないかなあ」

自分も御霊煌を無くしたり盗られたりすれば愚痴ややけ酒もするだろう。

「あゝう…そうだけどお…」

「仕方ありませんよ。とりあえず鍛冶屋に行きましょう」

「にとりんの言う通りだ。まずは自分たちのことからやっていこう」
「そうだね…よし！鍛冶屋に行こう！」

吹っ切れた様子で走り出す諏訪子についていく。しかし…諏訪子は鍛冶屋の場所を知っているのだろうか…

それらしい場所は十数分で見つけることができた。しかし、中には
ひとけ
人気がないので出かけているのだろうか…

「ごめんくださーい。離狗、居る？」

「紅流か。どうした？」

奥から離狗が出てくる。どうやら休憩をしていただけのようだ。いつもの黒い服は着ておらず、真っ白な洋服を着ている。

「ちよっとお願いがあつてねえ。ケーキの型つて作れる？」

「作れないことはないが……」

「忙しい？」

「いや、難しいというだけの話だ。不可能ではない」

「早苗の誕生会のケーキを作りたいの。なるべく早めにできる？」

「今すぐやろう」

「えーっと……離狗……さんでいいのかな？」

横に居たにとりが離狗のもとへ行く。そういえば離狗と面識がないのはにとりだけだった……

「呼び方は任せるが、私が逆騎離狗だ」

「じゃあ……離狗で。離狗、私に何か手伝えることはない？」

初対面でそこまでするのは彼女の持ち前の性なのだろう。離狗も考えているが、どうするのだろうか……

「構わないが、まずは少し下がってほしい」

「うん。私は河童の河城にとり。宜しくね！」

「逆騎離狗。人間だ、宜しく頼む」

他人目線だが、二人の意気は合っているようだ。しかし、こうなったら自分と諏訪子が持ちぶさたになっちゃった。そもそも完成品があることは予定していないので、

「諏訪ちゃん、この間に食材の調達でもしとく？」

と必要なもの諸々を買い込んでおこうと誘う。

「そうだね。じゃあ、私達は買い物してくるよ。二時間位で出来るかな？」

「作ったことがないから断言はできないが、金属桶の応用でいければ十分な時間だ」

仕事が板についてきたような口ぶりから察するに離狗も順調に軌道

に乗っているようだ。

「じゃあ任せたよん」

そう言つて諏訪子と共に鍛冶屋を後にする。

「ところで、これからどうする？ 今すぐに買い物をしても痛むだけだし……」

人里の中を歩きながら視線を向け、尋ねると、諏訪子は心ここにあらずといった様子でどこかを見ている。気になったので諏訪子の視線の先を見ると、近くにある甘味処に向けられていた。

「なるほどねえ……諏訪ちゃん、ちよつとそこまで行かない？」

「え？ え！？ 催促したわけじゃないんだよ！」

矢次ぎ早に言葉を紡ぎ、しどろもどろに取り繕う姿は年相応の子供のようなので面白いとも思うが、落ち着かせておくことも必要だ。

「俺が行きたいだけ。いいよねえ？」

「あ……まあ、それは……」

「はい決定。すぐ行くよん」

言いながら早歩きで甘味処へ向かう……

「コ、コウ……ちよつと待つてよ」

中に入ると、和洋折衷の少し洒落た空間が広がっていた。ちらつと見れば、机も椅子も傷が少なく清潔感も高い。

「いらつしゃいませ、お二人ですか？」

いかにも看板娘といった温和な感じの女性が出迎えてくれた。

「うん、適当に座るけど構わない？」

客の数もちらはらとは居るものの、全員がまばらに座っており、融通は効くのかも知れない。

「あ、はい。注文がお決まりになりましたら声をおかけください」

「それじゃこの辺にしとこうかなあ」

「コウ……何にするの？」

そういえば諏訪子を入れるために入ったのでそういうことはあまり考えていなかった。

「ああ……団子二串と冷やし抹茶。それと塩昆布位かなあ。諏訪ちゃ

んは？」

「私はあんみつと冷やしぜんざい、ところてんの黒蜜かけに豆大福と……」

随分食い気が多い。その体のどこに入っているというのだろうか……

「済みませ〜ん！注文したいんだけど」

「はい、お待たせしました。ご注文をどうぞ」

「普通の団子二串と冷やし抹茶、塩昆布もねえ」

「かしこまりました。お嬢ちゃんはなににする？」

「あんみつに……」

結局店員の説得も含めて五分は費やすことになった。

「は、はあ……かしこまりました……」

めいっばいに書かれた注文紙を片手に厨房へと向かっていった。この様子では更に時間が掛かりそうだ。

「あーうーコウって甘いもの嫌いなのか？」

「そんなこともないけど、甘すぎるのは嫌いになるかなあ」

元々食べなれていないのでどうにもならないことはある。食べるために生菓子を作ることもあるが、砂糖はあまり入れない……そういう意味では好きであり嫌いだ。

「美味しいのに〜」

「嫌いつてわけじゃないよん？」

「お、お待たせしました……」

店員が苦しそうに注文品を持ってきた。両手の盆にすべてを詰め込んできたようであり厳しそうだ。

「手伝うよん」

右腕を伸ばし、手のひらを上に向けて念動力を盆に送り、引き寄せ
る。

「え??あつ——」

思った以上に衝撃だったらしく、もう片方に持っていた盆を離して
しまった……左手は出している時間がない……

「はっ！」

突如として諏訪子が叫び、その瞬間、盆が浮いたまま動かなくなつた。

「お客様…妖怪の方ですか？」

「神様だよ？／仙人だけど？」

「……」

念動力や神通力を見るのは始めてなのだろうか…盆は無いということにも関わらず、持った姿勢のまま固まってしまった。

「とりあえず食べようか。いただきます」

団子は丁度よく焼き目がつき、抹茶には氷が浮いていてよく冷えている。団子の持っている元々の甘さが抹茶の香りと苦味で引き立って単体で食べるよりも美味しい。

「うん。いただきます」

諏訪子は目を輝かせながらあんみつを食べ始めている。ところてんでも頼んでおけばよかった。しかし、間食でそこまで食べる気にはならないので今度でも構わないか。

「あの…お客様……」

固まっていた店員が声を震わせながら恐る恐る話しかけてきた。

「何かなあ？」

「無礼を働いて申し訳ありませんでした…何卒お許しください……」

「別に普通だと思うから謝られてもねえ…俺も諏訪ちゃんも滅多なことじゃ怒らないし…あ、諏訪ちゃん。ミジャクジーここに置いたら？」

「コウ…ミジャクジ様は祟り神だよ？まあ、祟らなかつたら白蛇だし…加護はあるかもね」

そういえば諏訪子は祟り神だった…店員の顔が青ざめていつているのでなんとかしなければ…

「大丈夫だよん。神様もお勧めの甘味処って言えば良かったかもねえ」

「うん、このあんみつは美味しい。外界よりも自然なものを使っているからかな。おはぎも美味しいし、これから私へ供物はこのあ

んみつにしよう」

「あ、ありがとうございます…」

「それと、俺は万屋をやってるから運送や護衛も任せてねえ」

「もしかして…隻腕の万屋さんですか？」

「うん。本物じゃないだけでちゃんと動くんだけどねえ」

左腕を出し、てきとうに動かす。

「凄いです…」

「親友の手作りだからねえ。動くだけじゃない、その親友の想いが詰まってるから生身よりも大事なものだ。そうそう、持ち帰りで団子を三つずつ包んでもらえるかなあ？」

流石にあの二人に何もなしでは気が済まない。団子程度なら痛みもしないだろう。

「あ、はい…」

厨房へと戻る店員を見送りながら塩昆布をつまむ。いい案配に塩と昆布の出汁が均整を保っている。

「コ、コウ…あゝん」

不意に諏訪子が寒天の乗った金匙を差し出してきた。少し顔が赤いのが気になるが、食べるといふことなのだろうか…

「食べていいの？」

「うん…」

「じゃ、遠慮なく」

首を伸ばして金匙の上にある寒天を食べる。塩昆布のせいで蜜の甘さがより引き立つ。抹茶を口直しに一口含む。

「ねえ、今度はコウがしてよ」

そう言っただけで金匙の持ち手を差し出してくるのでとりあえず受けとる。自分で食べた方が食べやすいだろうに…

「まあいいけど…」

観点をすくう頃には既に雛鳥のように口を開けて待っている諏訪子の口に金匙を持っていく。

「はい、あゝん」

「ん…今日は最高の日だね」

満面の笑みを浮かべていて、満悦のようだ。甘味処に行くだけでいいとは随分安上がりな神様だ。

「そう?」

「そうだよ」

団子をかじりながらこれからの計画を思い浮かべる……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4166n/>

東方飛脚伝

2011年10月7日22時23分発行